THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年 第十一號

第二百八十四號

故田岡嶺雲譯並註

和譯漢文叢書

新時代の最大要請は時間と勞力との節約也

本叢書は此要請に應じたる者也

●全十二册完成 總クロース堅牢美本

原文の一字を換へず且懇切明晰なる註釋を加へたる者

●內容裝釘等の詳細見本は郵券二錢を要す

第一編 和譯老子莊子 正價壹圓 郵税拾貳錢
第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵税拾錢
第五第六編 和譯史記列傳 上下二册 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢

第七編 和譯七書 附鬼谷子 正價壹圓 郵税拾錢
第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢
第九編 和譯墨子列子 正價壹圓拾錢 郵税拾貳錢
第十第十一編 和譯春秋左傳 上下二册 正價各一圓卅錢 郵税各拾貳錢
第十二編 和譯東萊博議 正價壹圓卅錢 郵税拾四錢

◎批評◎

『譯文の簡滑、註解の明晰、亦嶺雲に非ざれば倣し得ざるの特色あり』（東京朝日）。

『これならば譯と云ひても原文の妙を損ぜず且つ今の青年にも讀易からん』（萬朝）。

『想ふに是れ譯者嶺雲の學と識との他に超卓せるに因るなるべし』（日本及日本人）。

序文 三宅雪嶺、戸張竹風、藤井紫影、河東碧梧桐、國府犀東、笹川臨風、大町桂月、堺枯川、泉鏡花、德田秋聲、藤田劒峰、白河鯉洋、佐々醒雪、鹿島櫻巷、正岡藝陽、千葉秀甫、

故田岡嶺雲著（再版）

數奇傳

挿畫 未醒 芋錢 月村（計七枚）

總クロース美本

正價九十錢 郵税十錢

發行所 東京神田區雉子町 振替東京七九九五番 玄黃社 全國書店賣捌

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學講義錄



本會員帽章



本會員徽章

第三回新學期開講

此際入會者に限り種々の大特典を與ふ(三)

本會に入會すれば「

本會員には大家の所論と會員の作品を滿載せる機關雜誌新文學を無代進呈す◉本會員には文章其の他無料添削の特典を與ふ◉本會員には各種の大特典を與ふ◉本會卒業生には學資貸與の特典あり◉本會卒業生には各新聞雜誌記者其の他に就職紹介の便宜を與ふ◉本會卒業生を會友とし會員同樣種々の便宜特典を與ふ◉教授法の最新講義の平易會費低廉短期の卒業之本會員の常に多とする所なり

講義錄見本附き
無代進呈
規則書 申込次第

初等科 五ケ月卒業

教授科目

論文。小說。新體詩。和歌。俳句。書簡文。國文。漢文。外國文學。日本文學。文學概論。新聞學。日本文典。創作百話。添削實例。雜科

高等科 五ケ月卒業

教授科目

近世文藝思潮史。藝術概論。哲學汎論。詩歌論。演劇通論。明治小說史。各國文學史。文章術。近世々界文豪傳。名著梗概。名文評釋。創作百講。

東京神田西小川町 (電話本局四五四七番 振替東京五二一九番)
大日本文學會

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

■英語研究會主任　加藤清次郎著■

模範 中學英和大辭林

洋裝金文字入
紙數千五百頁
特價金九十錢
郵稅金　八　錢

▲本書一册あれば現在の英語讀本に解らない所が一字もなくなる▼

（本書の五大特色）

一　本書は他辭典とは違ひ、多年中學教授に經驗ある加藤先生が現今我が國に行はれ居る二十幾種百有余册の教科書を一々讀破し、之に抱合せる單語熟語及難句を悉く拔萃し一々適切なる讀方と譯解とを附したり、

二　本書の發音は、最も邦人に誤り少き樣「マッケロー氏」發音學「センチュリー」「ウエブスター」「チャンパー」辭典を參照折衷し本書新案の振假名を應用し、加ふるに嚴密明瞭なる「アクセント」を付したり、

三　本書は同先生が現今、眞に學生諸君に適切なる辭典あらさるを慨して、編纂したるものなれば、諸君は本書を座右に供ふれば、教場に於て教師に就て學ぶと毫も異なる處なし、

四　從來の辭典は徒らに譯語を多く列へて、初學を迷はしむる事多し、本書は之に鑑みて適切要當なるものゝみを選びたれば、諸君は一見其要を得て、原語の意味を知るに於て決して誤る事なし、

五　印刷は鮮明にして、用紙は舶來最上等、製本は優美堅牢、紙數千五百頁、特價九十錢は英語辭書界中比類なき廉價なり、

■中等教育會編纂■

表解細註 問答全書

■全五拾册■

每册完結
每册價金二十五錢宛
每册郵稅金四錢宛

科目

●日本地理 ●鑛物學 ●數學公式 ●倫理學 ●割烹學 ●行政法 ●自治制
●西洋史 ●物理學 ●數學及原理 ●心理學 ●牧畜學 ●民法 ●法學通論
●地文學 ●化學 ●生理 ●教育學 ●土壤學 ●國際公法 ●民事訴訟法
●外國地理 ●算術 ●衛生學 ●教授法 ●園藝學 ●國際私法 ●裁判所構成法
●東洋史 ●代數學 ●和文英譯 ●法制學 ●農業學 ●刑法 ●文官普通及裁判所書記試驗問題
●日本史 ●平面幾何學 ●作文法 ●經濟學 ●商業學 ●刑事訴訟法 ●微積分學
●動物學 ●國文 ●裁縫學 ●肥料學
●植物學 ●英文和譯 ●漢文 ●家政學 ●憲法 ●商法

◎答案表解　一問を數項乃至十數頁に表解し其一項又は數小節に分解せるを以て其系統脈絡順序等整然として一糸亂れず斯に緊要なる事項は細洩らさず能く其大綱に付て明確なる答案を與へたり

◎學理例解　學理を基礎とし之を明解せるは勿論之に適切なる例證を引用し學理と實際とを調和せしめ其由來を闡明し一讀能く其蘊奥を知らしむ

◎應用自在　應用自在ならざるものは死物に等し其活動の妙運用の微に至つては專ら之に注意を拂ひたるを以て如何なる問題も斷案容易なり

◎記憶容易　表解的說明なるを以て其分解上之を記憶する事極めて容易なれば著者多年の實驗に基き腦力を費すこと僅少にして得る所極めて大なれば何人も一讀して效果の著なる意想外にあり

◎受驗案內　とも云ふへきものにして著者多年中學師範其他之れと同等の學校に於ける問題を類聚すること數萬其內に就き尤も適切と認むる者を拔萃し秩序的に表解したれば受驗の好參考たる勿論なり

◎內容外觀　內容の豐富にして幾多特色は前陳の如くなるも裝幀優美紙質良好印刷の鮮明は蓋し近來の出色にして內外共に完全双美なり價の低廉なるは世に定評あり

發行所　東京神田表猿樂町廿四　振替口座東京三二八　修學堂書店

賣捌所　全國有名書店

◎法學博士　江木衷氏序　法學士　杉一郎氏著（全三冊完成）

書入用

法理圖說　民法提要

壹卷　總則物權

貳卷　債權

參卷　親族相續篇

●本書は我民法と學理の系統を追ふて最も簡明的確なる解說を附したるものにて法理法源を學理的に分析して圖解を以て說明し加ふるに內外大家の學說は勿論大審院各控訴院地方裁判所の重要なる判決例は一々參照して各適所に挿入し實際問題解決の適例を示したり、故に學生及び一般人士の日用の顧問にして無上の良書なり。

四六形　假綴並製

定價　一卷
二卷　金八十錢
三卷金六十錢

總革上製箱入　各四拾錢增

◎文學士小山內薰、中村德助兩氏譯著（新刊發賣）

スマイルズ　自助論

洋裝菊版
總クロース
上製
正價　壹圓五拾錢
送料　內地十二錢
他二十錢

△成功を欲し立身出世を望む者は本書を讀め！
△逆境に陷り煩悶懊惱に苦む者は本書を見よ！

スマイルス自助論が萬人必讀の書として世界的歡迎を受けつゝあるは其各國語に飜譯せられ多大の讀者を有するの一事にて之を見るべし「天は自ら助くるものを助く」［自助］に依りて成功者たるものは他力の成功者よりも力強く萬代不朽なり、故に苟も活社會に處して優勝者なるを得んと欲せば必ず本書を讀まるべし

（日進堂販賣部）

圖書通信販賣法

讀書家諸士の御便利の爲め弊堂出版物は勿論全國書肆發行の新刊書は勿論既刊の有ゆる書籍雜誌を凡べて定價の一割引にて迅速叮嚀に取次販賣致し候團體購入及多數御注文の際は更に特別割引致し候間一應御照會被下度候

實費進呈

東京發行類別圖書總目錄二百十頁實費送料共拾錢にて送呈仕り候弊堂發行目錄は送料二錢御送りあれば無代進呈仕候

◉御注文規定　御注文の際は著者書名發行所定價送料等明瞭に御認の事代價及有無の問合せは必ず返信料添附の事御注文は凡て前金御送金は爲替なれば神田一ツ橋局は下記の番號へ郵券代用は必ず一割增の事

發行元　東京神田南神保町　振替東京一九二三三　日進堂書店

三宅雪嶺先生
福本日南先生
山路愛山先生序
花井卓藏先生序
大町桂月先生跋
鵜崎鷺城先生跋
戸山銃聲先生著

人物評論 奇人正人

（最新刊）
菊判總クロース頗美本
紙數六百餘頁
定價壹圓八拾錢
郵税拾二錢
中央公論讀者に限り郵税無料送本す

大々好評忽四版!! 現今唯一の照魔鏡!!
大小六百名士紙上に活躍す 痛烈快烈の大文字一發兌

東京戸塚字諏訪六十二番地（振替口座東京四九〇三番）
活人社
大賣捌所 目黑書店

反省社編輯

史學研究者の最必要書

空文年表

全一冊
定價金五拾錢
郵税金八錢

上下三千載に亘る各年代に、重要なる史的事件を記述せる外、各年代毎に必らず餘白を存して史學研究及び自習の際自ら研究し若くは記臆し置くべき事件を自ら書き入るゝことを得る便を圖れるは本書獨得の特長にして苟も史學に志あるものゝ一日も缺くべからざるもの也

東京市本郷西片町十番地
反省社發行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

南條博士著

安心錄

訂正六版出來す 正價壹圓拾錢 送料拾二錢

八版

森林生活

トーロ氏原著 文學士 水島耕一郎先生譯

正價壹圓廿錢 ◎送料拾二錢

彈碁著 末醒畫 滑稽百出

番茶一杯

◎正價三拾五錢 送料六錢

牛空著 未醒畫 珍談奇聞

名士の片影

◎正價四拾五錢 送料六錢

又狂著 鍬畫

底拔け倶樂部

◎正價三拾五錢 送料六錢

彈碁著 鍬畫

へそ茶だね

◎正價三拾五錢 送料六錢

前田文學士著

訂正增補

英語自由自在

◎特製正價貳圓六拾錢送料拾六錢 並製上下二冊各冊正價壹圓二拾錢送料拾二錢

大好評拾六版 たつた五拾日間にて英語を最も完全に修得する秘法如何

（内容見本進呈すべし）

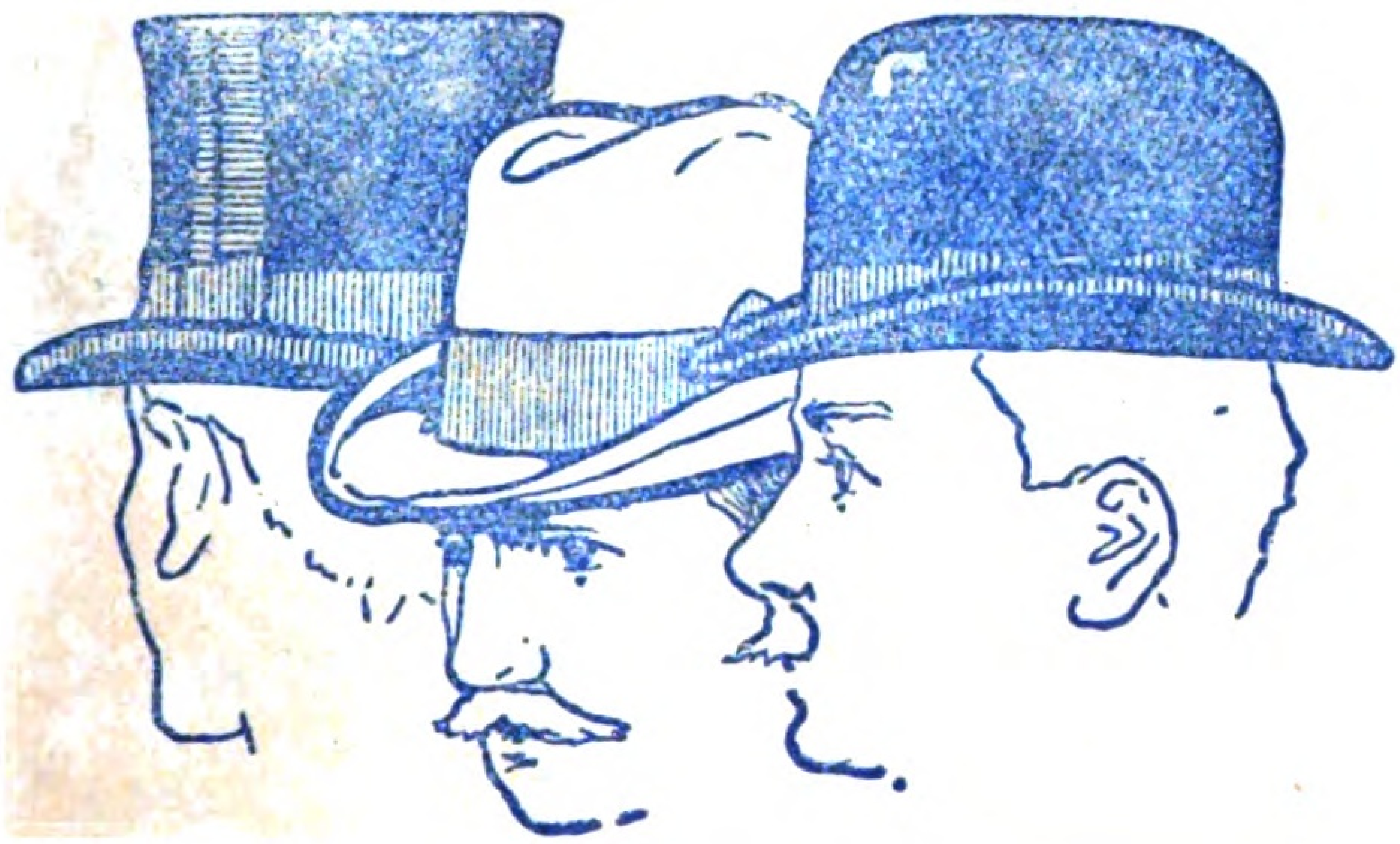
東京市本郷森川町 振替壹九六四七番 文成社 直接送料全免



中央公論第廿七年第十一號目次



冬の帽子來る



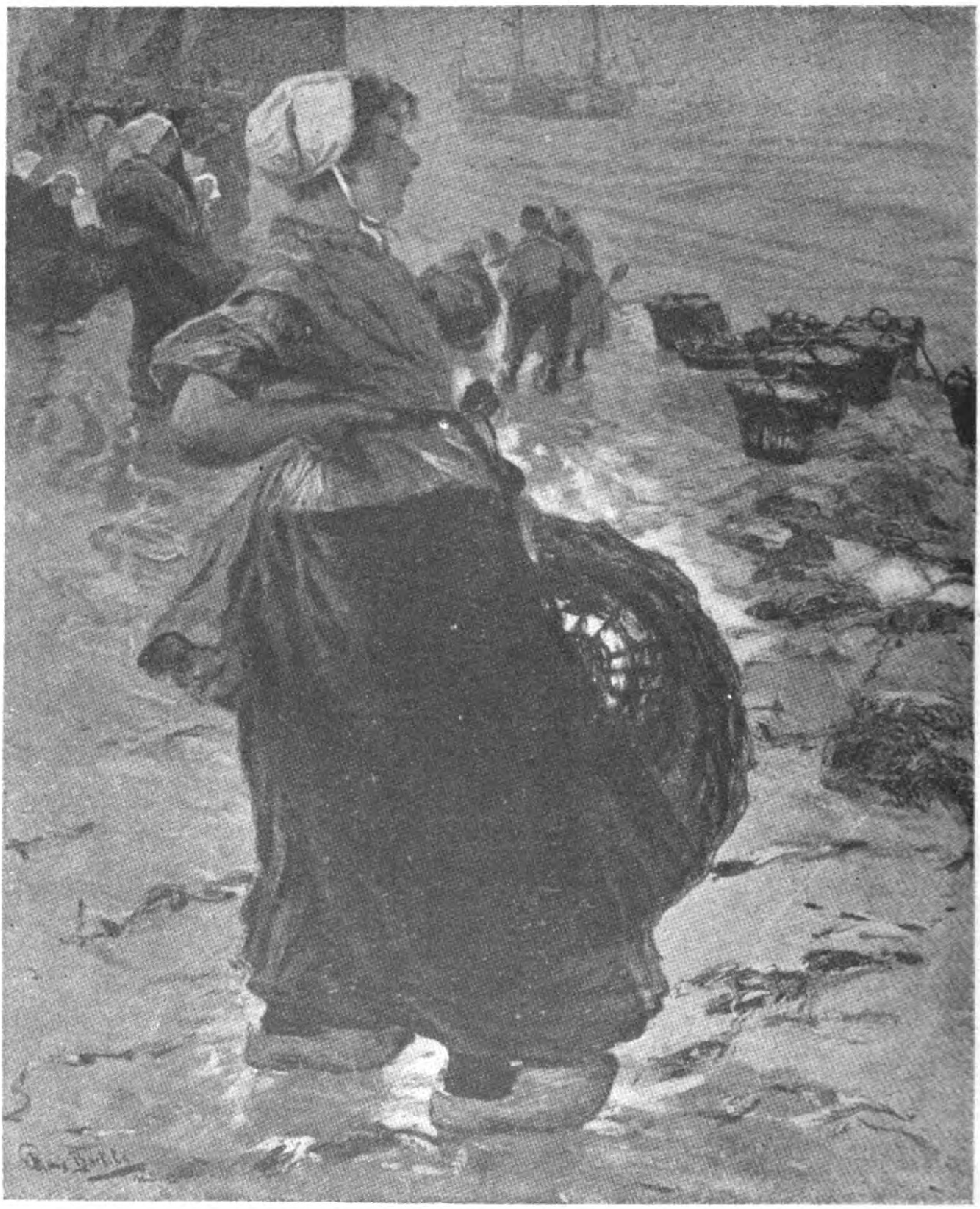
全國民儀禮に謹む時丸善の新着帽子は最も品格ありて荘重也

(目録送呈)

東京日本橋區通三丁目

丸善株式會社

HANS VON BARTELS



"A KATWYK FISHER-GIRL"

中央公論



第二十七年
第十一號
第二百八十四號

軍事立國論

（一）

近時財政緊縮論の聲甚だ高し、松方侯は數年前私かに緊縮論を唱へ、歲出を數年間据置きて以て日露戰役後の創痍を癒すべしと做し、其の意見書を當局及び重なる有志に頒ちしとあり、今や略々同様の案を立てゝ、頻りに内閣に慫慂しつゝあり、而して井上侯は實に其の裏書人にして、新聞紙も亦頗ぶる之に倡和するものゝ如し。

吾人は斯の如き意見を以て、國家經濟の根本問題を解決するに足らず、且つ當面の急務に對しても頗ぶる矛盾あるを疑ふもの也。

入るを計つて出るを制するは私經濟の事にして、國家の財政は、出づるを計りて入るを制せざる能はず、他なし、個人に在ては、其の收入の多寡に隨つて生計を伸縮するを當然とするも、國家は素より然るヿを得ざれば也、想へ、一國を列强の間に立てゝ其の完全なる獨立を支持し、國際競爭の伴に伍して、其の面目を保つに止まらず、進んで其の利權を擴張せんと欲せば、之に相當する文武の施設を爲さゞる可らず、此がためには假令多少の無理を爲すも、また努めて多くの費額を投ぜざるを得ざるにあらずや。

我が日本の如きは、現に年々五六十萬宛の人口增殖を爲しつゝあり、之がためにも、利權擴張の手段を執らざる能はざる也、ノヴォ、ヴレミヤの記者エゴロフ氏曰く「日本の人口增加率は實に驚ろくべきものなり、若し斯の如くにして推移せば、大に領土を海外に拓くか、若くば佛國人の如く人爲的に人口繁殖を制限するか、然らずんば唯だ亡國あるのみ」と、然り、我が耕地面積の增加率は遙かに人口增加率に及ばざる也、故に佛國人若くば近時の紐育市民の如く、人力を以て生兒を防制するにあらずんば、竟に食ふ能はず、衣る能はず、國民皆生活に窮して自然に衰亡するの外なきのみ、彼の松方ズムの徒、果して此の人口增加を奈何せんとするや、歲出据置は或は爲し得べし、人口は到底据置くヿ能はざるにあらずや、列國との關係上、到底現狀のみを支持するを得ざるに非ずや。

且つ日露戰役以來、正貨を外國に積み置くの得失は姑らく措き、此の事實は今や奈何ともす可らず、年々外債の利拂ひの外、尙ほ輸入超過の貿易決濟のため、年々此の正貨を減少し往かば、我が兌換制度は何に由て之を支持せんとする乎、貿易上のバランスを保たしめつゝ、漸次此の制度を變更せざるを得

ざるは論なきも、今急劇に之を更むの不利にして、且つ頗ぶる實行しがたきや何人も認めざる能はざらん、然るに松方ズムの主張は、絶對に外債外資を起すを非とす、抑も兌換制度を破壞するものならざらんや。

且つ正貨流出を防止するため、外國品を使用す可らずと云ふが如きは、是れ高價なる內國品を使用して、强て產業上の不利を顧みざるもの也、非自然の保護主義を行はんとするもの也、其の國家經濟及び民間事業に不利を來たす論なきにあらずや、殊に軍艦製造の如き、外國品を用ゐずんば、脆弱にして物の用にも立たざるものを造り出すの外あらざらんとす、是れ海軍をして幾んど一の案山子たらしむるもの也。

（二）

眞に國家の經濟を思ふものは、產業の發達を保護するがためにも、深く思ひを致さゞる可らず、單に關稅のみを引上げて輸入品を高價ならしめ、其の結果、食物を不廉ならしめて一般に生活難を來すが如き、實に甚だしき拙策なりとす。

政府既に鐵道を直接に經營し、且つ船舶航路に補助金を與ふる以上、鐵道に於ては徒らに收入の多きを求めず、重きを產業の發達に置きて、其の運賃の如きも、原料率、燃料率を特定して極めて之を低廉ならしめ、且つ輸出品の船賃にも特別割引法を行はしめざる可らず、之を是れ爲さずして、今の鐵道院の如く、乘客收入のみに重きを措き、或は國家の保護を受くる郵船會社をして、外國船と運賃同盟を造

りて、恣に我が輸出品の運賃を引上げしむるは、果して何の心ぞや。

忍へ、鐵道院が觀光團そのものを歡迎して其の運賃を割引するが如きは、徒らに收入增加を求めて、人民に不急の出費を促がすものにあらずや、國民眞に臥薪嘗膽を心とし、眞面目に其の業を勵む以上、觀風賞光のために旅行するが如きは、之を抑ゆるを當然とせずや、鐵道院にして眞に國家產業の發達に志あらば、何故に貨物の運搬を迅速にし、且つ其の運賃を低廉ならしめて、以て貨物輸送を營業の主眼となさゞるや、吾人は深く鐵道院の根本主義を謬まれるを慨すると共に、政府當局が產業保護のため、眞に適當の措置に出でざるを嘆惜せざる能はざる也。

松方ズムの如きも、未だ此の點に着眼せず、徒らに外品排斥を主張し、單に關稅の高率にのみ依賴せんとす、未だ思ふて而して至らざるものと稱せざるを得ざる也。

且つ外債は大抵不生產的に消費せらるゝと雖も、外資は然らず、主として生產的に放下せらるゝが故に、化して或る有價物と形を換ゆるのみ、例へば外資によりて鐵道を建設せんか、外資其の物は全く消滅せず、價ある鐵道となつて、相當の利潤を生じ、之を金に換ゆる場合には、或は却つて增加する乎、少くも初め投じたる資本と同額に換へ得べし、故に國家永遠の利害より打算せば、寧ろ大に外資を輸入して鐵道を改良し建設し、其の利潤によりて全然外資を償還したる後、其の純益を擧げて始めて租稅輕減の資に供すべきのみ。

松方ズムが茲に言ひ到らずして、單に退嬰緊縮のみを主義とするは、吾人の贊せざる所也、我が國今

や興國の機運に當り、駸々として抑ゆべからざる勢ひあり、何を苦んで退縮を事とすべけんや、政府黨たる政友會が平生積極主義を唱へながら、政府財産の鹽梅に窮するを助くるの智なく、却つて松方ズムを歡迎するが如き、將た平生元老無用を主張し、其の干渉を攻撃しながら、今や逆まに松方元老等の助言に隨喜するが如き、陋の極也、而して世論の之を迎合する、亦同じく陋の極也。

（三）

然れども是れ抑も末論のみ、吾人は此の際に在つて、更に溯りて國家根本の大問題を講究し、以て世上有識者の教諭を請はんと欲す。

吾人が曾て論じたりしが如く、**日本は實に武を以て立國の大本とすべき特質**を有す、皇祖神武の御名は實に能く之を表彰し、天武、桓武の御名、また常に英主に奉つるに武の謚號を以てせしに視るも、國の特質知るべき也。

歴史を案ずるに、希臘、羅馬、カルセージの興亡は論なし、近く和蘭の衰へしは、實に適切なる好例ならずや、西班牙、葡萄牙は、其の武力の盛んなるに當つて、幾んど西半球を掌握し、遠く東方亞細亞まて其の威を揮ひたりしが、然かも武備の弛ぶや、版圖年毎に削奪せられて、竟に今日の狀態となりぬ、和蘭は始めより歐洲に於て蕞爾たる一小國のみ、然れども西班牙と相爭ふこと八十年の永きに渉り、其の國運は此の際に在て大に伸張したりき、彼れが世界到る處に其の領土を有し、世界到る處に其の貿易旗を翻へせるは實に此の時なりしにあらずや、當時英國の如く、切齒自から堪ゆる能はざりしも、其の

力及ばざるがために、之を奈何ともする能はざりし也、然るに和蘭が西班牙と媾和し、其の精鋭なる陸軍を解放し、殊に海軍を三分一に減少するや、英國は千載の好機到れりとして猛然蹶起したりき、即ち和蘭と三び戰ふて三び之を破り、竟に殆んど和蘭領土の大半を擧げて其の有としたりき、和蘭や、積衰の極自から支ゆる能はず、今や僅かに獨逸の下風に立ち、其の扶助によりて辛ふじて獨立の名を保つに過ぎず、疇昔の繁榮壯大全く一夢に屬す、蓋し武を撤せる結果に外ならざる也。

支那歴世の興廢を視るに、また武を以て興り、武の衰ふるに由て亡びざるはなし、漢人漸く文にして平和を好み、全く文弱人種となるや、常に北方の强に壓せられ、國命殆んど北に移り、或は猶太人の如く、人種として僅かに存するに過ぎざらんとす、今や漢人の打立てたる中華民國なるものが、到底獨立の力なきも、また全く武なきが故のみ。

世多く武を以て不生產の絕大なるものとす、然れども是れ必らずしも通論に非ず、英國が今日の大を致せしは何ぞ、大半は是れ武力の効果にあらずや、露國が世界の大國となれるは何ぞや、純乎たる武力の賜ならずや、普魯西が漸くに勢ひを得て、竟に墺地利を盟主より排し、佛國に勝ちて而して獨逸聯邦の主となれる、また實に武力の結果にあらずや、英國人が米國の牛肉、濠洲の羊肉、支那の豚肉を喫ひ、露國の麥、伊太利の菓物に舌皷を鳴らして、以て瞻頭に世界の珍を絕たずと自負するも、無敵の大海軍あつて、能く世界の航路を占有するが故ならずや、米國印度の綿花を輸し來りて之を糸とし布とし、以て世界の市場に販ぐも、亦偉大なる海軍あるが故ならずや、米國人は西班牙と戰ふて比律賓を獲たるがため

に、戰爭の頗る有利なるを思ふて坐ろに好戰の傾向あり、戰爭必ずしも不生產的ならざる知るべきのみ。

我が日本も、平生不相當なる武備を有すと稱せらる、然れども日清日露兩大戰の結果を精視せよ、夫れ我が國の面積は、始め二萬四千餘方里に過ぎざりしも、日清戰爭によりて臺灣を加へたるがため二萬七千餘方里となり、日露戰役のため樺太の半を加へ、且つ朝鮮を併せて四萬三千餘方里となり、殆んど從前の二倍となれるにあらずや、就中臺灣の如きは、今や年々六千萬圓の租稅を收め得て、富度の進步驚ろくべきものあるにあらずや、之を交通機關たる鐵道線路に視るに、明治二十五年には五百五十哩なりしもの、日清戰役後の三十年には六百六十一哩となり、日露戰役後の四十年には三千百十餘哩となり、電信線路は、二十五年に三千四百五十五里なりしもの、卅年には五千百三十八里、四十年には七千二百餘里となり、船舶（汽船）に在ては廿五年に十萬二千三百一噸なりしもの卅年には四十二萬六千六百二十四噸、四十年には九十五萬一千五十二噸となれり、之を會社資本に視るに、明治二十五年には二億圓に充たざりしもの、卅年には五億三千二百五十二萬圓となり、四十年には十二億餘萬圓となり、貿易額に在りては、廿五年に一億六千二百四十二萬餘圓に過ぎざりしもの、卅年には三億八千二百四十三萬餘圓、四十年には九億二千六百八十八萬餘圓となれり、此等の進步必ずしも悉く戰爭のみに原因せざるも、主として戰爭のため促されたるものたるや爭ふべからず、武事を以て大なる生產的といふ、未だ必らずしも過當とす可らざる也。

マハン大佐は、國民が兵士として訓練を受くるがために、柔順、秩序、勤勉、質素、剛健等の氣風を養成するの利あるを主張したり、また一面の眞理なりとす、彼の富貴の子弟が兵役に就くを厭ふは、之に反對する放縱、驕奢なる能はざるを怖れてのみ。

若し國富の増進のみに重きを措きて、商工業を立國の本とせば、其の結果如何ぞや、富めるものは益々勢ひを得て、政權を掌握するに止まらず、富者の常として驕奢淫逸を恣にし、金屋に住ひ、美食に飽き、多くの婦女の貞節を汚すに止まらず、利害を重んじて正義を貴ばず、良俗衰へて文弱の弊益々長ずべく、國運の衰ふるや必然也。殊に政治上の腐敗殆んど言語に絶するものあらんとす。

武を立國の基礎とせば、武人の益々勢ひを得るや免かる可らず、隨つて武斷の風の増長するまた自明の理也、然れども武人は概して剛健也、堅實也、少くも商工業者に比して然り、殊に君國のためには一身を犧牲にすることを忘れず、義に勇むは商工業者の比にあらず、武斷素より弊なきにあらざる、驕奢、淫佚、文弱の弊に較すれば同日に語る可らず、其の是非得失多く問はずして明らか也。

我が國は、其の人口增加の一點のみより視るも、必らず大に殖民を爲さゞる可からず、此がため必らずしも領土を海外に拓くの要なきも、少くも利權を擴張し、外交を掩護して以て國民の海外移住を圓滑ならしめざる可らず、即ち主として武力を旺盛ならしめざる可らざるや論を俟たずとす。

表面に奢侈豪華を事として外客を歡迎し、以て其の財囊を絞りながら、裏面には質素儉約、生兒を抑制して頻りに富力のみを畜積する佛人の態度は、到底我が國人の堪ゆる所にあらず、黄金萬能を主義

として、何事も金錢を本位とする米人氣質も亦日本に適せず。

日本人は國民としての團結力の鞏固なる、忠君愛國の情熱の旺んなる、殊に質素にして矯捷且つ義に勇なる、先天的に武人たるに適せり、即ち武を以て國を立つることは、天の使命と稱して可也、其の富力を增進するが如き、專ら此の武力を支持する資と爲せば則ち足るのみ。

(五)

明治天皇の宏謨雄略は、大抵其の完成を告げたりき、唯だ一事の剩されしものは他なし、支那問題の解決是れのみ。

支那問題解決の要は究竟するに武力にあり、我が國にして、其の立國の使命よりして、將來の大計よりして、適當に支那問題を解決し、以て世界の人道と文化とに貢献せんとせば、何を措きても先づ堅實なる武力を備へざる可からず、而して今日より其の用意を爲すの急要なる、素より論なきのみ。

幸か、不幸か、我れは實に西隣に支那を控ゆ、單に此の一事より視るも、勢ひ武を以て立國の大要素と爲さゞるを得ざる也。

軍事立國のためには、國民皆精苦し努力せざる可らず、徒らに民力休養の俗論に雷同して退嬰減縮を主とす可らず、如何なる負擔にも能く堪ゆるの決心を以て、勇往邁進せざる可らず、斯の如くにして與國の機運に乘ずる、是れ日本をして最も正確なる針路に向はしむる所以ならずや、而して大正の新政なるものは、實に此の大針路に進むの外あらざるに非ずや、經世の遠識ある人、果して以て如何と爲す。

銀行會社の破綻豫防案

(一)

近時銀行會社の破綻頻々として續出し、且つ銀行會社員にして、其の資金を私するものまた少からず露顯す、是れ果して何の故ぞ。

銀行會社の破綻といふも、經濟界變動の結果には非ず、其の當事者が營業の方法を謬まりて、缺損を生じたるにも非ず、若し斯の如くんば、何人も之を諒として、而して寬恕せざる可らず、既に其の最善を盡す以上、見込違ひ、豫想外れ等は素より免かれざる所なれば也、一方に成効あれば、一方に失敗あると世事の常例にして、寸毫も恠むに足らざれば也。

然れども彼等の破綻するや、其の最善を盡して而して失敗せるには非ざるが如し、吾人の了解する所によれば、彼等は多く投機に關係せり、少しく詳らかにいへば、彼等は手を株式の賣買に染め、其のために銀行會社の資金を流用せり、否濫用せり、幸ひにして利潤を得ば、其の濫用、寧ろ盜用せる資金を納めて、實際に何等の痕跡を貽さゞるを得るも、失敗に亞ぐに失敗を以てせん乎、其の遣繰に窮して竟に破綻を暴露せざるを得ざるのみ、斯くして其の銀行會社の破綻を來し、其の結果全く銀行會社を倒滅せしむるに至るも少からざるのみ

近時株式市場の狀況は、多くの失敗者を續出せり、彼の銀行會社員にして株式投機に關するもの亦其

の例に漏れずして、多くは蹉跌し失敗せり、是れ彌縫を善くする能はずして、實に破綻を來せる所以ならずや。

（二）

銀行會社の重役にして、株式に手を出すは太だしき不德也、其の私財のみを以て投機を爲すも亦許す可らず、何ぞ況んや恣に銀行會社の資金を濫用するをや、其の行爲は不信の極にして、幾んど盗賊と異ならざる也、否盗賊以上也、多くの株主出資者より委託されたる資金を以て、不安なる投機を行ふ、啻に其の職分を謬まり責任を無視するに止まらざる也。

然れども駭くを休めよ、今の銀行會社の重役にして、何人か株式賣買に手を染めざるものぞ、唯だ資金に裕かなるものは、未だ多く銀行會社の資金を盗用せざるのみ、假令盗用するも、僥倖にして未だ投機に失敗するに至らざるのみ。

吾人は此の滔々たる惡俗を痛擊して、根本より之を掃蕩せんことを期せざる可からず、偶純良なる重役あり、謹直自から持すると雖も、然かも同僚の投機に從事するを諫止し非難するに至らず、心假令之を非とするも、世間の通例として之を默視する彼等良心の痲痺せる丈けそれ丈け、世上の惡俗の太だしきと、察するに餘りあらずや。

銀行會社の重役として、株主の信認を受け、其の資金を管する以上、謹直黽勉、一意株主の利益を計るを當然とす、株主が彼等重役に與ふるに裕かなる俸級と、多き賞與とを以てするに對しても、彼等は

素より然かせざる可からざる也、然るに其の職分に冷淡にして、却つて私利私慾に急なるが爲め、爲す可からざる株式賣買を爲し、用ゆ可からざる株主の資金を濫用す、其の罪實に盜賊以上也、賣國奴以上也、我が法律の曾て之を嚴罰するものなく、世論また之を痛撃せざるは何ぞや、之を罰すること絶無には非ず、之を難ずるも亦絶無に非ず、然も之を賣國奴以上と爲す者は全くなし、過れるの太だしき也。

（三）

銀行會社の重役にして株式投機に手を出すもの、屡々意外の成功を爲すを例とす、夫れ財の戻つて入るものは、また戻つて出づ、彼等は其の得る暴利のために、頓に氣滿ち心驕り、法外の奢侈に耽らざる莫し、第一は花柳の間に流連し、第二には居宅服飾を美にし、第三には外妾と別莊とを作り、太だしきは乃ち手を政治運動にまで出さんとす、蓋し政治運動によりて名聲を馳するに止まらず、また機密を知る便を得て、更に之を投機に應用せんとする也。

斯の如き傾向は、是れ一代の風氣をして、輕薄浮蕩放縱ならしむるもの、百害あつて一利なし、即ち彼等は一國良風の惡賊也、啻に賣國奴以上の兇人たるに止まらざる也。

驕奢の風に染めば、之を悛むると容易ならず、人間墮落の勢いは猶ほ円石を坂路に轉ずるが如し、之を止めんこと洵に難し、故に彼等投機に失敗するも、直ちに之を悔悛するに至らず、其の驕奢を續くるために、益々利を得るに焦心し、焦心の極、彌々投機に失敗し、竟に救ふ可らざるに至るのみ、其の往々銀行會社を倒滅するに至る、實に此の故也。

（四）

銀行會社の下級使用人にして、假令普通以上の智なき者と雖も、皆重役の投機に手を出すを知らざる無く、又其の驕奢淫態を視ざる莫し、夫れ上の好む所下是よりも甚だし、下級使用人等は重役の驕奢を羨むの餘り、先づ密かに花柳の間に出入し、其ののちまた株式に手を下し、濫用し得らるゝ丈け銀行會社の資金を濫用するに至る、而して重役等假令之を知るも然かも制する能はず、猶ほ蟹にして其の兒の横行するを罷め得ざるが如きのみ。

銀行會社の使用人等、身分不相應の驕奢を爲すに止まらず、其の投機に失敗するや、竟に數萬十數萬の公金を費消するに至る、實に此の結果也、昨今銀行會社等の公金私消の露顯するもの多き、其の徑路や、銀行會社の破綻と相同じ。

蓋し彼等には誘惑も亦多し、株式仲買人にして、銀行會社の融通を受くるものは、先づ重役は勿論、下級使用人に對してまでも、密かに勸むるに株式賣買を以てし、多くの便益を供するに止まらず、一時は其の利益のみを持來りて其の損失を負はしめず、茲に於て重役及び使用人は、漸く馴れて而して其の太だ利なるを思ひ、思はず其の道に入るの深きに至り、竟に公金を濫用するにも至るのみ。

然れども誘惑あるの故を以て、彼等の罪は寛恕せらるゝことなし、百千の誘惑に打ち克ちて、謹直精勵以て其の職分に盡すは、人の貴き所以ならずや。

（五）

米國人は黄金萬能主義を奉じて、最も投機を好むもの也、然れども銀行會社員にして、一度足をウォールストリートに入れ、手を株式賣買に出すものは、即時之を追放するを例とす、米國人にして尚ほ且つ然り、我が國人如何ぞ之に及ばざる。

吾人は先づ法律及び銀行會社の定款に於て、明らかに社員の株式賣買を禁止するの條文を設定せんことを主張せんと欲す、斯くして投機に心あるものをして、絶對に銀行會社に近かしめざるを得ば、惡俗或は一掃せらるべき乎、夫れ投機は人の好む所、一個人が其のため財を失ひ身を亡すも自業自得のみ、唯だために他の多くの株主に害を及ぼし、銀行會社を損失せしめて、財界に不安を與ふるに至ては忍ぶ可らず、既に普通の賭博を禁ずる以上、銀行會社員に投機を禁ずる亦當然のみ、思ふに此の事たる、彼等會社銀行の重役以下に取て、極めて痛切なる打撃なるべし、彼等をして一大恐慌を起さしむべし、然れども効果は必らず其れ丈け覿面ならん。

公論

山鹿素行論 附長沼澹齋論

福本日南

起見

史中の英雄其人に乏しからず。中に就いて、我最も親愛する所は、諸葛武侯其人である。彼の時代に至つて、炎漢の紀綱は全く地に落ち、彼處には袁紹、此處には劉表、扨は袁術公孫瓚等までが、長槍大戟を振舞はして、覇業を企てゝる。自ら視てコムマ以上と思惟する者は、氣が氣ぢや無い。中々ジッとしては居られぬ時代。武侯にして功名富貴の志があつたなら、八百株の桑や、二頃の田などをイジくつて居る場合ぢや無い。斯かる天下の情態にも關はらず、功名の風が何處に吹くかといはぬばかり、空嘯いて、今年やお蠶さまが當りそうぢやの、麥の肥しが利いたかのと、紅女や作男を相手にして、南陽の隴中にスッ込んで居た。傍から看れば、麻生の伯父さん氣が知れぬ。併ながら彼の思按は外に在る。群雄四方に割據して、互に雌雄を爭ふものゝ、何れを觀ても山家育ち、土が産した計芋、こんな徒輩と事業を倶にしても、徒らに生靈を茶毒するに過ぎぬ。左様無益の殺生をしやうよりも、天分の富を抱きながら、實の持腐りも一興ならんと、澄まし込んで居たものらしい。其中に司馬徽の推薦に聽いて、おとづれたのが、手を垂るれば膝より下り、顧みて其

耳を覩る、猿臂長耳の劉玄德てあつた。一度訪はれた時武侯はいつた。『我を祭の犠にする歟』と枉駕三顧を受くるに及んて、彼は玄德の爲すあるに足り、同時に己を信ずるの深さを看取し、さらば此人と棒組んて、天下蒼生を塗炭の中から救ふてみやうと思ひたつたものと見える。それて前日までは冷々水の如き先生が、一たび草廬を出てから後は、炎々火の如き人となつた。請ふ彼が後主に上つた出師表に看よ。『鞠躬盡瘁』、斃れて後ち已まん。成敗利鈍に至つては、臣が明の逆め睹る所に非ず」と。不幸、彼の志は全く酬いず、天下三分の業に終つたもの丶、一大陸に等しい禹域に於て、三分の業を立てたのは、墺・伊・獨・佛等の一大國を創建したのよりも、もつと大きいものに當つて居る。偉とし豪とし欽せざるを得ぬ。

が、劉玄德も三顧せず、時運も彼と會しなかつたらば、南陽山水好。最好臥龍岡。臥龍不可見。松栢欝蒼々。其松栢の肥しとなつて、悠々たる此天地の裏に永く武侯の存在を傳へる人も無かつたてあらうが、其邊に何の頓着も無い。『祇園・島原・撞木町、傾城狂ひの其中に、病氣なんぞて死なしやんしたら、忠歟不忠歟、分りやせぬぞいな』それを搆はぬ以上に於て始めて、英雄の眞資格はある。

素行の立志

此種大形の人物を我封建の時代に求めて、其面影の何處やら髣髴たるのが、山鹿素行てある。彼は會津に生れて、江戸にて長なつた。彼の父は山鹿六右衛門貞以といつて、由緒ある士てあつたが、會津の蒲生家滅亡の後、浪人となり、江戸に出て、町醫に隠れ、玄菴と稱して、刀圭の業に從事し居た。素行は其次男てある。彼の幼名は佐太郎、又六三郎とも稱したが、長じて甚五左衛門高祐とも又高興ともいつた。彼は生れながらにして、天才を具へて居た。六歳の時から、讀書に從事させられたが、八歳の頃には、四書・五經七書・詩文を讀み覺え、九歳の時に、林道春の許に入門した。すると道春は無點の論語・黄山谷の詩集など

を取出して、讀ませて見た。が、何の苦も無くすら〳〵と讀むので、只管感心し、弟子として敎養した。十一歳の春の元旦の詩などは、幼年としては傑作と稱せられ、十二歳にして見臺を用ゐて講義する事を許された。當時は都てが格式の世の中てあつたから、餘程好く書が讀めて、師の許可を受けるてなければ、見臺を用ゐる事は出來ぬのてある。然るに一世の大儒羅山先生が、僅に十二歳の少年に之を許したといふ一事ても、彼の學力は察せられる。彼十四歳の時、飛鳥井大納言雅宣江戸に來聘され、彼の奇才を聞き、召して詩を作らせてみられたが、即座に賦して上(たてまつ)つたので、雅宣も亦大に感賞し、爾後忘年の交を締せられた。そのくらゐてあるから、諸大名から頻々招待されて、經書の講義をする。それて山鹿の門に麒麟兒が出來たとの評判は早くも江府に嘖々たるに至つた。

が、彼は一個の秀才・文學生に甘んぜぬ。彼の志は文武兩道の士となるに在つたので、十五歳の時から、更に武藝と兵學の兼修を始めた。其兵學は當時第一流の兵家と聞えた小幡勘兵衞景憲の高足北條安房守氏長に就いて修業したが、其進歩の迅速なのには、同門何れも舌を捲いた。やがては景憲にも親炙するやうになり、景憲も我道の蘊奧を傳へるのは、此少年を措いては他に無いとまて見込み、彼が二十一歳の時に、免許皆傳の印可狀を授與したが、當時景憲の知友にて有名な神道家に高野按察(あぜち)院光宥といふ人があつた。景憲は前の印可狀のみては尙ほ物足らず、此光宥に囑して、別に添狀を作らせた。其文に『文に於ては、其の能く勤むるに感じ、武に於ては、其の能く修むるを嘆す。噫(おゝ)文章ある者は、必らず武備ありと、古人云ふ。我又云ふ』とまて書かせた。斯くの如きは、當時の異數とする所て、豪傑の若殿ばら、擧つて羨んだ。それだけあつて、爾後彼が講莚に臨んて兵を談ずるや、肅然整然として、譬へば諸葛亮が斜谷を出て、若くは孫子が桴皷を執つて、三軍を指揮するが如く、千兵萬馬交然として躍り出る。又或は不識菴と機山が河中島に戰ふが如く、神變鬼化測り識る可からざるの概があつた。

それは〱實に目覺ましい。そこで諸大名を始として、其士大夫、又は旗下、それから浪人など、一世に氣を負ふほどの者は、先を爭ふて、門籍に就いた。

此通り彼は經・兵の二學に於て、嶄然たる大家となつたが、彼は中々それのみで滿足せぬ。是等の學術研究の眞最中、更に前に擧げた按察院光有に就いて、神道を學び、十七歳にして、斯道の秘傳口訣を悉く傳授された。が、其後も尙ほ研究を繼續し、其頃忌部氏の學統を受繼いて、有名であつた廣田坦齋といふ國學者を師として、忌部神道の奧旨を究め、是れ亦皆傳の證を得た。斯坦齋も可なり博學の人て、神道學の外に、歌學及職原の學にも通じ居た。知見を弘めるに熱心なる素行は、それそれ亦兼修して、皆造詣する所があり、有職の學ても、立派に一家を成すに足るだけのものがあつたが、歌學の方も中々の熱心て、三代集から源氏以下の諸物語は申すに及ばず、當時の歌人の多數が窺いても見ぬ萬葉集まて誦讀し、壯年の頃は年に千首以上の國風を詠出したと、自分ていつて居る。

是のみならず、また〱ある。彼は亦老莊の學をも好み、是にも三たび臂を折るまで研鑽を續けたのである。それから禪學にも一指を染めたらしい。それは當時明から歸化した隱元などゝも會晤して居るので、察せられる。以上は彼の研究時代とも謂はう歟。要は、其當時に於ける衆流百家の學を究め、其上に彼の見地を起し、天地間に第一等の人物どならうといふのが、抑々彼の立志と認められる。

豪傑並び起る

議論の範圍を餘りに擴大なることは、本問題の下て、務めて避けるつもりであるが、それても此に一言せねばならぬ事がある。西洋百年紀の差金を我國に擬すれば、後柏原天皇の文龜元年から、永正・大永・享祿・天文・弘治・永祿・元龜・天正・文祿を籠めて、慶長五年まてが、所謂十六世紀に當るのである。此世紀には、關東に北條、北陸に上杉、東海に武田、近畿に織田、扨は中國に毛利・尼子、四國に長曾我部、九州に大友・島津・

龍造寺、それから世紀の後半には豐臣・德川などの諸豪傑が並び起つて、各々領土の開拓に腐心した。それて此十六世紀は、我國に於ては領土開拓時代とも謂ふ可きてある。是時代ほど武力的豪傑の顏揃は前後に無い。顧ふに是は競爭の賜に外ならぬ。六師が出れば、大將が見はれる。大將が見はるれば、又其上左衞門の三傑が現ずる。是は自然の理法である。而して同世紀の最後三年と海内の統一とを此世に遺して太閤が薨去した。其跡釜を、幸運な駿河の老爺奴(おやぢめ)が引受けた。

次に來つた世紀は、慶長五年から、中間に元和・寛永・正保・慶安、承應・明暦・萬治・寛文・延寶・天和・貞享等、昌平無事な御代だけに、其の多くは記憶にも留まりかねる年號を籠め、赤穗四十七士の復讎を二年後に待命させた元祿十三年までが、即ち十七世紀であつた。が、不思議にも此世紀は、前の世紀と面目を易へて、智力的豪傑が簇出した。儒學の方から數へ來れば、元和五年（千六百十九年）には、熊澤蕃山が呱々の聲を揚げる。それから中二箇年を隔てゝ元和八年（千六百二十七年）には本問題の山鹿素行が生れ出る。其次中間四箇年を過ぎて、寛永四年（千六百二十七年）には伊藤仁齋が誕生する。それから一寸間があつて、寛文六年（千六百六十六年）には、荻生徂徠が此世に來たので、假武以來の四豪傑が同じ世紀に頭(あたま)を並べた。さらば兵學の方面はと顧みれば、素行の生後十五箇年にして、寛永十四年（千六百三十七年）に長沼澹齋が生出する。それから人品こそ一等下れ、斯學界の一雄將たるを失はぬ由井正雪の歿年、慶安四年（千六百五十一年）から考へれば、生年こそ知れねど、世紀の產物たることは疑ひない。それから神道學は如何にといへば、素行に先だつこと四年、蕃山に先だつこと亦一年、元和四年（千六百十八年）には山崎闇齋が生れて來る。其の又二年前には、吉川惟足が出る。而うして寛永五年（千六百二十八年）には、大義名分を主眼とする國史學の大宗水戶の義公が誕生される。次に寛永十七年（千六百四十年）には、我古典學及國風學の復活者たる釋契沖が世紀に入來る。寛文八年（千六百六十八年）に至れば、之が繼承者たる荷田春滿も參預する。以上を更に並列してみれば、

元和二年 千六百十六年 吉川惟足生る。
中間一年
元和四年 千六百十八年 山崎闇齋生る。
元和五年 千六百十九年 熊澤蕃山生る。
中間二年
元和八年 千六百二十二年 山鹿素行生る。
中間四年
寛永四年 千六百二十七年 伊藤仁齋生る。
寛永五年 千六百二十八年 徳川光圀生る。
中間八年
寛永十四年 千六百三十七年 長沼澹齋生る。
中間二年
寛永十七年 千六百四十年 釋契沖生る。
中間十年
慶安四年 千六百五十一年 由井正雪死す。生年未詳
中間十四年
寛文六年 千六百六十六年 荻生徂徠生る。
中間一年
寛文八年 千六百六十八年 荷田春滿生る。

是等の諸豪傑は、何れも多少本源自發の…獨創見を挾有し居て、國民心地の開拓に從事したのである。從つて此十七世紀は、我國に於ける心地的開拓時代とも謂はう歟。日本開闢以來、此世紀ほど智力的豪傑の並出した事は無い。

以上を今一層簡明に約言すれば、

十六世紀は武力的豪傑競起の…領土開拓時代
十七世紀は智力的豪傑並立の…心地開拓時代

である。兩々比觀し來れば、無限の興味を感ずるものがある。看たまへ、秦末漢初の古代史を。項籍江南に虎嘯すれば、劉邦山東に鷹揚する。韓信跨間から這出して、將壇上に拜せらるれば、英布黥餘に奮ひ起つて、九江王の金印を佩する。人世の進步は全く競爭に在る。競爭が絶えれば、社會は死ぬ。素行が學問の多方面に渉り、一宗門の開祖たるに至つた所以も、自ら箇中に在る。

素行の經學

林道春一たび家康に聘せられて、一代の哲學となつてから以來、聖人の學問即ち儒學はといへば、京都の一角を除くの外は、悉く宋學となつた。それで四書を講ずる天下の子弟は、擧つて朱熹集註から學に入つた。恰も是は今日の文部省御編纂の讀本ともいふ處。併し威力は中々讀本ぐらゐのものでは無い。素行も亦御多分に漏れず、其宋學から進んだのである。お負に羅山先生直傳の教授に接したから、最初は矢張理氣心性の説に奉承した。從つて早く其說を推擴した著述なども公けにした。が、英雄何時までも他人の咳唾を拾はんや。彼の智見の進むに從つて、漸くそれを疑ひ出した。彼の見地や喜ぶ可し。聖人の道は聖人から承はらう。漢・唐・宋・明の門番や受附や取次輩は、銘々自個の意見を加へて、勝手放題な熱を吹き、聖人の思ひも・言ひも・敎へもしない事をいふ。洙泗に溯つて、聖人に面謁し、親しく其敎に接しやうと志し、訓詁註釋一切を斥けて、思を經書に潛めること多年、終に大に發明して、其の見る所を發揮し來た。試に彼が所論の一端を擧示しやう。

「今日の學者は名利を捨つることを要として、一點の利害心もなからんことを欲す。故に治國平天下の事に及んでは、更に之を沙汰せず。是れ學の實を盡さゞる故なり。學は何の爲ぞ。天下に立つて政を正し、人の朝廷に立つて、人民を救はんが爲なり。されば博施濟衆に在り。何事ニ於仁ニ。必也聖乎。と聖人はのたまへり。博く施し濟ふことと治國平天下の極に至らずして已む可からず。是れ學者の極功なり。大學の道は明德を天下に明かにして、天下平かなりといふに極まり、中庸の極功は、天地位し・萬物育するに至極せり。何ぞ是を分に踰えたりとせんや。然らざれば本自ら庶民に徴し、三王に考へ、天地に建て、鬼神に質すの道にあらず。言必信・行必果は硜々然たる小人の學にして、士の志氣にあらざるなり。予往昔嘗て疑ふ、今日性・心・道の論、三尺の童子も是

を以て事とす。國家の治平・朝廷の政事、之をいふ者は、名利に奔走して實學なしと論ず。而れども孔門の弟子各其志をいふときは、皆朝廷政事の用なり。夫子之を稱したまふも、其治國立朝の事を以てす。今より之を見るときは、孔門の高弟を名利に於て汲々たるに似たりと。この疑久らして息まざりき。是れ聖學の實を知らず、唯異端の淸淨・虛無・無願・無物を勸めて、我儒の實體と誤りなせるに由れるなり」と。

要は、孔子の學なるものは、程朱等の主張するやうな一種の心理學では無くて、實在を主眼とする經世學であるといふ事を發揮したのである。

聖教要錄の著

素行は斯くの如く時流に卓出した識見を以て、孔子の教義を主張した。其說は布いて四十五卷の「山鹿語類」となつたが、之が大綱を提げものが、即ち有名なる「聖教要錄」である。それて素行の流れを酌む者は、「語類」を素行學の條目、「要錄」は其綱領と稱して居る。如何にも此「要錄」は其名の如く、簡にし要を得たものである。

彼はいふ、

「知りて、力行せざれば、至ると謂ふ可からず。力行するも、省察せざれば、知索して、行蕩す。至ると謂ふ可からず。力行、省察、而る後ち知至る也」と。

其の所謂省察は、主として講學なり。講學に由つて、道を明らめ、其の明らめたるものを、直ちに躬行す可しといふに在る。即ち彼の主張は知行一致である。但し其知は、磨き上げたる知ならんことを要す。それて無ければ、其知が索する、索したる知を、行に合すれば、可惜其行が蕩する。といふに在る。從つて彼は讀書の標的を說く。

『讀書に、(道を)學ぶの志を以てすれば、大益なり。單に讀書を以て學と爲せば、玩物喪志のみ」と。

說き來つて、今日滔々たる學者の病に中るを覺える。

彼は實在主義である。オーギユスト・コント等が主

張する實在哲學即ちフィロソフィー、ポジチーヴと自ら默契する。彼はいふ、

「道は行ふ所ある也。日用以て由り行ふ可からざれば、則ち道にあらず。聖人の道は、人道也。古今に通じ、上下に亘りて、以て由り行ふ可き也。若し作爲・造設に渉りて、我は行ふ可きも、彼は行ふ可からず。古に行ふ可きも、今は行ふ可からずば、則ち人の道に非ずと」と。

其論旨理至極てある。斯くの如くして、一部の「聖教要錄」は極めて適切に孔子の教義を發揮した。が、其中に時流の學者を驚殺したのは、彼の性論てあつた。彼はいふ、

「學者性善を嗜んで、竟に心學・理學の説あり。人々賦する所の性は、初は相近し。氣質の習に因りて、相遠ざかるのみ。宋・明の學者が異端に陷いるの失は、唯だ這裏に在り」と。

是等も孔子の「性相近く、習相遠し」といふ性論に對しては、正當の解釋て、流石は素行なり。漢・唐・宋・明の門番・受附・取次等を斥けて、孔子の教義を學んだゞけに、其意を得たものてあると思ふ。若か之をダーヴインなどに聽かせたらば、そうよ、人間といふ者は、そんな者よ。孔子のいふ通り、お主の解する通りだと、首肯するてあらうが、此簡單なる性論を玩味すれば、宋學の徒が亞聖の人なりとまて尊崇する孟子の性善説からして否認し去り、其説の推撰者たる宋學派は、異端邪説に陷いれりとまて斷言し來つたのてあるから、七里法華に似た、お茶ノ水の聖堂連は厄鬼となつて怒つたのてある。

顧ふに當時のお茶ノ水派は、思惟したてあらう。彼山鹿甚五左衞門奴、羅山先生の御教育に由つて、學問の出來るやうに成つたくせに、有らう事か、亞聖の性善論にまて反對し、先生を始めとし、伊川・晦菴諸夫子のお説を信奉する我々を、楊朱・墨翟の徒か何んぞのやうに、異端呼ばゝりは、言語道斷、こりや聽棄てには相成らぬと闔慾いたものと見える。火元は恐らく林家てあらう。是に由つて、彼は不測の奇禍を買ひ、

赤穂に貶謫せられるに至つた。

素行の兵學

彼の兵學をいふに先だつて、當時の社會を一顧せねばならぬ。當時の社會は申すまでも無く武門武士の幅を利かせた社會である。花は櫻木・人は武士、武士で無ければ、夜も日も明けぬ。而うして其武士なるものは、讀んで字の如く、用武の道に達した者で無ければならぬ。何程學問があつても、識見があつても、打物取つて敵と戰ふ以上の修養なき者は、當時の社會の立物となる事が出來ぬ。其證據は林道春ほどの大學者でも、頭を圓めて、長袖者流に伍して居たので知れる。誰やらが言つたやうに「士が厭やならやめて頭剃れ、好き例しあり羅山法印」。此歌の下には、學者坊主なんどが何になるもの歟との意は、躍出する。それで士の當世に爲すことあらんと欲する者は、是非とも武士として立たねばならぬ。且つ素行の世に出る時代までは、元和の偃武を距ること未だ遠からず。斯道に名譽の士といへば、海内の諸侯は重祿を以て召抱へたものである。素行が師とした小幡勘兵衛景憲の如きも、其一人である。そこで浪人・庶士の輩は爭ふて武藝・兵學を修めたのである。素行固より有爲の才、倜儻にして氣を負へり。當世に爲すことあらんと欲する者であるから、夙に小幡の高足たる北條安房守氏長に從學したのである。

此間に一寸小幡勘兵衛の何者たるかを言はう。彼は武田の浪人で、甲州流の軍學兵法を以て一家を爲し、家康の旗下に收錄せられた者である。「甲陽軍鑑」の著者は此人らしい。今日の歴史家などは、同書の杜撰なのを看て、動もすれば彼の兵學までを馬鹿にしたがるが、左樣見くびつたものでは無い。全體戰國時代に在つて、最も戰術の進んで居たのは、武田信玄の軍であつた。一例を擧げれば、大阪陣に、伊達政宗の部隊長片倉が指揮した騎兵の突擊に對し、槍隊の步兵に稠密隊形を作らせ、それを折敷かせて、美事騎兵を追捲くつた眞田幸村が戰鬪振りなどは、今日の戰術から觀て

も間然する所が無い。其幸村は祖父の一德以來、武田の宿將であつたのでも知れる。又家康が駿・遠・參三州に據つて、秀吉軍の侵入を防がうとした時、多く武田の古兵を招徠し、頻に防禦の方法を講じたのに察しても、思半ばに過ぐるものがある。それで身甲州武士の家から出て、お負に少年時代から戰鬪の術に馳驅して來た景憲であるから、信玄流の武道に於て、相當に見得たる所のものがあつたに相違ない。尤も戰陣の間に長なつた者に、後から思ふやうな抽象的な理論的な深い學問のあらう筈が無い。それで治世となつて、疊の上で兵學の講釋をするやうになつてからは、不文ながらも「甲陽軍鑑」などを編出して、多少はコケ威かしに出た處もあつたらう。併ながら彼が如何に研究的であつたかは、後年自家の門人たる素行に七書を講じて貰ひ、之を研究して、其蘊奧を究めんと欲し、孫子の始計第一から始めて、本文を一々扇面に書きつけ、行住坐起に誦讀玩味し、從つて會得すれば、從つて次章に移り、終に全く七書の業を了へた。それで同書の篇章を書きつけた扇子が、積り〱て數千本、長持一掉に充ち滿ちたといふ事である。是に由つても、彼が空言放論の出鱈目家でない事は分るであらう。

素行は夙に此門に入つて、兵學を修めたのである。察するに、今人は兵學といへば、單に兵書を講ずる事だけのやうに思惟する者もあらう。が、當時の兵法といふ中には、弓・馬・劍・槍の鍛錬から、結陣・布營・攻城・野城、扨は築城術の研究までも含蓄して居るのである。素行の敏穎にして、熱心なる、悉く之に通じたのである。就中、築城術の如き、最も彼の得意とする所であつた。それで前にも陳べた通り、景憲は衷心から感服して、一種特別なる印可狀を彼に附與するに至つた。しかし是は彼に取つては、申さば兵學上の初の山蹈たるに過ぎぬ。それから以上は彼が卓絕の識見と學問とに由つて、韜鈐の妙諦にまで悟入したのである。是に至つては、景憲などは斯道に於ける小學時代の鄉校先生ぐらゐの感があつたらう。それを想見される談が幾らもある。彼がまだ二十五歲の時である。當時

海道切っ の豪傑と聞えた勢州桑名の城主松平越中守定綱は、最早六十歳の境に入り、お負に兵學は、同じく小幡の高弟で、夙に印可を受けた人てあるから、素行の先輩も先輩、大先輩てある。が、豪傑は自ら豪傑を知るて、此殿は早くも素行の卓見に感服し、兵學の弟子とならんことを求め、素行が辭退するにも關はらず、誓詞を入れて、終に門人となられた。是から觀ても、彼が二十四五歳にして、卓然既に一家を成し來つたのが知れる。

從つて斯學に關する述作も亦尠くない。「武教本論」は其一てある。「武教小學」は其二てある。「武教要錄」は其三てある。「武教餘錄」は其四てある。「兵法神武雄備集」は其五てある。それから「七書諺解」は博引旁捜して、精微を極めた。其他「古今戰略考」は一部の戰史に手を著けた始めともいふ可く、「武家事記」の著は、戰略考と表裏して、歷史の方にも關係を有する。

自分は日頃から彼の立見を悦ぶ者てある。彼は何が故に學者にして兵家を兼ねた歟。彼はいふ、

「儒にして帝たる也、三苗を伐てり。儒にして王たる也、無道を驅りて、巢に圍り、臺に焚けり。儒にして相たる也、東山を征し、管蔡を誅せり。未だ嘗て武略に疎ならず。若し武畧に疎ならば。聖人は一孱弱夫のみ。何を以て天下の上に立たん。故に天下事なければ、冠冕を飾りて、禮樂を尙び、天下事あれば、左に鉞を秉り、右に麾を執りて、以て禍亂を靖む」と。

是れ豈大丈夫の志てはない歟。此見地から彼は所謂山鹿流兵學の開祖となつた。

素行の國學

彼の時代は學問復興の初期てある。從つて所謂「學は周公孔子のみ」と天下一般に信じて居たのてある。が、豪傑の士は文王なしと雖も亦起るて、そろ〳〵國學の創立を思ひ立つた。尤も事の此に至るには、由つて來る經路がある。過去の三四世紀は、群雄割據、戰國攻伐の時代てあつたが、太閤一たび見らはれて、へ

の字なりにも、統一的日本を形成して、之を家康に相續させ、兎にも角にも治教の一端を開いて來たから、國民的精神は春光を迎へて、九地の底より、角ぐみそめざるを得ぬのである。そこで豪傑が方々に崛起した。其の最も偉大なのが、水戸の義公で、之に次いだのは、山崎闇齋と素行であつた。此闇齋と素行の國學振りは、異曲同工とも謂はう歟。闇齋は垂加神道を唱へ、素行は忌部神道を紹述し來た。後年に加茂眞淵などが起つて、大成した國學の前に視れば、孰れも遜色なきを得ざれども、敬神・尊王から國民立國の原義に覺到し、國民的反省を促がし來つたのは、流石に闇齋、流石に素行で、偉とし豪とし欽せざるを得ぬ。彼素行は此方面に向つて、夙に「神道書」の述作があつたが、「中朝事實」の著に至つて、一家の國體論を大成した。

顧ふに彼が廣田坦齋などの忌部神道から入つて、終に一家の國學を開くに至つたのは、恰度小幡景憲や北條氏長等の半俗兵學から入つて、終に兵理の正鵠に達したのと、一般である。豪傑の才能くせざる所なし。其の「中朝事實」に序するを讀めば、曰く、

「恒に蒼海の無窮を觀る者は、其大を知らず。常に原野の無畦に居る者は、其廣を知らず。是れ久しく狃るれば也。豈唯海と野とのみならんや。中華文明の土（我日本帝國の謂ひなり）に生れながら、未だ其美を知らず。專ら外朝の經典のみを嗜み、嘐々として其人物を慕ふとは、何ぞ其れ放心なる。何ぞ其れ喪志なる。抑好奇乎。將た尚異乎。中國（日本）の水土や、萬邦に卓爾し、而も人物は八紘に精秀なり。故に神明の洋々、聖治の緜々、煥乎たる文物、赫乎たる武德、以て天壤に比す可き也」と。

斯くの如くして、皇統の尊嚴なる、竝に國體の崇尙す可き所以を講明して、天下後世を警醒した。彼亦遂に皇政復古に一簣を培ふた一人であつた。それで御覧なさい。素行の流れを酌んだ俊傑は、吉田松陰でも、乃木大將でも、皆熱烈なる尊王愛國の人であつた。

事の因みに附言しやう。故乃木大將は此書を今人に讀ませんが爲に、之を出版して知人に頒たれた。今偶

之を繙けば、自分は其卷首に左の語を書きつけて居た。

今茲に明治四十一年九月廿六日、素行二百廿四春祥祭を牛門の宗參寺に行はる。我亦往いて會す。坐に乃木大將あり。此書を把りて我に贈らる。此書、素行の遺著に係る。大將夙に素行の立德・立言を欽する者。自ら貲を棄てゝ之を刊し、以て同好に頒てり。篤志・特行、大將の如きは、素行の徒たるに恥ぢずと謂ふ可し。

と。而うして今や大將亡し、遺卷を愛撫して、俯仰今昔の感に堪へぬ。

素行の文學

最初にも一寸一言したやうに、彼は幼少から詩・文にも志した。十一歲の春には、元旦の詩を賦して、老儒の羅山先生を驚かし、十四歲の時には、飛鳥井大納言と唱酬して、亞相と忘年の交を締したといへば、其天才も想像される。彼が壯年に亘つて、好んで莊子を讀んだといふも、亦此文學趣味に歸せねばならぬ。而うして彼の指を染める處、透徹せざる無きの概がある。それは彼が兵學の門人たる、大名の一人丹羽左京太夫の許に出て、時々兵書を講ずる際、主人の希望にて莊子の講義をも爲して居た。之を聽聞する大名幕下なども大分あつて、此方も亦評判となつた。すると當時武田道安といふ莊子學者が居て、彼は惺窩先生の直傳と稱し、斯學の大天狗であつたから、中々人に許假しない。甚五左衞門何をいふか、一度聽いてみたいといふので、素行信者の一人淺野因幡守(長矩の內室の父)が伴ひ來て、講莚に參じさせた。道安最初は此壯佼何をいふかとの面持して、聽居たが、一席了ると、心から感嘆し、惺窩先生以來始めて斯人ありと賛美したといふ事である。

それから彼は又儒家・兵家には珍らしく國文學の嗜好を有し、十七歲頃から二十歲前後までに、源氏・伊勢・大和等の物語・枕草紙、三代集、扨は萬葉集までも學習し、自身亦年々千首以上の國風を詠じ出た。彼の多

趣味も亦追想される。

但し其の漢文の日記などは、東鑑的漢文て、餘り能文ともいへぬ。併ながら「聖教要錄」や「中朝事實」などに至ると、立派な文章てある處から觀れば、餘所ゆきに洗錬して出せば、文字も亦人を服するだけのものがあつた事が分る。それから其詩なり歌なりも、今日まで餘り傳はらず、又人口に膾炙するもの丶無い所から思へば、文學發生初期の當時に於てうまかつたといふに過ぎなかつたのてあらう。然し彼の詩賦論を聽けば、吾等も亦同感てある。「聖教要錄」中、彼は詩に論及して、

『詩は志の之く所なり。内に志あれば、則ち言必らず動く。古詩は自然の韻叶也。其志或は諷諫を存し、或は事義を評し、或は好風景を述べ、或は自警し、或は時政・君臣の德を稱す。此くの如くなれば、六義自然に相具はる。後の作詩を學ぶもの、言を巧みにし、趣を奇にし、其の言ふ所は皆虛誕。故に詩人は天下之閑人、佚樂游宴の媒也』と。

詩・歌は一なり。漢に詩といひ、大和に歌といふ。御覽ぜられよ。現代の詩人・歌人、舊派・新派と互に標榜し、言を巧みにし、趣を奇にし、沽らん哉〱、我は價を待つ者なりと、御意あれど、何れも一山三百文、覆瓶にもならず。而うして乃木大將が内志一たび言に動き、

現し世を神さりまし丶大君の御あと慕ひて我は行くなり。

といへば、其裏に一奇趣・一巧句なきも、誦下に悚々萬人泣く。大將は素行の遺意を失はぬ。

素行は彼が如き理趣の人なるも、詩歌には詩歌の眞諦を認めた。それて彼は尚ほ語を次ぎて、

『作詩、必らず經書の文字を事とし、道德仁義など言ひて、世教に渉らんと欲する、亦詩の一病也。學教何ぞ詩を借らん。宋明の儒、多く此蔽あり。聖人の道を知らざる也』と。

解人の見・通人の論よ。

素行の研究的態度

彼が「聖教要錄」を著はして、孔子の實在主義を主張するや、目中に程・朱・陸・王なく、心性理氣說は異端なり、邪說なり、之を奉ずるの徒は、孔門の罪人なりとまで斷言して掛つたので、此書を刊行するに臨み、門人等は頗る師の身の上を危ふんだ。が、自信に厚き彼素行は、毫も之を危懼しない。彼の議論は堂々てある。

「噫小子、謀るに足らず。道なる者は、天下の道也。懷にして之を藏す可からず。天下に充てゝ萬世に行ふ可し。一夫も亦此書に因つて、其志を起さば、則ち化育に贊する也。君子は身を殺して以て仁を成すことあり。何ぞ吾言を秘せんや。且つ道を說いて人を謬る者は、天下の罪人也。漢唐の訓詁、宋明の理學、各〻利口饒舌し、惑を辨ぜんと欲して、惑愈〻深く聖人をして塗炭に坐せしむ。最も畏る可き也。聖經世に粲然たり。多言を勞す可からず。吾又博識に乏しく、文辭に薄し。其の聖言を註解し、諸儒を辨拆するは豈惟れ志ならんや。然らざれば乃ち學者の汚染、竟に新たにす可くらざる也。後世畏る可し。吾何ぞ過なからんや。吾言一冊せば、天下の人、以て告ぐ可く、以て毀る可く、以て辨ず可し。其の告げ・其の毀り・其の辨ずるを得て、而うして其の過を改めなば、道の大幸也。遼豕羞を貽し、黔驢蹶き易きは、皆己を知りて、彼を知らず、詳に致めざるの蔽なり。予は周公・孔子を師として、漢・唐・宋・明の諸儒を師とせず。學は聖教を志して、異端を志さず。行は日用(實在の謂)を專らにして、洒落(空理空論の謂)を事とせず。知の至るや、通ぜざる無からんことを欲し、行の篤きや、力めざる無からんことを欲す。然も猶ほ口に敏にして、行に訥なる、是れ吾憂也。聖人の道なる者は一人の私する所に非ず。如し一人に施す可くして、天下に擴ぐ可らずば、則ち道に非ず。必らず之を天下に示して、後の君子を待つ。惟れ吾志也。と。

之を觀れば、彼は何處までも研究的である。學者の本

領と稱せねばならぬ。當時の聖堂連にして學者の自信があつたならば、之と大に論戰し、孔學の眞理を推究す可きてあつたが、所詮太刀打は出來ぬと考へたか、卑怯にも權力の手を假り、犬の糞にて仇(かたき)を取つた。

素行の蹭蹬

彼の學術は以上に雜と觀察した通りてある。是から立ちかへつて、彼が一代の蹭蹬を一顧しやう。

扨段々述べたやうに、彼は二十四五歳までに、兵經兩學に涉つて、蔚然たる大家となつた。就中兵學は封建制度に第一の必要學、而して素行が斯學の蘊蓄は、小幡景憲や北條氏長などの企て及ぶ所て無い處まて至つたので、諸侯は爭うて彼を招聘せんとした。其中には紀伊大納言・阿部豊後守などもあつて、一時は兩侯の引張凧(ひつぱりだこ)とまてなつたが、時の將軍家光も其名を聞かれ、折々阿部伊勢守などを以て、兵學上の意見を諮問せられるといふ勢。家光の左右に出仕する人々からは、將軍家御召出の思召あれば、滅多に諸侯の招聘などに就くなとまて、内諭せられたのてあつたが、慶安四年に、家光が薨去せられたので、其事はお流となつた。お負に此歳には同じ浪人て兵學家を標榜した由井正雪の亂などもあり。浪人兵學家て門戸を張つて居るのが、多少の問題にもなつたらう。其頃素行招聘申込の筆頭は松平筑前守即ち加州侯て、七百石て召抱へたいとの相談。すると又播州赤穗の城主淺野内匠頭長直が、千石を以て、客卿として招いたのてある。五萬三千石の淺野家て、千石を以て迎へやうといふ禮意は、百二十萬石の前田家て、二萬石を賭するよりもモット豪らい。素行は此知己の値遇に感じて、承應元年に、草廬を出てた。是が彼三十一歳の時てあつた。

此間に一寸辨じて置きたいのは、諸書に多く此招聘の主人公を間違へて居る一事てある。其人が内匠頭といふので、長矩と間違へて居るのが「山鹿誌」てある。又之を長友と誤つたのが鹽谷守誠の「山鹿素行傳」。それから此頃何やらを看ると、亦之を長重と書いて居る。長重は是時既に故人。長友はまだ〱世子の若樣時代。

長矩は未だ誕生もせぬ前である。

抑此の長直が亦一個の豪傑大名で、松平越中守定綱と莫逆の親友だけあり。亦夙に小幡が門に遊び、甲州流兵學の印可まで受けた人であつたが、それで中々滿足せぬ。定綱と同じく節を折つて、素行を師とし、熱心の極、終に客卿として天下の俊傑を赤穗に羅致したのである。此人の上に就いても、亦申述べたい事が多々あれど、それは先づ擱いて、爾後素行を遇すること極めて厚く、只折々に道を問ひ、兵を學ぶだけで、一定の職司をも申付けず、恰度九年間、赤穗と江戸との間に悠々せしめたのであつた。

それで素行は心を傾けて、長直の爲に献替し來つたが、其間に彼の學識は益々進む。抱負も亦從つて大きくなるので、一小藩に區々たるを欲せず、天下の廣居に立つて、一世の人心を指導せんと思ふ念慮は、段々に痛切になる。終に萬治三年に至り、千石の祿を辭して、淺野家を去つた。

素行の全盛時代

彼が一たび淺野家を去り、江戸に歸つて、門戸を張るや、其名聲は舊時に倍し、兵學を學び、經義を聽かんと、門下に聚まる者雲の如く、此時には桑名の松平越中守は既に物故せられたれど、前主の淺野内匠頭（長直）や、淺野因幡守、松浦肥前守、津輕越中守、本多備前守等の諸大名を始めとし、幕下（はたもと）、各藩士諸浪人を合せ、其數三千以上に登つた。中には隨分豪傑があつた。其一人にて素行の相談相手になつた村上宗古といふ老人の如きは、有名なる渡邊勘兵衛睡菴が朋友で、眼（まなこ）時人を空うし、此頃の兵學者などは、幾んど其前に立つ者が無かつたが、一たび素行を見るに及んで、當年五十三歲に至り、人に誓詞を書くも恥入るが、宜敷賴むといつて、此門下に入つた。素行にして若し兵でも擧げるやうであつたら、必らず一方の大將株であつたらう。

それから是も門人の一人、備後三次（みよし）の城主淺野因幡

禁止した、是より先き勃牙利人の志士は立憲倶樂部黨と言ふ政黨を組織して居たが、之も解散を命ぜられたので、彼等は立憲政治の原則の一たる集會の自由を與へられぬものとして憤慨し、「此一事斯くの如くならば餘事知る可し」と呼號して又々昔年の匪團復活の決心を强めたのである。第二、昨年夏頃、土政府はマセドニヤに於ける武器沒收を始め、軍隊を以て勃牙利人の村落住宅を圍み、服從せざるものに對しては盛んに殺戮毆打等の暴行を敢てした、此武器沒收實行は政府側にて國内の平和上必要と見た爲めてもあらうが、一方より見ればマセドニヤのような不安の地ては各家屋に武器を備ふるのは自衛上仕方が無い點もあり、又久しく默認せられ、特權同樣に思はれたのであつた、從つて甚しく基督教諸民族の反抗を買ひ、殊にその實行回教徒に對して寛大なりし爲め、偏頗の謗を高めたのである、第三土耳其はマセドニヤに於ける基督教徒の所有地區を强制的に買上げ、或は沒收しボスニヤ、ヘルゴヰナ兩州(一九〇八年墺國の領となりたる地)より回々教徒を移住せしめて其土地を與ふる手段を執つたのである、第四立憲政治以前列國がマセドニヤ改革を監督した際には基督教徒たる小作人を小地主となす政策が多少宛行はれて居たが、青年土耳其黨執政後全然中止せられた、之等の不平は基督教民族をして又々土耳其反抗を始めしめ、同時に土國軍隊も亦た之に對して自然盛んに基督教徒迫害を始めた、又今夏の土國議會總選擧なども、官憲の干渉と猾策とて回教徒萬歲の結果を收め得た、而して最近コチアナの勃牙利人虐殺事件あり、ヘラネ基督教徒迫害事件あり、遂に土耳其人と勃牙利、塞爾比、希臘諸民族との反目は最高度に達したのである、

然かも之丈けが今回事件の重因てはない、此外に注意す可きは勃牙利、塞爾比、黑山、希臘諸國が接近したことである、從來之等諸國は共にマセドニヤを覬覦して居る競爭者て、頗る仲惡かつたものである、然るに最近に至り大に接近して來た、即ち勃牙利と希臘とは久しく敎會問題て軋轢反目して居たが本年五月双方

間の難問題を一切解決する協商を結んだ、その結果として之迄勃牙利が沒收した希臘寺院の財産を返還し、希臘教會を公認し、將來兩國の協力を要する政治問題につきての立場及行動をも約定した、又本年八月勃牙利及び塞爾比間にも同盟が出來た、之は一時否認せられたが墺紙ノイエ、フライエ、プレッセを始めとし其根據あるとを說いて居る、其他七月には黒山國（モンテネグロ）も之等諸國と協力を約したと言ふ報道があつた、兎も角此巴爾幹諸國接近は、則ち一國として微力なる彼等をして遂に思ひ切つて土耳其と戰ふ決心を生ぜしめたものに違い無い。

三

今回の巴爾幹紛爭眞相は既述の如しとして、然らば將來本問題は如何に決定す可き乎、之れ最も注意す可き問題である、

之に對する予輩の所思は下の如くである、曰く（一）巴爾幹四國對土耳其戰爭が愈大戰爭とならずして止むにせよ、若くは戰爭進行の結果、土耳其軍が勝つにせよ、マセドニアの改革は行はるゝであらう、（二）之に反し巴爾幹四國勝つとも、マセドニヤ（若くはアルバニヤをも加へて）分割は未だ行れ難いであらうと、

（一）土耳其は一九〇八年復活の一八七六年憲法第百〇八條て地方政治は分權主義に依る旨規定し、一八七八年伯林條約第二十三條に於てクリート以外の歐洲土耳其諸地方に對しても土地の事情に準して同樣の自治主義を許す可き旨を約束して居る、殊に最近墺國外相ベルヒトルド伯は已に或る程度の自治をマセドニアに許さんことを求め、駐土佛國大使も同樣の要求を君府政府に致して居るので、マセドニヤ改革要求は最早や巴爾幹四國丈けの主張では無いのである、多分基回兩教徒半數位より成る新マセドニヤ改革委員位を設け、列國監督の下に或る程度の自治を許すとは止むを得ない所てあらう、而して此點丈けは戰爭の績否、勝敗等に係らず行はるゝてあらう、

（二）然らば四國對土耳其の戰爭が愈實現し。且つ四

國が勝利を得た場合は如何と言ふに、マセドニヤは一層完全なる自治を許さるゝには相違無いが、分割の希望は未だ實現し難からうと思はれる、無論之は今後の局面展開如何にも依るとて、一概に豫言す可きては無いが、種々困難の點が見えるのである、第一は四國間の競爭軋轢の變である、四國は前記の如く接近はして來たけれども、之は土耳其と言ふ共通の敵に抗對する爲めて、其接近が果して分割問題迄も解決して居るか一疑問てある、然かも假りに黒山國はスクタリ其他北部アルバニアを得、希臘はクリート、テサリー、エピルスを得、塞爾比はコソウオ及び西部サロニカ、勃牙利はアドリアノープル及び東部サロリニカを得ると言ふ如き協定をなし得るとするも列强は容易に之を許さないてあらう、蓋し目下巴爾幹に多大の興味を持つて居る邦國は英佛露墺獨伊皆な然りてある、此内露國は今日自ら南下し難き事情もあり殊に一八九四年勃國皇太子ボリスの希臘教信徒となりたる結果勃國との親交も復歸したので、今ては同人種たるスラウ諸國の發展を希望するものと思はれる、英佛兩國は阿弗利加、亞細野等の自領に多大の回教信徒を有する關係もあり、就中佛國は十數億の資金を土耳其に投じ、現政府の好意を求むる事情もあるから、土耳其に反對する心も無いが、併しまた自ら領土的野心がないので、巴爾幹諸國が戰勝の曉マセドニヤ分割策を講ずるのに邪魔を入るともあるまいと思ふ、併し乍ら注意す可きは墺獨伊三國である、墺伊兩國は共に歐州土耳其に對し野心を包藏して居る、即ち墺國はその通商的出口としてアドリアチック海とダニユウ河を持つて居るが、アドリアチック海は數百哩に亘りて伊太利の攻擊を受け得可き危險がある、ダニユウ河は露國黒海艦隊の支配下に在る有樣てある、依つて土耳其領ノヴヰバザルを經てサロニカに突進し之を其軍事的商業的根據地とせんとは、多年の慾望てある、素志てある、而して獨逸は言ふ迄もなく此點に於て墺國に味方し居り、且つ都合善くば歐州土耳其に於ける、墺國の地位を堅固にし、獨逸自身の小亞細亞經營と相待つて、ツマリ波斯灣に至る迄を

兩國の支配下に置かんとを期して居る、從つて此希望の妨害たる可き巴爾幹諸邦マセドニア分割は到底許す能はざる所である、又伊太利はアルバニヤに野心を持つて居るから黑山國の發展を默許しないであらう、萬一露國が英佛兩國を動かし、多少巴爾幹諸邦に同情する運動をなさんか、國際外交關係は頗る面白いに違いないが、併しそれにしても分割などは六ヶ敷からう、併し孰れにせよ疑い無きはマセドニヤに於ける土耳其の勢力の墮落である、マセドニヤは今後歐州諸邦の監督を受くるとなる可く、之れ言ふ迄もなく歐州に於ける土耳其放逐の第一歩である、予輩の所見は斯くの如くである、之以上は今後時局の發展に徴するのは無い。（十月十七日）

殖民地經營と拓殖博覽會

拓殖局部長　江木翼

明治天皇の治下に於て、領土については從來の領土の面積の約二分の一に當る所の擴張があり、又人口については從來の人口に比して約三分の一の增加があつた。此事は明治天皇の治下に於ける最も顯著なる事柄であつて、即ち殖民地の獲得といふ事が明治史上に於ける最大なる事件の一つであることは疑ひない。今日に於て此事柄丈け——面積に於て從來の約二分の一の擴張、人口に於て從來の約三分の一の增加といふ事柄丈けでも、日本が如何に强大になつたかといふ事を示すについて相當なる材料なることは爭はれない。今此等の土地並びに勢力範圍内等に於ける國家及び會社等の一年の歲計を見るに、實に一億五千萬圓餘に上つて

居るのである。此點に於ても從來の歳計に比して約三分の一內外の增加を示した譯である。我が帝國が明治時代に於て如何に膨脹し發展したるかは、此土地、人口及び歳計に見て其大體を推測することが出來るのである。

さりながら單に領土の擴張、新附の人民の增加丈けが直ちに帝國の威力の强盛といふ事を示す譯ではないのであつて、此等の領土、此等の人民といふものが或は開發せられ或は發達して、よつて以て帝國全般の利益を增進するにあらざれば、今日世界列强の間に立つて、到底雄を稱することが出來ぬのである。

話が少し廣く亘り過ぎるけれども、今日世界の趨勢を見るに、餘程顯著なる事柄が少くとも三つ四つあると思ふ。玆に世界の趨勢といふのは詰り强國になるについて必要なる所の趨勢といふ意味であるが、其要件が少くとも三つ四つを數へ得ると思ふ。

世界の强國であるといふ事の爲めには第一に十分に教育されたる愛國的の國民が多くなくてはならぬ。又益々殖えなくてはならぬ。平たくいへば即ち本國人口、若くは本國人口と仝一程度に發達したる殖民地の人口が多數であつて且つ益々增殖しなくてはならぬといふのが第一の要件である。それから第二には今日に於て世界に覇を稱する所のものは富といふ事である。富の力が十分でなくてはならぬ。其富といふものが或はあらはれて資本となり、いろ〳〵な方面に活動するものであつて、非常に强大なる國は必らず巨額の富を擁し、資本をして各方面に活動せしめて居るのである。即ち第二の要件として富、其活動方面として資本の充實といふ事が備はらなくてはならぬのである。第三には今日の世界に於て强國が爭うて居るものは經濟力の發展といふ事である。而して此經濟力を發展せしむるには二つの要件が必要である。一つは生産したる貨物を賣り附ける市場の必要、他の一つは其生産原料を成るべく安く且つ手近に得るの必要である。それで此經濟の方面に於て成るべく多くの市場を開拓し、自らの勢力範圍を成るべく多く擴張せんとするは列强の爭ひ努む

る所であつて、其市場を廣く有するものが即ち世界の强國となるのである。而して市場を廣くせんとするには生產の原料を安くして且つ手近に有せねばならぬことは經濟上の理法であつて何人も知る所である。今日世界の强國なるものを見るに皆此等の要件を備へて居るのである。それで此等の或は人口、或は資本、或は生產品の市場、或は原料の供給などいふ方面に向つて如何に列强が努力盡瘁したるかを顧れば、强國となる要件も略ぼ明瞭にならうと思ふ。

それで今人口の事から第一に話したいと思ふが、先づ人口が多くなくてはならぬといふ事は申すまでもない。玆に人口といふのは、先きも申した如く、敎育を受けたる愛國的の國民といふ意味であつて、文明的の發達をしたる國民をいふのである。かゝる人口が多くなくてはならぬといふのは、かういふ人口は第一には經濟を發展せしむる力がある、第二は斯の如き人口は國を發達せしむるに必要なる負擔を分任する力が大きい。又斯の如き人口なるものは國を防禦する組織、即ち國防の組織について必要なるものである。即ち此等の經濟、軍事、政治などいふ方面に活動し得る國民が多ければ多い程、世界に大を稱するに都合よき事は分り切つた事である。

今世界の主もなる强國について其本國人種（本國人種といふのは少し語弊があるかも知れぬが委しくいへば、歐羅巴については白人種といふを適當とするのである）の人口數の比較を取つて見ると左の如きものである。之は千九百十年の調べであるが、此調べは固より本國及び殖民地に於けるものを通じて合算したるものである。

露	一〇九、四〇一、七二一人
米	八二、四二一、九八七
獨	六四、九四五、八八九
英	六〇、二七四、三八八
日	五一、五一五、九七三
佛	四〇、八一〇、八九三

右の表の中には本國に居るものでも、劣等の人種の

如きは加へてない。例へば米國には九百萬を數へる黑奴が居るけれども斯くの如きは之に加へてない。此數字を以て見ても、固より文明の程度即ち教育の程度によつても違ふけれども、大體世界に覇を稱する國々は非常に發達したる國民を多く持つて居るものであることが見らるゝのである。

それから第二の事を一寸簡單にお話して見たいと思ふが、今日世界の富といふものは開發に開發を重ね、發達に發達を加へて、非常なる蓄積を來して居る次第である。而して其大なるものは實に驚くべき數に達して居るといつてよいのである。固より富の事は到る處に完全なる統計を得ること六つかしいのであるけれども、今二三の國に於ける富の統計を見ると、實に驚くべき蓄積に達することが分る。即ち千九百十年に於て左の如きものがある。

英	二四、九八六、六八三、〇〇〇圓
米	二一、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇
佛	一二、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇

獨逸に至つては未だ正確に調べてないが、然し獨逸と佛蘭西と合せたものが英吉利に及ばぬことが略ぼ確かなやうである。それ故に先づ一百億磅內外と見るのを正當と思ふ。我國の富の積算をしたものもあるけれども甚だ精確を缺いて居るから、却つて讀者の誤りを招くを虞れて玆には擧げない。兎に角我國は列强國に比して此點遙かに劣つて居ることは申すまでもない。而してかゝる巨大の富を擁する國に於ては、皆其富の利用方法について頗る惱んで居る。即ち資本の放下を如何にすべきかに苦心を重ねて、或は外國に向て投資し或は殖民地に投資するといふ具合に、非常に苦心研究を重ねて居る。

最後に經濟の事であるが、歐米各國に於て此經濟力が甚だ發展して居るといふ事は別に喋々を要せざる程明かな事である。今日世界の各國は或は南米に、或は支那に、自分の市場を擴めんとする競爭努力は誰の目にも最も顯著に映ずる所であつて、決して見逃がすことが出來ぬ所である。此經濟の力を十分に發展せしむ

るには、安くして且つ手近に原料を得ることが必要てある。其原料を得るには成るべく多くの土地を持つことが最も必要な事柄になる。

今迄のお話は極く大體の理論てあるが、之を具體的（コンクリート）に殖民地と結びつけて考へて見るに、先づ第一人口の事柄てある。歐羅巴の今日の國土といふものは殆んど住み盡して居る。歐羅巴の諸國は今日新らしい土地に向つて自己の本國人を移住させ、新らしき土地の開發に努めて居る。殊に英吉利人の如きは年々十萬人以上を加奈陀、濠洲に送つて、其處に大いなる帝國の一部を形造ることに腐心して居る。即ち出來る丈け多く自分の本國と同じ發達程度のものを作ることに熱中して居る。此點から日本を見ると、日本は今日樺太にしても或は朝鮮にしても、人口を收容するに非常に有望なる地方てあつて、茲十年十五年は優に日本の增加する人口を受くることが出來る有樣になつて居る。此點に於て拓殖博覽會を見るならば、我々は此拓殖博覽會なるものは餘程深い意味があるといふ事を考へるのてある。即ち朝鮮の部分、樺太の部分に行て見ると、移住の狀況及び移住を受くる方法は髣髴としてあらはれて居つて、而して其將來の能力といふものも已に世間に知られて居るからして、此點から拓殖博覽會といふものが世間の注意を喚起すべき所餘程多くなくてはならぬと思ふ。而して日本は今日現在の所に於ては、人口の點に於て尙世界に雄を稱するといふ事に行かぬ。又發達の程度に於ても或は一段の遜色があるかも知れぬが益々國民性を發揮し、而して過剩の人口を益々多くして我經濟力を發展せしめ、我が國の負擔力を增加せしめ、我が軍隊の組織力を向上せしめて行くといふ事は實に刻下の急務てある。而して拓殖博覽會は之について一分の暗示を與へるものといふてよからうと思ふ。

それから第二に資本の點てある。今日世界の資本が充實して、其過剩に苦んて居ることは、前にも申した通りてあつて、資本といふものは歐羅巴に於ては殆んど之を用ふる所に用ひ盡し、入るべき所に入れ盡した

有樣てあつて、どうしても之を外に放資しなくてはならぬ狀態にあるのてある。殖民地の獲得が盛んに行はるゝのも畢竟かゝる理由に基くのてあつて、殖民地に投資して殖民地を開發し、而して資本に對する利益を得んとするのてある。即ち今日最大の資本を有つて居る英吉利は又最も多くの殖民地經營に努力しつゝある國てあつて、濠洲や加奈陀や印度に放資した額は頗る巨大てあつて而して此等の地方から得る所の富は又實に絕大なるものといつてよいのてある。産業となつては或は濠洲の羊毛となり、或は加奈陀の農産物となり、或は阿弗利加のダイヤモンド及び金となり、印度の綿となるといふ譯て、實に測るべからざる生産をなしつつある。而して斯の如き所の經濟の發展は一に本國人の放資を本となして居るのてある。翻つて我國を見るといふと、我國の殖民地といふものは放資の點に於て比較的に發達して居らぬ。或は臺灣の砂糖、滿洲の鐵道、朝鮮の農産物、鐵道、金鑛などいふ如く一二の事業に放資して居るものもあるが、大體に於てまだ資本を要すること頗る大なるものがあらうと思ふ。拓殖博覽會に臨んだものは、斯くの如き土地て、斯くの如き原料を産して、斯くの如き狀態にあるものは、必ずや大きな資本を要するといふ事を看取することが出來やうと思ふ。即ち其模型、其生産、其繪圖を見たならば資本家の頭を刺激せずんば止むまいと思ふ。今日の有樣に於ては、日本が殖民地の生産的事業に投ずる資本は、まだ僅かに數億に止るだらうと察するが、五年十年の後には必ずや五億となり十億となり十數億とならねばならぬのてある。拓殖博覽會は此點に於て必ずや資本家の神經を刺激すると思ふが、又資本家なるものも此見地よりして博覽會を見んことを希望するのてある。

それから第三には殖民地といふものは大體に於て本國の工業生産品を要求する所てある。即ち歐洲各國が殖民地を開發する所以のものは、自國に於て生産したる工業生産品を賣る捌け口を何處かに求めなくてはならぬ。それていろ〳〵の方法を以て市場の開發を試む

るけれども競爭が激烈でなか／＼六ヶかしい。そこで殖民地に向ては是非自國の生產品を賣り付ける途を確立したいといふのが歐米各國の熱心に企てゝ居る所である。或は關稅の障壁を以て自國の製品を保護し、或は航海の補助を以て自國の產物を發展せしむるのも、皆自國製品の市場を殖民地に求むるに起因する。我國の殖民地は如何かといふに、今日に於て矢張歐羅巴諸國と同樣の地位にあるのである。即ち殖民地は本國の工業品並に工藝品を需要する土地になつ居る。例へていへば、或は綿糸、或は綿布、或は日用品の如きに至るまで、概していへば工業品並びに工藝品を本國に仰ぐ形になつて居る、此點に於ては本國といふものは相當なる得意を殖民地に持つて居る次第である。現在の所に於て日本の殖民地といふものは日本の工業品を要求する力はまだ甚しく發達して居らぬ。けれども之は其土地の經濟力の發展と共に將來大いに進捗せしめねばならぬ事と思ふ。拓殖博覽會に臨んで見ると此點について眼を刺激するものが甚だ多く出て居らぬ。けれども或は關東州の方面に於て輸入品の見本を呈示して居る所などを見れば此等の狀態について暗示を與へるものといつてもよからう。我が工業家も亦此點に注意して此方面の企業を試みたらよからうと思ふ。

第四に最も必要なる點と思ふのは、殖民地といふものは內地に向つて原料的の物品を供給する所であるといふ事である。此點は前にも述べた如く、歐羅巴各國は殖民地に向つて餘程重きを置いて居るのであつて、本國に於て生產し難きものは之を殖民地に於て生產する方針で、現に特別なる獎勵を施したものがあり、又今施しつゝあるものもある。特に熱帶的殖民地に於ては、本國に必要にして而かも本國に出來ないものを生產することが頗る發達して居る。即ち或は綿花、或は珈琲、或は砂糖、或は各種の食料品といふやうな、最も生活に必要なる材料にして、本國で出來ないものは、殖民地に於て生產することは今日頗る發達して居る。而して之が一面に於ては本國に於ける生產工業に安い原料を與へ、よつて以て本國の產業界を利益することにな

つて居る。此點は我國の殖民地も全然同じ状態にある。即ち本國に於て生産しないか、若くは本國に不足を感ずるものは之を殖民地に於て生産するの方針を取つて居る。先づ臺灣を見ると、臺灣は砂糖を生じ、米を生じ、或は鹽を生じ、或は熱帶的の食料品を生ずる。之れ皆内地に於て必要缺くべからざるものである。而して多くは内地に於て出來ないものか若くは不足を感ずるものか、或は内地に於ては安く出來ぬものでないものはない。飜つて朝鮮に臨んで見る。之にも又各種の産物がある。或は米、大豆、粟等の農産物。或は金、銕の如き鑛産物。或は水産物。或は林産物いろ／＼あるが、是れ亦内地に出來ぬものか、不足を感ずるものか、又は内地で安く出來ぬものでないものはない。之を要するに日本の殖民地も此點に於て、安い所の原料品、安い所の生活の必要品を本國に供給し得る力を有つて居る。拓殖博覽會は此點に於て充分其能力を發揮して居ると認むるが出來るし。拓殖博覽會の最も力を盡した點も亦此方面であらうと思はれる。

之を要するに拓殖博覽會なるものは、時間と金の關係上極めて小さなる規模に於て成立したのであるが、一寸之に臨んで見ても、頗る意味の深い暗示を受くることが出來やうと思ふのである。又我輩は世間の人が、今話した如き點に向つて注意を拂ひ、又我が殖民地を斯くの如き見地より注意せんことを希望する。

財政整理に對する俗論を排す

本多精一

財政整理といふ事は、今日世間一般に唱へらるゝ所の一の流行語であるが、其流行語たる結果、却つて此言葉の眞の意義を考へるものが少く、隨つて財政整理の結果について全く誤つた觀察をなして居るものが多

いのは頗る遺憾である。

元來整理といふ事は現狀打破を意味する。已に現狀打破たる以上は、財政整理の場合に於ても、財政の現狀を著しく變へず、總ての人に滿足を與へて而して何人にも苦痛を與へずして財政整理を實行しようといふのは根本に於て不可能の事である。例へば今日財政整理の場合に於て一般の國民に對して租税を輕減する。又銀行業者に對しては國債の償還をやる。陸海軍に對しては陸海軍を擴張する。地方民や政黨員に對しては各地方に鐵道を建設する、港灣を修築する。又一般實業家の希望に對しては所謂財政經濟調節の名の下に企業界の景氣を刺激して事業を勃興させる。斯ういふ風に總てを滿足せしむる所謂總花主義を實行するといふ事は如何に敏腕なる財政家であつても到底出來ない事である。若しかゝる事が同時に行はるゝならば財政整理といふ事は一擧手一投足の勞であつて左程困難な事ではない。又實際の仕事について見ても今日日本政府の借金政策をやめるといふ事を斷行する丈でも、勢ひ借金の大部分を占めて居る官設鐵道を著しく縮少しなくてはならぬし、又朝鮮の事業も著しく縮少する必要がある。單に一の借金政策をやめるといふ事丈けでも官設鐵道や朝鮮の事業に大打撃を與ふるのである。況んや更らに進んで今の山本大藏大臣が第廿八議會で公言したやうに今日膨脹して居る通貨を縮少して兌換制度を堅固にする爲めには、我金融市場を著しく緊縮する覺悟を要する。金融市場を緊縮すれば事業界は今日の如く勃興することが出來ない。又公債や株券も今日の如き市價を維持することが出來ない。又外國債も斷念しなくてはならぬ。而して我經濟界は其當然の結果として或期間の間著しき不景氣に陷り、新事業が跡を絶つのみならず、現在の既設事業と雖も、此不景氣の爲めに破綻に陷ることを覺悟しなくてはならぬ。之は財政を整理するに當つて當然豫期すべき事で、我輩の見る所によれば財政の整理は又經濟の整理を意味し、經濟界の現狀打破を意味する。前にいつた如く政府の借金政策をやめ、兌換制度を行ふ丈けでも經濟界の不景氣、鐵道計畫の改造を餘儀なく行はなくてはならぬ。

況んや更らに加ふるに今日の如く一般的減税を行ひ、國民の負擔を輕くせんとするならば、單に一千萬圓や一千五百萬圓の行政整理で滿足することは到底出來ない。更らに進んで桂内閣以來の國債償還策をも打切り、本當に財政の基礎を鞏固にする必要を生じて來る。して見れば財政整理といふものは決して總花主義によつて行はるゝものでないのみならず、銀行業者にとつても亦事業家にとつても亦一般實業家にとつても少くとも或期間の間は一の大いなる苦痛を伴うて來るものなることを豫期しなくてはならぬ。今日世間の財政整理を口にする諸君は果して此苦痛を豫期して居るかどうか。少くとも自分の見る所によれば、財政整理は其瞬間に於て經濟界に對して一の大いなる――殆んど神秘的効果を齎らし、財政整理に着手すると同時に經濟界の景氣は直ちに旺盛に赴くが如くに想像して居る連中が少からぬやうに思ふ。然し之は財政整理に對する根本の誤解であつて、財政整理は其終局の結果は、經濟界にとつても著しき効果のあることは疑ないけれども、其結果を見るまでには少くとも數ケ年の間は、財政整理に對して總てのものが犠牲を拂はなくてはならぬといふ事は歴史の上にも亦理論の上にも明らかである。現に往年伊太利政府が其財政を整理したる場合に於て、伊太利國民は一時財政整理の爲めに、重きが上に更らに重き負擔を忍びて國庫の收入を增し、之と同時に經濟界に於て事業の破綻蹉跌相繼いで著しい悲境に陷つたけれども、實業家は此苦痛を忍んで三四年の後に至つてボツ〳〵財政整理の結果を經濟界に見ることが出來、經濟界は其爲めに漸を以て健全なる恢復を見た例もあり、又我國に於ても往年不換紙幣を整理して兌換の制度を開いた時に於ても經濟界は一時甚しき不景氣を免れなかつたけれども、其不景氣はやがて我國の兌換制度の基礎を開き、經濟界發展の原因をなした事は、何人も知るが如くである。然るに我國今日の經濟財政を談ずるものが動もすれば、我が政府が財政整理に着手すれば明日からでも經濟界が活氣を呈し、公債株劵は騰貴し、新事業は勃興し、金融市場は緩漫を加ふる如くに想像するもの少からざるは實に奇怪と

いはなくてはならぬ。此等の人は少くとも財政整理に對して、國民は當然何等かの犧牲を拂はなくてはならぬといふ根本の道理を無視したものである。世の中には無代價のものはない。財政整理に對して必らず何等かの代償を拂ふのは國民の義務である。然るに無償にて直ちに財政整理の効果を收めんとするが如きは、財政整理の根本義に關する大いなる誤解であつて、又政府として斯の如き誤つたる輿論の豫望を滿足せしめんが爲めに、誤つたる總花主義をとつて、あらゆる人に對して滿足を與へんとするが如き整理方針を取るならば、是れ亦政府の一大失敗たるのみならず、斯の如くんは何年經つても財政整理が本當に行はれない事を覺悟しなくてはならぬ。現に前內閣も其成立當初よりして財政整理を標榜して居つたのである。而して遂に財政整理の効能を見るを得なかつたのは何の爲めてあるかといふに、一言にしていへば桂內閣は畢竟無代償にて、財政整理の効果を國民に與へんことを試みたからである。少しく詳しくいへば、財政整理を標榜しつゝ一面に於ては外債の募集を試みて內國債を償還して又同時に通貨を膨脹せしめて强いて金融の緩漫を挑發し、之によつて以て事業界の繁榮を誘ひ、公債株券の騰貴を促して、銀行家にも、事業家にも、投機業者にも、陸海軍人にも、あらゆる人に對して滿足を與へて、さうして財政整理の體裁を裝はんとしたからである。是に於て無代償にて此等の恩惠に浴したる人達は、桂內閣に對して甚しく滿足の意を表し、桂內閣の財政策を謳歌したけれども、實際に於て帝國政府の財政は、毫末も整理の實を見ることが出來なかつたのは職として無代價にて財政整理を行はんとした爲めてある。是れ即ち桂內閣の財政の失敗の根本原因てあつて同時に現內閣をして財政整理を標榜して立たしめたる原因てある。然るに現內閣は又桂內閣の覆轍を踏んで、財政整理と同時に總花主義の恩惠をあらゆる方面に賣らんことを試み、海陸軍の擴張を初め、公債償還策を踏襲して銀行團の希望を迎へ、鐵道計畫も現狀の儘に存して政黨員並びに地方民の滿足を買ひ、租稅を輕減

して一般國民の輿望を滿足せしめんとし、又非募債方針を踏襲して金融市場の緊縮を避け、兌換劵の縮少を斷ぜずして經濟界の不景氣を來さゞらんとするが如き方針を採つたならば、其結果はいふまでもなく、桂内閣の失敗を繰り返すものといはなくてはならぬ。若し一朝かゝる總花主義の財政策を採るを餘儀なくさるゝと假定するならば、現内閣の行政整理によつて一千萬圓か一千五百萬圓の經費を節減した所で、之は固より大海の一粟で、之を以て財政整理の財源とする能はざることは勿論である。現に鐵道の建設計畫丈けでも本年度の如きは四千萬圓の借金を必要とし、朝鮮の事業計畫丈けでも一千二百餘萬圓の借金を必要とし、國債の償還丈けでも五千萬圓の財源を必要とする今日に於て一の行政整理のみによつて總ての人間に滿足を與へんとするならば財政の遣り繰りは依然として今後に之を繼續することを覺悟しなくてはならぬ。現内閣が果して如何なる財政計畫に出づるかは茲一ヶ月後にあらざれば明かに知ることが出來ないけれども、今日世間に傳へられて居る説を基礎として考へて見れば、現内閣は桂内閣の國債償還策さへも之を拋棄する意思が無いものゝ如く、銀行團の反對に憚つて來年度に於ても矢張り五千萬圓の國債償還を行ふやうに傳へられて居る。此事は桂公が外遊前に公言した事で、若し之を事實とすれば單に此一事を以てするも現内閣の財政整理に對して樂觀することが出來ないのである。山本大藏大臣の意見は第廿八議會に於て明言された如く、財政の緊縮、通貨の縮少、兌換制度の擁護等にあつて、此等の點に關して我々は藏相と全然希望を一にする所であるが、大藏大臣にして眞に其主張に忠實であるならば、今日の場合は其職を賭しても爭はなければならぬ場合と思ふ。其の機會が或は未だ到來せぬのかも知れぬが、現に彼の海軍擴張と國債償還とを實行する丈けでも局外者の觀察としては、安んじて其任にあることが出來ないのではないかと想像せらるゝ。況んや加ふるに鐵道建設の現狀を以てし殖民地經營の現狀を以てするに於てをや、世の財政整理を談ずるもの深く財政整理の眞義と我財政の現狀とを考へなくてはならぬ。

日本國及び日本國民の强點弱點

近時我が日本帝國の前途について悲觀說を唱ふるものあるに對して、又一方樂觀說を鼓吹するものあれども、徒らに悲觀し樂觀するは事物の眞相を研めて、其長所短所を明かにし、長所は長所として益々助長の途を講じ、短所は短所として必ず矯正の策を施すの實益あるに若かざるべきを思ひ、「日本國及び日本國民の强點弱點」といふ題下に、海内名士大家の高見を乞うて弘く江湖の參考に供せんことを企てたり。本號載する所は比較的短文のみにして稍々長文に亘れる井上哲次郎博士、大木遠吉伯、島田三郎氏、茅原華山氏、高田早苗博士、尾崎行雄氏、戸水寛人博士、松村介石氏大隈重信伯等の高論は、本號の頁數豫定より超過せる爲め、止むなく之を次號に掲載することゝなれり。此旨寄稿名士及び讀者の寛恕を仰ぐ（一記者しるす）

△日本人の弱點と強點

農學博士 法學博士　新渡戸稲造

一體斯ういふ問題について自分の考を正直に述べても差支ないのでせうか。日本人は果して自分の弱點をいはれて成程と感心する――イヤ感心はしなくてもよいが、靜かに耳を傾ける丈けの度量があるだらうか。私はかゝる度量のない事が日本人の最大の弱點と考へて居る。恐らく世界中て我國民ほど自分の短所について神經過敏なものは居るまい。外國人であれ日本人てあれ、己れの短所――日本國民の短所をいふと、直ぐ辯護にかゝるか、然らざれば齒向ひする如き態度を取る。他の國民にしても己れの短所を擧げらるゝ事を喜ぶものはない。だから之は無論程度の問題ともいへるけれども、然し兎に角一つ聞いて置かうといふ度量丈けは責めて欲しいものである。英國人がカーライルの口を極めて國民を痛罵した言葉を傾聽した度量は却て外國人をして英國人の偉大なることを感ぜしめた。

茲に私の大好きな話がある。彼のミル氏が或時倫敦で開かれた勞働者の大會に招がれた事がある。其時司會者が同氏を紹介するの辭を終つた時、聽衆の一人が起立して、今辯士の演說に先つて一言お尋ねしたい事がある。外の事でもないが、ミル氏が嘗て我々勞働者を罵倒して、英國の勞働者は殆んど動物に近いものゝ如くに言はれた事があると聞いた。氏にして果してさういふ事を言はれた事があるなら、又今でもさう考へて居るなら、我々の聞きやうもあるから、かゝる事實の有無を豫めお尋ねしたいといつた。そこで司會者は大いに狼狽して、何事か珍事が起りはしないかと爲す所を知らざる有様であつた時にミル氏が靜かに立つて、其事は私から直接に申しませうといつて演壇にあらはれた。只今の御質問は誠に至當なることである。我輩は嘗て何々の場所に於て、何々の會合の折に、英國の勞働者は無智無學にして理否の辨へなく、動物に近い處があるといふ事を、確かに此口から言うた事がある。此言が終るや其會場に居る數千の勞働者が一時に立つて彼を毆打でもするであらうと思ひきや、場内割るゝが如く皆一齊に拍手喝采をした。斯くの如き正直にして勇敢なる辯士の訓戒ならば我々は喜んで聽きませうといつたといふ話がある。我日本人もどうか斯くの如き態度に幾分でも近い度量を欲しいのである。

又今一つの弱點と思はるゝのは、今の事と稍々類して居るけれども、異說を――自分と別な說を容るゝことが出來ない。即ち冷靜に議論の出來ない國民である。反對の議論を主張する人は、敵のやうに齒向つて痛罵の言葉を浴せかけるはまだしもの事。あらゆる意地のわるい、人の感觸に障り、感情を害する言葉を用ひて攻撃する。それが假令教育であれ、實業の事であれ、經濟であれ、軍事であれ、政治上の事はいふまでもなく、少しでも自分と說を異にすれば、國家を害するとか、社會を毒するとか、甚しきは賣國奴とか非國民とか、破廉恥漢とか、人非人とか、丸で議論にならない言葉を用ひる。只下等社會の箆棒め！ こん畜生！といふやうなのゝ稍々體のよいのを用ひるに過ぎな

い。甚しきは學問上の事についてもさうである。今より廿年ばかりも前てあつたが、有名な二博士が學理上の爭論をしたのを田舍にゐて見た事があるが、其議論の終りは矢張り同じ事て、甲博士は乙博士を批評して斯くの如き說を持つて居るのは國家の根本を誤るものてあるから、國家　斯くの如き言を許すべからざるものてあると、警察の力を借りて乙の口を緘せんとした。乙博士は又甲博士を評して、彼は曲學阿世の徒だといつた。不思議にも日本には又互に感觸を害する爲めに極く都合のよいいろ〳〵の言葉が備つて居るやうにも思はれる。今いつた賣國奴とか曲學阿世とかいふ言葉――私は此頃外國語で之に當る言葉を見やうと字引を引張つて見たが、成程外國語でも此意味は無論あらはすことが出來るけれども、日本で平常使ふやうに通りがよくない。日本には惡口の道具がちやんと傍に備つて居るから、實際は左程に思はない事ても、手元の道具を振り廻はすのかも知れないけれども、兎に角議論をするのに論理を離れて感情に奔るのは日本人の弱點である。無論日本人ばかりてない、西洋にもないとはいはぬ。然しどうも西洋には少いと思ふ。少いと思はるゝ事は目下自分の經驗した事ても分る。先日私は乃木さんの割腹について自分の所信を世に公けにした。之が飜譯されて、橫濱や東京の英字新聞に揭げられた。其結果、外國新聞の社說、投書及び私信て以て攻擊の議論が澤山私の手元に來た。其中日本人の書いたものも二本ばかりあつた。西洋人の書いたものと日本人の書いたものとを比較して見ると、西洋人の書いたものには一々理由を述べてある。無論私は其理論には感服しなかつたけれども、兎に角冷靜に理由を述べてある。然るに日本人の書いた批評は單に冷評的てあつて議論としては何も擧げてない。手元に來た手紙の如きは、英語てあるけれども日本の筆て書いてあり且つ文法の間違ひなどから見ると正しく日本人に違ひないが、之は只一場の罵倒てあつて、貴樣は基督敎徒などゝ稱して居るが僞君子てあるなどゝ、只大聲を擧げた位のものてある。之を要するに弱點と思ふ事は、議論をするに、

冷靜なる態度を持して公平なる判斷を下し得ぬ事だらうと思ふ。今お互の弱點を擧げれば他に數箇條あらうが、私の差當り痛切に感じて居るのは此等の點てある。

又日本人のよいと思ふ方面は、右のやうな惡口をいうて居りながら心の底では善い事と惡い事との區別がちやんと出來る事である。理屈でなく殆んど本能的に良心の鋭い事。それだから第一の弱點としていつたやうに、自分の弱點をいはれて之を容るゝ度量が無いにしても、弱點をいはれると、之はあるぞといふ事を見る事が出來る。であるから彼れ此れ辯護しながらも、「其實有るんだからナ」といふやうな事をいつて居る。斯くいふ僕自身からして、外國人の批評でも受けると、時にはムキになつて辯護するけれども、退いて考へると恥しく思ふ。矢張り斯ういふ事は實際あると思ふ事がある。自分の口の先と腹と違ふといふ事は、よくない事であるけれども、前いつたやうな意味に於てはよい側もある。此心に今少し度量を大きくしたならばよいと思ふのである。一口にいふと度量は小さい、然しながら頭腦は明晰である。そして是非曲直の區別がちやんと出來る。之をも一つ言葉を換へて言へば物の感じの早い事である。

第二の弱點に對しても時を與へれば冷靜になつて、一時撲つたり敲いたりした人も「アレはエライ奴だ」「アレは面白い男だ」などゝいふ事を言ひ出す。又これが無くちや人間の仲間入りが難いやうなものであるが、此點に於ても恐らく外の國民よりも早からうと思ふ。猶太人だの羅馬人だのは耶蘇を磔にして、直ぐ後で「これは失敗つた」とはいはなかつた。耶蘇の處刑の事に與かつた者共は、恐らく彼等が死ぬるまで耶蘇を憎い奴だと思うてゐたらしい。之に反してソクラテスに毒を飮ました希臘人は、ソクラテスが死ぬる翌日直ぐ「失敗つた。聖人を殺した」と分つた。日本人は此希臘人に似寄つた所がある。であるから、昨日殺すが如く、肉を啖ふが如くに批難攻擊したものが、今日になると「アレはやつぱりエライ奴だ」「ナカ〳〵感

心な奴だ」などいつて居る。それだから人間の褒貶の盛んなる事甚くばかりて、昨日の豪傑は今日の罪人となり、昨日の罪人今日は聖人となるといふやうな様子があるが、然し之についてもよい事は、人間にも流行があるといふては語弊があるかも知れぬが、時が經つと公平な判斷に止るかと思ふやうてある。それだから我々も始終友人などゝ話すのである。君等は彼是わるく言はれても、自分の所信を貫くこと、眞にお國にお勸めする考でやつて居れば、生きて居る中に分らなければ死んでから分ると。私はそれ丈けの信用を確かに日本人に對して持つて居る。强點もまだ〳〵澤山あらうが、先きに弱點として擧げたものに對して、其半面になる長所を擧げて此話を終りとする。

△日本人と日本國の長所短所

田川大吉郎

◎日本人の一番の優所は、感情の强烈な點であらう、强烈といふ中にも、峻烈といつた方が、更によく僕の思想に適するかも知れん、從つて其思想の單純なことてある。其單純が確に長所の一つてあらうと思ふ。

感情の强烈と曰ひ、思想の單純と曰ふことは、要するに、日本が世界に離れた領圖上の政治的地理的關係に淵源する所が深い。只それ鎖國的の感情である。故に日本人は、内に於ても、外に對しても其相手方を敵として見る時に最もよく其本領を發揮し、活氣の頂上に逹する、喧嘩は日本人の得手である、爭ひは日本人の秀抜てある、戰爭は日本人の誇りてある。而して此氣象は決して惡い氣象とは謂へない。世に爭ふといふことは、人に爭ひ得るといふことは、頗る立派な氣象てある。確かな自信が無くてはならぬ。實に純粹な心意氣てある。日本人は實際奇麗な、淡泊な、瀟洒な氣風を持つて居る。

然し長所は短所てある。二十世紀は複雜な時代てある。善く之に處するには隨分くどい、ねつい、辛抱强ゐ氣合、覺期を要するに相違ない。而して日本人は此

れだ。

點に缺けて居る。僕の日本人に對する第一の恨みはこ

何にせよ激させ易い民てある。巧く此民を使はんには激させねばならぬ。善く激させさへすればまだ〳〵大いなる活動、發展が出來る。然もどう激させるかはそれが問題てある。特に戰爭を唯一の對象として、激させらるゝに慣れた、事實激するに習れた此國民を、どうして他の平和的戰爭、例へば學術、貿易、工藝の競場に激奮して起たせ、踴躍して進ませるかは多大の問題てある。

◎日本の國の長所は、何といつても環海の地勢てある。其島國てあることてある。天は日本に惠むに偉大なる地勢を以てしたものだ。此天惠に應じさへすれば、日本は興るに相違ない。史上の先例を求むるなら、英國が矢張其恰好の例てある。世に日本を東洋の英國といふことは誰が言ひ出したのか殆んど分らない。而して早くも世界的通語と爲つて居る。所謂天に口なし、人をして言はしたるもの、天は、蓋、日本が其島國的地勢の優勝を切實に自覺せんことを望んで居るのてあらう。

世に島國根性などゝ、日本人の狹隘、陋劣なる性癖の所因を島國的地勢に歸して、我から此天縱の形勢を訓ふものゝあるのは、無智の甚しきものてある。自ら侮るの甚しきものてある。日本は我知らず、今此窮地に陷らんとして居る。深く自ら省みねばならぬ。

△憲政に對する自覺なきは最大弱點

法學博士　花井卓藏

吾輩はこれから大阪へ向けて出發せねばならぬ矢先きだから忙しくて迚も悠りお話しは出來ないし、此問題に就ても是れと言つて纏つた考もないが――

まア維新の大業成りて國運は次第に發展し、國威國運中外に宣揚したる點に於て先帝の御懿德は我等の最も難有く感ずる所てあるが、之を以て我國發展の絕頂

であるといふが如きことに考へるといふことは恐らく先帝の思召ではあるまい。國運彌やが上にも發展して帝國の勢威を益々向上せしむることに力めねばならぬと思ふ。謂はゞ今は基礎の成つた時で、此堅く出來上つた基礎の上に活動するのは今後であらう、國家も國民も一體となつて之に當らねばならぬ。

國家の强點弱點、國民の長所短所、是れは研究すれば幾らも問題はあるであらうが、吾輩は强弱相援け長短相依り何れをも利用して國運に資することを力めねばなるまいと思ふ。當面の問題として一二の心附いたる點を言はゞ

(一)官僚政治の打破である。陳腐のことに相違ない。然し問題は依然として存してをるのであるから已むを得ない。憲法政治行はれ議政の機關備りて而も官僚は藩閥の保護色として政治地圖の上に優勢に色彩せらるゝといふことは決して立憲政治の美觀ではない、國民の自覺力は眞に果して此點に氣附いてをるか否や吾輩は甚だ懸念に堪へない。選擧權の賣買は國民の自由並に良心の賣買であつて憲法政治の最も厭ふ所である。國民の自覺力は藩閥を破り官僚を倒し善美なる立憲政治に補翼する高才逸足の士を選良に擧ぐるの概ありや否や。事は小に似たれども此弊の打破は今後に於ける國政の上に大なる影響を及すことであらうと思ふ。

(二)議政機關に知識の乏しきことは實に慨嘆に堪へぬ。選擧權の賣買は價を以て購ひ得たる物品の如き物と心得る連中に知識のあるべき筈はない。金さへあれば成金でも、目に一丁字なきものでも乃至前科者でも白晝堂々として競爭場裡に立つ事の出來る今日の狀態程嘆ずべきことはない。立法協賛の權を有しながら法律の法の字も知らず、豫算審議の權を有しながら財政の財の字も辨へず、行政監督の權を有しながら行政の意義さへ之を知らず、審眼に映ずる所は其最も上等なるものにして地方の利害、其下等なる者に至りては自己の利益以外何者をも知らぬのである。只起立賛成の機械となつて運轉してをるに過ぎない次第で、素より少數の立派な人はあるけれど大多數に於て此の怨みあるは

實に遺憾千萬である。であるから知識のみの戰となつたならば官僚と戰つて克く勝利を得らるゝや否やは大なる疑問である。

(三)故に國民は立憲政治に對する義務の觀念を以て最善なる自覺心を養ひ完全に選擧權を行使して、人格の上に於ても知識の上に於ても彼れに比して劣ることなく彼と戰つて破るゝことなき適當の人を擧ぐることに力め、文官任用令の如きは之を全廢し大々的に各方面の展開を力めねばならぬと思ふ。政友會中國民黨中の如き健全分子は此心を以て政局に立たねばならぬ。今や眼前に大敵を控へながら蝸牛角上の爭をなすべき時ではない。現在の勢で馴致して行つたならば憲政の前途は頗る憂慮すべきものであると思ふ。立憲政治とは民意に聞いて國論を歸一し内外の政務を料理すべき謂であつて、民意を遮り國論の歸一に反抗する官僚政治とは兩立すべからざるものである、陸軍擴張は誰の發意である? 二個師團の增設は何人の發意である? 文官任用令の維持者は誰である? 思ひ至り考へ至れば民意國論の要求せし所のものでは斷じてない。何だか問題には適合せぬかも知れぬが只思ふ所をお話したのである。今の所忙しくて外に仕方が無い。

△日本國民の强點と弱點

石川半山

日本國民の强點と弱點とを指摘して見よと言はるゝか、ハッハッハ、凡そ一個人に付て之を見るも、其の長所の裏には大概短所が潜み、彼れの弱點と見ゆる所に、却て强味の有る如く、一國に付て考へて見ても、見方に依て長所ともなり短所ともなり、說き方に依ては弱點ともなり强味ともなる者だ、威嚴の有る人が傲慢と言はれ、節儉をして居る人が吝嗇と嘲けられ、馬鹿で間抜けた男が溫厚と褒められ、狡猾な人が機敏と賞される如く、同じ様な性格を色々に評するので、樂觀的に見れば、何もかも强味に見へ、悲觀的に評すれば何もかも弱點に見える者だ、ソコでドウ見るが良い

かは暫らく措いて、日本國民の特殊なる所有品を列擧して見るなら、先づ左の諸點で有らふ。

第一　萬世一系の天皇

先づ日本の强味は此の萬世一系の天皇陛下に在りと謂ふべしだ、國民を統一する權威の强大なること、眞に世界に比類なして有る、此の統轄力に於ては世界何れの國の主權者と雖も、日本の天皇陛下に及ぶ者は有るまい。之れは確かに日本の强味で有る、然かしながら此の强大なる力を有し玉ふ天皇陛下の君側に、藩閥が居て、所謂社鼠城狐となり、强大なる君權を借りて國民を威嚇し、國民は之れが爲めに一も二もなく閥族に屈服するのは、一の弱點で有る、實例を擧げて之を言へば、衆議院が豫算案で政府と衝突した時に、政府が勅語を借りて之を壓服すれば、民黨は忽ち閉口して仕舞ふたではないか、貴族院も第十三議會に於て勅語に畏れ入ッた事が有る、それから如何に人望が有ても器量が有ても、御信任がなくては政局に立てないと云ふのは、之れは憲法政治を健全ならしむる所以でないから、矢張り弱點だ。

第二　陸海軍

日本人は君國の爲めに生命を捧げることを何とも思はない、武士道を以て精神を堅め、世界に比類なき强い陸海軍を持て居る、之れは確かに日本人の强味で有る、然かしながら之れと同時に、此の陸海軍費を支へる爲めに、國民は塗炭の苦しみをなすのみならず、年々軍備擴張に忙殺せられて、財政は窮乏を告げ、一國の生産機關に働くべき多數の壯丁は、兵營に收容せられ、所謂强兵貧國となッて居る、故に强大なる軍備は日本の强味で有ると同時に、一方から見ると之れが此の國の一大弱點で、日本國民は此の軍備の爲めに、益々貧弱となるの虞れも有ることだ。

第三　簡易なる生活

日本國民はマッチ箱の如き粗末な家屋に住し、半裸體の如き粗末な布片を着し、澤庵の香物で、麥飯の茶漬をかッ込みながら働ける國民で有る、之れは此の國民の一大强味でなくてはならぬ、然かしながらコウ云

ふ簡易なる生活情態は、文明國の體面上から永く續くワケの者でもなく、一方から言へば此の生活の程度の低くいことが、世界の輕侮を招く原因と謂ふとも出來る、簡易なる生活に甘んじ得るが故に、向上發展の氣に乏しく、國富を增進する道を講ずる熱心が足らない、即ち之れは國民の弱點とも謂ふことが出來るで有らう。

第四　人口の繁殖力

日本人の繁殖力は殆んど世界に比類なきほどに强大で有て、一年五六十萬人づゝも繁殖する、之れは確かに此の國の强味に相違ない、然かしながら此の繁殖する人口の處分は、國民に取て最大の難問題で有る、旣に米國からは排斥され、濠州でも排斥せられ、支那大陸でも排日熱が盛で、此の年々繁殖する人口を捌くべき方面がない、是に於て內地の生存競爭は、年を逐ふて激烈になり、物價は騰貴し、生活難が壓迫を加へる、貧民が多くなる、社會問題が起り、終には危險思想に爆發するに至る、故に人口の繁殖は、强味で有るが、同時に日本の弱點で有る。

其他の諸點

其外に日本國民の特性を列擧するなら、寒暑に堪える事も、一の强味で有らう、印度に三代住むと子供の出來なくなる英國人や、安南、東京方面に來ると忽ち品性の墮落する佛國人に比すると、日本人は臺灣澎湖の暑さにも北海樺太の寒さにも驚かない國民で、之れは確かに强味だが、此の殖民に適する性質が有る爲めに、米國でも濠州でも支那でも排斥を受けざるを得ない、此の國土の生產力が乏しくして、石炭も今から十四五年で盡きて仕舞ひ、石油も少く、銅の命脈も怪しく、金銀は至て乏しく、鐵もサッパリ出てない、貧弱の點は此の國の最大弱點で有るが、其の代りに他國から盜まれる憂ひはない、日本を世界列國の目で見るなら、ゴロツキ壯士が兇器を以て、九尺二間の貧乏長屋に居る樣な者だ、ドンな物好きな盜賊でも、之れへは寄り附かない、條約改正の當時に內地雜居を許すと外國人が續々來住して、日本を外國の物とする樣な論が

大分現はれたが、先づ其の心配は多分無用て有る、故に此の貧弱と云ふことも、一方から言へば日本の强味かも知れない。

要するに强味も弱點も、一國の政治方針に依て、利ともなり害ともなる、政府と國民が能く其の實質を知て、巧みに之れに處して往けば、弱點となるべき者も强味となるが、政治其の宜しきを得ず、國民互ひに戒しむる所を誤らば、强味として數ふべき者も、却て國家滅亡の原因となるて有らう、故に政治は六ヶしいのだ、唯一片の屁理屈ではイカない、老子曰く「國を治むるは小鮮を煮るが如し」と、此の呼吸がなか／＼六ヶしいが、今の官僚政治家や政黨員共は、理屈て固くなッて居て、此の言ふに言はれぬ呼吸が呑み込んだ者が少ない樣だ、アッハアッハ、先づ我輩の此の問題に對する所見は、コウ云ふ所だが、外の諸君に名論が有るなら、承はりたい者だ。

△進步主義は長所　取捨を誤るは短所

慶應義塾々長　鎌田榮吉

日本の强點といふものは先づ日本は進步的であるといふ事である。よい事となれば、日本の舊來の習慣にない事ても何ても構はず、ズン／＼採つて之を消化し同化して自分のものにして了ふ。或事柄については外國にあつた時よりも更らに之をよくする力をさへ持つて居る。之は日本になかつた事だからいかぬなどといつて決して排斥しない。之は日本の歷史に於て明かに證明せられて居ることて、朝鮮の文明、印度の文明、支那の文明、皆な日本人は之を採つて其よい血を吸ひ肉をとつた。手早くいへば外國からいろ／＼なものを採つて日本の國民性や國家が出來たのてある。さればといつて日本固有のよいものは決して捨てない。外國にない日本固有の美點を保存しつゝ外國の長所を自由に取り容れて來る。之が非常の長所てある。

然しながら其弱點といふべきは、時々其れが調子が狂うて、無暗に新らしき事に奔り、甚しきは外國癖に陥つたかと思ふと、或時は又非常に保守的になつて、國粹などゝいつて自分のものばかりよく見えるといふ病氣が起る。時々此病氣の起るのは日本の弱點である。之が爲めに進歩が遲れることがある。然し之は日本の常態ではない。健康狀態ではなくして病態である。何でも威張り散らしたくなる病氣である。けれども之は持病の如きもので、病氣は一時的のものであるからして、病氣が直りさへすれば進歩的といふ常態に復るのである。

外國人が日本は下り阪だなどいふのは以ての外の見當違ひてある。尤も日本人の仕打に左樣に疑はれるやうな事がないとはいはれぬ。之は日本人の注意の足らぬ所から起つた事て、日本の一部の人の擧動が、かゝる疑惑と侮りを招く原因をなしたのである。かゝる事は國として立つて行く上に注意しなくてはならぬ事てある。然し日本は常に進んで居る。ドン／＼進んて居る。病氣さへ起さぬやうにして行けば下り阪といふやうな事は決してない。此點我々は甚だ意を强うして居る。然し外國人の意見も幾らか參考にすべき價値はある。何でも固有の美を捨てずに、新入の美を附け加へて益々日本の文明を養うて、之を增大發展せしむることが必要と思ふ。時々道草を食ふのがいけぬ、時々病氣をするのがいけぬ。それだから本當に養生して何時も健康體でありたい。

△日本國民の强點と弱點

文學博士　谷本富

○凡て世界は廣く、時勢は常に流る。廣い世界を狹く見るより、お國自慢も出れば、又常流の時勢を萬代不易と想ふより、自然と固陋にも成る道理。盲千人の目明一人とは、昔から極つた相場付なれども、さて又實際は其の目明殿にも隨分盲の多い事を合點せねばならぬ。眼に盲するに非ず、心に盲する者を斥すと云はばチットは分かる筈。井底の蛙は素より井戸を以て廣し

と做すべし。管見と臆測とは古今凡俗の未だ免れざる所、何も事新しう咎め立てせん用はなけれども、盲人國、心盲國とは恐らく『山海經』にも見當らぬ圖柄と思へば、一等國々々々と御自慢遊ばすよりは、先づ顚ばぬ前のお杖が肝腎々々と申したい。

○明治維新の初畏くも先帝南殿に出御ましく〳〵て、天地神明に誓はれた五個條の御文中でも、取別け難有くてたまらないのは、舊來の陋習を一洗して天地の公道に基づけやう、廣く智識を世界に求めて大に皇基を振起しやうとの仰せてある。開國進取の國是はこれから定められた事と恐察し奉る次第だが、併し實際明治時代の後半は動もすると逆戻りした氣味が無かつたてもない。其の譯は憚る所もあれば暫く略するが、何はともあれ國民多數の思想が今猶ほ固陋の舊習を脱しないては、誠に恐縮に堪へぬ次第てあるまいか。

○乃木大將も亦昨年の夏てあつたが、英皇戴冠式から歸られた時に、我が國の文物は外國に及ばざると太だ遠い、驅足て勉强せねばならぬと言はれたる由、新聞紙上て拜見した。自分も不肖ながら前後兩度の洋行て、我が國の民情を今更腑甲斐なく思つたとが少くない。併し諛言は大好物、苦言は大嫌ひといつては勢、曲學阿世の流行するが當然、自分等の樣な直學黜世の連中はひつ込んで居るより外なからうか。

○金甌無缺の國體萬古卓立して、泰然富岳の安きに在り。臣民克く忠、克く孝、一旦緩急あらば義勇公に奉ずるのは、洵に是れ精華と誇稱して可なりてある。併し又米人ラッド博士などは數々來遊して略ぼ民情にも通じて居る樣だが、日本人の特徴はセンシビリテーに在る、センチメンタルなる所に在る、感激し易いとは著明だと謂つて居る。激しい者は又自ら醒め易いとすれば、永續は或は少々請合ひかねるかも知らん。現に日露戰役の際に於ても、愛國公債の二回三回と度重なるに伴れては、募集に困難を見はしなかつただらうか、どうか。

○この頃ロンドンタイムス新聞が親切に日本の將來をとやかう言つて吳れたのを、我が同胞はなんと聞いた

か。明治天皇御一代の間に無類飛切の大進歩を爲遂げたのは、全く維新史始てふ進取的精神が上下に充溢して居たからである。將來の盛衰も亦同じく只だ是の維新史始の進取的精神が發揮すると否とに係るぞとの忠告と自分は睨んだ。されば今後の事は元老などの與り知るべき所でなからうと結んである。諸元老は實に豪い。併し「年寄の冷水」はいろは譬にも早く戒めあるとの事。

○或は又このタイムスの忠告を以て青年志氣の墮落を鞭撻しやうとしたものと觀、又色々危險思想の萠起に頂門の一鍼をピンと打つたものと觀るのは好いが、過つて所謂武士道の奬勵でもしたものゝ樣に取られては嘸迷惑するだらう。敢て言ふ、今は大正元年である。西洋では第二十世紀の新舞臺である。

○乃木將軍の自殺に關する外字新聞の批評などもチットは眼光紙背に徹して讀んで貰らいたい。況して都合の好い分だけ麗々と揚げて、他は略に附すといふのでは卑怯千萬。外國新聞に「是れて以て今猶ほ東西の間鴻溝の存するを知る」と言ひ、或は又「外國の文物は頻に輸入しても遉に舊來の思想は容易に動搖せざる所以を知るべし」など言つてあるのは、果して譽めたのだらうか、毀つたのだらうか。時には國際のお世辭といふことさへ御存知ないとは、鶴龜々々。

○日本從來の教育法は保守か進步か。戰場の用意を本旨とするのか、それとも寧ろ平和的に大發展をさせやうといふのか、一寸借問すと出掛たい。外國君主御名代諸殿下の驚嘆は恐察し奉るに餘あるが、ノックス卿の眼底には又何が何と寫つたゞらうか。パナマ堀割祝賀の大博覽會には遉に桑港でも我が國委員の歡迎を極はめた樣だが、移民排斥は今や啻に北米合衆國ばかりてなく、南米にも追々布及して、八方塞りと成つては、眉を逆立て眦を裂いて睥睨した所で始まるまい。怒髮帽子を衝いた所で、只だ怖れて愈々門戸を堅く鎖す迄てあらう。尙武てす、好戰では無いと辯じても、何々軍神、何々軍神と、軍神の續々出現し玉ひ影向ましましては、世界各國さぞ桑原々々と叫び居るとてがな御

座らう。自殺の、暗殺のと、實行やら、虚喝やら、殺氣滿々としては紅毛先生も定めて靑息だらう。果して愉快々々と申すべきだらうか。

○世界各國新聞多しと雖も日本に於ける一種の新聞紙ほど一種の勢力のあるのは無いさうな。挑發に、敎唆に、將た脅迫に、虚構揑造を耻とせず、恐らく米國有名のエルローペーパーも遠く三舍を避けやう。臆面もなく好く遣ると云つても、必ずしも褒めたのではない。狂犬の恐ろしいのと獵犬の强いのとは自ら差別もある筈と申す者もある。失敬千萬な奴と叱り玉へ。だが兎に角一種特別の恐ろしい新聞の有るとは日本の强點だらうか弱點だらうか。西洋のカリケチユアなどは弱いのか品が良いのか、此處暫く疑問とする。

○ニーツエは曾て道德を自主道德と奴隷道德とに別けたさうな。日本には最に福澤諭吉氏が獨立自尊を修身綱領の第一義と謂はれたのを捉へて、不敬の樣に不忠の樣に難じた大先生も御座るげな。國民皆奴隷道德を倘んで、而して國家眞に獨立せんとは、木に緣つて魚を求むるの難きよりも更に一層難いとは思召さずや。

○個人主義を西洋舶來の蛇蝎の樣に言做す人に聞せたいは、眞に人格なるものの講釋。夫のソリダリテーの卑見も幸に廣く讀まれたやら讀まれぬやら。心細さは秋風の膚冷たきに、國家の前途只だ樂觀してばかりは居られず、去りとて悲觀は大禁物。盛衰興亡は一に維新更始の進取的元氣の榮枯如何に由る。既に維新更始せんとせば勢、議論の劃一は望まれまい。雷同附和は百害あつて一益なしと御承知あれ。世界は廣く、時勢は流る。各自活眼を開いて獨創を勵まねば、徒に感激し興奮しても、酔漢と一般、笑止千萬とや申すべき。

○自分は往年始めて新教育を講じ出した時に、國民心理學上一國々民の長所短所を知らうと思はゞ、十個の問題があると言つた。就中第五問として「該國民は名譽を好むか實利を欲するか」又第六問として「該國民は過去の中に生存するか將來に向つて生活せんとするか」を見たら大抵分かると言つたのは、今更此處に繰返す必要はなからうか。咄。



淪落の女

東京朝日新聞記者　松崎天民

「淪落の女」五篇、これにて完結を告ぐ。喜多村綠郎氏への「黒縮緬」、正宗白鳥氏への「捨ばち」宮田脩氏への「お小夜」、桐島佳吉氏への「さまよひ」、山室軍平氏への「十二階下の夜」等。何れも、予が多忙なる新聞記者生活中の副産物にして、また、人生探訪に於ける報告書中の一斷片なり。

五、十二階下の夜

一、未曾有の廓淸運動

其の夜——

日本に私娼窟が出來て以來、日本に學校が出來て以來、日本に學生の群が動き初めて以來、未だ曾て有らざりし大運動が、帝都の隅に勃發した。

早稻田大學生の早稻田私娼窟征伐——と云ふ、聞いただけて痛快な、血の氣の湧き立つ樣な——其の一大運動が、初めて早稻田の天地を震動した夜、新聞記者たる彼は、何事も知らずに酒を飲んで居た。新橋際のおでん屋の二階て、友人Kと盃を交しながら、彼は「十二階下の夜」に就て、種々と思ひ

を悩ましてゐた。

「淪落の女」の終篇として、愈々淺草の「十二階下の夜」を書かねばならぬが、締切間際になつても、一向に興が乘つて來ない。興が乘らぬと何事も書けない癖のある彼は、そんな時に限つて酒を飲む、度を過して飲む。飲て醉が少し廻る頃になると、彼は哀傷的の氣持になつて、凡ての感受性が鋭敏に働き初める、お酌に出た女中、痩せた貧相の十六七を捉へて、

「こんな所て、こんな事を仕て居ては、淫賣になつてしまふぞ。早く良い亭主を見付けて、世帯を持たなくちや不可いよ、え、姉さん」

などゝ、眞面目になつて云ふのが、そんな時の癖てある。相手の女が身の越し方行末などを思ひ煩つて居る場合にぶつ付かると、

「有り難う存じます、御深切に、そんなこと仰つて下さる方は、貴郎ばかりよ」

と無事てあるが、若し御機嫌の惡い時だと、

「斯う見えましてもね、ちやん／＼御亭が付いて居るのてす、お氣の毒樣！」

を食つて、引下るのが常てある。

「おい十二階下は何うするんだい、餘り醉ふと駄目だぞ、出掛け樣ぢやないか」

とKは俄に急き立る。大正元年秋十月の中旬、外套の欲しい夜の空に、彼は背廣の間服を着て居るばかり。度の強い眼鏡を光らせて、少し前屈みに歩く姿を見て居ると、何の事は無い豚てある。

「立てば筆筒、座ればインキ壺、歩く姿が置時計、はあちんかいな、ばかばのば」

と、能く彼の友人は冷評する。彼は恐ろしく身なりを氣にする癖に、帽子や洋杖は無頓着て、納り返つて居る事が多い。今夜も彼は見物の鳥打帽をかむつて、赤靴に鼠メルトンの洋服と云ふ扮裝。洋杖は友人長梧子からの借用物。

赤貝の酢の物と、蛤鍋と、酒が三本の御台計は、一圓てお剰が入らぬ程に安かつた。

二、淺草雷門行の電車

博品館前まで歩いて、其所から雷門行の電車に乘つた。遊ぶに好い秋の夜の東京には、地方の人々が多い。

微醉になつた彼は、滿員に近い電車の釣革にぶら下りながら、「電車の哀感」と云ふ標題を考へた。この車には、種々樣々の人々が、種々樣々の思想と事業とを抱いて、乘て居るに違ひ無い。吉原へ遊びに行く人もあらう、十二階下へぞめきに行く者もあらう、近親の危篤に走る女もあらう――と考へた。

「美人が居ないので淋しいね」

と、突然Kが小聲で云つた。彼は子供臭い空想から覺めて、初めて車内を見廻したが、その前に立つてよろめきたい程の女は、Kが云つた樣に居なかつた。

「今夜は、不漁だね、美人の不漁」

また、Kが耳許で云ふ。同じ電車でも、外濠線の電車に乘つて居る人には、「不如意の影」が無いけれど、深川行や巣鴨行、雷門行や新宿行には、「貧しい影」を見る事がある。と、彼は六年前、新聞に書いた「余は電車に乘るを好む」の一文を思ひ出した。

日本橋で乘換へ、本石町で乘換へ、淺草橋で乘換へる人が、隨分あつたけれども、美人は一人も乘らなんだ。空席を見出して、彼とKとは隣り合せに腰掛けて、又何にか囁き合ふ。

廐橋から一人の女が乘つた。

色の白い小柄の淋し相な顏で、銀杏返しが亂れて居る。乘客の顏を順次に見廻して、賴りなさ相な、何者にか怖ぢ恐れる樣な表情をして、そつと懷中から財布を出す時、左の手にダイヤモンドが……。

電車の中で、男や女の顏を見るのを、此上も無い快樂にして居る彼は、直ぐ女を「私娼」と斷定した。

「おい、あの女を何者だと思ふ」

今度は彼が口を切つた。Kは足拍子を取りながら、

「日蔭の花、白粉の女、淪落の女」

と、切れ／＼に云つて、輕く笑つた。

「えい雷門、雷門お降りの方は……」

突然、車掌が大きな聲で叫く。杜鵑に君を思ひ出の駒形を過ぎると、雷門の方は俄に明るく、仁丹の廣告電燈が、先づ陽氣な感を起させる。雷門界隈は。夜にかゞやく天地である。醉が覺めた。また、何所かで飲まう。

三、よか樓と神谷バー

Kと彼とは、先づ神谷バーに入つて、安い葡萄酒を飲んだ。印絆纏やら洋服やら、縞の羽織やら褞衣やらが、細長い卓に倚りかゝつて、強い「電氣」を引かけて居る圖は、露西亞物の小說、ゴルキーの世界を偲ばせる。日本の詩人では、兒玉花外の來さうな所である。

二人は直ぐバーを出て、よか樓の二階へ上つた。女中の美貌を寫眞版にして、絶えず新聞廣告をして居る所。よか樓の名は、今や誰知らぬ者も無い。

美しい女が八人居る。八人の顔には、八人の異つた、それ〳〵の強い表情がある。

彼は先づビールを飲んだ。Kは日本酒が好いと云つて飲んだ。若い文士や若い畫家、新しい劇場の人々も來れば、華族の若殿樣も來る。「三田文學」と「スバル」が落ち合つて、隣り合せて飲むのも、珍しく無いと云ふ。

よか樓はよかァ無い、と云つて居た彼も、

「美人が居る。花やかで宜いね」

と囁く樣になつた。口の惡いKは、

「洋食嫌ひの君が、よか樓にお百度かね」

と冷笑したが、彼は頻に女の顔を見た。

大家のお孃樣としか見えないお竹さん、文學趣味を解するお梅さん、利かぬ氣らしいお里さん、お園さんに、お富さんと、彼は小聲に名を呼で見て、

「この人達の行末は、小說を見るよりも興味がある、幸福だらうか、不幸だらうか」

と小い聲でKの左手を突いた。

十二階下の暗い夜に、「淪落の女」を見に行かうとし

て、先づよか樓に、若い娘達の微笑を讀む。二十餘の卓が並んで居る公開の食堂では、接吻も握手も恥かしからう。唯眼と眼と相合し、手と手と相觸るゝ刹那に滿足して、「左樣なら」を浴せられるのが落か。

彼は變な氣持になつて、飲みたくも無い酒を大分飲んだ。戸張の蔭には、世馴れた女將が居て、凡てを監督して居ると云ふ、新聞記事が出た以來、お客樣の態度は何う變つたらうと、彼は可笑しくなつて堪らない。終にビールをブッと吹き出した。

「冷いと思つたら、ビールの噴水か」

Kが勘定をして、よか樓を出たのは、十時を過ぎた頃界隈は未だ宵の口の樣に賑はつて居た。光と響の世界――。

「論落の女」を何う云ふ風に書から、「十二階下の夜」を何う云ふ風に描から、と心の中で惱みながら、二人は仲店を觀音堂の境内へ。

門の附近には、「周易判斷」が多い。

四、救世軍の山室樣に

雷門を入らうとする處で、二人は一寸立止まつた。

救世軍將校山室軍平氏に宛て、長い手紙を書いて居るが、送らうか送るまいか。

「送らないで、十二階下の夜の中に寄つたら宜さ相に思へるがなア。然し君の勝手だ!」

と、Kはズボンの隱しへ兩手へ突つ込んだ儘、仁王樣の扉に背をもたせかけた。

その手紙の中には、こんな文句がある。

▲「岡山縣名鑑」に依りて、貴下が岡山縣人である事を初めて知りました。貴下は備中で私は美作、國は隣り合せですけれど、私は「岡山縣」から、貴下の樣な傑物を世界に出した事を、心から誇とし光榮として居ます。

▲博士も澤山に出た、金持も相應に出た、文人も可成に出た、官吏も少し位は出た、新聞記者も尠らず出たが、それが「岡山縣」のために、何の誇になり

ませう。唯一人の「山室軍平」を有する事は、唯一人の「片山潜」を有するよりも、何れだけ岡山縣にとつての大なる誇であるか知れない。

▲岡山縣の奴は馬鹿利巧て困る、小才が利き過ぎて困る、大將が少くて參謀が多い。然し大臣になつた人も居る。大學長になつた人も居る、市長になつた人も居る、社長になつた人も居る。唯、同じ長の中でも、「救世軍の大將」を出した事は、特に岡山縣の誇として、日本全國に威張つても宜い、世界各國に誇つても宜い。貴下は實に其の人傑である。

▲日糖事件に連座して、獄に下された村松代議士が、出獄後改心して救世軍に救はれ、初めて神田の和强樂堂て泣いた時に一度と。娼妓の廢業問題か何かて、女郎屋の亭主と救世軍とが、神田の青年會館て會見した折に一度と。貴下を見たのは僅に其の二回。

▲逢つたのは二回に過ぎぬけれど、「山室と云ふ人はエラい、死んだキリストを表看板にして、最も生きた仕事をして居る」と、私は大に敬服した。備前の奴は輕薄、美作の奴は横着だが、備中の奴は鋭いと思つた。備中が一番エラいと心から敬服した――

此の手紙は、未だ長く續いて居る。十二階下に來て、こゝから銀座の救世軍に送る筈であつたが、彼はKと相談して、送らぬ事に極めた。

Kは、其の續きを讀むから、破らずに置けよと云ふ。醉つた時に書いたのだけれど、嘘は一つも無いと云つて、彼は淋しく笑ふ。

觀音堂の境内は、暗くて氣味が惡い。

五、聖書の背皮金文字

「隨分、思ひ切つた事を書いてある」

と云ひながら、Kは水族館前の瓦斯燈の光て、其の手紙を讀み續けた。

▲同じ基督教ても、聖書の背皮金文字より、一歩も外へ得出ない様な、空論て飯を食ふ牧師の群よりは、貴下の仕事の方が世間に近く、新聞紙に近いだけに、私は常に興味を以て、「救世軍」を傍觀して居ます。

▲あの赤い帽も嫌だし、あの人の心を煽てる樣な、性急な傳道法も厭だし、萬事を軍隊的に遣つて居る事も、戰爭の嫌な私の蛇蝎視する處ですが、然し何だか知ら救世軍は面白い。日本の救世軍を統率して、「世界の人道」を濶歩して居る第一人者が、「岡山縣の人」かと思ふと。何だか斯う肩身の廣い樣な、愉快な氣持がします。

▲私は基督教會が嫌ひ、牧師が嫌ひ、救世軍が嫌ひ。說教よりは活動寫眞が好き、讃美歌よりは浪花節が好き、アーメンよりは南無妙法の方が好き。然し「山室軍平」だけは、精力の强い世界の大仕事師として、常に尠らず感心して居る。救世軍は大嫌だが、「山室軍平」は、何となく好きてある。——

「そんなもの、最う讀まなくても宜い。これから活動寫眞でも見て。いよ〱本城へ繰込まうぢやないか。おい、K、K」

「これは何だな、十二階下の原稿の最初に書く豫定だつたんだね。くだらないなア」

「馬鹿にすない。其の次には僕の一大告白が書いてあるのだ。えいと……

▲岡山縣からは能く詐欺取財犯を出すが、基督教は明治十八年——私が八九歲の頃——から、非常な勢て傳道された。宣教師のペテーを初め、牧師の上代知新、松崎謙吉、渡邊源五郎、金子某、綱島佳吉、小崎弘道、横井時雄、本間重慶、押川方義、金森通倫、宮川經輝、安部磯雄、原田助、守田幸吉郎などの姓名も、幼い頃から私の頭にあつた。

▲私は母の膝に抱かれて、何も知らない間に洗禮を受けたが、物心附いてからも、二三度バプテスマの葡萄の汁を吸ひ、パンの一片を食つて、「さまよへるものよ」とか、「雪の如く白くせよな」など丶、頓興な大きな聲で唄つたものです。——

「何うだ、面白いか、書いたらう、隨分」

「キリスト靈あらば、この墮落した罪の子を如何せんと、泣いて居るだらう」

二人の足は、先づ明るい方へ向つた。

六、日蓮と基督の愛兒

「洗禮を受けた君が、今では莨も吸ふ、酒も飲む、女も買ふ……。實に驚いたなア」

「別に墮落とも、罪惡とも思つて居ないよ。十二階下の夜に出沒して、其所に展開される人生の悲喜劇を讀む方が、聖書の六ルビよりは、何んなに有り難いか知れない」

「そんな事を、教會で飯を食ふ牧師が聞くと、戰慄し侮蔑し憫笑し咽鳴するぞ」

「何でも好い――、幼い頃から日蓮宗の父と基督教の母とに抱かれて、齡長じては弘法大師を信ずる女を妻として、こゝに獨自一個の新宗教、運命を信ずるに至つた男ありさ。何も左樣に、心配する事は無い……」

二人とも能く饒舌る。臭い共同便所の前を通り拔けると、活動寫眞街の雜音が、物狂はしう響いて來る。

彼は其の從事して居る新聞紙に、「ジゴマ」の問題を喚起してから、直接この興行界に何んな影響を及ぼしたか、一つは夫れが見たくて、この光の巷へ出た。

菊人形の國技館、天勝の帝國館、新ジゴマの大勝館と、電燈は白日の樣にかゞやく。この賑かにして花やかな、凡ての屈托も、凡ての心配も、不如意も、不平も、不安も、懊惱も、忘れさせて了ひさうな、巷の群集に混じて、二人は別々の事を思ひながら歩く。

Kは、近く新聞に連載する「帝都の書生」に就て、「學生が多いなア、風說以上に多いなア」と驚く。彼は又、道行く女の風體ばかり見て、

「居る、居る、女の八分通りは君、私娼だよ、日蔭の花、白粉の花、淪落の女!」

と合點する。この光の町にして既に然り、

「暗い町へ行つたら、思ひ遣られるね」

日蓮の父と基督の母とて生れた彼は、騷がしい此の町を步いて居ても、何事か哀傷的の事を考へずには居られない。愉快とか、面白いとか、樂しいとか、嬉しいとか云ふことを、有の儘に受け入れる事の出來ない

彼は、凡ての快感の底には、必ず一道の悲痛哀傷の感が流れて居るものだ、と極めて居るらしい。

往來群集の男女が、面白氣にさゞめき行くのも、彼の眼には淺間しく映る。若い男女が樂し氣に語り行く刹那の姿も、彼の眼には「終末の悲劇」が先に立つて、可愛相に見える。萬事斯う云ふ風に、物事は正面から、世間並に照觀し得ないのが、彼の生命(いのち)である。

十二階下の夜に咲く白粉の花は、彼の眼に、何ういふ風に映じたであらう。

先づ彼の「探訪日記」を見やう。

七、探訪日記の中より

彼の「探訪日記」には、彼が新聞記者として接觸した、人物の姓名、年齡、職業から、事件の概略、所感、觀察などを、誰が見ても判らない、時には彼自身が見ても判らない樣な、符號樣の文字で記入してある。

其の第七册は、主として私娼の研究を記すものと見え、第一頁の所に大きく「東京の私娼」と書き、其の次へ細くペンで「恐しき私娼窟にて」として、「淺草の淫賣窟と一口に云へど、五區の「御堂裏」六區の「活動裏」、千束町の「十二階下」と、これを三大別して見るが、地理の上にも、種族の上にも、等級の上にも、最も至當にして且つ便利なり」と記してある。

總説とも見るべき所には、「數字的調査」と大きく書いて、種々の數字を記してある。

五區	（御堂裏）	九〇軒	一三五人
六區	（活動裏）	一六三軒	三五七人
千束町	（十二階下）	六二二軒	一二〇〇人

『十月十日現在調査、五、六區は大概銘酒屋にして、千束町に限り銘酒屋一五九、新聞縱覧所四六三あり。總計八七五戸の私娼窟に一六九二人の私娼あり、これ警察署の調査にして、實際の數よりも或は少かるべし。吉原が衰へて公園盛となりたるは、一つは土地遠き吉原まで行くの要無く、飲食遊興總て公園附近にて事足るが故なるべし。又一つには面倒複雜にして、高價を要する吉原の非現代的營業法なるに反して、公園

附近の私娼窟は、萬事お手輕を專一として、五十錢乃至二圓の少額にて、優に半夜の快を貪り得らるゝがためなるべし」と、これは其の次に附記してある。

「警察は象潟、馬道兩署の管轄なり。兩署の轄内には、私娼窟と私娼の他に

	象潟署	馬道署
藝妓屋	一四九軒	二六軒
藝妓	二七七人	六三八人
待合	七五軒	一三軒
料理屋	一軒	一八軒
飲食店	二〇一軒	二四九軒

等あり。他に芝居、活動寫眞、輕業、菊人形、浪花節、夜店、屋臺店などありて、こゝに燈花の巷を現出し、こゝに暗黒の家をなす。歡樂と罪惡と相隣せる別天地として、淺草を等閑視すべからず、公園を度外視すべからず。」と書き其の次へは、

安價、刺戟、低級趣味、音響、匂、臭氣、接觸、掏摸、誘拐、巡査、貧、暗黒

などの文字を、切れ〳〵に書いて、最後に「淺草は社會記者の寶庫なり」としてある。

八、恐しき私娼窟にて

彼の「探訪日記」は、斷片的であるが、これをつなぎ合はせると、一つの文章にならう。

「恐しき私娼窟にて」と題した一項には、次の樣な文字が記してある。彼も此の界隈には、大分足繁く入込んだ一人の樣である。

『觀音堂の裏は、公園に於ける私娼窟の中にて、最も淋しく最も上等の部に屬す。活動寫眞の裏は、賑かにして稍下等に、十二階下に至つては、十餘の小路縱横に連りて、最も凄慘なる私娼街の觀をなす。人間の醜惡無慘にして、且つ悲慘苦痛の狀を見んとする者は、先づ十二階下の迷路に赴くべし。』

『海老名彈正も行くべし、成瀨仁藏も行くべし、留岡幸助も行くべし、原胤昭も行くべし、島田三郎も行くべし、矢島揖子も行くべし、田川大吉郎も行くべし、

山路愛山も行くべし。青柳有美も行くべし、島崎藤村も行くべし、高田實も行くべし、土肥春曙も行くべし、松井須磨子も行くべし初瀬浪子も行くべし。」

「警察は施すべき凡ての事を施して、今は唯営業者の自衞を待つの一事あるのみと云ふ。百人の内に八十人乃至九十人の梅毒患者ありしは、本年夏季以前の實績なり。今は百人に就き六十人乃至七十人の有毒者に過ぎず、確に十人乃至二十人は減少したりと喜ぶ」

「新聞縱覧所には、申譯ばかりの新聞が二三葉あるのみ。酪酒店には、ビールが五六本と、正宗が一ダース位あるのみ。一寸その中に入り、莨の火を附けて出んとするには、二十錢銀貨一個を要すべく、その座敷に上りて澁茶一碗を飲まんか、何うしても五十錢は置かざるべからず。飲食店に非ず、待合に非ずして、濃化粧したる女の出沒すること、斯の如きは稀なり。これが所謂新聞縱覧所にして、又酪酒屋なり。」

「一軒に少きも二人、多きは五六人の女が、鼠鳴きしつゝ客を呼ぶ。其筋の取締嚴重なるため、退轉又退轉して今日に及びたるも、到底これを絶滅し得べくも非ず。供給あるが故の需用か、需用あるが故の供給か、何れにせよ、公園の私娼窟は衰へず亡びず。」

「男は淺間しきかな、男は放縱なるかな、男は多情なるかな、男は無情なるかな。女は悲慘なるかな、女は弱きかな、女は淫奔なるかな、女は横着なるかな。修養無き男と女とが、醜骸相抱いて泣き、笑ひ、叫び、哭する所、これを淺草公園の私娼窟と云ふ。」

萬年筆で書いたり、鉛筆で書いたり、毛筆で書いたり、中には電車の中で書いたと見え、字、形をなさず、文、體をなさぬ所さへある。

九、淋しい觀音堂の裏

「その淋しい觀音堂の裏に來た」

と云ふ書き出して、新聞にも雑誌にも出さないのが一つ。「探訪日記」の數頁を領して居る。

「觀音堂を右に見て、眞直ぐに吉原の方へ向つて進むと、五區の私娼街に出る。

腰板張の障子に硝子の入つた、古風の家構へもあれば、格子戸に鈴の音響く、今樣の待合式もある。「梅林」とか、「吉川」とかした街燈ホノ暗く、「酩酒屋」と大きくした家は、さう澤山に無い。

「ちよいと、お入んなさいまし」

「山田さんぢやなくて、寄つて入つしやい」

「ちよいと〳〵、貴下や、ちよいとゥ」

「おや何時かの方、村上さんよゥ」

活動裏や十二階下の樣に、呼び込み方も猛烈に露骨てなく、何となく上品に聞える、こゝの女に限つて、特に激しく鼠鳴きをチユー〳〵する。鼠鳴きは彼等仲間の緣起でゞもあるのか、道行く男に向つては、物を云ふ前に、先づ此のチユー〳〵を浴せかける。

家に依つては、隨分ボル所もあるが、最も安心して遊べるのは、五區と云つても宜い。印絆纒や羽織無しの連中が尠くて、マント、インバネス、外套、髭、眼鏡が多いのも、觀音堂裏の特色である。宮戸座や花屋敷や、一直などに近くても、全體の空氣が觀音堂ナイズして、何となく四邊が落ち着いて居る。

××とした家の前を通ると、二十三四の小意氣な女が、素人の女が云ふ樣な口振で、

「お入りなさいませんか」

と云ふ。其のませんかに何となく引き付けられて、默つて靴を脱いて、座敷へ通る。

座敷と云つても、細長い鏡臺一つ置いて、柱時計と、粗末な茶簞笥と、座蒲團が四五枚ある他には、活花一つない四疊半。中央にチヤブ臺が一つあつて、火の消えた莨盆がある。

やがて先刻の女が、ニコ〳〵しながら來た。

「何かめしますか、ビール、御酒」

「サイダーかシトロン、酒は最う澤山」

「好いぢやありませんか、ビール位」

「入らない、最う此の通りのへゞれけだ」

「嘘ばつかし、何うせ銘酒屋の酒なんか、旦那樣達のお口にはねえ、宜う御座いますよ」

斯んな問答をして居る間に、女は相手の男を觀察す

る。遊興を勸めても大丈夫の人柄、と認められるが最後、一層媚びる樣な態度て、

「貴郞遊んて居らしても宜いのてせう」

と來る。實に簡單明瞭なものてある。

十、彼奴は新聞屋だよ

「金が無いからね、まア遊ぶまい」

「御戲談もんてせう、紙幣なら替へます」

「そのお札も、生憎に御座なく候だ」

「無くたッても、紙幣が承知いたしませんわ」

「全體、何の位て、遊べる、の」

「さうね、ちよいとてすか、お泊り？」

「その…何やらの沙汰も金次第さ」

「ちよいとてしたら、二圓、てすけど一圓五十錢ても好いわ。遊んていらッしやいよ、ね」

「泊りだッたら。何うしたら宜い？」

「お泊りてすと面倒だわ、こゝの家は何てすから川向ふへ參りますの、向島の待合さんにね。十一時から朝の入時まて、五圓てすけれど、四圓なら承知しますわ。それに待合さんに一圓、何や彼やて六圓はかゝります。馬鹿／＼しいぢやありませんか。」

「全く、馬鹿／＼しい、高いぢやないか」

「藝妓よりも高いのです、五區はねえ。だから餘り、馬鹿にしては不可いッて、皆樣も…」

「ちよいとなら、何所て…」

「こゝの家にあります、判らない秘密の間」

女との問答は、これて大概要領を得た。便通を催したので、上着を脫ぎチョッキを脫ぎ、ズボンを外して便所へ行く。臺所一つ隔てた帳場の話は、手に取る樣に聞える、こゝの女將と先刻の女とは、何事かヒソ／＼話をして居る樣子。便所から出て前の座敷に入ると、

「長いお便通ね、痔持の樣だわ」

と女は左り氣無い風をして居るが、何うも樣子が變つて來た。便所に入つて居る時、

「彼奴は新聞屋だよ」

と云ふ聲が聞えたが、俗はチョッキの隱しにあつた

社名入の名刺を、喩み見たに極つたり。

「サイダーと便所と、そうして豆、一圓も置いたら宜いのだらうね」

五十錢銀貨二つ置いて、出やうとする處へ、この家の女將らしい老婆が出て、辭儀しながら、

「御勘定、二十錢で結構で御座います」

と輕蔑した態度て云ふ。天下の大新聞記者と、淺草邊にある小新聞記者とを一所にして、ふざけた事を云ひやがる。彼等の恐るべき男は、曰く警察の役人と、地廻りの新聞記者風を吹かせる無頼漢か。

酒も飲まず、女も買はず、二十錢と云ふ所へ一圓置いて、外へ出ると、御堂裏の暗い夜風が氣味惡い。明日は雨か、また嵐か。

一番上等の觀音堂裏にして、既に斯んな風てある。「活動裏」は何うか、「十二階下」は何うか。更に、「探訪日記」の所々を拾はう。

十一、燈火の巷暗黑の家

彼の「探訪日記」には、季節もなく月日も無い。あつたとせずにあると書き、居たと書かずに居ると記す。日記中の事件の如きも、「過去」を「現在」に強いて居る樣な點が見える。

唯だ左の一節には、珍しく月日が記してある。十月五日と云へば、最も新しい記事の一つ、「燈火の巷、暗黑の家」と題して、主として「活動寫眞裏」の私娼窟を書いてある。備忘錄風に、短文を斷片的に書き止めたものだ。

『一、十月五日夜、十時頃、活動寫眞裏、銘酒屋××の座敷。女お艶、齡二十二、色白く肥滿、髮濃く、眼に愛嬌あり。何か判らぬ縞物の袷衣に、絣の羽織を着て、大ハイカラに結つた姿は、看護婦の外出か、女事務員か。總體に派手な女にて、言葉つき陽氣なり。

二、活動寫眞の樂隊聞え、表通をぞめき行く男の聲聞え、女の男を呼ぶ聲、淺間しく聞ゆ。例の如くチャブ臺の上に、豆とおかきとサッポロ一本あり。隱れて斯る遊興をなさんには、餘りに騷々しく、餘りに落着

き無し。觀音堂裏の淋しく陰氣に、上品なるこそ宜けれ。

三、六區は種々樣々の男の入り込む所、銘酒屋の性も最も惡く、ビール二本に海苔位出して、二時間も寢轉んで居れば、三圓餘を貪る事あり。と、これはお艶自らの告白なり。男なども構はずに呼び込み、隨分手酷しき罵詈雜言を浴せ掛けても、皆々平氣なりとぞ。

四、隣室にて、怪しき女の泣き聲聞ゆ。お艶の語る處に據れば、猛烈なる痲毒を受けて、悶え苦しむなり。自分の身だしなみが惡い故に、斯る痛き目も見るのなり、誰を怨まん樣もなからん。氣の毒なれば何とかせんと思へど、先立つものは、それ金なりと云ふ。

五、ちよんの間は、この家にても事足るべけれど、お泊は向嶋か、附近の安宿なり、玉の善惡に依りて、相場に上下の相違あれど、一夜四五圓を要するは、御堂裏と同じ由。ちよんの間ならば、一圓にても宜けれど、金の有り相な紳士ならば、取れるだけ取るとぞ。

六、長居をする客が一番禁物なり、とつとと用を足して歸るが第一のお客樣なり。病毒受くるは、主としてちよんの間の客に多ければ、自衞と云ふ事を忘れず。隔日には醫師の許に通ひて、局部の診療を受け、月三回には警察の取調を受け居れりと、お艶の云ふ。

七、恐しきは巡査の制服、氣味の惡きは吾妻橋際交番の赤電燈、腹立しきは泥醉者の押の强さ、嬉しきは金ある若き人を呼び込みし時、とお艶又云ふ。」

要するに、不氣味な町、不氣味の家——。

十二、お醫者さんが好き

「お艶の顏は興趣あり、六區の部分的色彩を見るに足る。左に、お艶の談片三四を記し置くべし。

お艶曰く、お客樣の中にては、學生さんが一番宜し。學生さんならば、五十錢にても厭はしからず。十圓金持て三圓を費す人よりは、一圓の金持て一圓を費ひ果す人の方、遙に賴母しきお客樣なり。

お艶曰く、お醫者のお客は大に佳し。安心して身を任すに足るは、唯だお醫者樣のみ。藝人や活辯は、男

振の好きを鼻にかけ、妙に人を卑しむ癖あり。私娼にも意地あり張あり、卑しめられ辱めらるゝを快しとせんや。公園の藝人は總じて性質惡く、詐かれて憂き目を見たる者、十指にも餘るほどありと聞く。

お艶曰く、妾達も好くは無けれど、お客様も好くは無し。男は女の心を疑ひ、欺されまじと覺悟してかゝり、女も亦男には容易に許さず、殺されまじと決心してかゝる。娼妓に戀あり、藝妓に戀ありと聞けど、私娼の群には戀なし、眞の戀ありと云ふは噓僞なり。

お艶曰く、男の情を知らざるに非ず、唯、戀をせんには、餘りに此の身の冷きを如何にせん。男の無作法なる、露骨なる、醜汚なる、有りとあらゆる野獸性を見ること、日毎夜毎に多き身は、男の弱點のみ見えて、淺間しとも淺間し。戀するなどの氣には到底なれず。

お艶曰く、この家にて客を取るを、仲間にてはころびと云ひ、他の家――安宿、素人屋の二階――に連れ込むをしきと云ふ。お泊にて終夜枕席に侍する場合は、俗にとまりとか、連れ込みとか云ひ、最も危險にして安心ならず。私娼の喜ぶは、その中にてもしきなり。しきの客は、萬事手っ取り早くて最も好し。」

その次へも、お艶曰くと、お艶曰くと三ヶ所に書いて、下へ餘白を空けてあるが、未だ何事も記入して無い。彼は此の「探訪日記」を土臺として、同じ淺草の私娼街同じ十二階下と總稱する中にも、「五區の陰氣」、「六區の騷擾」、「十二階下の凄慘」と、三樣別々の空氣なり、色彩なりを描き出す考へらしい。

よか樓を出て、活動寫眞街に出たKと彼とは、大勝館の横手で別々になつた。Kは此の界隈を歩いて居る學生を觀察すべく、活動寫眞裏の方へ曲つたが、彼は一人、例の豚の樣な身體を前屈みにして、テク／＼と十二階下の方へ行つた。明きより暗きへ――。

其の夜から二三日は、毎夜の如く彼の姿を十二階下に見た。十二階下の暗い迷路に見た。

彼は何を見、何を聞き、何を感じたか。

十三、笑の中幕涙の大詰

肥つた前屈みの豚然たる彼の姿を、十二階下の大路小路に見た時、世間の者は活動寫眞の辯士位にしか、其の相場を踏まなかつたらしい。顏を見られ樣が見られまいが、十二階下の暗い夜に徘徊することは、彼にとつても左程の苦痛ではなかつた。レポーターたりエジターたる彼は、寧ろ朝飯前の仕事位に心得て、相應の興味を以て、暗い小路に隱顯出沒した。

然し彼は、普通の探訪者でなく、普通の記者でない。世間は彼を何んな風に見て居るか知らないが、彼自身は尠くとも人生の探訪者——運命説の上に立つて、此の世相を觀ずる記者——位の覺悟を以て、常に哀傷的に人間と世間とを眺めて居る。酒を飲み女色を漁さる事を、大した不道徳、大した罪惡と心得て居ない彼も、明治三十九年冬、初めて「吉原遊廓」を見た時には、男の淺間しさと女の悲慘(みじめ)さとを突き付けられて且つ驚き且つ泣き且つ戰慄した。初めて「十二階下の夜」に、人間の暗い淺間しい悲慘な光景を見せられた時にも、彼は酒を飲み女を漁ることを、何でも無い事の樣に心得て居ながら、其のデカダン的近代調を帶びたる一體の空氣には、尠からず面食ひもし、且つ心から驚愕し痛哭した——。

「吉原」を知ること漸く深きを加ふるに從ひ、彼は此の世外の別天地、社會外の社會を見ること、一般の遊冶郎と同じ程度にまで馴れるに至つた。美しい女の居る、カフェーが出來たり、バーが出來たり、レストランが出來たりして、夜を遊ばんとする一部の男に、歐米の近代素を提供する一面には、春を賣る藝妓の群よりも、より輕便にしてより露骨なる私娼の群が、今や東京全市の外を包圍し、内に充實しつゝある狀態を見るに付けても、彼は吉原の頗る非現代的なる營業法と因襲的なる一種の空氣と色彩とを、反つて面白く愉快に感ずる樣になつた。果は其の非性慾的にして、純歡樂的なる情調を懷しむに至り、昔の思ひ出に生きつゝある老通人の樣に、娼妓そのものを度外視した「吉原」そのものを喜んで、こゝて飲みこゝて語り、こゝて唄ふことを、此の種の遊びの中て、最も歷史的の樣に思ひ、

最も韻文的の樣に感じ、最も道德的の樣に信ずるに至つた――。

然し「十二階下」は違ふ。吉原が歷史的であり、詩歌的であり、道德的であるに反して、十二階下は現代的であり、散文的であり、性慾的である。

吉原は「中村歌右衞門」の中幕――、十二階下は「喜多村綠郎」の大團圓――。

十四、其の聲雀に似たり

其の十二階下に來た最初の夜、彼は私娼窟の關門とも云ふべき八百屋橫町から、廣い通りの貝殼橫町に出て、更に國技新道、櫻新道を經て、五區の藝妓屋新道に近い都新道を一周し、懷中(ふところ)寒いに自由新道の狹い暗路を辿つて、十字街の猿之助橫町に立つた。

同じ十二階下と云つても、上中下の別は家にもある、雇女(でかた)にもある。これだけ歩くに二時間を要して、呼ばれた家の前には立止まりもし、中に入つて茶を飲んだりもした。「新聞縱覽所」とした街燈は、日を經るに從つて減少したが、「銘酒屋」の[illegible]燈角燈は、道行く人にも夫れと判る、梅村、秋本、春の家など。

「ちよいと君、寄り給へ、洋服君」
「あら、おまはりさんの萩原さん」
「お髭さん、お髭の旦那、ちよいとウ」
「眼鏡の方、ビールの看板、廣告の看板」
「貴君、お入んなさいよ、達磨さん」
「高帽の方、丸い方、すました方よウ」
「お遊びなさいよ、ちよいと、洋杖(ステッキ)の方」
「親分、あら親分、大丸組の親分てば」
「ちよいと〳〵、オペラ館の先生」
「お寄んなさいよう、四十九圓の旦那」
「莨の火なら懸(つ)けますよ、ちよいと」
「入つしやい、入つしやい、ビールの看板」
「あら、飲んだ方、ヂャスターゼの紳士よウ」
「あらまア、厚い眼鏡の金緣のゼントルマン」
「アイラブユーの先生、入らつしやいな」
「西岡さんぢやなくて、病院の、婦人科の」

掃き溜に豚の様な方、お寄んなさいな」
「ちよいと、深澤恒造に似て居る方」
「お寄んなさいな、ちよいと、ちよいと、ラブしてよ」
「ちよいと、ちよいと、ジゴマの旦那」

彼は十二階下を一周して居る間に、白粉の女から斯んな風に呼止められた。制服の巡査を恐れて、其の佩劍の響と靴の音とを、何ものよりも怯ぢ恐れて居る癖に、普通の男と見れば、彼等は安心して、斯んな言葉を妙な語調(アクセント)で浴びせ掛(か)ける。其の聲宛然(さながら)雀の如(や)う。

人生のどん底に零落して居ながら、零落そのものの悲しさ痛ましさに泣くことさへ能(な)はず。紅白粉の厚化粧して、心にもない世辭と愛嬌と冷罵とを、道行く男の上に浴せかけて、それて其の日〱を送つて居る果敢き女の群よ。――酒の香失せた彼の顔は蒼くなつた。

最も醜汚にして、最も惡辣なる猿之助横町の銘酒屋×××に上つて、彼は先づ一杯の水を飲んだ。そして、正宗　燗を熱くせよと命じた。

女が二人、「お遊びなさいな」と云ふ。

十五、故郷近し齢老たり

熱い烟が出た、白い豆が出た。

彼は默つて、女の言ふ事を聞いて居る。女ははしやぎ切つて、「何かお取りなさいな」と云ふ。

奥の三疊敷、新聞の新年繪附錄を額にして、一間の壁に掛けてあるばかり。小いチヤブ臺の上には、豆ランプの光が、陰氣に暗い。

女は一圓下さいと云ふ、彼は五圓でも十圓でも遣ると云ふ。多いだけ結構ですけれど、それでは奥樣に濟まないと云ふ。濟むも濟まないもあるものか、こゝへ來たらお前さんのものだ、煮ても燒いても殺してもと云ふ。女は白い歯を出して笑つた、金歯が光つた。

お前は何所の生れだと聞く、千葉縣ですと答へる。齢は幾歳だと問ふ、二十を一つ越したばかりと云ふ。學校は、尋常小學、何をして居た、家で百姓を、何しに東京へ出た、女優にならうと思つて、何うしてこん

な所へ來たと聞くと、美しい着物が着たい爲だと云ふ。

十二階下の銘酒屋と新聞縱覽所には、千二百人の女が居る。原籍關係を調べた表に據ると、

東京	四〇五人	千葉	一〇三人
埼玉	七六人	栃木	七五人
神奈川	六二人	茨城	四九人
新潟	四七人	宮城	四五人
福島	四〇人	群馬	三七人
静岡	二八人	愛知	二四人
富山	一九人	秋田	一七人
長野	一六人	山形	一四人
三重	一三人	石川	九人

て、その他の各府縣は一人か二人。東京が一番多くて、東京に近い土地がこれに次いて居る。

彼はポケットから小い切拔帖を出して、女に氣取られぬ樣に見た。警察で調べたと云ふ利娼の年齢關係て、千百三十八人の内

十二歳以上十五歳未滿	九人
十五歳以上二十歳未滿	四四四人
二十歳以上二十五歳未滿	四五一人
二十五歳以上三十歳未滿	一三八人
三十歳以上五十歳未滿	七二人
五十歳以上六十八歳未滿	二四人

とある。十五歳以下の九人は子守て、五十歳以上の二四人は、飯炊だと斷つてあるが、他の千百人は、悉く紅白粉の化粧して、夜毎に變る枕の數々。百人に六七十人の梅毒と淋病患者がある事は、警察でもこれを認めて居るのに、女は頗る平氣なもの。

「貴郎、何を見て居るのです、昨夜の御會計てすか。お止しなさいましよ、こんな所へ來て、さ」とばかり、又「お遊びなさいよウ」と迫る。

十六、一千二百人の運命

×××の奥座敷、豆ランプの光暗さも厭はず、彼は女を相手に飲みながら、十二階下の闇路に咲く白粉の花を思ふ。こゝに笑ひこゝに泣くよ一千二百人、其の

運命の過ぎ來し方は、風なりしか、雨なりしか。

現在の私娼一千百三十八人に就き所轄警察署の調査した表に依つて、彼等の過去を見るのも興趣がある。「何うして私娼になつたか」を、數字の上に見るのも一つの方法てある。

一、何人に養育されたか

實親に養育せられたる者	一、〇二七人
養母に養育せられたる者	二四人
繼母に養育せられたる者	六四人
親戚其他に養育されたる者	二三人

二、學校の教育を受けたか

學校へ通はず無學の者	四〇九人
尋常小學校に在りし者	五七一人
高等小學校に在りし者	一五六人
他の專門學校に(電信事務員養成所)	一人
通學したるもの(簿記學校)	一人

三、私娼になる前の職業

家業に從事	六二五人	女中	六八人
酌婦	六二人	藝娼妓	五人
看護婦手傳	五人	裁縫職	九人
新聞縱覽所營業	一五人	其の他	三四九人

四、何をしに東京へ來たか

以前から東京に居る者	三八七人
堅氣の家へ奉公のため	三七二人
親や親戚を便りて	一一二人
銘酒店に入らんため	一四七人
工場の工女になるため	二五人
無斷外出して放浪の末	三三人
看護婦にならんとて	四人
確とした目的もなくして	四八人
女學校へ入學するため	六人
娼妓になる考へにて	二人
女髮結になる目的にて	二人

五、私娼になつた遠因近因

生活難のために	五六人
(親が金のために養女にした	二四人

内	
不具病疾の夫を養ふため	一三人
子供を扶養するため	一三人
情夫のため、情夫に捨られ	二八人
保證人なく堅氣の奉公出來ず	九人
母と共に雇はれ母は飯炊	四人
子と共に雇はれ子は子守	一人
其の他いろ／＼の原因にて	四六八人
他人の誘惑に依り	五七八人
内	
雇人口入業者のため	五五人
主人又は雇主と知合にて	二七〇人
主人と親戚の關係あるため	六一人
宿屋の主婦に誘はれて	一人
勞働するのが厭にて	一一九人
着物を拵へんが爲めに	二一人
晝間通學の約束にて	一人
子守奉公して墮落し	二人
新聞縱覽所營業出來ず	三人
女中か子守かと思ひて	四五人

願くは數字をして、凡ての事を語らしめよ。十二階下千二百の女の上には、「人間の影」が薄い。

あゝ弱き者よ、汝の名は永久に「女」なり。

十七、人生探訪者の感想

彼は猿之助横町を出て、また八百屋横町を歩いた。十二階の上には電燈かゞやいて、國技館で囃す樂隊の音は、道行く人を追立る樣に響き渡る。

十二階下の夜は、十月の中旬にして、殊に寒い。おでん屋やら煎り豆屋やら、辻占賣やら按摩やら、ぞめきの中に混つて行くのが、この邊の暗い凄い景物を添へる。巡査が通る、刑事が行く、地廻りの遊人らしい男が三五人、心安氣に制服の巡査と、何事か立話をする。

夜の十二階下には、宗教も無い、法律も無い、道德も無い、藝術も無い。人間の醜汚な半面、野獸性の一面を、最も現實に爆露した所として、彼は今更の樣に戰慄した。大きな聲では云はれないが、當代の新聞紙に現はれる三面雜報を、縱に引延して讀まされる樣な

氣持になつた。新聞記者として、社會部の仕事に從事して居ながら、彼は此の十二階下に來ると、何時も一種の不安と恐怖の感とに打たれる。

現代的であり、散文的であり、性慾的である十二階下――。彼は不安と恐怖とを強て一方へ片附けて、好んで其の十二階下に出沒した。人間と世間とを見ること幼稚な、若い自然派作家の小家を讀むよりも、こゝに展開される人生の活パノラマの方が、彼には尠からぬ興趣を以て眺められた。「東京の淺草」と云ふ、觀音樣と、活動寫眞と、花屋敷と、仲店と、樣々の香高い飲食物とを聯想させる一區廓に、斯うした「人間の暗い異性」が公開されて居るかと思ふと、彼は東京に往むことの幸福を、單り春の花と秋の空とにのみ、享ける譯に行かないと思つた。十二階下は彼にとつて、復とあるまじき「人生の探訪地」であつた――。

八百屋横町の新聞縱覽所××に入つて、彼は其の日の夕刊を手にしながら、「十二階下」に就て、種々の感慨に耽つた。警察の調査に據れば、彼等の多くは世路の風波に揉まれて、流れ溺れた身の果は、浮かむ瀨無い濁り江に沈んだ樣であるが、其の大多數は「強い性慾の衝動」に打ち勝つ事の出來ない、「意力の弱さ」に原因して居るとも思つた。本願寺も本郷教會も、帝國大學も女子大學も、憲兵隊も警視廳も、此の「性慾」の前に對立しては、其處に何等の權威ないものと爲り了する事を、彼は當然の現象だと合點した。

新聞縱覽所××には、二十前後の女が三人居たけれど、強て遊興を勸めなかつた。

十八、戀を味ふ月日なし

八百屋横町の新聞縱覽所で、彼は珍しい戀の一幕を見た。これを最も拙い新聞雜報體に書くと、

男の心、女知らず

▽十二階下の私娼に戀無し

淺草千東町俗稱十二階下八百屋横町の新聞縱覽所××方へ一月前より私娼となりて、現れたるお梅(二十四)と呼ぶ女あり、深川大工町にて下宿業を營め

る伯父△△△△方へ身を寄せて客の給仕臺所の手傳など爲し居りしが十人並勝れし容色とてこれまで言ひ寄りし男も尠からず、中にも△△方へ下宿せし埼玉生れの勞働者○○○○（二十八）は三年前よりお梅の容色に懸想し人無き折々それとなく言ひ寄りしも何時もお梅より冷かに遇はれて本意なく打過し居たり、一方お梅は伯父が下宿業を廢めて十二階下に轉居し新聞縱覽所を開業する事となりしかば自分も其の儘今の×××にて手傳ひなどなし居る内私娼となり夜毎に男は變れども媚賣るは同じ女と墮落したり、斯と聞きたる○○は金で自由になるものならば三年越しの此の戀成らざる事やあるべきとて苦しき中より五圓の金を工面して五六日前の夜×××を訪れお梅に逢ひて切なき心を打ち明け遂に契を結びたり、それより○○はお梅のこと一日も忘れられず何とかして金をつくり過る夜の夢を繰り返さんと思へども身は其の日稼ぎの勞働者の悲しさ三圓の金も思の儘ならず兎やせん角やせんと案じ煩ひし末一圓の金懷中して昨夜お梅の許へ出掛けたり、○○は今一圓より持合せ無けれど働いて儲けた上必ず支拂ふべければ今夜はこれだけにて遊ばせよと迫りしが×××もお梅も金の無い人に用は無しと冷淡に頓着せぬより○○は途方に暮れて立歸りたり、×××にては彼樣な男は此の後客にする事ならずと噂し合ひ居りしに件の○○は警察署より一名の巡査を同行し來り「此の家のお梅は私と夫婦約束せし仲にも拘らず淫賣となりたり今夜一度逢はせば宜し逢はせずば然るべく御處分願ふ」と聲も高々に叫き立てたり、×××にては狂人になつたのかも知れずとて先づお梅を何處へか隱し其の夜は事なく納りしも○○はお梅に逢はせずば自殺するぞと半狂亂の體にて八百屋横町より貝殼横町を馳け廻りし姿笑止にも氣の毒なりき、其の後如何に成り行きし事ならん。

と云ふ風になつて、色も曲も無いけれど、彼は此の一場の出來事の中に、十二階下の女の淋しい生活を讀だ。生慾を浪費して、漸く其の日〳〵の飯を食つて居る彼

等には、實際、戀をする元氣も無く、戀をする時間も無く、戀をする餘裕も無い。

眞の戀を味はふ月日も無くて、彼等は妙齡の春を送る。悲しいては無いか、痛ましいてはないか。

十九、私娼窟に美人多し

弱い女が群集して居ながら、不安と恐怖の念を起さする十二階下に、秋の夜は十一時を報じた。

凡ての活動寫眞館が、その「光」を失ひ、その「響」を絕つた時、彼は夜風に吹かれながら、雷門の方へ歩き出した。十二階下を題材にして、今日までまだ曾て現れない一種の新聞記事を書きたい。これを書き得る者は、「自分の他には無い」などゝ思ひながら、彼は興奮した頰を撫てて見た。

「自分の知つて居る程の事實は、警察署も知つて居やう、救世軍も知つて居やう、矯風會も知つて居やう、新聞記者も知つて居やう。然し自分には、自分の觀察と自分の感慨とがある。これを鹽梅して、小說ならぬ小說、雜報ならぬ雜報が書きたい。自分の仕事は、小說體と雜報體との中道を、開拓しながら進むにある」

と、彼は文章の取材や書き方に就て、種々考へながら電車通りへ出た。

「赤」電車に近い夜の空氣は、冷たい中に沈靜を缺いて居る。品川に、上野に、歸るは皆「醉覺（えひさ）めの人」を乘せて、走ることと速てある。彼も亦、「九段青山行」の人となつて、「十二階下の夜」を思ひ起す。

「實に慘憺たる所だねえ、十二階下！」

と、向側に乘つた二人連の學生は、小い聲て語り初めた。銀椽の眼鏡掛けた方が云ふと、

「あれて大分良くなつた方だ。三四年前は何うして、今日の比に非ずさ」

と、背の高い、髭の濃いのが答へる。

「然し美人が居るねえ、驚くべき美人が居る。」

「藝妓の下、女中の中、酌婦の上よりも、より大に美人が居る。水天宮の裏や、日本橋倶樂部の界隈に行つても、彼所（あすこ）ほどの美人は居ないからなア」

「吉原衰へて、公園盛なり、現代式だね」

「公園衰へて、十二階下盛なり、性慾万能だ」

學生二人の話を聞きながら、彼は獨てニコ〳〵した。

淺草の私娼窟には、全く驚くべき美人が居る。醜婦よりも、美人の方が多い。醜業に馴れた者も澤山居るが、未だ世の鹽を甞めない、初心な女も澤山居る。十二階下が盛になるのも、無理てないと思つた。

初めて淺草て私娼となり、早稻田、戸塚、濱町、蠣殼町、根津、神明と轉々するのもあれば、方々を流れ渡つて瘦せた身體を、十二階下に落すもある。東京市内の私娼双六は、「振り出し」も「上り」も、「十二階下」と其の附近である。と、彼は地理の上から見た「私娼分布觀」の未定稿を思ひ出した。

「私娼分布觀」の冒頭には、「性慾浪費者の群よ」と云ふ一句がある。十二階下に出沒する男も女も、悉く此の群であると思ふ時、彼の近眼鏡は、何時も熱い涙に曇つた――。

暗い青山に歸つた頃、秋の夜風が身に沁みた。

二十、性慾浪費者の群よ

其の夜、早稻田て、例の私娼窟退治があつた。

あゝ私娼窟征伐、學生の運動としては、痛快至極の事かも知れぬ。尠くとも其の附近の空氣を一掃する事に於て、彼等の運動は無功て無いかも知れぬ。然し、私娼窟は「早稻田」だけて無い、「十二階下」にも、「濱町」にも、學生の姿を見る時、彼は征伐運動の火の手が、餘りに部分的てあるのを、物足らず思つた。

宗敎も、敎育も、法律も、「性慾浪費者の群」に對して、何等の權威も無いものてあると斷定した時、彼はこれが「現代だな」と思つた。自分も亦、その群集中の一人てある、と思つた時、彼は何だか、「申譯の理由」を發見した樣な、心丈夫な一種の氣持になつた。これが「現代人の氣分」だとすれば、「十二階下の夜」は、この氣分を具體化した、最も奔放自由の世界てある、との結論にも到着し得られると思つた。

何者の權威を以てするも、性慾浪費の大勢を左右す

る事が出來ぬとすれば、何うしたら宜いてあらう。彼はこれを牧師にも聞きたい、教員にも聞きたい、警官にも聞きたい、文明批評家にも聞きたい、小說家にも聞きたい、新聞記者にも聞きたいと思つた。

其の翌朝、彼は「探訪日記」の中へ、次の樣な文句を記して、新聞社へ出勤した。

「何うする事も出來なくなつて、女は私娼の群に落ちる。何うする事も出來なくなつて、男は私娼の群に戯れる。何うする事も出來ない——それが恐しい性慾の力。」

社へ出て、其の日の新聞を見た。皇太后陛下の名古屋御着の記事やら、生蕃の飛行見物やら、印刷局活字引の死去やら、文展の批評やら雑觀やら、天下頗る太平の中へ、單り早稻田の「私娼窟征伐大示威」の記事のみ、三段以上を領有して居た。黒山軍(モンテネグロ)活動、黒山軍猛襲、黒山軍勝利など云ふ、二號活字も見えた。

讀て見ると、「私娼征伐」の記事が、最も深い興味を惹いた。世界は依然女の世界てあると思ふ時、彼は人知れず微笑んだ——。

今夜も、「十二階下」へ行かう。

——一、一〇、二〇稿了、大尾——

附記——愚劣なる「論落の女」、これにて大團圓を告ぐ。本誌上にこれを掲出して以來、書簡に、新聞に、世間の毀譽相半せるは、予の望外とする所なり。更に近く一冊本にまとめて、某書舗より發刊し、改めて讀者の淸覽を乞はんとす。斯る愚作を長き間掲出されたる中央公論社に對しては、予は其の寛容を感謝せざるべからず。(天民生)

「誘拐された女」 細井柏村

右の一篇は松崎天民氏の「淪落の女」を讀み、天民氏に宛てゝ、作者が目撃せる事實譚を小說體に書きたるものにして、惡漢の手に誘拐せられて、身を南洋に賣る哀れなる女の一生、小說よりも深く讀者の胸に響かん。乞ふ之を次號の誌上に俟て。

鑑査論

小山正太郎

文展の鑑査審査に就ては絶對に秘密を守ることになつてをるから、これに就ては一言もお話は出來ませんが、これを離れての鑑査論なら差支ないと思ひますから愚見を述べることにします。

一體にどういふ會に於ても又世間でも鑑査と審査とを程度が違ふばかりで同じものだと考へてをる人が多いが是れは全く誤りで、鑑査と審査とは全く性質が異なつてをるのである。世間では多數の出品から稍良いものを拔擢するのが鑑査で更に良いものを拔擢するのが審査であつて即程度の高い低いの違ひだけであるやうに思つてをるが、審査はその通り多數の出品の中から良いものを選んで是れに賞を與ふる資格を授けるのであるし鑑査は多數の出品の中から其會の目的に違ふと思ふ者を拔出して出品を禁止するのである。重な條件を二三擧げると風俗壞亂の虞あるとか秩序を亂すとか、或は其會の目的に違反してをるとか兎に角失態と認めるものを拒絶するのであるから、美術の展覽會である以上は美術の拙劣なものゝ出品は之を禁止するのは言ふを俟たないが審査は何れかと言へば良いものに賞を與へ鑑査は不良いものを罰する爲めにするものといふやうな違がある。性質に於ては全く反對であつて如何なる會に於ても展覽會を開く場合に其會員は皆出品權を有つてをるわけであるのを鑑査は之を禁ずるのであるから或意味から言へば會員の資格の一部を奪ふわけになる。例へば美術協會の展覽會で鑑査をするとすれば協會員は皆出品する權利を有するのに其一部に即鑑査ではねられた人々には其權利を停止したわけとなる。若し政府に於て開く會ならば國民は誰でも出品

する權利を有つてをるわけて鑑査てはねた時には其權利を剝脫して了つた事になるのてある。それ故に其局に當る者は餘程愼重に事に從はなければならぬ事は勿論てあるし、賞は重きに從ひ罰は輕きに從ふと言つたやうな意味からも差支のない限りは嚴に過ぎるよりは寬に失する方がいゝのてある。苛酷に出品禁止を振廻すは嚴罰を行ふと同樣に只怨を買ふの基となるに過ぎない。加之作者に比較研究の途を供し自由競爭せしめん爲めには會場の陳列が許す限り多數のものを出品せしむるがよい。只會場には制限あるものてあるからその場合には已むを得ない。外國の展覽會にも鑑査の無いものもあり又極めて嚴重な鑑査をするのもあるが、鑑査の嚴なるものは皆會場に制限せられて已むを得ざるに出てをるに外ならない。フランスのサロンが嚴重の鑑査を要することになつたなどといふのも會場は三千內外の繪を列べられるに過ぎないのに出品出願が一萬にも達するといふのてあるから已むを得ず鑑査が嚴にならざるを得ないのてある。丁度學校の入學試驗のやうなもので小學を終れば中學に入れるのは當然てあるけれども中學が收容し得る數に限りがあるから志願者の多い場合には已を得ず競爭試驗て採るやうなことになる、從つて入學試驗の程度が追々高くなつて來る。それと同じわけなのてあるから若し中學が充分收容力があるのに入學試驗の程度を高めて收容しない時には大なる誤りてあると同樣に陳列し得る會場を持ちながら猥りに出品を禁止するやうなことがあるならそれは大なる誤てあると謂はねばならぬ。それ故如何なる會に於ても第一に會場を調査して陳列し得らるゝ數を定め、これに應じて出品を採るのが當然てある。若し假令極めて拙劣な物のみに其數を滿してもそれは其會員の力が弱いので已むを得ないことてあるし、國立官立とすれば國民の現在の力が其程度にあるのだから亦已むを得ないわけてある。他から之を評しても今度の會の出品は前回より出來が不良いとか或は良いとかいふ評を受けるのみてそれが當然の實力てある以上差支ないわけてある。よく私立　會などに於ては此評を受け

ることを據つて多數の出品禁止をして極めて少數の優等品のみを列べて前回に較べて進歩はしたが出品數が少いまでだと揚言してをるなども往々見る所であるがそれは事實を枉げて體面を保たんとするもので僞りのことである。

鑑査の寬嚴何れが奬勵になるか

鑑査を嚴にするとはねられたものが奮發して次回には更に良いものを作るといふことも無論あらうが、それは鑑査の嚴なるものが奬勵になる場合であるがさういふ場合は極めて尠い。多くは鑑査にはねられると再び出品せぬといふやうになり餘程熱心な勉强家でも二度もはねらるれば大概出品を見合せることになつて了ふ。さうして漸く怨聲を放つやうになり終には再び筆を執らないとか或は激して轉業をするなどといふことも生ずるに至るのである。一體技術の研究をしたいといふ熱心があつてさうして技術のまだ拙いやうな人には比較研究の便を與へるといふことが其進歩を助くる所以て又最も奬勵の途に適ふのである。絕對に出品禁止ては遂に比較研究の途を奪つて進歩を差止めるやうなものである。特に社會て實用を足してをる多數の技術者などは日々の業務に追はれて兎角時々の進歩に後れ勝ちのものである。此らを時勢に後れざるやうに誘つて社會全般を進歩させるといふには此等に比較研究の便を與ふるより良いことはないのである。然るに若し時勢に後れたとか或は新進の人と比較して拙いとかいふとから出品を禁止すると、終には社會全般の用を爲してをる方面と展覽會とは別物となつて展覽會は極めて少數の進歩せる人の研究所となつて了つて社會は更に社會を進歩せしむる爲めの展覽會を開く必要を生ずる。私立の好事者のみの會などに於ては少數者の嗜好を滿足させればよいのであるから此邊の事を餘り斟酌するに及ばないが國立とか官立とかいふやうな會に於ては殊に此邊の注意を要するのである。

鑑査の方法如何が藝術に及ぼす影響

鑑査の仕方次第て全體の技術者の研究の進路が色々に動く。それ故に鑑査する場合には餘程此の點に注意

を要するのである。例へば荒い描き方の繪を多く採ると次回の出品にはさういふ描き方のものが非常に多くなり、裸體の圖柄を多く及第さすれば次回には裸體の繪が増加するといふやうな風に、又反對に歴史畫を多く拒絶すると次回には歴史畫の出品が全く無くなるといふやうに、次回の出品に非常に影響するものであるから可成廣い方面から採るやうにして、如何なる方針て進んでも良いものは皆選に入るといふ考を全般の出品者に與へておくことが必要である。それと共に當局の鑑査員が自己の好みからして鑑査の標準方針を屢々變更するのは出品者の考を攪亂する計りて非常な弊害を生ずる。孰れ鑑査の局に當るやうな技術者はその道の天才てあるが、天才といふものは永く同じことをするのを好まないのが當然てある、それ故に矢張り總ての天才が爲す如く鑑査員も亦毎回新奇なものを好むことになり可成違つた手段を用ゐた出品を列べ度くなるのは自然てあるけれども、そこは自己の好みと鑑査とは別物として自己の好みを抑へて出品者の爲めを考へなければならぬ。然らざれば其間に非常な弊害を生ずる。例へば明い繪を良いものとして多く當選させた時に多數の出品者は成程あゝいふのがよいのであると考へて鑑査員の指導に從つて熱心に其方面の研究をして次回に澤山出品した時に鑑査員は斯ういふものは最早陳腐であるというて却つて暗い畫を多く採るとする、そこて多數のはねられた人は更に鑑査の方針が違つて今度は暗いものが良いやうだと研究の方針を違へて次回には今度は暗い繪を澤山出す、そこて鑑査員は又去年は面白かつたが最早之も陳腐になつたというて悉くはねるといふやうに天才が新奇を好むところから始終鑑査の方針を變更して出品者の指導となることを忘れた時には多數の出品者の思想を攪亂して了ふのみて進歩せしむることが出來ず、從て優れた作品を得られないことになる。故に此邊をよく注意して何れの方面に向ふも差支ないといふことを出品者の頭に充分入れるやうにして、出品者は皆安心して自分の信ずる所に從つて進むやうにしなければならぬ。殊に多數の鑑査員

が同じやうな好みを持ち同じやうな方面に全體を進めやうとするならば藝術界に於ては誠に忌むべき形勢を作ることゝなる。是れは兎角生じ易い弊で、アカデミー派とか何學校派とか何會派とかいふやうなものを生ずれば、それは藝術の最早進歩しないといふことを自ら語つてをるものである。又藝術そのものは百人百樣に夫々個性の向ふ所に從つて各異つた方面に進むのが其本來である。天才であればある程、百人は百人ながら違つた方向に進んでゆくのであるから、其中の僅五人なり七人なりの好みに合せて百人の出品を取捨せんとするのは間違つてゐる。それ故に鑑査員は宜しく自己の好みを捨てゝ可惜未來のある作家を誤らしめないやうにせねばならぬ。自分の好みは斯うである、然しながら鑑査員としては斯うであるといふやうにシッカリと頭を兩樣に使つてゆかねばならぬ。何會の鑑査でも茲に注意をしないと此らの弊を生ずるに至る。西洋諸國に於ても、此弊に就ては始終八釜しいことであるが、日本でさへも已に此らの弊に陷つてゐることは決して尠くはないのである。(談話)

巴里の衣食住

法學博士　和田垣謙三

自分は今度一年ばかりの外遊の間に、殆んど其三分の二以上を佛蘭西に居つたから、巴里の衣食住の事でも話して見やう。

第一着物　について話さうと思ふが、先づ男子の方からいふと、佛蘭西人は一體儉約であるから、巴里の都のプリンスでも衣服は決して贅澤でない。男子が着物

に贅澤をするのは寧ろ英人であつて佛人でない。パリジアンには、着物などを新調する人が比較的少くして大抵のものは出來合で滿足してゐる。從つて出來合の男子の着物を販賣する店にはなか〳〵宏大なものがあり、又其數も多い。で其處にさへ行けば老幼或は肥瘦を問はず、どんなものでも直ぐに間に合ふ。但し多數の日本人は此便利を利用することが難い。といふのは日本人は足が短かつたり或は胸が狹かつたりする。そこで其年恰好に適はしい縞柄なり色合なりの出來合の着物がない。或は大いさが合ふとすれば、それは彼方の十七八歲の子供のゝで色合や縞柄が合はぬといふ風だ。出來合のは非常に安いもので殆んど新調の半分よりも安い。が、どうも身體に合はぬものだから金に豐富ならざる在留の日本人もイヤ〳〵高い金を拂つて新調せねばならぬ事になる。體の小さいといふのも此點に於て不經濟の原因となつて居るのである。

婦人の服は、流石に巴里は世界の婦人服流行の本家本元であるから、之には巴里婦人も全力を注ぐ。一體佛蘭西人は衣服を調製するについて趣味に富んで居る。誠に立派だけれども其割合に金はかけない。詰り縫ひ樣だの、色合の調合だの、縞柄の選擇などが巧くて、着る人間とぴつたり調和することに意を用ひて、一部分〳〵には左程の注意を拂はない。全體のエッフエクトに最も着目し苦心する。夫れ故に英米人などは割合に高い材料を用ひて、着物の細かい苦心をするが而かも一寸も着物が其婦人に似合はずして、着物と人間と丸で別々で、人間が着物を着て居るのか、或は着物が人間を包んで居るのか分らぬのと大いに趣を異にして居る。その體格の長所は充分に之を顯はし、短所は巧みに之を隱すといふ事に最も其妙を得て居る。詰り佛蘭西人は着上手といはうか、着物の選擇は天下第一であつて、佛人の天然の美は、或は英人にも、或は北方の那威人にも、或は南方の伊太利人にも一歩も數步も讓るだらうけれども巴里市を步いて見ると、殆んど皆が美人に見えるのは、詰り着物の着上手に原因するので、此點は實に驚くの外はない。私は初め英吉利

贔負で、倫敦の方が美人が多いと主張してゐたが、今度巴里から倫敦へ行つて見ると、倫敦の女は到底も汚くて見られない。而して之は全く倫敦女が巴里女よりも着下手であるのに原因するのである。

帽子についてもなか／＼凝つたもので、男子の帽子の流行元は倫敦といふが、婦人帽の流行元は矢張り巴里であつて、之れ亦老幼によらずそれ／＼自分に似合ふ帽子を工夫して之を被つて居る。殊に若い人などはなか／＼派手な、餘程大きな帽子を用ふる。電車、汽車、馬車の出入りには邪魔になる程大きな帽子を被る。一體さういふ大きな帽子は針を以て頭に留めて置くが、帽子が大きくなるに從つて針も長いのを用ひる。甚しきは一尺餘の針があつて、針の尖が帽子の外に二三寸も出て居る。そこで汽車とか電車とか人込の多い所では、動もすると女に目を衝かれたり、顔を刺されたりして誠に危險だ。薔薇の如き美人にも矢張り針のあることは、こゝにも具體的にあらはされて居る。獨逸などでは針の尖にトメをかぶせる制度があるさうだが、佛蘭西にはまだない。然し近頃は男子が其必要を唱へて居る。

第二食物　について話して見ると、一體佛蘭西人は食道樂といはるゝ。又或人は惡食(あくじき)と評するのも當つて居る。支那人は鼠の子と鳥の巣を食ふが、佛人は蛙を喰つたり、蝸牛を食つたりする。が前にもいつたやうに佛人は儉約だから、料理は誠に旨いが、材料は安いものである。其安い材料を巧く料理鹽梅して旨く食はせるのが佛人の得意である。野菜などは特に上手に使つてある。佛人にいはせると、英人などは只肉を水で煮て其儘に卓上に載せるんだといふが、佛人は所謂調味宜しきを得て、單純なものがどうして斯う旨いかと舌皷を打つ如く上手に料理をする。要するに佛人は意匠に富んだ人間であつて、衣服に於ても食物に於ても始終斬新な、人の目を驚かすか、人の舌を驚かすかを考へ、そして見事に成功するのである。英人はプリンシプルで動き伊太利人はセンチメントで動き、佛人はアイデヤで動くといふが、それは全く事實であつて、衣食の瑣事に

至るまでよく國民性があらはれてゐるのである。

近頃はなか／＼菜食が流行て、巴里などでもヴイジタリアンが殖えて精進料理屋がなか／＼多い。自分も其方の熱心家の案内を受けて行つて見たが、精進だとて馬鹿には出來ぬ、なか／＼旨かつた。これも着物と同じやうに旨いけれども非常に安い。之に比べると日本などは比較的に料理が高いやうに感ずる。

第三住　については、英吉利は我家は我城郭なりといふけれども、自ら城門を開いて、客を招いて其溫かきホームを人に見せるといふ事は英吉利人の誇りとなし又樂みとして居る所であるが、佛蘭西殊に巴里に於ては其點に於ては英人の如くにあらずして、人を招待する場合には多くは料理屋に於てする。其點に於て我日本とよく似てゐる。それであるからして、一見すると佛人の方が英人よりも餘程親しみ易いやうに思はるけれども、其家庭に入ることは英國よりは餘程六つかしい。之は巴里は倫敦に比べるとレントが――地代でも家賃でも――高いので、従つて二階三階住居といふものが多く、間數なども制限があり、客を招待するやうな立派な食堂もなく、况んや客に一泊を勸めるやうなベッドルームなどは餘程少いからであらう。巴里についての話はいろ／＼あるが、それは何れ其中に話すことにし、今は只衣食住丈けに止めて置く。

人物評論（三十三）

△今秋の文展と日本畫の四大家

笹川臨風



日本畫界の四大家

栖鳳、廣業、大觀、觀山

今年の文展の第一部第二科では京都の方が東京よりも多く鑑査に及第して居る。然し之を以て直ちに京都の方が東京に優るといふのは早計である。京都の方の審査員の歩調が一致して居るといふ事も其原因であらうし、又京都の繪は手際のいゝといふ爲めに、かゝる鑑査の場合には甚だ利益があるといふ點もあらう。尚此他に於て、京都にては所謂大家連がよく後進の子弟を誘掖するといふ大いなる理由があると思ふ。殊に京都の美術學校の卒業生が（在學生までが）多く文展の合格者であるといふ事は注目すべき現象と思ふ。例へば平井楳仙の如き、土田麥僊の如き、榊原紫峰の如き、毎年文展に合格をなし、又文展の作品中に於ても已に注意をさるゝに至つた者である。此美術學校は松本亦太郎氏が校長をして、氏の穩健なる思想と又心理學から割り出したる藝術觀を以て指導をして居る。然しながら最も大なる敎導の任に當つて居るのは竹内栖鳳、山元春擧などである。此連中は後進の子弟を敎へ導き、展覽會のある毎に、東京の畫風東京の色彩などを大いに研究して、如何に京都の畫風を向上させようかに注意して居ることは著しい事實である。其點に行くと東京の畫家には後進を誘導する人が甚だ少い。川合玉堂の門下に於ける山内多門、梶田半古の門下に於ける小林古徑、島内松南、前田青邨（も居たさうだ）などを除いては門下の高材逸足には甚だ乏しいのである。親分肌の寺崎廣業の天籟畫塾は塾生も多く、なか〳〵盛

んなもので、新年の發會式には素人芝居をやつたり、隨分諸藝に達した通人も少くないけれども、本職の繪の方になると、一向に是ぞといふ人は無いのである。吉岡華堂は文展にも合格して居るが鳥谷幡山などになると、同癖では稍々出色の方であらうけれども、文展には影もないのである。下村觀山の門下生と云ふものも別にないが、北上峻山が本年合格して居るのは寧ろ異數である。此他には門弟といふ門弟も殆んどない。横山大觀には一體弟子といふべきものが殆んど無い。唯同氏の家に二人ほどあるが、今猶盛に修業中である。殊に東京の美術學校になるといふと近年の文展に合格したものは殆んど無いといつてもよい。今の美術學校は此點についていふと美術家を養成する學校では無くて、中等學校の圖畫教員を養成するより外は能は無いのである。それに近頃は高等師範の方に中等學校の圖畫教員を養成する科が出來たから、此點からいふと、今の美術學校は全く存在の必要を認められぬかも知れぬと思ふ。今日の美術學校のやり方では全く天才が出ることが難いのである。殆んど學生をして其向ふ所を導き數へるといふやうな人もない。寺崎廣業を除いては繪畫の先生らしい人はない。結城素明さへ今以て助教授である。之を京都に比べると全く顔色なしといつて可なりである。

所で、京都の若手は大家によつて數へられ導かれて中央畫壇に名を馳するが、之を數へ導いて居る大家の中には近頃一向其成績を見せない人もある。竹内栖鳳の鴫の屏風は昨年から評判があつて出るとか出ないとかいふ事であつたが、昨年も極く簡單なる「雨」でお茶を濁し、本年も文展には出品がない。本願寺の天井が忙しいといふ事もあらうけれども何やら物足らなく感ずる。栖鳳は幸野楳嶺の門下から出て居るが、遙かに師を凌いでゐるのみならず、鹽川文麟は固より岡本豐彦も及ばず、今日では殆んど呉春の壘を摩して居る。一時洋行して歸つて來た時代には新研究を試みて、京都畫風の極く嫉味なセピア色などを頻りに用ひてゐて、羅馬の古城趾の如き大作ではあつたが甚だ愚作であつたやうなものを出したが、今日では此人の技は圓熟に入つて、技巧も勝れてゐるし、又誠に氣の利いた、それで生氣の潑溂たるものあるのは此人の特色である。栖鳳が故菱田春草を怖れたといふ事をよく新聞などで見るが、之は本當の事であるかどうかは知らぬけれど、春草は靜の畫家で、栖鳳は動の畫家である。春草には理性の冷やかなるものがあるが、栖鳳には情味の溫かなるものがある。栖鳳が文展に出した大作は、「雨霽」「兎と猿」「アレタ立に」と昨年の「雨」である。「アレタ立に」は刷毛の使ひ方の巧みなのを見せてゐるが、今迄の所では「雨霽」が一番氣品がありに又最も栖鳳の特色を發揮してゐるやうである。然るに近來此人は全く大作といふ事をやらないやうである。本願寺の天井は別として、尺五以上の繪はあまり書かない。多くは半切であるとか、若くは俳句入の粗畫を以て濟ましてゐるのである。かる が故に栖鳳は行き詰つたなどゝいふ評判もあるが、實際此作者が眼新らしいものを書いて、今の行き方より飛び離れた事をするといふ事はどうやら困難ではなからうかと思はれる。けれども根が器用な人であるし、繪の上り具合の上手な人であるから、遣り様次第に

よつては何とか新らしい事が出來ないにも限らぬと思ふ。近頃新畫の値段の高くなつたのは全く栖鳳のお蔭である。栖鳳が春芳堂と結托して、成るべく自分の畫料を高くし、春芳堂は成るべく今までの栖鳳の作品を買ひ集めて、いはゞ一手販賣のやうな具合にした。一度栖鳳が之を初めた爲めに、其他の畫家も値を高くしないと自己の價値に關する如く考へ無暗に高くすることをした。それが爲めに栖鳳の半切畫は、鳥を一羽か二羽書いたもので五十圓だの百圓だのする。殊に此の人近頃頻りに俳句入りの繪を書くが、之は四條派の畫家の、よく褒めれば趣味といはふが、わるくいへば癖であるかも知れぬ。吳春は蕪村に學びゐたから、蕪村の俳畫に眞似て自己も俳畫をやつた。近來東京でも川端玉章が俳句入りの繪を書くけれども、栖鳳の繪も玉章の繪も俳畫趣味は少しも無い。只粗畫を描いて下手な俳句をくつつけた丈けで、どうしても俳味があるとは思はれない。之は栖鳳にとつて惡るい洒落だと思ふ。しかし栖鳳が小品を畫いても一筆苟くもせず、色紙一枚に書くにも二枚も三枚も書き損じをして氣に入るまで書くといふのは流石に濫作家とは大なる相違がある。

京都に於て栖鳳と相並ぶ――並ぶといつては語弊があるかも知れぬ――栖鳳に次いでの作家は森寛齋門から出た山元春擧である、栖鳳、春擧、何れも京都の美術學校の生徒を薫陶してゐるが、自家の門下生からいへば栖鳳よりも或は春擧の方がいゝ門下生があるかも知れぬ。栖鳳門の川村曼舟の落選は氣の毒であるが、今回の文展の中の「釣日和」を描いた小村大雲の如きは春擧の門下生で、今度の文展の中では出色の作である。處が先生の春擧になると、今度の「嵐峽」の如きは甚だ薄ッペラな、無暗に引き伸ばした、少しも面白味のない惡作である。之に向つては、東京の川合玉堂の「湖」が、作は大きいが、此作者が平生の落付いた品のいゝ作品を出すにも似ず、卑俗な失敗の作であッたのと相對せらるゝ。玉堂の此繪を見ると、江戸時代の繪畫の中の風景畫を思はせる。後ろの海の色の具合などはよく東海道五十三次などの錦繪にあらはれてゐるのと同じだ。然し廣重などはこういふ事はモット上手に描いたもので、あゝいふ繪を描くなら、寧ろ人物を土佐派のやうな人物にして、畫面を上品に引緊めなくてはならぬ。之は明かに玉堂の失敗と思ふ。春擧の畫面も「鹽原の奥」の一節を無暗に引伸ばした位にしか見えない。

一體に京都の繪を見るといふと、近頃は圖案式のものが多い。菊池契月の「茄子」の如きも全く圖案である。此畫は向つて左の方の人物の色合と茄子との色合の調和に苦心した相だけれども、人物の着物の色合と茄子の色合とは餘り違はぬ。同じやうなもので調和を計るとは一向感服が出來ぬ。それならば調和でなくて殆んど混和である。向つて右の方の赤い着物の子供の色が餘程よく調和が取れてゐるし、唐辛子もまことによく利いて居る。其他土田麥僊も二枚共全く圖案である。平井楳仙の「小雨の朝」も色が薄く、誰でも壁紙を想像するやうな繪だ。昨年「大根の花」を描いた榊原紫峰は今年は、南國の云々と云ふ面倒くさい畫題の下に蝶々と蜂のとまつてゐるのと、飛んでゐるのを描いてゐるが、之も圖

案めいてゐる。手際は上手で奇麗であるがどうしても一種の圖案である。又木島櫻谷の「寒月」は大變苦心の作である。從來には見るべからざる色彩を竹に與へて居るが、然し甚だ氣持のわるい色で、例のセピア色は此以外にはもうなくなつたが、セピア色に代るやうないやな心持の色である。繪は餘程よく描いてあるし、夜の心持もよくあらはれて居る。然し此竹の色がもう一層何とか苦心をせぬと、人に快感を與ふることも出來ぬし、又雪の夜といふ寒い感じも起らぬ。京都の繪にはどうも西陣式の所がある。西陣を控へて居る爲めか、京都の畫面は西陣式に傾いて圖案式、輸出向になるといふ事は、京都の畫家の今後に於て考ふべき問題であらうと思ふ。此等は竹内栖鳳などの指導者が大いに注意をしなければならぬ所である。栖鳳は甞て京都の色彩と東京の色彩とは相異ることを自覺して、後進に話して聞かしたさうである。之は最もな事で、天氣のよい關東の空合、すべて調子の高い東京の色彩は、水蒸氣の多い、一體に調子の低い京都とは土臺に於て違ふ所がある。栖鳳は三味線の調子が京都と東京と大變に違ふ、東京の調子は急にして高く、京都の調子は緩やかにして締め括りがない、之は色彩の上にもあらはれるといつたさうだが、こゝに氣の附いたのは流石に栖鳳の栖鳳なる所である。京都では友禪染の本場であるが、色彩の奇麗で華やかであるのは東京の方が上である。此爲めに京都の畫家は色彩に苦心をして居る。今年は出品しない爲めに美人畫に於て物足らぬやうな感じを起させる上村松園女史は、竹内栖鳳にはいろ〳〵保護を受けて居るさうであるが、已に色彩に於ては東京のやうな色が出ないといふ事を自覺して、此點に餘程苦心を拂つて居る。然し此人は餘程手際の旨い人で、東京の美人畫書きの及ぶ所でない。東京の閨秀畫家たる池田蕉園女史などは未だ及ばぬ。蕉園の繪は近頃千篇一律となつて、今度の「灯ともし頃」などは、一ツ〳〵には如何にも妖艶な綺麗なものであるが、只昔の古湯女の風俗を集めて描いたといふに過ぎず、時代の空氣も出てゐなければ、畫面の中心もなく引締ッてもゐない。此點から行くと新らしい試みが無いといつてよろしい。そこへ行くと近頃は大阪の畫家の方が、美人畫の方に成功する人がチョイ〳〵あらはれて來た。昨年の北野恒富の「日照雨」本年の島成園女史の「宗右衛門町の夕」の如き、昨年及び今年の美人畫中に於ては出色のものである。「宗右衛門町の夕」の背景は誠に心持のいゝ色で、又前にゐる二人の舞妓も誠によくあどけなく出來てゐる。舞妓の足が無恰好だといツた人もあるが、必らずしもさうでないと思ふ。只向つて右の女が下駄を脫いで居るが、之は姿勢からいふと左の方の女が下駄を脫いだ方がよいやうに思ふ。江戸時代に於ては美人畫は殆んど江戸の獨占であつた。京都にも、西川祐信のやうな、其後の三畠上龍のやうなのがあつたけれども、到底江戸の盛運には及ばなかつた。近頃で鏑木清方は江戸の美人畫に於て望を囑されてゐるのであるが、今年は不幸にして不合格であつた一分之は本年の作品が色彩が餘りに濃厚で、調子が卑俗であつたといふ點からであらうと思ふ。美人畫も此通りに京都や大阪に於て大分上手なのが出來て來、殊に色彩の研究が大いに進みつゝあり、又美人畫にも栖

風などが大いに教導してゐるのであるから、將來は大いに見るべきものがあらうと思はるゝけれども、今迄の通りでは美人畫も兎角千篇一律になり易い。

此點へ行つて色彩といふ事になると、東京の觀山が獨占の妙味を持つて居る。觀山の色彩は實に見事なものであつて、到底他人の企て及ぶ所でない。色彩畫家となれば、故人に菱田春草の妙手があるが、殊に觀山に至つては此點が何人よりも長じて居る。觀山は小供から畫家として生れた。殊に岡倉覺三氏は近來は殆んど觀山一人を養成して、同じ美術院の仲間でも觀山を他のものよりも遙かに飛び離れて群を拔かせようといふ遣り方であつた。然し觀山には技巧があつても頭腦(あたま)が乏しい、觀山は岡倉氏の指導によつてあの技量を發揮するので、岡倉氏なくば觀山無しといはれて居つたが、此頃では必ずしも然うでは無い。岡倉氏なくとも觀山は立派な大家である。然し岡倉氏の指導を加ふれば尙一層の妙味が出るのである。觀山が出品しないといふと、文展が何となく淋しいやうに感ぜさせる丈け、それ丈け觀山はエライ處がある。特に毎年の文展にいろ〳〵と目新らしいやり方をして人の注目を覓めるといふ事は觀山がなか〳〵上手な所で、初回の「木間の秋」といひ、「大原御幸」といひ、又一昨年の文展の「魔障」といひ、兎に角場中に異彩を放つて居る。只觀山は學問が乏しいから、自ら新らしい飛び離れたものを工夫するといふことは困難であるやうに思ふ。然し古畫を脫化して自己の技巧によつて描くといふ事は餘程上手である。殆ど比なしと云てもよい。近頃は觀山は原富太郎氏の保護を受けて橫濱に卜居して居るが今の觀山は立派な大家であるから何も富豪の保護を受ける程の必要もなからうと思ふ。或は毎年の如く文展へ異彩を放つ作品を出す準備かとも思つたが、昨年も今年も何も出さない。目下原氏の保護を受くるものに安田靫彦あり、前田靑邨あり、今村紫紅あり、殊に本年は此等原氏の保護を得て居る紅兒會の連中が何れも文展に於て東京派を代表して出色の作を出してゐるといふ事は、原氏も定めて得意であらうと思ふ。東京の少壯なる此等の畫家は京都の如く步調の一致したるものではないが、皆飛び離れた天才であるから、思ひ〳〵に自己の創意に成れる作を出して居る。之は京都と大いに違ふ所である。京都は栖鳳などの大將の下に足並を揃へて活動する勇士であるが、東京の天才は別に大家にも養はれず、大家の作品から少からざる感化は得て居るが、何れも自己を發揮することを努めて居る。それであるから東京の作家は手際はよくないけれども、新らしいもの面白いものを拵へて居る。觀山や大觀といふやうな連中は、後進子弟を導くことはしいないが、後進子弟を感化するの力は非常にある。京都に於ける大家は學校に於ける敎師の如く、東京に於ける大家は社會に於ける偉人のやうなものである。靫彦の「夢殿」は調子が柔かく、聖德太子の瞑想して居る具合、其後ろに立つて居る三人の天女の顏、如何にも氣高く又莊嚴な所がある。殊に天女の着物の色の靑い色などは至極落附があつて、いひ知れぬ快感を與へる。此度の文展の出品中では優等なる作品の一と見て居る。前田靑邨の「御輿振」は伴大納言繪卷などから脫化したもので、

圖面の變化もあり、人物が非常によく活躍して居る。何れも變化がある。昨年の「竹取物語」に比すれば尙一層巧みなものだ。今村紫紅の「近江八景」は新らしい睨ひ所がある。が必らずしも成功した作とはいはれぬ。其中の「比良」と「粟津」と「石山」などは最も作者の頭と手腕とを認むべきものであるけれども、「堅田」「瀬田」「三井寺」「唐崎」などは餘り取るに足らぬ。尙大に工夫をせねばならぬと思ふ。

本年は東京の二大家の大觀と廣業が「瀟湘八景」を出した。一は新らしい處を見せ、一は古き領分に於て其腕をあらはしてゐる。廣業は今の畫壇に於ける谷文晁である。總てがさうだ。谷文晁が南北兩派を混和したならば廣業は一科と二科とを混和して居るかも知れぬ。畫家などには天才が多いから、得て胸量が狹くなり易いものだが、廣業はどうしても親分らしい所がある。如才ない所がある。交際が廣い。又繪も之に準じてなか／＼いろ／＼な派を研究してゐるし、又達者でもある。從つて達者に任せて濫作もする。濫作は誰にでもあるけれども。廣業の濫作になると殆んど價値のないものが澤山である。しかし此人が眞面目になるとなか／＼よい。「溪四題」「夏の一日」の如き、古い手法から得た新らしい繪であつて、殆んど今後の日本畫は斯くの如きものであらうなどと、或評家にいはれたものだ。然し廣業の繪は最早や圓熟の極に進み、此上開拓する餘地は殆んどなからうと思ふ。吾々は栖鳳に於ても其樣に感ずるが廣業に於ては殊に此感を深くする。本年の「瀟湘八景」は餘程苦心の作に違ひはない。一體に穩やかで、綿密の點までもよく注意を拂つて居る。然し新らしい所からいふと甚だ其分子には乏しい。品は決してわるくない。然しながら「瀟湘八景」の作者としては支那には牧溪あり、日本の東山時代にも之を描いた畫家も少からずある。何れも氣韻の高いものである。廣業の作には奇拔な所がない。蒼潤な所はない。只温雅な所を取るべきと思ふ。大きな幅ではないけれども決して行詰つた跼蹐たる繪ではない。大觀の「瀟湘八景」は例の新らしい八景である。人或は之を評して「瀟湘八景」といふ名が無ければ瀟湘八景とは思はれぬといふが、之は要するに古き形式に拘束された見て、其の圖面を見てゐる所から、新らしい變つたものをケナスのであらう。大觀の意見も多分昔の型を破らうといふ積りで描いたので、「瀟湘八景」も亦此やうに描けるものだといふ事を示すのであらう。實に大膽なやり方である。大觀は從來大いなる未成品であつた。頭腦の進步した人、創意の澤山にある人であることは誰も認めたけれども、然し中年から畫家になつた人であるから、技巧の點は觀山などに及ばぬ所があつた。然し近年は大觀の技巧が實際進んだのである。此人は古畫もなか／＼研究して美術院あたりで繪卷や何かを模寫したりしたから古畫に對する造詣も深い。氣品といふ所も大變に主張して居るから、此人が技巧さへ進步すれば畫壇に於て非常なる大いなるものとなり得るのである。大觀は從來未成品であつたが爲めに出來不出來が多かつた。非常によく出來て居るものは殆んど他に比類がないものを拵へるけれども、出來のわるいものになると、曾我蕭白式で殆んど之が大家かと思はしむるものもあつた。近來になると技巧が著しく進み、繪

が餘程器用になつて來た。本年の「瀟湘八景」などは頭腦と共に技巧の非常に進んだことを示した例である。觀山と大觀は尙之から變化し得る所の前途が充分にある。殊に大觀の如きはいろ／＼自ら工夫をし、いろいろと創意し、常に新らしい事を見附けやう／＼として居るのであるから尙前途を開き得る人である。故菱田春草も然りで。代々木時代は決して春草の進境の極點ではなかつた。春草をしてもつと生き長らへしめばいろ／＼と變化することが出來たであらう。之は東京の美術院連の特長であつて、歩調は一致せぬが各自新らしい道を拓からとする。それだから美術院の感化を受けた人、又受けて居る人は皆一躍／＼に自己の領分を開拓せんとする。紅兒會の連中は美術院の感化を受けて居るが。今度の飛田周山の「天女の卷」の如きも亦美術院派の作である。其圖面を見ると觀山などの感化を大分受けて居る。尾竹竹坡にしても故菱田春草などより大いに得る所があると自らも稱して居る如く、直接間接に美術院派の影響を受けて居る。東京から美術院派を無くすれば、東京の美術が無くなるのみならず、京都以外の日本の美術は亡くなるのである。イヤ、京都の美術ですらも多少美術院派の影響を受けて居るやうである。今秋の文展を見るも村上鳳湖の「栗の秋」は相變らず春草の落葉の感化を見せて居る。平田松堂の「木々の秋」は觀山の「木の間の秋」の混雜したのである。昨年大觀の「山路」に砂繪具を使た影響でもあらうか、本年は「茄子」と云ひ「寒月」と云ひ、「宗右衛門町の夕」中の一人の舞妓の衣物と云ひ砂繪具が大流行である。

美術家中で最も美術家らしき美術家を求むれば大觀などは即ち其人である。天才肌の、藝術を以て自己の本領と心得、自己藝術を拵へることを專一として他人の毀譽褒貶を構はず、場當をせず、自己の思ふ所を遠慮遠釋もなく大膽に書きあらはさうとする。其人自ら眞に美術家らしき美術家であるから、其作品も從つて美術の本能といふ所を發揮して居る。

明治の四十五年はまだ明治の美術といふものを拵へなかつた。雅邦の如きは前時代の跡を繼いで、明治初期の畫壇を代表する。明治の後期は未だ畫壇を代表する大家が出なかつた。今以て美術界は混沌としてゐる。所謂新藝術なる者は出來上らぬ。江戸時代は流石に自由な時代であつて藝術家が各々自己を發揮し、官僚の狩野派以外に於て種々なる派を拵へた。而してそれは皆何れも立派である。殊に德川時代の中世以後になると、なか／＼エライ大家が澤山出た。今日は德川時代に比すると未だ藝術が充分向上したとはいへない。然しながら今日の藝術壇に於ては西に栖鳳あり、東に觀山、大觀、廣業あり、各々其特色を有して居るのである。此等の作家の畫が十分に新藝術を代表するとはいへぬが此等の大家によつて新藝術が開拓され、拵へられんとしつゝあるのである。京都に於て栖鳳等が美術學校を拵へて新らしき美術家を作らんとし、東京の美術院の連中は新藝術の上に感化を及ぼしつゝあるとは今日の藝術及び今後の藝術界に於ける大いなる恩惠といはなくてはならぬ。

△四氏の藝術

正宗得三郎

僕の竹内栖鳳氏についての記憶は、『古都の秋』に初まつてゐる。氏の作品に多少興味を抱いたのは、第一回文展に出た『雨霽』で其他の作にも時々少しづゝ位の趣味を感得したのもあつたが、特にこれと云つて取立てゝ感じたのはない。

氏の作品は才氣が餘りに自然の洞察力を薄ぺらにしてゐる、氏の技巧が簡潔にして洗錬されたと云ふのも、自然に突込んだ揚句にレファインされたのでなく、始めから器用に寧ろ或一定の所に逃げてゐる。氏の作が凝つてゐるけれどもこれが爲めに深くなく淺弱の感じしか殘つて來ない。

第四回文展に出た『あれ夕立に』なぞ氏の洒落た色と、刷毛の手際を出した作で、一寸その技巧は人を魅する愉快さはあるが見てゐる中に飽きて來る。又畫集なぞ見ると中に溪流だとか花鳥だとかに情趣の多い作品もあるが、それは在來の四條派そのまゝのものと同じ効果の所にあるものだ。

何日だつたか、僕は氏に撰畫會の席上で、紀淑雄氏に紹介されて一寸會つた事がある。その時氏は大觀氏の『月夜の山』を見て大觀は、自然の靈をそのまゝ手を出して、すぐ受け樣としてゐると評してゐたが。それは手を出しても仲々受けられないと云ふ意味であつたらふ。僕は又思ふに、氏はこれとあべこべに、過去の藝術の目で自然を洞察しようとしてゐるが然しやはり自然は容易に洞察を許さない。

第二回文展に『飼はれたる猿』『飼はれたる兎』とを出品した時、氏の弟子が栖鳳先生位こん日金箔に墨をよく乘せてゐる人はない、廣業なぞ同じく金箔に墨で描いてゐるが、金地と、墨が離れてゐると云つてゐた事がある、で僕は注意して見て、こんな事を詮索する必要があるかと思つた。こんな事を近時無謀の批評家に云へば、そんな事はどうでもいゝと云ふに違ひない。無論畫は畫面の効果から判斷するからにはこんな事はどうでもいゝ樣だが、眞に畫の内面を探すにはこんな事が可なり畫面の意味と密接の關係を持し、又時にそのものゝ勢力をなしてゐる事がある。殊に瀟洒たる墨色を尊び、型式は内容の暗示を意味し、一點一畫の隅迄、透徹した、近代詩の象徴の一部に這入つてゐると思はす日本の藝術は、一滴の墨のにじみにも、自然の調子と掛合つた有意味のものになつてゐるものもある。からに專門家なり又眞に日本藝術の趣味の境地に心を傾むけるからには、こんな下らない樣な事でも、心を注で見るのも無理からん事である。

畫の極致は哲理を帶び、宗教に這入り、近代的でなくてはならんと云ふ、その概括論位は今日ではどんなへぼ畫家でも又批評家でも知つてゐる。又遡つて、芥子園畫傳の氣運生動、用筆骨法、應物寫生等の畫法の意味も、近代的の解釋の如何によりては、今日の畫界の向つてゐる極致問題を廻遠くなく適切に意味してゐるとも解される。たゞ評家がこれ等の意味を畫面の上に發見して來るにはどうしても專門家の通つて來る、

總ての意味を一つ一つ技巧と共に味つて來なくては漠たる藝術論になつてしまふ。例へば氣分〲にて進んで行くのは、漠たる一般の人の見方で、時に夜と晝との間違が出來て、夜を晝と解した評家も可なり多い。若しこれが技巧を味わずして氣分丈味ふたのなれば、全く無意味のものになつてしまふ。

畫は自然に近きを尊びつゝ顧みると、自然との交渉の餘りに關係の遠い事がある。專門家にしても朝の畫を夕の畫と間違へ、女を男と間違へる事なぞは實に多い、こんな事なぞ必ず作家の主觀なり、作畫そのものゝ罪でなく畫そのもの〻性質にもあると解される。然もこの間違は畫の高下を判斷するに差支へない事が多い、これなぞ藝術中繪畫が技巧にある證據で、殊に日本畫なぞこの樣な點は極端に出てゐる。同じ文藝でも小説なぞの行方とは全く違つてゐる。文學者の多くが驚くばかり畫面の解らないのも、自然と畫との成立に內感が文學の如く直接でなく、技巧材料の型式ベールが掛つてゐて、然もこのベールに內律が含有される。日本畫なぞの畫面の働き筆の運動、色の生死は、碁打の石の如くして、素人の見方では生きてゐるか死んでゐるか解らない。又洋畫と日本畫とは材料の變化により畫の意味を可なり變化さしてゐるが、畫面に於ける、センスの働き、物の有無、調子は丁度外國の音樂家の耳で、日本音樂の調子を聴く樣なものだ、特種に鑑賞するには、日本畫家の鑑賞の網を一度くゞつて更に進まなくてはならん。

栖鳳氏の「古都の秋」は新意なる題目と、構圖、描法は當時人の目を牽いた、月の煙れる下、樹木の間より羅馬の廢墟が半ば崩れ落ち、その下に紫色の衣を着た人が逍遙てゐる。センチメンタルを帶びた畫面は最も甘い當時の詩人なぞの愛唱したものである。筆はぐじ〱して淡彩にて暈どれる趣は水彩畫の樣であつた。美術院の朦朧派とも違つて、朦朧とした甘い描寫であつた、其以前に「幾園の春色」「十二ヶ月」は四條派の更に明るい調子のいゝ寫生を加味したものである。中で、猿と躑躅、しだれ柳に鷄は、清新にして温みのある作であつた。其後大阪博覽會に出た、「羅馬の古城」は「古都の秋」を更に大きく屛風に書き列べた樣な作でその効果は不結果であつた。この新技巧は恰も下村觀山氏が同じく洋行した時に、夜のロンドンなぞを水彩の絹畫の如き試をしたので同し新味の理解力と傾向である。又其當時同じ樣な描法で獅子を描いたが、獸らしい生きた處は少なかつた。「夏の河邊」は餘り一面に淡く貧弱で、觀者に、墨色の煙れる以上に、追求する情趣は起させない。

「野犬閑臥」は氏の動物の描法に特質を持してはゐるが。華山なぞの野犬から見れば生きてゐない。「群鴉」は刈稻を干した竿に鴉の種々の狀態をして列んでゐるが、何處か蕪村の句の如き全般に廣がつた統一と、味を持つて新趣味があつた。第一回文展に出た「雨霽」は風に吹かれてゐる柳と五位鷺は、吳春から出て更に細かき才筆の頭は、統一した一種清新の氣が流れてゐた。「飼はれたる猿」「飼はれたる兎」は、寫實と、裝飾的と可なり能く調合し、古趣と新味とを兼ねた「群鴉」と同じ温雅なる屛風であつた。

氏の頭は器用に人物、山水、花鳥に働いてゐる、氏は思慮深く、沈思にして又氣焔の高い人だ相だが、畫は賢明で、少しの無鐵砲の處はなく四條派を第一の本城としてゐる丈に單純である。又作品もその方に成丈近いのがいゝ、この點は川合玉堂氏に似てゐるが、その間に多少の辛辣さと敏活がある。氏の前途に不安がないと共に、測り難きものは全躰に要求されない。

氏の藝術と、この四人中に於て最も接近してゐて、更に大きい人は寺崎廣業氏である。氏の藝術には何日も多少の可笑味と、不安を持ちつゝ揚々としてゐる。總ての過去の藝術の特質を有理に持扱ふてゐる。栖鳳氏程瀟洒にして凝つた處はないが同じく筆意の人で、人物風景、花鳥一たび氏の筆に上れば一種の大さと柔かき調子を持つて人を包圍して來るのは、確かに筆の魅力である。その筆意は、四條、南畫、北畫を加味してそれが混化されてゐる。氏の美術院時代の『菊壽童』なり、『王摩詰』『王陽明』は皆不思議に畫面以上の大きさ深さを持つてゐる。

その他『秋草』『日傘』『瀧口入道』第一回東京勸業博覽會に出た、『王摩詰』にしても、又四回文展の『夏の一日』にしても稚氣を帯びつゝ筆は自由自在に躍り跳ね豊麗で又時に鋒を持つてゐるが、栖鳳氏の如く痩せてない。

第一回文展に出た『大佛開眼』は、奈良朝時代の華さと、嚴粛さがある。構圖は、見下した大佛の金の蓮花の下臺の一部が上部の一端に見へて、その餘地には殆んど餘す所なく人物が列び埋まつてゐる。恰も開眼當時の一部を寫眞に撮つた樣だが、僕にはそれが如何にも鷹揚でよかつた。この如き一寸馬鹿〳〵しい構圖は他の人には出來ない。『菊壽童』が古い作だがやはり同じ意味のものを持つてゐる。『日傘』なぞも德川時代の官女が大きな着物を着て、こつてりとした顔をして、長閑の春日に糸櫻の下に日傘を持つてゐるのは、何所に奇拔もないが、不思議に大きな感じがする。

氏の色彩の深さは、觀山に及ばないし、表情の奇智、構圖のウイツトは大觀の如くないが、悠々として永遠性を持つてゐる。常識的天才家である。

『夏の一日』は大觀氏の『燕山楚水』の卷と比較比評されたものだがこれなぞ殆ど比較するのは無謀である。大觀氏の空なるに比してこれは洗錬され充實されてゐる。長卷を辿つて行く間、一樹一道の情趣は、山となり河となり村落となり開展して妙技に道入つてゐる。

たゞ氏の作が常に可笑味を持つてゐるのは場所の小さい處に大きな感じを與へるのに大きい場所に不思議に樂山の如く小さい感じを與へてゐる事がよくある。何日か撰畫會に出した、『支那山水』なぞはその一例であつた、これはまだ岩の皺の描寫に缺けた處があるに違ひない。餘り筆の面白さに捕へられて、自然の研究が足りないからだらふ。からに文晁なぞに似てゐて、文晁より不自然に無理の描法がある。中で四季山水なぞは、文晁の寫生畫に更に新意を加へたいゝ作であつた。

今度の『瀟湘八景』は、一見明畫を見る心地がして、新意は殆んどない、

粉本そのまゝである。然し洞庭の秋月なぞ、遠波の月に輝されてゐる風情なぞ仲々いゝ味がある、僕にはやはり大觀の瀟湘八景の亂暴なぞから見ればこれでもいゝ方だ。

氏は東洋藝術家を代表した、磊落にして雄大を愛し、其風景畫は、文晁に似て、種々の新意を試みてゐるが、氏の近時は益々飄々として、南畫の詩境に向つてゐる。

横山大觀氏の作品には、中に大變いゝ作もあるが、又可なり下らない作もある。僕の氏の作の慊らなく思ふ第一は、意味あるらしくして意味なく、獨創の樣で、古大家の模倣が多く、寫生してゐない處である。

美術院時代の『屈原』『聽法』なり又美術學校にある菜の花の中にゐる馬の畫なぞいゝ方の作である。『老君出關』『茶々淵』は醜怪と云ふより空の分子の多い作である。無暗に大きくらしくした周圍は實は何にもない作である。たゞ氏と春草氏とは、或色調に新意がある、これが模倣も、模倣と一寸見えずやがて大觀は新意ある獨創家なぞと云ふのである。

前田錄七氏藏の十六羅漢にしても總ての効果は、漫畫的の深さしかない。然し第四回文展に出た、『流燈』なり辰澤延次郎氏藏の『難陀乳糜供養』又郞山胡海帖の『菩薩』なぞは一種印度情緒のある神秘のある、人を魅する不思議の力を持つてゐる。殊に『流燈』は氏の作中最も傑出したもので氏の獨有のものである。その表現は、色の神秘に、輪廓の不思議の形式が、謎の如き暗示を持つて、心の中に捲き附いて來る。

氏は又叢多の山水畫を出してゐる。『海上の朧月』とか『二百十日』『曉』『燕山楚水』『山路』又此度の瀟湘の八景等があるが、人物の如くこれと云つていゝ作は少ない。

『二百十日』なぞは氏の無謀を最も代表した作で全體に具の這入つた淡墨を塗抹して、畫面の隅に松葉を二三本散らしてゐるなぞ餘り馬鹿々々しい、又『燕山楚水』でも一寸ウイットの面白味はあるが、深くなく物がない。中空を摩する山も、地上に散在せる人家も、人も大きい樣で又玩具を列べた樣な幼稚な感がある。雨となり晴となり、自然の搖り動く狀態の愉悦の念は何處かに潛んではゐるが、作畫に移つてからの眞實さを缺いで、空に狹つた分子が多い。

自然の印象をすぐ捕へるにも、型式的に這入つて行くのと、しみ〴〵と內實性から這入つて行くのがあるが、氏は型式の約束から這入つてゐる。山の高い樣で、高く見えないのも、細部に渡つた研究がしてなく。感情をそのまゝ圖案式に持扱つてゐる爲めだ。この型式內容は恰も、ホールゴーガンに似てゐる。『山路』でも『瀟湘八景』でも型式內容は面白いが生きた內容はない。私はこの點は、寧ろ廣業氏に同情する念が強い。大觀氏の內容は又時に小杉未醒氏の漫畫と意味を同じくしてゐる。『瀟湘八景』の遠浦の歸帆なぞ畫面の成立から色の用ひ方等未醒式である。

氏はずつと以前に、夏四題なぞと云ふ、印象派の選び相な題目と、場所とを描いた事がある。氏は空氣の變移を描いたのだ相だ、兎に角變つた試み丈はする人だ。殊に無線、朦朧體から一種の色調と、情趣を呼び出した描法の研究は、氏と春草氏の遺業である。この意味で『釋迦又に

逢ふ』作なぞ歴史的價値を持つてゐる。

四人中最も大作を作り。殆んど完成の作品を出してゐる人は、下村觀山氏である。氏の作品の注目すべきを擧ぐれば無數ある。『日蓮上人』『繼信の最後』『闍維』『鵜飼』『イソップ物語』『嚴島』『大原の露』『問答』『荒磯』『婦人』『元祿美人』『大原御幸』『魔障』『光明皇后』『木間の秋』『小倉山』『四季の花卉』その他記憶丈でも驚かされる丈の作品がある。そして又つまらない作が少ない。『繼信の最後』『大原の露』はその色調土佐より出でゝ更に新らしき試をしてゐる。色調は大膽にして然も眞率に研究されてゐた。これ程強く、これ程重く大きく、又完成されて出來たのは氏の生涯にも稀だし他の人の企て得られない處である。

『闍維』は今高野山に納まつてゐる相だ。金棺既に火を發し羅漢菩薩閻王等が凝視する所で、釋尊涅槃の圖は多く見るが佛身の闍維の畫はこれが嚆矢だ相だ。氏はただ智慮と、獨創とで進んでゐる。寺崎氏の如く、揚々とした筆の魅力はないが、全體の効果は全進的で、又栖鳳氏の如き、才子でなく、大觀氏の如く空でない、これなら技巧が勝れたと云ふより物に對し、畫布に向つて愛著の念が深いのだ。然しこれは過去の藝術になつて、今日の觀山氏は全く熱が去つて、新趣がなくなつた。『大原御幸』なり『魔障』の如き馬鹿に凝つたものになつて、藝術そのものの眞實は乏しくなつた。無論、日本趣味のあるものに、耽美してゐるに違ひないが、餘りに、古典的である。

『大原御幸』『魔障』を一々細部に見て行くと、人物でも他のものでも、微妙に迄研究されて、寫生と在來の繪卷物の情趣とよく合して、溫雅なる間に、何か或ローマンスのイリウージョンを起さすが、この作によつて前途を考へさす事は出來ない。

春草氏の朦朧派が、自然と光琳に近づかんとし。廣業氏が、南畫の趣味に這入らんとする如く、氏は又土佐の古法の境地に這入らんとしてゐる。『小倉山』『木の間の秋』は裝飾風だし色彩は美はしかつたが、少しいやみであつた。『唐茄畠』『唐茄棚』は氏の作として紹介されてゐるが武山氏の代作だと云ふ事だ。

氏の作は美術院時代に作品が多く又傑出したのが多い。

以上四氏の作品は各々特質を持してゐるが、栖鳳氏は、新意のない又感銘する作の少ない人だし。大觀氏は未だ將來に發展して行き又完成する任務を持ちつゝ、あの稚氣のまゝ悟つてゐる樣だ。廣業氏は、筆に自然の風を開く迄に行くかの疑問を殘してゐる。觀山氏は行き詰まつた感じがする。然も大觀にしても、廣業にしても次第に山水畫になつて來るのは、日本人の最後の質を談つてゐるのではなかろふか。天地の間に芭蕉が血の氣を少なくして悟つた樣な所を誰れも持つてゐる樣だ。

△日本畫の四大代表者

内田魯庵

△觀山と大觀と廣業と栖鳳と此四君が今日の日本畫の四大代表者たる事

は何人も異議は無からう。シカシ雅邦生存中は一と口に雅邦玉章と云つても玉章は如何しても一枚下で、雅邦が天下の畫界、獨り畫界のみならず、有らゆる美術界を一統して君臨する觀があつたが、雅邦以後は玉章翁は今日では既に凋落して强弩の末魯縞を穿つ能はざる感があつて、雅邦に代つて此四君が相對峙してをられる。が、相對峙してをらるゝので、四君の内の一人が挺然覇を稱してをるので無い。技術か人格か何か知らぬが雅邦より落ちてる點があるのでは無からう乎。之も爭ふべからざる事實であらう。

△四君の技術に就ては世間既に動かす可からざる定評がある。之を論ずるは恰も上野や淺草を說くやうなものである。且、我々シロウトが深く技術に立入るは僭越でもあるし、實は能く解らぬのだから之を避ける。

△栖鳳君の名は今から廿二三年前既に京都の畫界に重きをなしてゐた。其頃余が故久保田米僊と會して談偶々京都畫家に及んだ時、京都の畫家の細膩外一步も出づる能はざる無意と其見識の卑くして友禪の下畫描きを甘んずる職人的品作を罵つたり歎息したりしたる後、唯爰に一人の竹内栖鳳あり、此人の將來の造詣は眞に測る可からずと、米僊君は口を極めて嘖々して止まなかつた。栖鳳氏の畫は其時分既に二三度見た事があつたが、其偉大なる將來を有するを聞いたのは故米僊の一夕の茶話であつた。人物の鑑識に於て米僊君亦隻眼ありと云ふべしだ。

△其後米僊氏の家で偶然栖鳳君に會つて談を交へた事があつた。其時分余は宵二才であつたゆゑ栖鳳君は忘れて了つたらうが、栖鳳君も猶だ若かつた。但し余のやうな書生と違つて黒斜子の紋付の羽織を着てゐた。僅か三十分か四十分そこらの會談であつたが、栖鳳君の才氣溢るゝやうな話し振は今でも耳の底に殘つてる。

△其後美術院の初めての展覽會が當時の五號館に開かれた時、栖鳳君の『秋夕』と題する西行法師の畫があつた。如何にも勝れた出來榮のもので、其時分は猶だ畫の相場が一般に安かつたから、尺八か二尺ぐらゐであつたと思ふが、價はタツタ十圓だつた。丁度此時故大橋乙羽が貯金の中から六百圓だか七百圓だか出して畫を買つたといふ大評判で、敬中だの大觀だのが畫を澤山買つた。處が栖鳳君の『秋夕』を洩らしたので、或日乙羽に會つた時、何故アレを買はんのだ、アレを買はんやうでは畫の咄は出來ぬと云つてやつた。すると乙羽は宛も余が栖鳳君の親類でもあるやうに、アレを買はなかつたのは甚だ濟まなかつた、實は阿父（亡佐平氏の事）に買はせるツモリで色々勸めたが阿父は大黒か夷の畫でなければ解らんのだと、頻りに反覆陳謝した。余は欲しかつたが、貧乏書生で（——今でも——）畫を買ふ錢は無いから、續いて四五遍行つて其畫を飽かず眺めた。會期の中ごろを少し過ぎて、此畫に約定濟の札が附いた時は何となくガツカリした。

△棲鳳君の作で、此『秋夕』より更に一層印象の深かつたのは之から二三年過ぎて後櫻ケ岡の美術展覽會に出た『廢園』といふ畫である。破芭蕉の下に連翹か何かの花が咲いてゐて雜草の茂つてゐる飛石の上を蜷が横斷する圖で、廢園の趣きが印象的に現はれてをる。たしか丁度同じ時、

雅邦が柳の枝か何かを猫が押はつてる圖を描いて大評判であつたが、棲鳳君の方が遙に勝れてゐた。余が棲鳳君のアドマヤラーとなつたのは實に此『獅圖』である。恐らくば棲鳳君の傑作の一つであらう。此畫も其當時は十圓かそこらであつたが、今は誰が所藏してゐるか知らん。最う一度見たいと思ふ。

△棲鳳君の其後の作に就ては世人の記臆も新らしいから吹々する必要も無いが、兎にかく技術の一點に就ては當今第一であらう。故雅邦も單一なる技術を以てしては棲鳳君に一籌を輸するであらう。

△廣業君と會つたのも久しい以前であつた。勿論深く交際したのでは無いが、廣業君が東陽堂の繪畫叢誌の縮圖をしてゐた時分、故乙羽を通じて廣業君と二三回會つた事がある。今でも拔けない東北辯であつたが、中々能く辯じた。隨分氣焰を吐いてゐた。平福百穗君のお父さんの穗庵門下で、菅原白龍にも學んだ事があつたやうだ。が、廣業君の腕を揚げたのは繪畫叢誌に從事して、土佐でござれ狩野でござれ、南畫でござれ浮世畫でござれ、何でも關はず縮圖したのが知らず識らず大いなる研究となつたであらう。繪畫叢誌は其後種々の縮圖を載せたが、廣業君のが最も勝れてゐた。

△大觀君には近年一二度或る宴會で顏を見たばかり、觀山君には猶だ一度も會つた事が無い。シカシ前の棲鳳君にも二十二三年に一度會つたとは言へ、棲鳳君の方では此當時から余の如き檻褸書生は眼中に無かつたらう。廣業君とも知つてると云へば知つてる、知らないと云へば知らないといふ位の關係であつて、當代隨一の此四大畫伯と實は甚だ親しく交際した事が無いのだ。夫故其人物に就ては少しも知識が無い。何事をも云ふ事が出來ない。

△技術が圓熟して且新味を持つてるのは何と云つても棲鳳君であらう。半折に可、屛風に可、花鳥に可、美人に可、行く處として可ならざるは無い。シカモ前人の典型を脱して必ず幾分の新味を帶びてゐる。

△廣業君亦八面玲瓏の畫才。人物に宜しく、風景に宜しく、浮世畫風の美人畫までを巧みにする。其筆力の健なる眞に當世の珍である。唯新味の點に於て棲鳳君に比して缺けるやうであるが、其多方面なる才は兄たり難し弟たり難しである。

△觀山君に到つては題材自から限られてるやうだが、其着想の超凡なるに伴ふ其筆力の雄渾なるは雅邦の遺鉢を傳ふるに足る。觀山君の畫を見ると波斯あたりの美術を憶出させる。波斯の美術は印度の直系であつて、ガンダラの樣式が東漸したる希臘と混殽して新たに產み出されたものであつて、恰も觀山君が法隆寺美術に學びて西歐趣味を加味したのに一致するのであらう。觀山君の最も得意とする人物畫には波斯の畫そつくり其儘のがある。何と云つても規摸の雄偉なるは觀山君である。

△大觀君は其輪廓の廣大なる誠に端睨すべからず。今日既に嶄然として挺んづる大手腕を認められてをるが、其の眞價値は實は猶ほ未知數である。縱令今日で留まつたにしても勿論一代の大家たるは爭はれないが、まだ此先きどれほどエラクなるのか解らない。或は平たく云ふと案外エ

ラクないのかも知れぬが、殆んど尋常尺度を以て測る可からざるものがある。例へば廣業君と比較すると、廣業君の畫は百幅が百幅ながら夫れ〴〵面白く感服出來るが、大觀君の畫は百幅の中少くも七八十幅までは餘り感服出來ないものばかりだ。唯其中の二三幅は廣業君に限らず誰にでも眞似の出來ない伎倆を現はしてをる。

△例へば今度の同じ題目の瀟湘八景でも廣業君の方が遙に巧い。大觀君の方がマヅイ。が、マヅイ大觀君に棄てられない味ひがある。何故マヅイ畫に感服するのか解らぬが、何だか感服せずにはゐられないのだ。大觀君の畫は未知數である。大觀君の畫を二三枚座右に置いて朝晩眺めて研究して見たいと思つてゐるが、然う思つてるばかりで余の如き貧乏書生には出來ない。

△又例へば此四君を畫家として既に頂點に達した人として見ると、觀山君は恰も富士の山の劍が峰の尖端に座禪してゐるやうなものだ。栖鳳君や廣業君は其頂上を運動してゐる人だ。大觀君は上たり下りたりしてゐる人だ。時々は噴火坑内まで入つて見る人だ。

△日本畫と四畫伯について

高村光太郎

私は、當今の『日本畫』と稱してゐる藝術、若しくは、其の藝術家の藝術に對する態度について根本的の疑問を有つてゐるので、斯ういふ比較論のやうな各論にあまり興味がありません。

所謂日本畫の事を口にする時には、まづ此の根本問題を考へてしまはます。觀山にしろ、大觀にしろ、栖鳳にしろ、廣業にしろ、私の見るところでは、俗人に過ぎないと思ひます。私が俗人だといふ意味は、本當に藝術といふもののツボに身を投じてゐないといふのです。皆同じ樣に眞摯さを缺いてゐます。不純です。自我を飾つてゐます。そして、驚くほど、内生活の無い人等だと思ひます。私は、此の人等は、今一度其の頭腦を破壞してかからなければ駄目だと考へます。内生活のない藝術家の空虛な作品、夢のやうな作品は此の人等によつて澤山作り出されます。此の人等は、しん底から自分の立つてゐる地面を考へたことがあるでせうか、そして、今、世界の人間がどの位の藝術境に立ち入つてゐるかを見渡した事があるでせうか。

假りに比較をしてみれば、觀山は、獨創といふ力がなく、自由と天眞とを缺いてゐるやうです。その代りに一番勿體らしい畫をかきます。大觀は、獨創といふ事に苦しんでゐる痕のある獨創力の乏しい畫家で、やはり自由と天眞とを缺いてゐるやうです。色彩に對する敏感は有つてゐると思ひます。栖鳳は、滑稽なほどの俗畫家に見えます。所謂日本畫大家の典型のやうに見えます。廣業は、論ずるのも厭なほど不徹底な、世間の爲めの畫をかく人のやうです。めつたに自分に向つて畫をかいた事はなからうと思はれます。

日本畫論の根本問題は中々大變ですし、此等の人の比較といふことは、何だか無駄なやうな氣がしますから、もう止します。

△廣業、觀山、大觀三君と栖鳳君

山方香峰

日本現代の日本畫家として第一指を屈すべき頭領はといへば、何人も廣業、觀山、大觀、栖鳳の四君を擧げることに一致するであらうが、僣四君の現在の位置及び將來落附くべき先はどうかといふに、それは銘々の好みと見立方によつて違ふと思ふ。然し大體からいふと、廣、觀、大の三君は、或點に於て一致點が認められ、栖鳳君は、これと比して多少の隔たりを有つて居る、それは敢て東京派とか京都派とかいふ、我々の見慣れ使慣れた區別ばかりからでは無論ない。

今年の文展には、廣業君と大觀君とが出したばかりで。觀山君と栖鳳君とは出さなかつた。我々はこの事實を輕忽に見逃してはならぬ。觀山栖鳳二君の出さなかつたのは、何も忙がしいといふ位の事ではなからう。二君には輕々しく文展に出し得ぬ事情があらうと思ふ。それが二君の立場からしても、又日本畫に對する態度の極め方からしても、さうなくてはなるまいと我輩は推測する。

廣業君と大觀君の文展に出した作は、何れも瀟湘八景である。二君が同じ題材を擇んだのは、先年一所に支那漫遊を試みてから、支那の自然に就て少からぬ趣味を感じ得た故とも推せらるゝが、又或は二君の間に申合があつて、同じ題材を如何に取扱ふかといふことに就て、研究的に自家の態度を明白に表現するといふことに決したものかも知れぬ。少くとも我々がさう解して、そしてそれによつて二君の現在を批評し説明するに差支があるまいと信ずる。

先づ大觀君のを見ると、在來の行方と少しも違つて居らぬ。或人はこれを評して、瀟湘八景の古い型、即ち牧溪玉澗以來の古い型を打破つた點に於て成功して居るといふが、我輩は必ずしもさうは思はぬ。大觀君の描法からすると、嫌でも應でも古い型の儘では畫にならぬ、是非それを取捨てゝ、大觀一流の構圖を新らしく造らねばならぬ。つまり古い型を打破るのは目的でなくして、古い型を破らずば一筆をも下し得ぬのである。要するに大觀君の描法に隨ふと、自然を自然の儘に描くといふことが到底不可能であつて、これを自己の主觀に打込み、別に第二の自然を造り上げるといふことになる。其所が大觀君の長所であつて、又短所とも見られぬことはない。

それから大觀君の作には、よく氣分が出て居るといふ、それは如何にも拒み難い事實である。けれども君の作に出る氣分は、部分の氣分であつて畫全體の氣分ではない。一例を擧げると瀟湘夜雨の圖は、夜雨といふ氣分だけはよく出て居るが、場所の感じは少しもない。單に竹をかいて瀟湘を利かすといふことは、丸で臭草紙の見返し繪のやうなものだ。この點もこの作家の缺點として擧げることが出來る。

次に廣業君の作を見ると、大觀君とは打つて變つた描法を試みて居る、そして廣業君自身のやり方としても、從來のに比して多少變つた點がある。つまり大觀君は、歷史で變がつた日本畫としては變つた行方で

あるが、大觀君の作としては其甲の作と乙の作との距離が少ないのに、廣業君は、在來の日本畫との距離は少ないが、其甲の作、乙の作との間には、常に少からぬ距離を保つて居る。それが第一の相違。

それから大觀君の作は、餘り骨を折らずに感じの善い點を覘つて成功して居るが、廣業君のは、非常に努力し、そして觀者に善い感じを與へるといふことを餘り目的として居らぬ。これが第二の相違。

大觀君は、甲の作と乙の作との間に距離が少ないばかりでなく、其描き得べき領分も至つて狹い。之に反して廣業君のは、大觀君程其作に統一が認められぬけれども、才人の事業何れに之くとしても可ならざるなしである。これが第三の相違。

大觀君は、いふ迄もなく現代の繪である。明治とか大正とかを離れて君の繪は存在すべきものでない。廣業君のは、百年前、若くは二三百年前にあつても立派な繪であり、又百年後、若くは二三百年後に於ても同じく立派な繪であると思ふ。これが第四の相違である。此意味を今少し詳しくいふと、大觀君の繪は、日本畫のどん詰りでなくして、寧ろ新しい試みの出發點である。この先きそれがどう變るか知らぬが、とにかく大に變らねばならぬ運命を持つて居る、つまりは君の繪は猶未成品の形である。之に反し廣業君の繪は一歩々々踏み固めて進んで行くので、其行り處にはしやんと極つた形が附いて居る。これとてもこの先き大に變ずるかも知れぬが、今の儘でも立派な出來上つた繪だ。この出來上つた繪であるといふことが、君の繪が青年の視聽を多く牽かぬ最大の原因であると我輩は思ふのである。

二君のこれから先きどう變化し、更にどう落着くかは、今の處何とも斷言することが出來ぬけれど、大方は推測されぬこともない。獨り觀山君のみは全く未知數である。君は進で大觀君たることも出來、退て廣業君たることも出來るが、君は恐らくこの二途の外に、更に新らしい別の途を開拓せんとして煩悶して居るであらうと思ふ。我輩は廣業君を技巧の人とし、大觀君を頭腦(あたま)の人として押片附けることを好まぬばかりでなく、そう一口に二君の傾向を言ひ定むることを甚だ不穩當と思ふ者であるが、然し觀山君に至つては頭腦(あたま)の人であつて、同時に手腕の人であるといふことを承認せねばならぬ。君は、古畫の行方を其儘踏襲し行く技倆も拔群であつて、そして新時代の嗜好に逢迎し行く手腕も亦尋常ではない。但しそれだけ君は去就に迷ひ。あれかこれかの見定が附け悪いかも知れぬが、今に於て態度を明白にせずば、後進の紫紅、靫彦などに逐越されぬとも限るまい。

總ていふと、以上の三君は、皆それぞれ異つた立場を持つて居るけれども、自己の領分を日本畫の領分と一致さするといふ點に於て同一である。言換ゆると、日本畫を粧飾化する一面を持つてる外に、純正の日本畫の一面をも併有して居るのである。然るに栖鳳君になると、どうしても其畫家たる全人格が粧飾化されて仕舞つて、純正の日本畫を作らべき餘地が無くなつて居るやうに思ふ。勿論これは東西兩京畫の優劣を決すべき問題でなく、又栖鳳君と他の三君との優劣を決すべき問題でもな

い。

栖鳳君を論ずると、勢ひ中村雁次郎を連想することになる。栖鳳君の圓熟した技能は、どうしても雁次郎其儘で、若し單に技巧の圓熟の上からいふと、無論東西兩京の第一人たるべき價値があらう。その上ならず雁次郎の要心深いこと、手狃れた務の外は容易に染めないこと。興行上手なことなど、凡て自己と世間との接觸を保つ上に行渡つた用意のあることなど、當面の技藝以外にも、二者に少からず共通點があるやうに思ふ。

栖鳳君を雁次郎に比すると、差向き廣業君は羽左衛門で、大觀君は左團次である。左團次の比較的新らしいものに成功することゝ、羽左衛門の時代世話何方でも達者に遣つて退ける腕前あることなど、恰も兩君に切つて嵌めたやうに當つて居る。して何方が多くの未來を有するかといふ問題も、この二優の將來から推測つて、大體其要際を得らるゝことと思ふ。

觀山君になると、一寸こゝに相比すべきものが見到らぬやうである。其所が、又觀山君の値打かも知れぬ。

△格に入つた廣業と格を出た大觀

島村抱月

四人と言ふんだが觀山に栖鳳は今年は出してないから、それに此二人の最近の印象は、私今よく覺えてないから、廣業と大觀とのお話をすることにせう。

廣業氏と大觀氏とは、丁度今度の出品者でもあり、其上偶然題材までが同じものである爲めに、比較してみる場合に特別な興味を覺える。一言にして言へば、廣業氏は、格に入つた日本畫のディグニチーを見せやうとし、大觀氏は格を出た日本畫、即今日迄の處で最も新しい日本畫の試み――と言つても紫紅氏等の作のやうに殆ど西洋畫に接近するといふ行き方と違つて、寧ろ何處迄も日本畫のシグニフイカンスを殘して、それで最も新しい、行ける處まで行つてみたいといふやうな畫風である。此等の點から大觀氏の作は、一方廣業氏の作と比較して、面白い對照を作るのみならず、一方紫紅等の作と對照して、亦面白い論題を作るものである。此意味で、私は今度の展覽會の日本畫中では、大觀君のあの作を以て、一番興味のあるものと考へた。尤もこれは第一日の瞥見だけでの印象である。

廣業氏と大觀氏は、自ら一方はより多く手の人、一方はより多く頭腦の人といふ對照をなしてをる。是れは強ち手の人だから不良く、頭腦の人だから良いといふ意味での對照ではない。藝術の上に於ては、何方も重大であるのは論を俟たないけれども、島渡その人に接した上から考へても、廣業君がその一方に秀で、大觀君が他の一方に秀でた人であるといふことは看取せられる。同じ新しい試みでも、兩方行き方が違ふ。況して今度のやうに、故らに違つた途へ行つた繪の上から較べてみると、愈々

此對照が明になつて來る。譬はゞ兩方とも、最も適した方面にその腕を見せたといふ形である。只廣業氏の繪は、その非凡な技巧の中に、較もすれば、才子肌とか、才筆とかいふやうなタツチが折々出て來る。今度の作の如きは、殆ど此一面の特色を脱して、格に入つた日本畫の威嚴といふ如きものに肉薄して來たのは、又別樣の興味である。

大觀氏の新藝術は、今度の作の中の二三などで見ると、益々技巧の新しさから、內容、若しくは氣分、若しくは見方の新しさといふ處まで移りかけてをる。一段の進境であると思ふ。新しい繪はあんな風に、摑んだところの中味の上から新しくならなければ駄目である。此の外に、新しい試みとして評判せられてをる日本畫の如きは、此點に於てまだ大觀氏より數段の下に於て新しくならんと努力してをるものである。即ち多くは技巧の上に於て、先づ新しくならんとしてをる。摑むところの內容とか、氣分とか、見方とかいふものは、依然として陳いのが多い。題材が陳いと言つても、何も昔の人は汽車を描かなかつた、それを現代の人が描くのが新しいとかいふやうな意味の、只車柄の新奇なのを選ぶ、といふわけでは決してない。同じ瀟湘八景でも構ふまい、その中で摑む所が新しかつたり、解釋する處が深かつたり、乃至全體の結構が空想的の寄せ集めでなく、一圖として、始めからシツカリとした眞實であるといふやうな點を、根據に置かなくてはならない。今日技巧の上に、先づ新味を出さんとしてをる人々は、恐らくあれが、畫家にとつて已み難い一つの階段であつて、それを通り越すべく努力してをるのであらうと思ふ。多くの日本畫を觀ると、どうもまだ大幅になればなる程、全體の結構の上に空想が多く、嘘が多い。描かれたる局部々々は、隨分骨折つた眞實を摑んでゐても、その組合せ方に嘘があつたり、空想があつたり、又折角或部分はシツカリとしたものを摑んで描いても、他の部分がまるで古い空想の產物をくつ付けたものになつたりして、全體の眞實性といふものを壞してをる。その點になると、西洋畫家は流石にさういふ缺點が尠い。

終りに斷つておくが、玆で空想といふのは、強ち空想畫を排するといふ意味ではなくして、嘘になる空想を斥けるのである。畫いたものが總て外形上の現實性を有たなくてはならないといふ意味の反對としての空想ではない。今日では外形は已に問題ではなく、事物の眞實不眞實は、其生命にあるのであるから、その意味で、空想とは、嘘のものといふ意味に用ゐたのである。

△四畫伯に對する對話

X生

ある南歐の人――其人は美術家でもなければ、批評家でもない、云はゞ唯の素人で、自分と大差はない――と二人上野に向つて開會中の文展見に行く途中での話。

X、君は廣業と觀山と大觀と栖鳳と比較して批評の出來る程、此人々の作品を註意して居ますか？

○ そんなに澤山まだ見る機會はありませんでした。然し君は何故此四人丈けを殊に選ばれたのです。此方々は別々な畫派の代表的頭領で、强い個性を發揮して居る畫家なのですか？

X 左樣、そんな意味は先づないでしよう。寧ろ有名（セレブリティ）が現今の日本で群を拔いて居て、その作品は非常な高價で飛んで行つて終ふ——社會は常に價値といふ字を直接に金銀の價値に換算して夫れが一番確かな僞りのない最終の判决だと可成の人々まで思つて居る。夫れは兎も角、君の藝術上から其の價値を定めた御意見が聞きたい。

○ 私が去年の文展までに見た僅かな經驗で敢語する無禮を許して下さるならば、近代の日本畫の中から此四人を一つ括弧に入れて考へる事が出來る、すると此四人の作品は四人が四人一樣なよく似通つたもの、といふ印象しか殘りません。一體日本人の顏が皆な似通つて居る樣に、日本人の畫には個性といふものが一向ない。日本畫が非常に自由な藝術でありながら、個性を發輝する事の充分でないのは實に不思議にたえない點です。

X 自由には自由な藝術に相違ありません。然し、自然の見方は可成單純であり簡略です。其の單純な處が却つて充分個性を活す事の出來難い點かと思ひます。夫れと觀察の單純な割に技巧が複雜で、形式的には餘り進歩し過ぎて居る。これは君等の想像以上だろうと思ひます。

○ 勿論私でも、現代の日本畫といふ小範圍の中でならば、此四人の作品を色別する事が出來相です。當るか當らないか別問題として云つて見ましようか……廣業は在來の技巧の中から入用な技巧を勝手に取出して來て、其時々の出來心で、題に應じて呵成するやり方。觀山は過去の日本畫から日本畫として最も適した題材を選んで、夫れを洗練した既成の技巧に工風を加へて成就する處、流石廣く世界的に養ふて來た眼識です。日本畫の長短をよく知つた人と云はれます。然しどうしても狹くなり易いのが缺點でしよう。

大觀ですか、あの人の畫を理解するのは私共歐洲人には一番困難です。恰度栖鳳の夫れと正反對です。然し多少日本畫を見慣れて來ると一番興味があります。即ち日本畫に幾百年か養ひ來つた内容と感興とを最も大膽に取入れてある樣ですから。形を超越した殆ゝ抽象的の感念を再び形に托す、夫處が吾々の考から一寸遠い處です。栖鳳、あの人の技巧の陰には露骨でなく巧みに洋畫のコンセプションが取入れられて居ると思ひます。又非常に捕はれた科學的な點があります、然し時には夫れが反つて禍てはなかろうかと思ふ位です。

X 大體私も御說に贊成です。然し試みに純日本畫家の批評を聞いて見たいものだ、奇拔てしよう。

會場に入つて、見物人の肩と肩の間からやつと大觀と廣業の瀟湘八景を見比べた後。

X 一般見物人には廣業の方がより多くの感動を與へて居る樣です。妙だ、あの寫眞の樣な細い寫實的な作品を、大觀の夫れ以上に喜んで居る、

これが現代の日本人だ！　私には大觀のアンテレクツエルな畫風がより多く興味を引きますが、君はどう思ひます。

○　そうですね、廣業の此畫風は部分部分線で描いてある。而して大觀のは全く色彩〻調子の變化で染め（パンドル）られて居る。先づ一見して夫れが殊に目立つ相違です。

X　一體日本畫は描くものか、染めるものか、君の御意見は？

○　吾々外國人は日本畫をデッサンの色彩したものと心得て居ました。然るに古代の名作を多く見るに從つて、段々其の誤見てあるとを悟りました。勿論筆力とか何んとか云つて、筆法を重んじた事は一見直ちに分ります。然し夫れは部分部分で單調に陷るのを避けた、一種の方便であつて、洋畫の所謂アクサンに相當して居ます。而して全體はやはり調子の變化が主要な部分になつて居ました。名作には眞に感心する樣な實例が澤山あります。處が段々近世に及んで反つて其の本義は忘られ、徒らに筆力とか何んとか云つて、描く一方になつて終つた。遂には畫面の統一を失ふた作品許り增えて來た樣です。

廣業の今度の出品に中々全體の調子といふ事も考へてはある樣ですが、部分の描寫の精密な丈けに、全體の調子は小膽で、思切つてやつてない。大觀の放膽で描くよりも染める事に力を盡したのと二三間を隔て比べて見ると活々しさ（ビバシテー）に雲泥の差があります。廣業の技巧には未た確固な自覺がない、夫處が作品に少し弱い感を起させ、大觀は大に自覺あるんで裝ひ過ぎて、やゝもすると空虛な奇拔に走りかけ樣とする、部分では（アンシチー）アクサンにもやゝ物足りない。勿論之には日本畫な日本畫としての批評ではありませんよ。

X　大觀がよりアルチーストでしよう。

○　勿論そう見えます。あゝ自然の形を離れて一種の感――可成り普通な俗人すら考へ及ぶ樣な概念的な感ではありますが――を出す事の出來る畫風は吾々から云ふと重法で澤山しい。又家い頭です。此大觀の八景などは或代表的作品として土産にしたい氣が起りました。然し尚ほ惡口を云へば裝飾畫（パンノーデユラチーフ）の場合、洋畫ならば八幅相互の調和をもつと深く考へて面白味をつけてやつたでしよう。尤も此八景は掛物として、別々に床にかけるのでしようからこれでいゝでしよう。

二人で話しながら彫刻の室に行つた。群衆は僅かな作品の周圍に、蟻が梨の實の喰ひがらにたかつた時の樣に黑山をなして居た。（了）

△棲鳳、廣業、大觀、觀山と四氏

紀　星峯

△棲鳳、廣業、大觀、觀山の四氏は明治畫界の先達者（パイオーニーア、グループス）中に數ぐべき代表的人物であつたばかりではなく、大正の現在に於てもなほ日本畫界のスターであり、人氣役者である。實に明治後半の日本畫が四氏の人物性格樣式に負ふ所が多かつた事と、現在の日本畫界がなほ四氏に多く

を期待してゐる事とが事實であるから、四氏の人物性格を論ずることがやがて明治繪畫史の一半を論ずるやうなものとなるので、容易な事ではない。

△自分の忙しいので、いよ〳〵雜誌の締切まで僅に四五時間ばかりの餘裕しかなくなつた。今の私には到底そんな複雜な問題を說き試みやうとする勇氣はない。それに私は四氏の知人たる光榮を十數年來有してゐるものゝ、未だ氏等の人物性格を評知し得て、人に說き得らるゝ自信がない。併し折角の御委囑に默止しがたきまゝ、四氏の人物性格の輪廓なりと書いて見やう。

△四氏の人物性格はそれが發現した作品の結果の證する如く、その根本に於て相異してゐる。がアーチストとして四氏を觀れば、その閱歷に態度に相通の類似點が少なくない。

△同じ天才でも詩人は多く生れながらにして成り、畫家の多くは師承による所がある。四氏もその例に洩れない。即ち栖鳳氏は幸野楳嶺の四條派の筆を采つて畫道に上り、廣業氏は狩野派の小室秀俊より畫家たる素養を得、大觀、觀山の兩氏は東京美術學校に橋本雅邦の天才に撲たるべき運命に生れたのであつた。が四氏とも早く重い傳統の扉を開いて、眼界廣く果しない淸新自由の天地を見、それに憧れつゝ日夜羽翼の備はるのを待つて、遂に奔放自在の飛翔を試むるに至つたやうな互に相似た閱歷を有つてゐる。勿論その肩上に於ける師承の負擔は、栖鳳、廣業の二氏には輕かつた。雅邦は近代の大家であつたから、それを師とした大觀觀山の二氏には重かつた。併しこゝではその重さ輕さの如何に依つて、四氏の藝術を上下するのではない。たとひ楳嶺と秀俊とが雅邦と比肩し難きも、その光背には四條派と狩野派との傳統が燦として輝いて居つた。又栖鳳氏と廣業氏とが容易に出藍の譽を得たとしても、それが今の兩氏に取つては、丁度大觀觀山の兩氏が、同型の樣式圈內でその師雅邦と對比せらるゝ事が迷惑であると同樣ではなからうか。私のこゝで云ふのにそんな意味を加へられては困る。私は唯多くの畫家にはその師承の傳統が恰もメエテルリンクの『タンタジールの死』に見えた鐵の扉のやうに、死力を盡しても排することの出來ないもののやうに思はれてゐるのを、氏等は早くより開き試みて、自由な開濶な天空を眺め、術套を其處に脫却せんとせる勇氣と努力とに富んで居たと云ふまでゞある。

△そして少なくもその天職と信じたる藝術の自由のみには、他に一指をも觸れしめず、それを尊重し、欣求し、憧憬すると同時に、心ゆくまでその淸新なる自由なる藝苑の空氣を呼吸して、膨脹し發展したる自個の特性を觀んとする態度も、また四氏に通じて著しい性質のやうに思はれる。併しこの性質は往々自負自滿偏狹局量ならしむるやうにも思はしむる。概して自個の作品に對する批評を聽き又は讀むに餘り熱心ならざるが如きは、その一例ではなからうか。但し例外は幾らもある。現に文展の初日に廣業氏がその作「瀟湘八景」の前にて、私見を求められたる熱心の如きは、今も感じて居る所である。

△四氏の技巧は圓熟した。奔放自在の妙境に到達した。筆は心のまゝに

讃ひ、心はさながら筆に現はれる。アーチストとして四氏の滿足思ふべしである。加ふるに四氏の名聲の籍甚たる、山川〓村にも知らざる者なく、その一幅の小品にして價百金に上る。生活難の聲一般に高き今日、物質の困難を知らざる四氏の如きは、社會の人として最も幸福なる人であらう。而してかく物質に名聲に技巧に自足自滿の快感を擅にするを得たる爲めか、四氏の心情は常に靜平安穩で春風駘蕩、天下泰平の面影を宿してゐるやうである。所謂近代人に切實な煩悶懊惱の叫聲、不安寂寥の吐息が、四氏の唇頭より漏るゝことがあるであらうか。やれ自然主義とか、やれネオ、クラシジズムとか、やれルソイズムとか、やれオイケンとか、ベルグソンとか、世界の現代思潮は不安の遣瀬ない心境に高鳴をしてゐるが、併し四氏の幸福なる生は、其等の浪音に煩はされぬやうである。この點より云へば四氏は最早所謂近代人と謂はれないかも知れぬ、とまれ四氏は等しく社會に所謂成効したる人である。その成功を憧ふても、心おのづから樂天的となるのは無理もなからう。洒間に於ける氏等の艷冶が、折々新聞又は人より人に傳はるに依つても、一宵の興樂に散じて後なき、氏等が光風霽月的な樂天的作情が髣髴せられぬであらうか。

△廣業氏はまだだが、外の三氏は何れも嘗て西洋へ行き、その文明に接し、その藝術を研究し來つたのであるが、併し三氏共にその思想言行等に西洋の臭味なく、頗る東洋的なる所、廣業氏と同樣である。栖鳳氏には嘗て歸朝早々、洋畫風に描かれた「ローマの廢址」の作があつた。併しその後の栖鳳氏の作は、全然日本的殊に畿内的情趣の流露したものである。栖鳳氏はやはり日本殊に德川以後の畿内の畫伯系の人であるやうに思はれる。大觀氏は故菱田春草と和裝して、米國よりヨーロッパと印度を遊歷し、歸朝後所謂沒線說を主張した。而かもその「流燈」の作は、寧ろ印度アヂャンタア又はエルラの古畫の復興派と目された印度現代の畫伯ボーセの畫風を想起せしめたではないか。そして支那に遊ぶに及んで氏の感想は益々東洋の風物に興味を得、暗示を得て、「楚水の卷」「水國の夜」「五柳先生」「竹林七賢」「瀟湘八景」となつたではないか。氏の東洋的は勿論印度以東の廣さに解さねばならぬが、併し西洋臭からぬ所に氏の特徵が見えるやうである。觀山氏の西洋嫌ひは滯英中英語の使用を勉めなかつたとかの一事に依つても知られやう。今や西洋の文藝が我が上下の趣味に同化されつゝある秋に際し、我が畫界の新派の代表者と見らるゝ四氏の性向趣味態度が、此の如く東洋的であつて、寧ろそのクラシカルな景趣情調に執着してゐるが如きは、頗る異觀として識者の注意を惹くではないか。

△藝術に熱心なるは、また四氏に等しく觀る所である。四氏が博く古畫の名品を涉獵し、その特長を看取して、自個の作品に資せんとする努力は、今時の青年畫家輩の到底企及する所ではない。又四氏共に能く古人の特長を攝取し消化し得る力を有つてゐるが、併しその表現の奈何に至つては、その天分着想技巧の異なると共に異なる結果を示してゐるのは自然である。そしてこの點に於て大觀氏の著しく他の三氏と異なるの

を例外とせば、他の三氏の表現法も着想も概してクラシカルな傾向を共示してゐることが目につく。この點より觀れば、三氏はその性向に於ても趣味に於ても、大觀氏よりはクラシカルであるとも言はれやう。

△栖鳳廣業の兩氏は現に圖畫教育に從事し、觀山大觀氏もまた嘗て東京美術學校の教職に就かれてゐた。故に四氏は教壇より若き畫生に影響を及ぼした所の共通の閲歴を有つてゐるが、併しこれは四氏に取つては偶然の事で、この閲歴から四氏に共通する何等かの性情を看取し難いやうに思ふ。否、却つて現在の如く、廣業氏が東京美術學校を背景とし、栖鳳氏が京都繪畫專門學校を背景とし、觀山氏は横濱の富豪原氏の邸内に、大觀氏は不忍池畔に、各々その境遇を特殊ならしめてゐる方が、各性格に本ついた必然事のやうに思はれて、甚だ我々に面白く思はれる。

△通有性はこの位にして止めやう。もう時間も迫つて來た。これから四氏の人物性格を列記する豫定の實行はむづかしい。それに他に幾人もその方面の事を書く人があると云ふから、他に餘り云ひさうもない四氏の通有性を擧げた、その皮相外(?)の觀察を口實に、さらば！ としやうか。あゝ併し今筆を擱いても、それよりそれと強く閃く四氏の特性の印象は安らかに眠らせさうにもない。と云つても斷片的の印象を、何から書き初めやうか。

△つい先日のこと、私は文展で栖鳳氏に逢つた。

××氏(京都の青年畫家)は面白いものを書きましたね。

エヽ、ゑらう勉强するので、めつきり上手になりました。

本願寺の天人の圖はもう御出來ですか。

熱心にやつて居りますが、何や彼やで、とつともう一向捗りません。

こんな會話を冐頭に、話は長く盡きなかつた。栖鳳氏と話をすると私の心は何時もしつとりと落ついて、何となく悠長になる。京都の青年畫家を心から推奬する先覺者の雅量と温情、そして話が自分の上にかゝると謙遜しつゝ諄々と靜かに穩かに語り出す。そこに私は栖鳳氏の爲人や性情を感じたやうな氣持がする。怜悧で、しとやかで、親しみ易く、而もしつかりと緊つてゐるやうな所に、氏の性格は見えるやうである。粹も甘も御承知な上方の紳士、その代表的人物で氏はあるまいか。氏に接すると丁度練れた鴨河の水が淸くあつさりとした中に、おつとり柔かい懷しみを覺えしむるやうな感じがする。そして此等の性格が氏の作品の上にやがく複雜した特徴となつて現はれてるやうである。氏はまた事物の靜動の機を見るに頗る機敏である。種々の事物に一瞥をくれて、その眞相を捉へるのが得意らしい。それには氏の柔しく輝いてる目が、丁度また適して居るやうである。觀山大觀廣業氏等の目もまたそれ〲特徴を有つてゐるが、氏の目は丁度春の和んだ空に瞬く星のやうに、一種の光を瞬いてゐる。「雨霽」や「あれ夕立に」や「雨」などはかゝる目に映つて生れた作品である。

△君二科ではどれがいゝかい、どうも僕には……

と熱を負びた辭で、竹を割つたやうに、思つたまゝの心を、眞率に、率

直に廣業氏が私に言つてくれたのも、つい兩三日前のことであつた。若し廣業氏の性格はと問はれたら、私は此の一例に躍如として居るではないかと答へたい。栖鳳氏の言(ことば)の奥には熱が潜んで、口唇に柔かに流れ出るが、廣業氏の言葉の端には何時も熱が罩つて、そして顔面に眞面目の筋肉が動く。栖鳳氏に會へば、懐しみを覺えて知らず識らず自分の心が溶け合ひ、廣業氏に向へば張りのある眞率な意氣に我れ知らず釣込まれてしまふ。洋裝の時も、和裝の折も、何時も容儀の整つた士太夫的紳士的の風采の裡に、瀟洒磊落な氣品がほのめく。そして此等の種々の性が「溪四題」「瀟湘八景」その他の作に尤も具體的に現はれて居るやうである。

△誰れかゞ大觀を氣の知れぬ人と云つたさうだが、氏の全性格は勿論そんな簡單な言葉で掩ひ盡さるゝものではない。が、氏、會へば何處となく混沌たる深さと、端倪しがたい所があるやうな氣持がする。鐵拐仙人が空に向つて氣を吐いて居るやうな態度で、少し口を開いて岡倉氏の口吻で、評價の問答的の應對をさるゝ時に、そんな感じをする人が少なくなからう。眞面目なやうな、皮肉のやうな、同情してゐるやうな、しないやうな、洒脱なやうな、熱中してゐるやうな、無頓着なやうな、細心的なやうな氏の態度は、たしかにその性質に常識を以て忖度しがたい複雜したサムシングのあることを思はしむる。春草の理智的な明瞭な輪廓の性格に比べて、エクセントリックな、端倪しがたい其處に大觀氏の眞面目が潜んで居るやうである。そして「山路」にしても「瀟湘八景」にしても、この複雜なサムシングが表はれて居るのではあるまいか。

△觀山氏は寡默の人である。ハア〳〵と何時も丁寧な返辭につゞく二の句がその口より洩れる前に、もう顔の全體が引きしまつて、澄ました態度になつてしまふ。第二の問答も同じ型で終る。何時迄たつても親しみ惡い感じがする。大觀氏は人を前にしても忽ち忘我自由の境に銜を脱した天馬の縱横自在に奔馳して居るのを凝と靜かに見て居るやうな樣子をするが、觀山氏は目を對者に向けて凝つとその者の心を讀まふとするやうに見える。大觀氏に對しては種々話の矢は逸れて當途なく消えてしまふ。觀山氏に向へば話は直ちに行き止まつて、次の話頭を考へてる心の後(あと)からアデユー！の囁きが込みあげて來やしまいか。氏の風丰性情等を知つた人が、氏が瑰麗細巧、裝飾的な「木の間の秋」や「小倉山」や「大原行幸」の作者であるのを、往々不思議がるやうである。が、氏の莊重的な修飾的な、打解けがたい、底のあるやうな、そしてそれを押へつけてゐるやうな、判じ難い心は、氏のアートに依つて、印象さるゝやうである。

△不圖けふヒユーザン會で逢つた、若い洋畫家の姿が浮んで來た。そしてそれが丁度同會で見た未來派の畫のやうに、今書いてゐる四氏々相表裏して、私の心に妙な對照圖を描いた。あゝ私の頭はもう疲れたのだ。こんな腦裏の印象と、四氏の爲人性格とがどの位吻合してゐるであらうか。私は更け行く晩秋の夜半に、何んだかすまん氣がしてならなくなつた。

△日本畫家に就いて

齋藤與里

拜啓お約束の原稿は出來ませんでした。實は私は御指定の四氏に對しては今の處何も書き度い事はないのです。それでお約束の原稿は、私の友人の日本畫家に宛た手紙に仕樣と思つてゐたのでしたがそれも出來ませんでした。

其の友人と云ふのは日本畫家の仲間や、世間一般の間には可也な評判を立てゝゐる男ですけれ共、其の本體は藝術と何の係はりもないのです。それは其の男が藝術家として、先づ何よりも頭腦を惱まさなければならない筈の藝術をさし置いて、名を廣める事や、お得意の旦那を探す事などに日夜其の意を用ひてゐるからです。而して私は其の男が隨分厭なのです。それですから其の男を擧げて、日本畫家と藝術と云ふ樣な題目で書いたら、多少日本畫家の現在に觸れる點も。又全く共通する處も出來ると信じて、それを書ふと思つてゐたのでしたが遂に出來ませんでした。何卒不惡願ひます。

——一〇、一九——

△四人とも四十臺

黑田鵬心

▲四人の事を書くに就いて一寸年齡を調べてみたところ栖鳳の四十九（元治元年）を最老として廣業の四十七（慶應二年）、大觀の四十五（明治元年）から最も若い觀山の四十（明治六年）に至るまで四人とも四十臺である。殊に今一年でも前後すると栖鳳が五十になつたり觀山が卅九だつたりして都合が惡い、大正元年だから丁度四人とも四十臺なのである。

▲二十臺はまだ小供である、三十臺で漸く大人の仲間入はするがまだ小供氣が失せない客氣にはやる時期である——余の如きはまだ小供から大人に入らうとしてゐる位のものだ——四十臺になつて始めて本當の大人となつて分別も漸くついて來る。早く老衰する日本の樣な國ではまづ四十臺が働き盛りで、やゝ熟し、五十臺に入つて圓熟するのである。

▲今これを四人に當てゝ見るのに、觀山は漸く本當の大人となつた許りの時期であるが、氏は廿二歲で美術學校を卒業し直に助敎授に任ぜられた程で早熟であつた。大觀は四十臺の中間、正に大人として分別盛り働き盛りで半ば熟し、廣業は稍々熟し、栖鳳に至つては圓熟に近い。

▲而して此の四人は既に日本畫に於ける一流の大家として目されてゐる。余も實際の腕に伴ふ一流の大家の名は、先づ此の四人に冠せねばならぬと信ずる一人である。春草が生きてゐたら五人となろ。

▲四人の畫風の違ふ事は其の最近の作、廣業、大觀の現に文展に出してゐる「瀟湘八景」、栖鳳の昨年の「雨霽」、觀山の一昨年の「弱法師」を見てもわかるが、四人は畫風のみならず、鄉國、經歷を異にしてゐる。

▲栖鳳は京都の人、料理店に生れたが幼時から繪を好んで十四歲の時橫山滿耕の門人土田英林の敎を受け、十八歲にして幸野楳嶺の門に入つた。

それから大に腕が進んだが畝若が老いたので家事を見、其の暇に繪筆を取つたが、畝若歿するに及んで家事を婿に任せて全力を繪に注ぎ、技益々上達して京都美術學校教論に任ぜられ、別に家塾を開いた。

▲廣業は秋田の人、家老の家に生れ父は戊辰の役に功あり、母は繪を好み、外戚には學者があつた。小學校を出て中學校に進んだが、此時家道衰へ二三年の間は非常に貧苦と戰つた。それから乳母の養ふ所となり、先づ畫を以つて身を立てやうと十六歳の時學校に入つたが學費が多くなつたので翌年之れを廢し、幼時から好な道とて狩野派の小室秀俊の門に入つて繪を學んだ。それからも隨分困苦と戰ひ郡役所の受附や書記なども務めながら繪を描き、廿一年平福穗庵に招かれ上京して其の門に入つた。併し間もなく足尾に赴いて零細の畫料を畜ふる事一年半、再び出京して穗庵が編輯してゐた繪畫叢誌のあとを引受け、それから叢誌の下繪として古畫縮寫に勉勵し、技漸く進んだ。

▲大觀は水戸の人、十一歳にして上京し、湯島小學校に入り、後東京府中學校、東京英語學校等を經て、東京美術學校に入り廿六年同校日本畫科第一期卒業生として世に出て、廿九年京都美術工藝學校教諭となり翌年東京美術學校助教授に任ぜられた。

▲觀山は紀州の人、和歌山藩士にして能面彫刻の名手の子に生れ、幼より畫を好み、十四歳の時上京して雅邦の門に入り、十六歳にして東京美術學校に入り、廿七年日本畫科第二期卒業生として出て、直ちに助教授に任ぜられた。

▲即ち四人の中栖鳳と觀山とは幼時より畫を學び、廣業と大觀とは寧ろ遲くから畫道に入つた。而して栖鳳と廣業とは私塾より出て、大觀と觀山とは美術學校から出た。栖鳳は早くから畫を學んだが美術學校には入らず、大觀は學校に入つたが畫を學んだのは寧ろ遲い、早くから畫を學んでしかも美術學校に入つた觀山は最も順境に育つた畫家である。それに反して遲くから學んでしかも學校に入らず、貧苦と戰つた廣業は最も逆境を經た畫家と云はねばならぬ。而してこれらの境遇は今日の四人の畫風を作るに多少の影響があつた樣に思はれる。

▲明治卅一年東京美術學校に紛擾あり、時の校長岡倉覺三、橋本雅邦等校を去るや、同じく職を奉じてゐた廣業、大觀、觀山相共に袂を聯ねて辭職し、日本美術院を創立した。即ち西の栖鳳を除いた三人は此の時志を同じくして美術院によつたのである。而してこの頃から三氏の作は頻に世の注意を惹きだした。殊に大觀は所謂朦朧派と稱せらるゝ新手法をみた。

▲併し四氏とも未だ大家として許さるゝに至らず、栖鳳は卅三年歐洲に渡航して翌年歸朝して畫風一變し、他の三人は卅四年再び東京美術學校に入り、大觀は卅六年印度に遊び、觀山は同年文部省留學生として歐洲に赴き、卅七年大觀も亦歐洲に赴き、卅八年大觀、觀山共に歸朝した。大觀は印度行で既に畫風を一變したが、歐洲行は又二人の畫風に影響を與へた。而して廣業一人日本に留つて孜々研究し、四人は相並んで腕を上げた。

▲栖鳳は卅五年東京美術院展覽會に「古都の秋」を出し、廣業は同會に「小督局」を、同年の內國勸業博覽會に「横笛訪瀧口入道」を出し、大觀も其の前後に「茶々潤」、「迷子」等を出して何れも世人の注目を惹き、四人とも畫界の大立物となつた。

▲文展に就いては種々の批評もあるが、兎に角始まつて以來名品佳作が之れによりて紹介せられ畫家の名も亦之れによつて揚つた事は事實である。我が四人の畫家が佳作を發表し、名聲頓に高まつたのも亦文展開始以來の事である。即ち其の第一回に於いて栖鳳は「雨霽」、廣業は「大佛開眼」、大觀は「二百十日」、觀山は「木の間の秋」を出品し、「雨霽」と「木の間の秋」とは殊に評判が高かつた。

▲翌年及び翌々年は文展に對立して國畫玉成會が開かれ大觀と觀山とはこの方に佳作を出品したが、栖鳳と廣業とは相不變文展に出品した。

▲而して文展玉成會を通じて四人の代表作を求むれば、栖鳳には「雨霽」「飼はれたる猿と兎」(第二回文展)「あれ夕立に」(第三回文展)、廣業には「大佛開眼」「渓四題」(第三回文展)「夏の一日」(第四回文展)、大觀には「流燈」(第三回文展)「燕山楚水」(第四回文展)「瀟湘八景」(第六回文展)、觀山には「木の間の秋」「大原御幸」(玉成會)「小倉山」(玉成會)「寛障圖」(第四回文展)等がある。

▲今之等の代表作によつて四人の短評を試むるに、其の年齡と經歷とは爭はれないもので四人共に現在の大家であるが、栖鳳と廣業とは寧ろ明治の大家で、大觀と觀山とは明治から大正へかけての過渡期の大家の樣に思はれる。

▲一昨年雅邦遺作展覽會を見た時に、雅邦は要するに德川から明治へかけての過渡期の大家であつて明治の大家と云へないと思つたが、其の意味で栖鳳、廣業は明治の大家であり、大觀、觀山は明治から大正へかけての過渡期の大家である。

▲栖鳳と廣業とにも新し味はある、殊に自然を寫す點に於いては二人とも中々忠實で、必しも典型に囚はれず、縱橫に自己の腕を發揮してゐる。併し此の二人はつひに線の畫家である、形の畫家である。

▲これに反して大觀と觀山とは忠實に自然を見ながら之れを畫にするには變化を加へ、一つは印象的に一つは裝飾的に現はし、しかも二人ともに線の畫家に非ずして色の畫家である。

▲或はこれをあまり大ざつぱの論だと云ふであらう、余もさう思はぬではない。題材、手法ともに一人必ず一つを守つてゐる譯ではないから細く論ずれば色々複雜してゐるにきまつてゐる、余は唯大體を云つた迄である。

▲併し猶一歩進んで云ふ事を許して貰へば四人の內最もクラシカルなのは廣業であらう、「渓四題」に於いて大に新しい試をやつたが、これは根底に古い手法を以つて新しく自然を觀たのであつた、次の「夏の一日」や今年の「瀟湘八景」に至つては益々クラシカルの匂に富み、しかもこゝが廣業の本領かと思はれる。

▲栖鳳は京都の畫家としては寧ろクラシカルの分子に富んでゐるが、其

の手法には中々新しい點があり、自然に對しては固より忠實に、この意味でナチユラリスチックだと云つてもいゝ、尤も極くリファインされたナチユラリズムである。「飼はれた猿と兎」と「あれ夕立に」はこの事を證してゐるではないか。

▲大觀は多くの人の云ふ如くロマンチツクである、「流燈」にしても「燕山楚水」にしても「瀟湘八景」にしても皆さうであるが、余は更らに多少のインプレシヨニズムの分子があると云ひたい。大觀の描く山にしても水にしても唯ロマンチツクと云つたのでは足りない。

▲觀山はカラリストである、四人の内最も色彩に敏感を持つてゐる。「木の間の秋」や「小倉山」は勿論、「大原行幸」に於いてもよく此の長所を發揮してゐる。而してこのカラリストである所がデコラチーヴのものを描くのに適當してゐるのである。

▲此の四十臺の四人が、更らに五十臺の四人となる――人間の最も圓熟すべき時期に入る――時に、果して如何なる畫を描くであらうか。問題となりつゝある日本畫の將來は、實に此の四人の畫家の双肩に負はされてゐるのである。至囑々々。

△私は觀山大觀が好きです

小杉未醒

私は大觀觀山が好きです。只好きなんです。廣業栖鳳に日本畫の方から見ると佳いのだらうが、私は日本畫、西洋畫といふ風に分けて考へ度くない、繪は只繪として考へたい、さうすると大觀觀山がいゝです。

一體日本畫は西洋畫の影響を受けて一時混亂した。寫生力に困つたです。西洋畫には寫生力があるが、日本畫には西洋畫の寫生力みたいなものはない。その無い所に日本畫の佳い所のあるのを、或は眞似たり或は頑固になつたり、宛然丁髷と極端なハイカラに分れたです。日本畫の繪具で西洋畫の眞似をしてる人もある、馬鹿な仕事ですア。

其中で此四人は割合に惑はずにやつてるですね。自分の了見だけではどうしても大觀觀山が好きです。栖鳳廣業の得意な遣り口は了解してますが固有の繪具の使ひ口には了解出來ません。緑青をどう使ふとか群青をどういふ風に使ふとか、器用に不自由な繪具を使ひ分けるのをよいとしてるが、吾々には判りません。

大觀觀山は日本の藝術家として數へらるべき人でせうな、又相當に其繪も殘るものだと思ひます。春草の死んだのはいかにも惜しいですね、生きてれば無論四人が五人になるのでせうけれど。

廣業栖鳳の二人は日本畫を了解してると思ひます、觀山大觀は西洋畫までも了解してます。新しみは此二人が餘計に有つてゐる、さうすれば吾々が此二人を一番に好きと言ふことになるでせう。

大觀と觀山とは大差ありません、要するに年齡の差だけです。洋畫から言へば同じ事です。大觀に沈默重厚、觀山は覇氣滿々と言つたやうな、繪としては觀山の方が佳い、大觀は氣を使つて書くです。廣業ですか？

苦勞をした中々圓滑な社交的の人らしいです。栖鳳は知りません。觀山は滿谷氏と岡田氏をひつくるめたやうな、大觀は中澤氏と吉田氏をひつくるめたやうな人です。

五浦組はミレー一派が巴里のやうな所に居ずにバビルゾンに引込んで佛蘭西の繪の新運動を起したのを眞似たわけですが、五浦と言ふ所は私も行つて見たが荒涼寂寞で、色が乾いてゐて、迚も藝術家が集つて新運動を起す程の所じやありません。それにミレーなどのは肚の底から藝術家の要求としてやつたのですが、五浦組は岡倉さんが牛耳を執つて天下の形勢から割出したことで、割合に効果は舉げなかつた。多くは此方へ歸つて來ました。

私は栖鳳に感心してることがあります、又聞ですが、あの人は餘り描かぬといふことです。畫料は高いから描き相なものだが描かない。描きさへすれば巨萬の富を爲すことも出來るでせうが、中には輪轉機みたいに描く人もありますからね。描く氣になり相當の感興を有たぬとあの人は描かぬ。さういふ所は自分の藝術を賢く扱つてると思ふです、多くは濫作で自分を壞すのですから。古格を守り群青綠青を驅使することなどは巧いです、然しそんなことは日本畫の樂屋内の喝采に止まらないでせうか、甚だ要領を得ませんてした。

△栖鳳廣業觀山大觀の人物

大村西崖

私は觀山と大觀と一所に美術學校に入つたのであるが、大觀の方は美術學校に入る前に中學校を卒業して普通學の素養があつた。英語などは自在に話せた。一寸才子肌の處があつた。あの人のお父さんは地圖を描いた人で、地圖の版權などで生活して居つたらしい。確か神田五軒町かに居つて相應な生活をして居つた。觀山のお父さんは面打ちで、兄さんなども面打ちをやつて居つた。能は近頃はまた流行り出して來たが、御維新後久しく廢れて居つて廿四五年前までは商賣にならなかつた。それで觀山のお父さんも鹿の角とか象牙のやうなもので、輸出向の能面の模造なぞを作つて居つた。家も貧しかつたやうに思ふ。それで中學にも入らず普通學の素養といふものは殆んど觀山になかつた。どういふ譯か知らぬが學校が出來る前に芳崖か雅邦かの門人になつて繪を描いた。そのお蔭で學校に入ることが出來た。それだから學校に入つてからも學課なんかは丸で出來ぬ。試驗の時でも學課の方は自分で出來ない。それで妙な事をして濟まして來た。學校では其頃技術の方に重きを置いて居つたから學科が出來なくても卒業させた。我々は第一期の入學生であつたから、學力も技術も皆非常に違ふ所から、學校では技術によつて試驗して之を二組に分けた。觀山も大觀も私も皆上級になつた。私なども其頃は繪で上級に上げられたのだ。其時分の大觀の繪などはお話にならんで、

今の中學生が水彩畫でも描くやうな具合に泥繪具を塗りこくつた丈けで、丸で繪になつて居らなかつた。それでも他の八九人と共に矢張り上級に行つて、下級に行つたものより半年早く卒業することが出來た。觀山は其時分から大和繪の傾向を持つて居り、大觀は人物畫に熱心であつた。大觀は卒業製作も人物畫であつた。大觀は卒業する時分でも素人が器用に畫く位のもので、之が繪書きになれるかと思はれた。觀山は初めから繪が書けた。然し才は初めから大觀の方が勝つて居つたやうだ。學校を卒業して後岡倉さんのやつて良つた博物館の國寶模寫をやつた。大觀も亦それをやつた。其時分には惡い風があつて、岡倉さんは酒を飲んで盛んに遊ぶ。それを取卷いてワイ／＼飲み廻る連中が岡倉さんの氣に入つて引立てられるといふ風であつた。私のやうに眞面目なものは一向に氣に入られなかつた。それて美術學校は酒を飲みながら美術を談ずるといふやうな連中の結社みたいになつた。觀山はよく飲んだし、大觀も飲めといはるれば飲むので岡倉さんの氣に入り、美術學校の助敎授に採用された。私は其頃京都の美術學校に居つたが、京都に居つても仲立つ見込もなく、又其頃から私が心を注いだお經を讀むことも東京の方が都合がよいので、私も岡倉さんに賴んで矢張り東京の美術學校の助敎授にして貰つた。處が私は酒も飲まず女郎買ひもせぬので、サツパリ岡倉さんの氣に入らずとう／＼岡倉さんと喧嘩をして出て了つた。そして大觀や觀山は依然として岡倉さんを取卷いて居つた。其取卷くといふ事は固より惡い事であるけれども、其間に彼等が岡倉さんの理想を吹き込まれたといふのが、彼等の今日ある所以である。岡倉さんは品行とか人格とかいふ事には一向感心出來ぬ人であるが、手の無いラフアエルとでもいふべき人で、自分が筆を執らぬが、頭腦には藝術の作品がポカ／＼浮いて出て來る人である。元來新らしい頭腦を持つた大觀であるから、岡倉の天品の理想を吹き込まれて、人の思ひ附かぬ繪を書くやうになつた。あれは皆一に岡倉さんの指導によるのである。畢竟岡倉さんは自分に腕が無いから、觀山や大觀をして自分の理想を描かせたのである。それで我々は、長く岡倉さんに離れてゐたなら、二人の畫想が枯渇するでなからうかと疑つてゐたが、然し之は杞憂に過ぎなくて此頃は觀山も大觀も岡倉さんを離れても矢張り立派に一家をなし得るに至つた。岡倉さんはどうも德の缺けた人で、大觀なども何か面白くない事が出來て岡倉さんを離れた。然し多年叩き込まれた岡倉の理想は最早や二人に宿して居るやうである。それで大觀は何時でも人の書かない妙なものを描く。つひ此頃まで大觀には繪が描けない、あれは素人繪書きだとやうに思つてゐたが、世間では、あの變つた描き方が大變氣に入つて、山だか水だか雲だか分らぬやうなものが、案外に人氣を博して、もう堂々たる大家になつて了つた。私などには餘りよいと思はれぬが、山だか水だか雲だか分らぬ所に一種の面白味はあるやうであるが、人物は丸で成つて居らぬ。近頃は形を度外視して感じを書くといふ事が大變に流行つて居る。其流行と一致する所からも歡迎さるるのであらう。形に律せられないといふて不思議な形の人物が出來て居るが、ハイカラな眼を捨てゝ本當に見た

ならば、あゝいふ人物は褒める譯に行くまいと思ふ。

觀山は之に反して古代の繪卷物を研究し、大觀のやうに變挺なものは決して書かない。近頃は餘り此人の作を見ないが、「魔障」の圖などは古代の繪卷物の筆法で書いて、大和繪のよい所を咀嚼して己れの筆となして居る。僕等は今でも大觀の繪が百世の後非常な聲價を保つかを疑ふのである。然し懸崖に瀧がかゝつたとか、海岸の松が朝靄に霞んだとかいふものを書かせては天下一品と稱せざるを得ぬ事がある。僕は嘗てあの人のやうな繪を朦朧體と名つけて、朦朧體の稱大いに世に行はれ世間一般に美術院派を呼んで朦朧派といつた事もあるが、其頃の人は皆凋落して、本家本元の大觀一人が踏み留つて居る丈けだ。懸崖に瀧とか海岸の松とかいふのは實に巧いもので大觀の眞の價であるが、さういふものに感心した人が、變挺な人物畫までも面白いやうに素人眼に映るのぢやなからうかと思ふ。觀山の繪は此頃餘り見ないから何とも批評することが出來ぬ。

序に一寸話したいと思ふのは彼等が岡倉を取卷いた時代の惡習が天性となつて、大觀などはよく酒を飮む。西郷孤月が不遇に倒れ、菱田春草が夭折したのも皆岡倉の遺した餘毒である。岡倉は自分の理想を若手に吹き込んで大家を拵へた功は沒すべからざるものであるが、有望の若手が其餘毒を受けて倒れたのも亦忘るべからざる彼の罪である。大觀の如きも酒をやめて長生したならで、まだ／＼前途があらうと思ふ。尤も天才には一種病的又は狂的の所があるものだから、恰度李白のやうに大觀の天才が自然に酒を要求するのかも知れぬ。隨つて酒を廢れば畫が書けなくなるといふ心配もなきにしもあらずであるが、我々孤月の如き友人を酒の上から失つた事を思へば、大觀にも酒をやめて貰ひたいと思ふ。

廣業とは私は餘り深く交際つた事がない。然し廣業が「廣業畫譜」を作る時に私は其傳記を書いた事があるので、其經歴は大概知つて居る。秋田の佐竹藩中でも非常によい身分の家柄であつたが、御維新以後微禄して貧苦の中に長なつた。然し家柄のよいといふ事が彼を激勵し、國の畫工に學び、東陽堂に入つて繪畫叢誌、風俗畫報の挿繪を長年やつたから、廣業は何でも描けるのである。凡そ天下に何でも描ける人といつたら彼に及ぶものは一人もあるまい。其中に岡倉好きの若手が組織した青年繪畫協會に入つてから追々世間に知らるゝやうになつた。あの人の今の畫風は文晁の再來とでもいふべく、支那でいへば王石谷のやうな人で、諸流を集めて自分の藥籠の中に入れ、別に一派を描き出したといふ形である。實に何でもよく達者に描く、大家としては恥しくない人である。私は生立ち時分からの友達でないからよく知らないが、この人も豪放な遊びなどをよくやるやうである。之は流行る畫家にはよくあることで、別に尤めるほどの事でもない、却て其盛なる證據といつてもよい。

栖鳳とは、京都市美術學校で三年の間仝僚として交際つた。あれは幸野楳嶺門下の四天王の一人で、其中でも腕達者な事と、人物の氣骨のある事では一番勝れて居つた。初め楳嶺の通りの繪を書き、其後段々老熟して來て、圓山派の先輩の繪よりは寧ろ蕪村が氣に入つたものと見える。四條派に蕪村を混ぜて一流を開いたのが栖鳳である。恰度吳春が蕪村と

應擧を合せて四條派を書き出したと全じやうであるが、栖鳳の方が呉春よりもずんと面白い。腕もずつと上だ。今日の栖鳳は蕪村に續く人で、或は蕪村の壘を摩するといつてもよい。そして圓山派の寫生の圓熟した所があるからなか／＼面白い。人物は餘り饒舌らず沈着にして濟まして居る。世間の毀譽に頓着せぬやうに見える人だ。時に俳諧をやる。其俳諧はなか／＼氣骨のある句が多い。今ぢや京都畫壇第一等の人で、又東京の大家に比べても矢張り第一位を占めるでせう。栖鳳の繪は百歳の後も聲價を保つことが疑ひない。廣業も亦然りである。觀山の繪は近頃餘り見ないから分らぬが、大觀は疑問である。然し流行といふ事は多數を意味するから、大觀が流行つて、澤山書くことになれば、大家として後に保存せらるゝことになるから、數の上からいつても、矢張り後に傳はることになるかも知れない。先づ此位で御免を蒙りたい。

△廣業と大觀の瀟湘八景

石井柏亭

栖鳳觀山大觀廣業四大家を評論して呉れと云ふことであつたが、私は二年間も留守にして居たので、栖鳳觀山の作を久しく見ない。幸に大觀廣業の二人は今度の文部の展覽會に揃つて瀟湘八景を出して居るので好都合だと思ふから、たゞ一寸此二人に就いて何か云ふことにした。

廣業の今秋の出品は瀟湘八景の內五圖だけて横物の墨畫である。さうして私は前の『溪四題』や『夏の一日』などよりも今度の方に敬服した。今度の畫は一見した處非常に古風である、けれども決して陳套と云ふことは出來まいと思ふ。國粹保存主義美術協會主義の第一科の方に却つて之れ位古典的な堅固なものは少いから可笑しい。一體廣業はもとから明畫傾向の人である。狩野の門から出ては居るが殆んど獨習的の人で、各派を斟酌し、中頃雅邦の影響を受けたと思ふ。さうして或時は其雅邦の感化が害をなして居ると思ふことがあつた。今度の畫に雅邦臭味の脫けて居るのが私を引寄せた一原因かも知れない。

文部省の展覽會の日本畫部がたゞ廣い屏風で押し合つて居る間に此落着いた日本室向きの掛軸を見ることが先づ愉快である。『洞庭秋月』『遠浦歸帆』と云ひ『江天暮雪』と云ひ、皆愼重に一筆苟もしてないのみならず、傳統を尊重すると同時に或新意の入つて居る處がいゝ。これに比較すると傍にある川合玉堂の『潮』と云ふ屏風などは氣の毒な程迷つて居る。

大觀の瀟湘八景も亦場中傑作の一つである。大觀は奇拳と無器用とを特色とする様に思はれて居たが、此頃では技巧が熟達して少しも無器用と云ふ處はない様になつた。私は大觀其人と相識るものではないが作畫に徵すると却つて仲々才の利く人だと思ふ。此前に見た『楚水の春』あれなどにも才が溢れて居たし、今度の畫にして見ても亦才氣橫溢の感がある。たゞ才に任せて技巧の上滑りに陷らない處が此人の美點である。

京都の畫は由來單調になり勝ちだ。一しきり無聲會の感化からだが水彩畫の出來損ひのやうなものが續出したかと思ふと、春草の『落葉』以來

裝飾畫風の風靡する處となつて、今秋の展覽會などは京都派悉く裝飾畫となつたかの觀がある。日本畫家の裝飾畫風に傾くのは最も恰悧な逃げ場である由を前にも曰つて置いたと思ふが、京都のはあまりに形式的友禪模樣的に陷つて面白くない。

大觀の瀟湘八景も亦裝飾畫風ではある、けれども京都派のそれとは非常の懸隔がある。大觀のは裝飾的であると同時に自然の情趣を印象派的に捕捉して居るので、其處に活氣もあり趣味もある。八景のうち『洞庭秋月』『漁村返照』『瀟湘夜雨』等は特に私の好む處である。

△栖鳳、觀山、廣業、大觀

河野桐谷

(一)

◎——「だみ蔽柑子などいへる物は我にも生へず」と故人が道破した、その奇麗な京都の土から產れたものが栖鳳氏の藝術である。過去の歷史と優美な土地の感化が一團體中に醞釀されて、繪畫の外的形式——色彩と形似に對する稀なる創造批判の力となつたものが栖鳳氏の藝術である。四條丸山など云ふ一二の畫統で包み兼ねる大きな力が其處に潛む。我等は千年の歲月を經て訓練され藝術の自らなる力に吸引されて、我等の感覺に最も好適なる彼の畫を崇めるは當然である。

◎私は一度京都に遊んで栖鳳氏を訪ふた。上京油小路の靜かな町通に面して、坂塀潜門の瀟洒な一構、塵埃一つ留めない清淨閑雅な前栽の趣、折から初秋の風が檐先の須磨簾に通て、吊瓶形の鉢に植へた深紅の朝顏の一輪が、裝飾氣のない一室に、水際立つた快よい色彩を點睛して居る。洗練都雅、夫等の形容詞の外に、一味の機智を湛へた此客間の印象は、先づ私をして、主人畫伯の平生を偲ばしめた。そして愈々畫伯との應對が始まるに及んで此第一印象は現實に確められたのである。

畫伯は、始終俯き勝ちに。極めて低い調子で。諄々として物語られた。我々後輩に對して務めて謙讓溫和な態度に出やうとするも。寧ろ律呂に外れた大聲は、千年の夢を孕む古都の空氣を擾亂す恐ある樣に眞しやかに物語られたが、談話其物には敏感に伴ふ機智の光が折々メスの樣に閃めいた。話の要旨は大體に保守的だけれど、新人の諍を裏切する鋭利な觀察が其底に潛むとは思はれたのである。

◎雖然、斯る敏感、斯る觀察が、西京てふ過去文化の雰圍氣中にのみ分散されるのは、氏の爲めに幸か不幸か?、換言すれば、那程の敏感が夫を裏書する深い人世味なしに、單なる敏感として色彩形似の外的完成にのみ向けられるのは斯人として果して憾なからうか。私は此點に多少の疑なき能はぬ。假令ば「アレタ立に」の感覺美が、單に筆先の器用として享受されるのは藝術家たる栖鳳氏に決して名譽の報酬ではあるまい。而も氏の製作が常にあの範疇を出ぬ場合には——「飼はれたる猿と兎」は其一反例かも知れぬが——氏は遂に新代の藝術家として其深い內的傾向に觸れたとは云へなくなる。西洋の中世主義も。尙古主義も一度は其近代

人たる內觀を通して來た所に意義ある樣な現象が、不幸にして氏等一流の藝術には適用出來なくなる。我等は決して感覺の藝術を否定しない、併し夫は一度或る個人性のを通過した場合にのみ云ふ事である。感覺を感覺としてのみ取扱ふは最早や自覺ある新人の爲し得ぬ業ではないか。

(二)

◎栖鳳氏が都會人なる如く、觀山氏も都會人である。併し氏は山紫水明の京都に生れないで、神田上水で產湯を使ふを誇とする江戸に生れたが。氏の藝術には寸毫も彼の如き鄕土的色彩はない。そして何時も展覽會場で見かける殿樣然たる氏の態度風采には。瀟洒と意氣を悅ぶ江戸ッ子の面影もない。栖鳳氏に江戸辯を使はせれば、江戸ッ子かとも思はれやう。仙齋平に五ッ紋の我が觀山君は到底べらんめえの眞趣を解する人でないらしい。

◎べらんめえの眞趣を解すると解せぬとは、藝術家たる氏の位置に何の關係もないけれども。之と關聯した都會人特有の銳敏な感覺は氏の製作からは發見出來ぬ。氏の裝飾畫家としての成効は第一回文展の「木の間の秋」、二葉會の「大原行幸」以來滿天下の認める所だけれども、氏は寧ろ之を天稟よりも强學に得ては居ぬだらうか?

氏の製作を通じて何時も私の感ずる事は、其營々として勉めた完成味の跡である。而し夫は滿幅に行屆いた知力的の努力の痕跡で、旺逸した感興の湧出る跡でもなく。一筆一刷毛に充實した銳敏な感覺でもない。同じ裝飾的と云つても、結城素明氏の裝飾畫には、氏の著るしい個性があの富麗な色彩と大まかな描線に現はれて居るに反して、觀山氏のは全然裝飾的たらしめんが爲めに裝飾化して居る氣味がある。私の記憶に殘る氏の製作の中では、「大原行幸」が最大の興味を有て居るけれども。其すら半以上を夫の物語の伴ふ美はしい聯想と、其土地の曾遊の追憶とに奪はれるのである。氏は美術院の第一回展覽會に、大觀の屈原に對すべき理想畫「闍維」を描いたが、其人物の描法なぞ微弱なる雅邦風で、前者の「屈原」が陰慘悽溢の一特色を出したに比すべくもない。最近の「魔障圖」は其技巧をこそ取れ、作者の狙つた內的價値は殆んで零であつた。斯くて氏の理想畫家たる一面は甚だ稀薄だと云はなければならぬ。

◎けれども氏が古畫の眞髓を得て之を新らしい構圖に化する力は獨得である。「小倉山」の樣に濃厚華麗な色彩を不調和なしに使用し得る技倆も獨得だけれど。强い個性が背後に潛まぬ純感覺的傾向は、近代人の內的要求と殆んど沒交涉なる事、栖鳳氏の場合と少しも變りがない。

(三)

「瀟四題」と寺崎廣業氏――

私は其以前の廣業氏を餘り認めたくないし、其以後をも認めたくない。其僻私は氏の作品展覽會を忠實に硏究した一人である。美術院開會以後の氏の製作に一通りの理解を有つ事寧ろ栖鳳觀山兩氏に對するよりも勝て居る程である。第一回(美術院)の「後赤壁」に始まり中頃の「月光燈影」三十六年の「秋山」に至る幾多の佳作は何れも當時の混沌たる畫界には記念すべき作品だけれども、其凡てを貫く特色は何だつたらうか。

日はく折衷漸進。唯た夫のみなのを憚らず思ふ一人である。

◎或は表現法の折衷的なのを、表現內容の新奇に依つて辯護する論者もあろうけれど、夫は毫も徹底せぬ見方である。況して廣業氏の場合には夫すら許される餘地が無いから。我等は只其折衷されたる技巧の善惡に就て僅かの批判を下すにすぎない。而して美術院派が世の冷罵の標的となりつゝある間にも、氏と玉堂氏許りは、世の所謂鑑賞家から猶愛顧を受けつゝあつた一事は、氏が過去の傾向を遺憾なく語て居るのである。

◎氏が居常酒に徒て興到れば筆を遣るのは古來東洋畫家によくある一特質である。只此特質は最早や我等には餘りに粗漫に餘りに誇張である。アブサントに醉ふて巴里の魔窟をさまやうマルラメ、ボードレールの心理とは、全く質を異にした只の泥醉である以上。昔の傳紀者の様に墨痕淋漓なぞと大まかな賛辭はして居られないのである。

反對に氏の描線は寧ろ謹格である。所謂墨を惜んで骨力を重ずる方である。宗元、狩野の力强い線描を振翳して學習未熟の若輩を喝破し得る當代畫界の第一人者である。

◎斯の如き廣業氏が「溪四題」を描いた時。私の前には只驚嘆があるのみであつた。見よ其構圖は全く淸新である。其描法は從來氏の剛い線に慣れた我等に全く目新らしい米點や皴法である。嗟美の聲が四方に起つたも亦偶然ではないが、其最大長處は、對境と筆者の氣分とがピッタリ一致した希有なる瞬間の結果にある。當時邦畫の極致の様に批評家が指摘した客觀的寫實の說は實は廣業氏其人の個性に最も適した畫風と云ふにすぎないのではなからうか。

尤も今から見れば、氏の採入れた南畫の自然描寫は、明淸時代の傑作には往々發見されるものだけれども、狩野と四條と丸山と南畫と云へばツクネ芋式計りで持切て居た從來の畫界には全く一新福音だつたに違いはない。現に其の影響は此年の文展邊にも見られるのである。

◎然るに、對境と主觀とがピタリと一致する斯の多幸な瞬間は、其後の廣業氏には再び來らなかつた樣である。そして其後の文展に現はれた氏は又元の優秀な技巧家になり終つて構圖の自然と淸新を求める僅かな努力の外は何等描法上の新意を見ぬのである。殊に本年の文展出品の或者の如きは、藝術的良心の墮落に伴ふ局部的寫實の弊にすら陷て居る。謂ふに文展と骨董商と無識なる紳士紳商とは三つ輪になつて物質的成功の火焰中に氏等二三の現代大家を投じ去りはすまいか。是我が醉廣業の爲めに最も危ぶむ所のものである。

（四）

◎幸に語の非禮なるを許されゝば私は、蓬頭垢面の大觀氏を、しらふの狂氣とでも云て見たい。そして此の素地の狂氣の大觀君と、酒中の仙たる廣業君とが、先年相携へて蜀山楚水に放吟した跡を一篇の漫畫にでも書いて見たい。恐らく是程後の繪畫史家に興味を以て迎へらるゝものはないであらう!!!

併し此諧謔には尠からぬ眞理が含まれて居る。醒めたる大觀の內心の苦悶憂悶、其動いて止まざる藝術的憧憬と、醉ふたる廣業の怡々自得の

値とは、現代畫界の横斷面を示すべき好個の對照となりはすまいか。

私は或雜誌で、春草歿後の邦畫界を師ゆる新人は獨り大觀氏あるのみと斷言した。世間は恐らく夫を一個の獨斷とも見るであらうが、私は此機を利用して稍細かに其理由を開陳して見たい。

◎大觀氏は强弱の二面を有するロマンチストである。其强い一面が表はれたのは、「屈原」を描き「萊草」を描いて邦畫の可能性に多大の衝殺を與へた初期美術院の時代だつた。時恰も我思想界のスツルーム、ウンド、ドランク時代に際して氏の出現は丁度チエリユール、ドラクロワの佛蘭西畫界に於ける夫に均しかつたが、何事にも深い根底のない我思想界は、ロマンチズムと一所に印象主義寫實主義をも迎へたる有様で、氏の强烈の傾向は全く一時のものに[illegible]た。

併し氏等の憧憬的氣分の表現方法にと創められた所謂沒線描法に、漸次自然描寫の一新法として研究が重ねられて、寫實的ならぬ邦畫に色彩光線の科學的要素を加ふる唯一の源泉となつたのである。

大觀氏の狂熱が斯くて次第に熱心な自然研究に推移して行く間に、時代精神の推移は漸次に彼を弱いロマンチストとに變へて行つた。只氏と春草氏には新藝術に對する不斷の憧憬がある。一切の舊型を破て完全に自己を語る或るメデイユムを得る迄は、如何なる世間の罵倒迫害をも意とせぬ勇猛精進がある。勿論線か色かは彼等の間に去就を決し兼ねる一大問題だつたに違いない。恐らく今日猶完全に解決を見ぬ根本問題に違いないが、當時の二氏は頑として色を主張した。

只如何に二氏が色的沒骨を主張して光や空氣を描かうとしても、元來氏等は己を虛して大自然に仕ふる事夫のルーソーの後期に於ける樣な人達ではない。從て當時作られた風景畫は矢張題材等で氏等の主觀的傾向を滿足させるものが多く、到底西洋の印象主義の畫家が色と光の興味に全く題材を忘れるとは趣を異にして居た、のみならず、色的沒骨其物からして、主義を違した一種のgebrochenの色は塗れるけれどもprismicの色彩換言すれば飽和の極度に達した原色を用いて科學的に光と色とを出す事は不可能なのである——斯る科學的方法の是非は別として——要するに氏等が一時陷つた極端な洋畫模倣は時代の風潮に誤まられた一時の悪傾向であつた。宜なる哉賢明なる春草は其後次第に之を棄てゝ、かの代々木時代に於けるが如き一新境を開いたのである。

◎雖然、私の大觀氏に期待する所は、其動いて止まざる藝術的憧憬と近代的氣分とにある。氏には勿論觀山の精博もなく廣業の骨氣もあるまい。野武士に似た氏に栖鳳の都會的教養と完成した趣味の無いは當然乍ら夫等は氏の全人格的藝術の前に何等の價値なきものである。一個の「流燈」は氏が弱きロマンチストとしての憧憬的な氣分を遺憾なく發揮しつゝ「アレ夕立」よりも「木の間の秋」よりも將た「溪四題」よりも、我等の心胸にフアミリアなる顫動を與へて吳れた。しかも其感銘が全く「流燈」てふ文學的畫題を離れた。色彩形似の繪畫的要素、氏が苦心の結果なる新技巧から生れた事は。私の推稱をして愈々根據あらしむるのである。

併に脆ろいロマンチストの一面に現實の逃避があり歡樂の憧れがあり

更らに疲れた超脱があるのは寧ろ當然である。積極消極の二の頹廢的氣分は之から生れ出る。吾が大觀氏も亦此方面に奔らぬであらうか。私は之に對へて去て今々展覽會出品の「竹林七賢」に於ける或る顔面表情を見よと云ふ。去年の「山路」の馬士の顔、今年の「瀟湘八景」の或る點景人物の顔を注意せよと云ふ。「山路」には自然描法に一新路を開かうとする努力があると共に、一種の超脱に趣く氣分の推移が窺はれた。「竹林七賢」には更らに著しい頹廢的氣分が仄見へ、「瀟湘八景」は描法として昔日の傾向に復歸する樣だけれども、氣分の清新と獨得とは氏の健在を遺憾なく語て居る。

摸倣と折衷と退嬰の計に日も是足らぬ邦畫界の大家小家は、少しく案地の狂人となる修養が必要ではあるまいか？（一、十、一七）

△淺草の球乘の如し

津田青楓

一體今日の日本畫は淺草の球乘か或は一種の輕業の樣ぢやありませんか。

仕損じは幾頂にも御容謝ヤー、と云ふ掛聲が唯無いだけぢやありませんか。

そして藝當が旨まければ旨い程觀客が手に汗を握るぢやありませんか。

其の藝當の旨ひのは栖鳳が一番ぢやありませんか。

それから廣業、觀山、大觀と云ふ順序ぢやありませんか。

栖鳳の軸物が一幅何百圓とか何千圓とか云ふ時價を何 迄も保つてゐると云ふのは栖鳳の藝當が旨ひばかりでしよか。

一番六つかしいそして一番危險な世渡と云ふ綱を渡ると云ふ所に獨特な天才を發揮してゐると云ふ事が彼の人氣を集めてゐる最大の原因ぢやないでしようか。

而し球乘や輕業が藝術ぢやない事は分り切つた事でしよう。

而し私ても藝術と云ふ事を切はなして仕舞つて單なる球乘の觀客と成つたら栖鳳の技巧の旨いのには拍手するにきまつてゐます。

△廣業と大觀

澤村專太郎

『瀟湘八景』を同時に二人が畫いた、而して夫れを展覽會の或室に列べて置いた、僅に是れだけの事實から廣業と云ひ大觀と云ふ文字が幾つも幾つも新聞や雜誌の上に讀まれる、と考へて來れば、此二人者の有する大きな何物かゞ重く強く人の頭に響かずには居られまい。『廣業』と『大觀』といふ二個の名詞をならべて考へると、孰らが偉いか、孰らが巧いかと云ふやうな、てふど小供が角力の番附を擴げた時のやうな、好奇的な疑問が起る。けれども夫れは自分の知る範圍以外の事である。

では孰らが好きだと問はれると、實は作品だけなら廣業の作も大觀の作も、兩方共に嫌いたと云ふより外はない。勿論作品の巧拙から云へば廣業でなければ畫けないと想ふ程巧い點があり、大觀でなければ達せられないと考へらるゝ程面白き點が夫々ある。けれども玆に予の好惡と云ふのは、そんな理屈めいた意味ではない積であるが、若し強いて何等か理由を求めるならば、今迄見た作品が未だ未だ此二人の達すべく期待してゐる點に達してゐない。即ち予の兩氏に對する大なる期待と兩氏の現在迄の作品との間に大なる空隙がある。此空隙が自分には目立つて嫌な感情が起るのであらう。若し今秋の『瀟湘八景』だけに就いて露骨に云ふならば、大觀の作には技巧上太だ不器用な點がある、此不器用な技巧が却つて其作品に底光りを與へて一種の飄逸(エクセントリツク)な情調(ムード)を畫面に投込むに適合せしめた觀がある。若し此不器用なる技巧の下に大觀が立たなかつたならば、此畫が飄逸な情調を約束するが如き陰謀を有するだけ、夫だけ淺浮に流れて到底見るに堪へなかつたかも知れない。又かの作品が更に不器用に畫かれたならば、予は此作品が一層強き光を放つたに相異なからうと信ずる。大觀が『迷兒』『釋迦父に逢ふ』『流燈』などを作つて印度の近代畫風の感化を受けたと稱せられた頃に於て、營々として開拓した領域中には多量の技巧が含まれてゐた。此技巧の習練は却つて動もすれば大觀を危地に誘はんとするものである。昨秋の『山路』は毫も技巧に屈託せず自己を忠實に表現せんとする熱情に於て觀者に多大の興味と尊敬とを拂はしめたのであるが、今秋の作品には包み切れなかつた技巧が密かに其背後から手を伸ばしてゐるのである。

此點に於て大觀の『瀟湘八景』は更に一歩深く踏込む事を妨げられてゐる。若し平易な語を以てするならば、底の知れざる馬鹿らしさが無遠慮に發揮せられなかつた事に於て、予は氏の藝術の茫漠たる領域に漂泊しながら何時の間にか自分の歸路を忘れて了ふやうな味を得なかつたのである。夫れが爲に廣かるべき土、深かるべき海が、自ら限定せられ壓縮せられて、遂に畫面と對立してゐる事は自己の興味を蔑視し傷害する條件なるが如く思はしめた。是は寧ろ不器用であるべく作られた天才が器用な手を不調和に伸ばした結果ではあるまいか。一昨年の『楚水の卷』に於ては氏にとりて確かに矛盾した希望が齎纏つてゐた。固より作家として自己の開拓せる技巧を流露したいと云ふ熱情を有するは當然の事なるが如きも、氏にとりては其處に悲しき矛盾がある。畢竟此技巧を褒み自己の世界を求める爲に右に往き左に進み而も何れにも滿足の境域を發見せない、と云ふ點が氏の藝術をして意義あらしめ倘からしめて居るのである。かの『楚水の卷』に見たる技巧は他の作家に比ぶれば實は作家の信じた程誇るべき要素を有せなかつた。『瀟湘八景』は明かに其作法に於て『楚水の卷』を一轉せるものなれども、其企圖に於ては全然相反せるものと考へざるを得ぬのである。

或は廣業の技巧を大觀に附與したならば理想に近づくだらうと云ふ人がある。けれども予は之には同意する事の出來ない者である。廣業の技巧を若し大觀に與へたならば、大觀は鋭利な此武器の爲に自滅を招く恐

れがあるからである。少くとも予は是程廣業の技巧を重んじたい。氏の閱歷を姑く措き『昭君怨』『蓮如上人眞筠御所に謁す』『後赤壁』『櫻、柳』『后德』などの製作を見た同じ眼が『溪四題』を見『夏の一日』を見、今また『瀟湘八景』を見る事は殆ど其過程として理路を一步も違ざかれるの感に堪へぬ。然し是れが氏の製作をして聲名あらしむる所以であらう左に行かんとすれば左、右に行かんとすれば右、殆ど往くとして可ならざる無き概がある。『瀟湘八景』の如きも實は此多面的なる手腕の一個の發露に外ならぬのである。若し此『瀟湘八景』を中心として考ふれば、是は技巧の過重に依て觀者を壓せんとするが如く、一方に於て作者の內部生活は此の過重なる技巧の提供に制せられて其表現を妨げられてゐると云ふの外はない。『溪四題』『夏の一日』の作に於ては其技巧の光が彎屈したる內容に依て分明に其所在を證明した。同時に毫も外形の破綻を見ずに內部の展開を示したが、『瀟湘八景』は形式の整理の爲に內部生活の流露を犧牲に供したと見なければならぬ。是れ此作に對する予が非難の中心點である。次に技巧に於て多大の能力ある作家は動もすれば銳利なる其手を無意識に誇張する、是れ藝術の作品上に現はるゝ『僻(くせ)』の一種として爆裂の弊を釀すものであるが、此意味に於ける誇張は氏の舊時に於ける人物畫に於て屢々認めた所である。固より『瀟湘八景』にありては此種の厭ふべき弊はないが、却つて其銳利な筆端が畫の緊縮を助長した事を認めなければならぬ。廣業の技巧は疎漫な製作に滿足するを許さない。何處までも行詰かしめんとする、此點に長所はあるが、同時に短所も伏在する。此種の傾向は寧ろ略筆的なる効果に遠ざからしむるものがある。從つて若し廣業が大觀の試みたると同一の方向を取つたならば果して大觀と同樣なる深度を保ち得たか何らかは疑問である。

予の信ずる所では『類』の中に沒して了ふ事は藝術として尙ぶべき事ではない。近代の繪畫は一步宛『類』を破り『型』を崩して其處に自己を中心とした、自己だけが浮出てたやうな輪廓を見せやうとする事に近づいてゐる。技巧に多量の經驗と力量とを有せる人は慥かに此方面に於ては有利な地步に立てるがやうで、而かも實は極めて不利な點が多いのである。何故かと云ふに、此種の作家は技巧に關して與へられた力量を知らず識らず浪費して夫れが惹き起す所の苦き結果を顧慮する餘地がない、是れ彼れに對して自然に與へられた悲痛な制裁であるからだ。廣業はてふど夫れの餘り多くを享けて居る。古土佐に向つて大手を振つて步む事の出來る彼れが明淸畫の路を辿つても周文一流の中に踏込んでも圓山四條を訪れても戶惑せずにすたすた行く丈の手際は廣業の特權である。かくて廣業は無人の境を行くが如く技巧の世界を闊步してゐた。けれども廣業の作品には往々自己と技巧との中間に貧弱な間隙を發見せしむる。是は技巧が一步も二步も前へ走つて自己を取殘して行つた痕迹である。其眩しい程烈しい速度の技巧に吾々が打たれてゐる間は少しもそんな不安を感ぜないけれども、若し行過ぎた事を見送るだけの餘裕があるならば、其空隙は直ぐに眼に立つ。假令目に立たなくとも、若し廣業が自分で夫れと知つたならば、予が之を不可とする事も無論諒とするに相異ない。

予は此點に於て廣業を考へながら特に廣業を批評したくない、寧ろ近時の展覽會の作品總べてを非難したいのである。

技巧に才力を有する作家が自己の輪郭を刻み上げる時には往々漣波の如く砂底の動搖を基本としてゐない。夫れ故に此種の作家には深刻の表出を缺く。偶〻深刻の表出なるが如く思はるゝ要素と雖もそは却つて深刻を傷害する成分たるに過ぎない事を發見する。之れに反して自己の藝術的内部生活に忠實なる作家は思はず識らず深刻となる。強いて大觀の所長を認めやうとすれば此點である。大觀に似た近世の作家を求めても無論適當なものは無いが、若し大觀の概念を明かにする爲に、特に予に誇張的な稍不穩當な表出が許さるゝならば蕭白である。予の信ずる所に於ては蕭白程不器用な作家を近世に見出だす事は出來ない。けれども彼れ程剛情に自己の内部生活を守つてゐた者は恐らくあるまい。また彼れ程不器用な割合に後世に知られてゐる作家も勿論尠いのである。されど蕭白には明確な路がその藝術的生涯を一貫してゐる。素より大觀には蕭白の奇矯と激越の調とを發見する事が出來ないが、其代りに飄逸な情調を有してゐる。此點に於ては寧ろ守景に似てゐるが、蕭白に幸運な閲歴を與へ、新時代の藝術的傾向を了知せしめたならば、少くとも大觀の進んだ路の或者を精神的に歩ゆんだであらう。大觀の技巧を忘れんとする近時の傾向に就て特に然るを覺ゆる。大觀と蕭白とを比べたと同樣の意味で廣業の夫れを求むるならば文晁である。彼は南畫は勿論、土佐繪を試み圓山を學び西洋畫を研究し、其技巧に於ては殆んど其何れにも成功せんとしてゐる。此點に於て廣業の所長が能く一致してゐるのである。何れにするも予は此二個の名詞を既製品とする事には不同意である。若し此二者を既製品とするならば、予の考ふる二者の未來の影（フユーチユアイメーヂ）と二者自體との間に頗る大なる空隙の在る事を認めなければならぬのである。

△皆さんが好きです

中澤弘光

私は皆さんが好きです。お描きになつたものゝ中では大觀さんの「流燈」や支那からのお土産などは好きなものゝ中です。觀山さんの「大原御幸」や「窺隙圖」は好きです。今年は觀山栖鳳の二人が出してらつしやらないので寂しいです。兩大關ですものね。一昨年でしたか皆さんが揃つてお出しになつた時分のが一番可かつたやうです。それに菱田さんの「猫」もありましたからね。

栖鳳さんは筆の達者な人で、始めの方の繪はいゝと思ひますが、去年の霧か雨のやうなものはどうも判りません。大觀さんのやうな遣り方は——飄逸とでも言ふのでせうか——面白いには面白いけれど一層裝飾になるものでせうかね。

一體近頃のは大分あれですね。今の處では日本畫の方が面白いかも知らぬが西洋畫は未成品といふのだから眞面目に研究してゆけば隨分これから變化してゆかないにも限りませんね。日本畫は古金屛風に人一人

暈けるとか、全體の調子を色々に弱めて目障りにさへならねばよく見えるといふのでは西洋畫の方が寧ろ先きの變化が樂しみだらうと思ひますがどうですかね。

西洋畫は塗ると言はれても仕方はないが日本畫は殊に描かないと不可ませんね、筆が見えてないと面白味が少い。全體の色をボーッと薄くして黄色くしたりなんかするのは狹い遣り方だと思ひます。今年の「夢殿」なども一寸觀るといゝ感じですが狹いです。そこへゆくと木島櫻谷の「鹿」などはよかつた。強い色でいゝ心持を出すのがいゝので狹い遣り方になつて行つては先きの進歩はどうですかね。それから岩繪具などを平に一面に延しで模様のやうにやつてゆくのはどうですかね、新しい試みかも知らぬが西洋畫家は皆厭だと言ひますよ。

△二つの爭ひ

結城素明

今年の展覽會を覽ると日本畫の方で斯ういふ現象が明に認められる。廣業觀山大觀栖鳳の四大家の中で觀山栖鳳の二人は自分自身の繪を出品してないに反して、廣業大觀は親ら陣頭に馬を進めてゐる。その代りに觀山栖鳳の二人は自分の率ひてゐる門人と門人との間に明に戰が開かれてをるのを見受けるが廣業大觀にはさうしたものはない、只一騎打の試合が爭はれてゐる。

其間の事情は深く知らないが栖鳳などは最近自分の教授してゐる在校生卒業生乃至研究生を督勵して、松本校長よりも寧ろ熱心に殆ど手を執らぬ計りに氣を付けて青年美術家の出品を監督激勵して後進誘導といふことを圖つてゐる。觀山も矢張り自らは影に隱れて門下の庇護促進に色々の手段を執つてゐる。

觀山派と栖鳳の美術學校派との爭ひ、大觀と廣業との一騎打、これは將來に於て非常の興味を以て刮目せらるべきものであらうと思ふ。然し今年の展覽會だけではまだ勝敗の數はその孰れとも決せられぬ。

△廣業、觀山、大觀、栖鳳

林田春潮

(一)

文部省展覽會が初めて開かれた時に、廣業は何んなものを描いて、この空前の晴の場所に出したら可いかといふのに一方ならず思ひ惑ふた。その頃は日露戰爭後の戰勝熱の盛んな時であつたが、丁度美術學校長の正木が、奈良時代の大佛開眼式を掲げて、日露戰爭以前に日本に國民性が最も高潮したのは此の時だといふことを頻りと說いてゐたので、彼は遂にそれを採つて出品畫を作つた。その畫は完成したのではなかつたけれども、その時の展覽會がそれに對しての取沙汰は如何にも凄しいものであつた。それから二回三回と引續いて、今年に至る迄彼は一度として

出品を怠つたことがない。自然主義の傳唱された時には、あの奇抜な『谿四題』を出して自然主義的の逼眞の描寫を見せ、支那に遊んで歸つた時には、長卷の山水や屛畫なぞを描いて東作畫の材料を古人以外に取扱つて見せやうとした。そして今年には、さながら元明の遺作かと疑はるゝ許りの支那の風景畫を作つて、尋常の畫家が思ひも及ばぬ復古的の作品を示してゐる。

此の如く、彼は時勢の傾向を觀破する聰明な洞察力があると同時に、亦何事にも心を配つて、絶えず世間の注視の的となるといふ意を忘れない。こゝが大事と見て取つた時には、何事を措いても必ず努むる。苟も藝術分内のことならば知らぬこと、藝術以外の世間のことに就て鋭い感受性を有つてゐる彼のやうなのは少からう。畫家の中には隨分世間のことには通じないのが多い。けれども彼は畫家でなく何れの職業を執つたとしても立派に今の位置をなし得る人である。さればとて、彼は藝術家の肌合が決してないではない。世事を忘れて風月に嘯く藝術肌の洒脱な面白いところがあつて、そして同時に、世間の氣合も、人情の酸も甘いも嚙み分けた極めて怜悧な社會通である。栖鳳は知らないが、觀山には此の超脫があつて怜悧がない。大觀に至つては藝術家肌が多分にあり過ぎて、その代りに常識が彼ほど圓滿でない。そして却つて直覺的に世間の樣子が見えると、往々我を忘れて意外の邊に手を出す不思議な水戸人氣質がある。所ろが廣業にはそれがない。何處迄も常識的、中庸的である。圓滿に發達した常識の天才、それが彼の人に愛され、多くの贔負を有つてゐる譯であらう。

そして、此の通り世間的に融通の利く彼は、其の畫に於ても亦同樣に融通の利く伎倆を有つて居る。各流各派何れの畫風にも出入して無礙自在、何が來たとて驚かぬ丈の腕前がある。これは彼の才分が何れの畫風にも融和し得るからでもあらうが、大觀でも、栖鳳でも、又は觀山でも彼ほどには多方面でない。唯だ多方面なのが畫家として好いことか何うか、又は其等の何れにも彼が優れてゐるかといふことは別問題であるけれども、兎に角四人の中で彼が最も多方面だといふことは、さう承認しても差支へはあるまい。既にかの洞察があり、努力がある、そして更に此の融通の利く伎倆がある、是等の諸要素が相待つて今日の彼を造り上げたのは尤な次第ではないか。

然しながら、玆に見遁すことの出來ないのは、彼は何んな新らしい畫を作る時でも、其の形式の裏には必ず何物かのオーソリチーを控えてゐるといふことである。『谿四題』などは彼としては隨分思ひ切つた描法だといはれてゐるけれども、其の其基礎となつてゐるのは矢張土佐と南畫である。土佐と南畫がなかつたなら、或はあの畫は出來なかつたかも知れない。寧ろ是等の古畫から長所を取つて大膽な新描法を試みたところに彼の素養があり、多方面な才分があると見た方が可い。彼は傳統に裏切りするのは好まない人である。法則を無視する藝術上の無政府主義者となるのには、彼はあまりに古畫の素養に富んで居る。寧ろ固有の長所に牢固な基礎を置いて、そこから新らしい日本畫を築き立てて行かうとす

るのが彼の目的であるらしい。彼は今度の展覽會で、大觀と併せて嘖々の名を博してゐるけれども、其の畫にも現はれてゐるやうに、又誰しも知つてゐる通りに、彼と大觀とは行き方が同じでない。大觀と同じでないのは彼一人ではない。觀山も栖鳳もさうであるけれども、彼のやうな多方面の才子であつて尙ほ大觀と一致することの出來ないのは、一ツは素より大觀が飛離れて一人倫を絕してゐるからでもあらうが、彼としては過去に對する執着が深いからである。かくて彼は復古的の立ち場を執つて極めて安全な道を歩いてゐる。大觀には他人の行き得ない超群獨得の道はあらうが、此の安全がない。其の畫を見ても、彼には少くとも技巧上の後楯（うしろだて）がある。從つて失敗がない。所が大觀には出來不出來が多い失敗がある。彼が此の如く安全な道を選んだのは、如何にも怜悧な行き方であつて、流石に能く己を知るものだといつて可い。今日の日本畫は大觀のやうな創造的の作家を必要とすると同時に、亦彼が如き堅實な素養のあるものを要求する。就中教育の方面には、彼のやうな折衷的、穩健的の大家がよい。この意味からして、彼を美術學校の教職に据えたのは校長正木の鑑識が當を得たものだといへる。

（二）

觀山と大觀に至つては、いろ〳〵の方面からして此の論題に興味を添える。彼等が覽出した美術院の全盛時代からすると、今日の彼等は二人共に隨分に變つた。啻に其の境遇が變つた丈でなく、其の畫も亦驚くばかりに變つてゐる。彼等の畫を最初から觀てゐた人達の中には、岡倉と別れてから後の彼等の作は、其の以前に見えて居たやうな深さ、大きさ、高さがなくなつた。詰り思想が貧弱になつたといつて慨いてゐるものがある。といふのは、岡倉と別れない前の彼等の作は、岡倉が思想を吹き込んで畫かせたのであつて、彼等の思想は即ち岡倉の思想であつた。所ろが岡倉と別れてからは、同時に其の思想もなくなつたので、彼等が作品の內容は藻拔の殼になつたといふのである。これは事實であつたか、何うか、恐らくは彼等三人より外に知るものはあるまい。然しながら、此の事實は虛構であるとしても、彼等の思想が貧弱になつたことは爭はれない事實である。作の全面に漲つてゐた欝勃たる氣象は當時青年であつた彼等の元氣を示すものであつたとしても、あの頃の作に見えてゐたやうな力強い、深い內容は今日の彼等には見られないではないか、そして其の代りに思想よりも技巧に力を注ぐ主形的の傾向が著るしく殖えて來たのは何といふ激しい變り方であらう。觀山が斯ういふ傾向に移つて來たのは別に不思議はない。彼は岡倉氏と別れなくても、かうなるべき藝術的運命を有つてゐた人である。此傾向を執つてゐるのは、寧ろ當に行くべき道を行くのだといつて可い。彼は廣業と同じく技巧の人、復古的の人である。唯だ其の裝飾的の一面丈は、廣業よりも又は栖鳳よりも彼の多分に有つてゐる長所であるけれども、それとても大觀や故春草などに較ぶると其の立ち場は矢張古畫を離れてゐない。彼は寧ろ古畫を自在に取扱つて何物かを新らしく組立つるところに其の伎倆を現はす人である。就中調色家（カラリスト）としての彼は、何人に較べても劣るものではない。彼

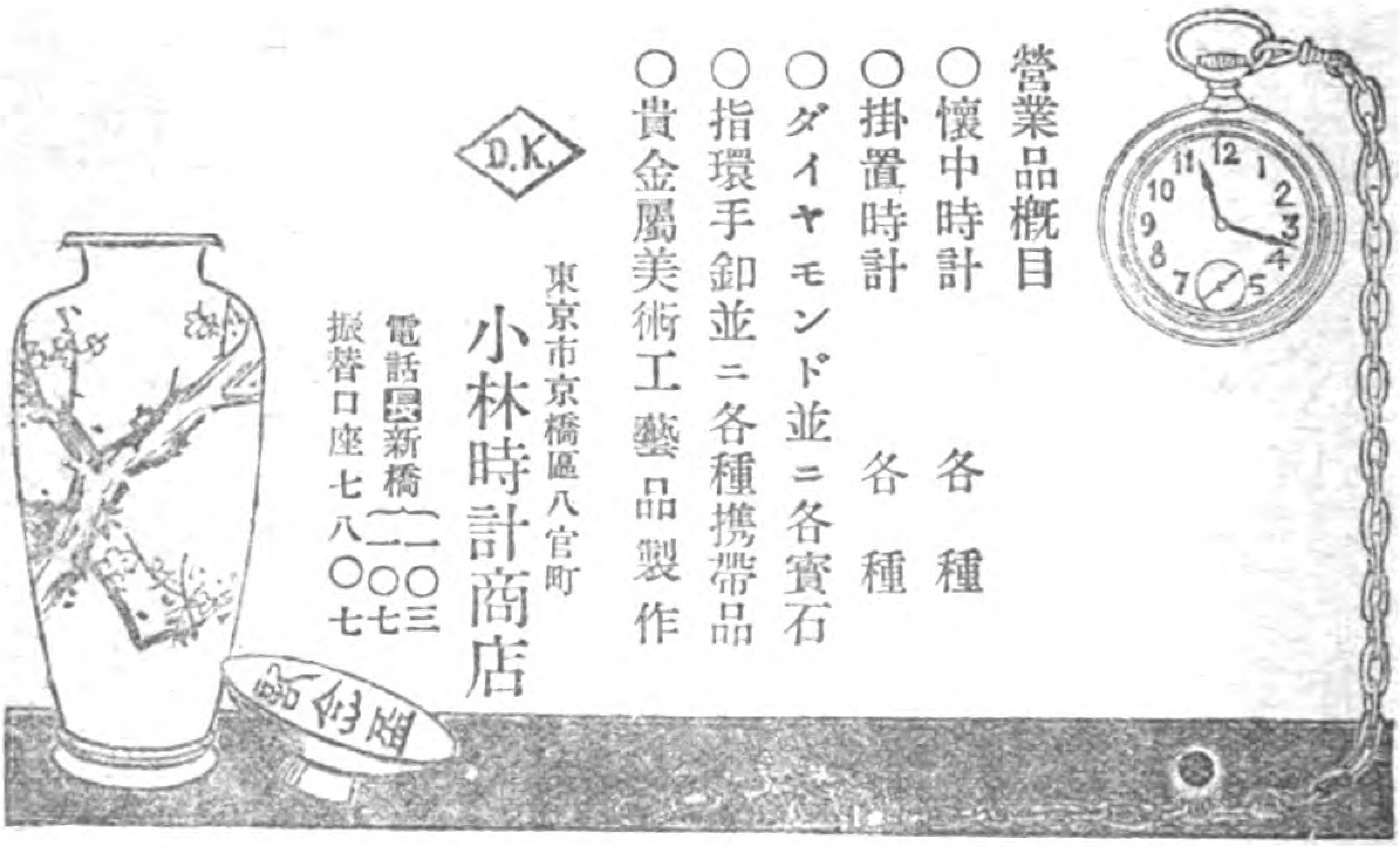
は今、富豪原某に愛されて、舊幕の頃に相撲取が大名に抱へられたと同じやうに、其の保護の下に安全な勞作をやつてゐる。彼の同情者の中には、彼の爲めに此の幸運(?)な境遇を咀ふものがあるといふことであるけれども、彼は何んな境遇にあつても決して技術を忘るゝ人でない。少くとも設色家(カラリスト)として鑑賞家を喜ばす時が何時かはあるに相違ない。從つて其の心配は無用である。

然しながら、意外なのは大觀である。彼は此頃新進の一畫家に向つて技巧の忽せ(ゆるが)にしてはならぬことを熟々と說いたと聞いた。又、今年の文部省展覽會に出してゐる『瀟湘八景』は七度迄も稿を更えたのであつて、昨年の同じ出品『山路』も幾たびか畫き直したものだといふことは、誰でも知らぬものはない彼の逸話である。是等の事實は、彼の美術院時代に於ける『屈原』や『世界三聖』を記臆してゐるものに取つては、如何にも驚かるゝ許りの變化である。あの頃に於ての彼は寧ろ思想の方面に於て認められてゐたのではないか。表現法や形式には兎角の非難があつても、内容の優れてゐることに於ては、彼は實に當時第一の人氣者であつたのである。それが裝飾的傾向に移つた頃から、何時しか技巧に重を置くやうになつて、遂に今は以前と全く反對の現象を示して來た。彼の氣稟からいへば技巧に要目を要すのは、彼の適任でない。彼は熱烈奔放、觸るゝもの皆焚かずば止まぬ火のやうな性格を有つてゐる。彼が故春草と交つて渝らなかつたのは、彼の熱と春草の冷と互に能く調和したからである。曾て早稻田で美術研究會が開かれた時に出席者の一人は、彼の或る作を指してネオ、ロマンチシズムだといつた。その作が果してネオ、ロマンチシズムの特質を有つてゐたか何うかは玆に問ふべきことでないとして、兎に角彼は今日の日本畫家の中で最もロマンチストに近い特質を有つてゐる畫家である。そのロマンチストに近い特質を有つた彼が、今のやうに形式に憂き身を窶すのは抑も何としたことであらう。けれども、彼にあつては、それもまた無理もない、彼が過去に於て非難を受けた弱點は、その技巧の拙いといふことであつた。されば彼の現在の努力は其の非難に對する報復だともいへる。此に於て彼の辯護者は現在の彼を指して過渡期だといふ。過渡期か、さうでないか、それは彼の將來を待つて決せらるゝことであらう。

とはいへ、彼の技術はまた決して蔑ることの出來ないものである。否彼は技術史に於ても、今の日本畫界に優に獨得の位地を占め得る素養と特色とを有つてゐる。彼は美術學校を出てから久しく國寶の修理に從事し、岡倉氏に從つて歐米に遊び、また印度をも見舞ふてゐる。歐州には栖鳳も行つた、觀山も行つた。けれども。彼等には岡倉といふリーダーがない。加ふるに彼らも亦それを理解するだけの頭腦を有つてゐる。見聞の廣いことに於ては、四人の中で彼に及ぶものはない。彼は此の廣い見聞と明敏な感覺とを以て其の技巧を作つてゐるのである。彼は何物をも一且消化して自個のものとした上でなければ吐き出さぬのであるから、其の影響は表面に現はれないけれども、其の技巧の中には彼の觸れた一切が總て包まれてゐる。殊にこれは殆ど誰も氣がつかないのであるが、彼が近年の色彩の中には、フオイスラーに依つて得た感化が見えてゐる。日本畫家の中に、かういふ西洋近代の形式に目を着けたものが彼の外にあるか。彼は實に油斷のならぬ畫家である。

（三）

栖鳳については、私は餘り知らない、強て書いたら書けないこともないが、其には姑く預つて後日を期さう。唯だ此頃、何とかいふ人が、彼に關する評論を書いて、彼をミレーに譬へたり、最高級の讚辭を捧げたりするのは、私は、あれは皮肉に彼を弄んでゐるのだと見てゐる。


營業品概目
○懷中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
D.K.
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話長新橋一一〇三　二〇七
振替口座七八〇七

（中付一の二）

參萬部限特價發賣

簡野道明先生著

增修 故事成語大辭典

製本既成内容見本進呈

洋装全一冊 紙數二千頁

小院曩に著者が獨力多年の苦心に成れる『故事成語大辭典』を發行するや、學界無比の大著として空前の賞讃と絶大の歡迎とを得、重刊また重刊、今猶需用の激增しつゝあるは深く光榮とする所也。然るに著者の忠實なる、是を以て足れりとせず、新に日常必須の成語約五千を增補せられ、玆に新装せる本書を公にするに至りぬ。小院この好著を汎く江湖に普及せんため、定價の至廉と携帯の便利とを圖り、別に内容原版本と異ならざる四六判形の縮刷本を發行し、原版本と共に特價を以て大方の高需に應ぜんとす乞ふ速に御注文あらんことを

原版本	菊判背革製	定價五圓五十錢	特價金四圓	送料	東京市内四錢 其他金廿四錢
縮刷本	四六版洋布製	定價參圓五十錢	特價金貳圓五拾錢	送料	東京市内四錢 其他金拾六錢

拾遺 一定價金壹圓（外に送料市内金四錢其他拾貳錢）增修前に購入諸君便利を圖り今回增補せる拾遺のみを別冊とし此際特に實價を以て高需に應ずべし

發行所 東京神田錦町一丁目十番地（長電話本局二四八四 振替東京四九九一）

明治書院

（中付一の三）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

和歌

尾上柴舟選

後藤むくろ

○

しみじみと畑にあるはこゝろよしこのたまたまの夕ぐれのいろ

夕日しづみ川ばたの草柔かに青ざめゆけりわれなほあゆむ

わが愁ひみにくき地に沁みも入れさらばすべてに物おもひなし

かなしまむはた泣き泣かむあはれなるよのつねびとのわれにしあれば

内田月城

○

藤いろのパラソルの柄のしろがねのひかれば君はちらと笑みける

そらいろのうすき野薔薇にふる雨かちりゆく花かこひしやわがきみ

きみが家にあまりにちかくすめること惜しきここちすられしけれども

桐垣青花

○

やるせなうがらんとしたる秋にゐて死をばしきりに思ひみるかな

我悲しみ涙ともならずものたらぬかゝる夜をば早くより寝ぬ

關本梁村

○

こほろぎや部屋かたづけてなげだせし身にひとしほの悲しみの沁む

貧になれし食の甘さも膳ひとつ減りてののちはさびしかりにし

ゆふぐれの林のおとのさびしさにひさしくも眼を投げてありけり

さまよひにいでてしゆふべのなつかしきこゝろおごりに買ひし林檎よ

うつけたるごときこゝろのちらばりにいつしか雨がふりてありけり

鶴尾春醉

○

瞳にしみる白き蒲團のシーツにも冷たき秋をなげかるる朝

垢づける蒲團のなかに身をまろめ暁を待つ心も

となさ
この日頃酒とめられて味氣なく女と二人さけるこほろぎ

○　　　　大眉朝果

しら玉の酒を嗅ぐよりあほるよりより寂しさのまたあるべしや
酒飲めど醉頰にいでず蒼ざむる男のかほを君いかに見し
はやつきし酒のしづくをてのひらにうけてながめてわれを寂しむ

○　　　　本間白い袖口

隣家のヒステリカルによくわらふ年増の妻に秋はかなしさ
遠山の炭やく煙青々とたかくくもれる秋の午後かな
歌よまむなど思ひたる初夏の今朝の心をなみだしてめづ

○　　　　高添翠

汝が泣くはわが泣くなりとまたしても兄の手紙の見るに得堪へず
東京は明るかりきと思ひ來し東京も暗き涙を誘ふ
一二年過ぎなば死ぬといふ事を思ひて一人夜の街をゆく
昔てわが語りし友も草木もわれより遠くはなれてみゆる

○　　　　打田紅雨

蚊帳のかねすれ合ふ音もかなしかり秋てふものの這ひよりてきて
草の上を淡き影して蜻蛉らの飛ぶもかなしき秋のくれがた
痩やせて樹々はみにくきまたしても愁をわれに强ふるかなしさ

○　　　　前田黄昏

あやなくも君より吾れにかゝりたる電話のあとの心の淋しさ
七月の港の朝の不安なるこゝろをゆすり船海にうく

○　　　　竹村天双

秋來ることとさららしく作りたる幼な心を人の知れりや
みづからの此の我儘も君ひとり笑みてうけがふ

忘られぬかな

○　　町田不破

わかために泣かぬ人のみ市をなす此處長崎の灯
も心地よし

何時知らず身をめぐり居る秋風にしばし醉後の
身を默しみる

○　　戸叶悌二郎

うす黄なる秋の日させる停車場のくづれし柵に
這ひよる煤烟

わが母校はらはらはららとする秋の櫻もみぢのな
かにさびしく

○　　田村司郎

痛むとて涙ぐみつゝおさえたる乳房にひゞきこ
ほろぎがなく

果物の饐へ腐りゆく甘たるき匂ひの中の午後の
明るさ

○　　藤田訥鷗

撫子の途にはかなき下駄のあと清水をくみに君
の出づるか

かへり來ぬ明日は此の草むしらんとおもひてく
ぐる門の夕ぐれ

○　　田村胡春

かなしさは渚に落つる夕しほを手にすくふとき
心そゝりぬ

うすひかる雲より下に蒼茫と國府津の海の暮れ
にけるかな

○　　西原微風

人並に心せかれて夕されば歸り來にけり下宿屋
の部屋

無意識に書きつらねたる人の名のローマ綴りを
數へなどする

○　　安達靜子

月淡う秋の木草にながるれば心しづかに待つ人
となる

秋の夜の明るき街はなつかしやまた林檎など求
めにゆかん

○　　さゝれ石

過ぎし日も來ん日をも見ずたゞ今日をわれの日
として過さしめ給へ

死はすべて戀人をさへ捨てさするかなしきされ
ど安きものかな

○　　伊藤錄

おとなしくなりたる秋の心やと思ふに涙せきあへぬかな

とこしへに清き心となるすべもなき秋の夜の悲しき祈禱

○　武富荻花

なみ／＼と注ぎたる酒の泡だつを見ゐる心の淡き滿足

稻妻の光る刹那に黒がみの靜かにゆらぐ君は美し

○　芥川葉雨

秋來れど地に心を滿すなし蒼空蒼空なつかしきかな

あらはなる木立の影が泌む地にまた一つ泌む我がたち姿

○　西村孤舟

なつかしや若葉の中は百年も思ひ來し人かくるる如し

別れつる君の顔よりおぼろなる野路の夕の月見草かな

○　椰子樓

三十路越す友も新妻めとりぬと涼しき心初秋に入る

枕邊の湯呑の摸様見あきぬと君いたつきのさびしき便り

○　北里天街

廣々と青める海へ黄昏の風がもて行く我くちずさみ

裏町の倉庫の壁に身をよせて夜の港の爪彈をきく

○　山村芳郎

海に落つる酒匂の川のさゞれ波五月の末の日に光る見ゆ

○　山本渚の貝

君思ふ心に添ひてうねり行く代赭の山の道ぞかなしき

○　市橋栖川

あゝわが汽車何をかなしみなれもまた名古屋の市を逃れ去るかな

○　月岡波路子

晝となれば夜を戀ふなり夜となれば夜は夜とて悲しきものを

○　楠谷幽夫

犬な鳴きそ毒をばかりてはかなかる眠りむさぼるわれなさましそ

○ 高木曉星

ひつそりと秋の日暮れぬ妹は何か悲しき暗がりに泣く

○ 中田夢十

カフェーのその色硝子日はうつるまばゆきまゝに目とぢて飲む

○ 南の旅人

ほほづきを鳴らし覺えしゆふぐれの輕い氣分の月のいてしほ

○ 住田初士彦

遁れ出て歸り來ぬれば吾が家はいよゝ貧しく父母の生く

○ 石井保

ひとりなりつひにひとりとなりにけり今宵はしげく虫のなくかな

○ 戸田露葉

露おびて優しや梨の花が咲く此頃吾になづきたる君

○ 相長十一郎

氣紛れに小櫻貝を唇に當て海に向ひて夕暮を呼ぶ

○ 安藤竹露

まことしく父母をいつはり歸り來し放蕩兒にも夏は來にけり

○ 酒井賢

ぢつとして思ひまとめてこの宵の心のまゝをかきたく思ふ

○ 加藤忠亮

朝寢して重き頭にうつすりと夕べの夢の浮ぶたつ秋

○ 桶谷芳水

若き日をあとになしつゝ老人の群に交りてすごすかなしさ

○ 田坂幻花

潮の香に袂を染めし南風その風もはや吹かずなりけり

○ 大久保朱鳥

秋はよし夜の露臺に登りきて君を思ふにも涙するにも

○ 村上夕人

分れては秋立つ床の涼しさに涙も出さず寢る夜ごろかな

○ 櫻木萬治

かろやかに朝の風吹き桃色のコスモス一つ醒めてありけり

○ 二木登美

店先の陶器の箱のつめ藁にゆふかけてなくきりぎりすかな

○ 嘉手納順範

美きかをり吸へば悲しき何やらむ涙ぐまるる處女にも似て

應募和歌は東京小石川區原町百十五番地
尾上柴舟宛の事

俳句

蘆 高田蝶衣選

煉瓦燒場の擴げ柵蘆に道作る　柳子
立つる鳥居の力木もして蘆邊なる　同
網干場芦白ければ百舌鳥も來て　同
帆摺れ狹河芦晴れに連峯の影　三碧水
根深芦を洗ふ水雨に堪えし江　同
市日荷を芦の白穗に渡し居る　同
刈られ芦に鳥飛ぶや煙雨霽れやらず　雪の門
水瘦せす芦根に小魚群るゝ見る　同
月の雫呼ぶが如芦そゝと鳴る　同
隱士訪ひて蘆晴れの歸路に龜拾ふ　三石
芦の夕月あり〳〵と樓に鷺を呼べる　同
滴水に立つ霧や芦の碧汲む　同
磐盤の攀づ塔婆芦の花淋し　明兮
路程圖に案むれば芦に雨を聽く　同
寒鳥騷ぐ芦叢や野火に雲燒けて　同

不漁つゞきの町ひそと芦に微雨歇まぬ　百花
景またなきも棹返す芦間月更けて　同
旅程急げど此景やなけん芦の月　同
芦の穂に風強し使者を餞る日　芳葩
島と思へぬ屋並なれど芦に霧晴るゝ　同
落日を悲む海女や芦花の飛ぶ　同
尿繁きに舟忌む詣芦の花　銀竹
氷嚢を吊り干す穂芦見る緣に　同
千鳥思はす景となり芦穗飛ぶ頻り　同
流れ材を保留せるを芦の穂に出てゝ　雲洞
蘆の穂や朝暮の煙も鹽處　同
麻煮竈の埋め迹や芦の沼近に　觀葉樹
芦咲くや涼棚は板落ちてあり　同
湖樓三甕の一に繋舟芦出てし　湧漁聲
病後描く風葦雨芦にも疲れたる　同
歌書にあけば軍書にも訪ふ師芦の宿　李邱
又も不和に去ぬ嫁を渡す芦長き　同
細々と歸漁待つ灯かも芦間漏る　竹梅
芦の穂や何捕らん綱糸の八重　同
灯を消せば思索澄み行くを芦さわぐ　耳山
箸洗ふまで芦根澄む湖雲遠し　同

舊交を新交に絕たれ芦老いし　更二
礎石重き運び返しや築地芦　同
廣野つゞきの河邊來て芦の曙や　冲雲
移り來しも佗し井桁に高芦の　同
落日に潮來れば灣頭の芦沒す　國郎
漁期過ぎし雨の島出洲の芦淋し　同
投げ節の舸夫偲びけり芦の雨　双柊子
古歌偲ぶ芦茂る里獨樂賣れり　同
泥と共にすくふ魚青藻芦は穂に　雨春草
芦のさびれ埋立し臺場流されて　同
花芦に洪水浸りの大碑かな　美田
花芦に罠を投ぐるや靄の中　同
芦に晴れし伯樂の群旅を歸る歌　句瑠璃
笠山の碑へ蘆の路我と添ふ蝶や　同
川蘆や艪洗ひ唄暮るゝまで　雨箭郎
霧は野樹へ退く蘆や鳶落つる見る　同
さびれ驛に酌み合へり蘆の宿女等と　蘇枋子
蘆に絡む藻もあり日々に廢る街　思汀
風土病も此沼ありて蘆の花　六絲生
蘆の穂や應募の織女過ぎる日々　雨露人
蘆浸す水濁し狩舟も出て　荻子

蘆花暮るゝ曇日や洲干藻を寄する　青嚩子
蘆吹くや渡小屋夜食煮る香して　象眼
舟戰の勝占ひや蘆の一穂にも　寸江
蘆間浮く鳥に苫屋の灯落ちけり　歸雁
此ごろの返り蚊と云ふも蘆曇るより　一箕
觀湖樓に又の御宴や蘆の月　破句迷
濡細りを葦吹けば鳥渡り初む　東皐
据網に魚溜る水や蘆花處々に白　天行子
生簀魚汲む水白し蘆の花　一幸

課題（煤　拂（三十句限）　十一月十日〆切
　　（初　空（拾　句　限）　十二月五日〆切
規定　用紙半紙、淡路假屋在釜口高田蝶衣宛

新年號特別課題　新題の句（新年、冬、春）十二月五日限
投吟家諸君の見聞する年中行事名物及其他の節物にして從來の季寄に漏れたるもの又は新事物△題數を限らず各題別紙にし説明を詳記する事△句數一題に付十句以下△原稿に住所氏名を明記の事

評論

三傑勝敗如何

（ウイルソン―タフト―ロオスヱルト）

一

十一月五日は近けり、十一月五日とは何ぞ、米國憲法には大統領選擧日を指定せず、唯四箇年一回の改選を定むるのみ、然るに一八四五年、米國議會は新法を制定して曰く、大統領選擧は十一月第一月曜日に續く火曜日たる可しと、今年今月五日は、正さに是十一月第一月曜日に續く火曜

日にあらざる乎。

此日こそは、米國將來の運命に深大の影響を及ぼす可き重要の日也、米國の友邦民たる吾人に執りても至深の興味を感せらる可き日也、知らず、タフト、ロオスヱルト、ウイルソンの三候補中、能く中原の鹿を獲るものは誰ぞや。

回顧すれば、今日の選擧競爭程、盛觀を極めたるはあらざりき、就中終始活動振勇しかりしは、前大統領ロオスヱルト氏とす、氏は六月市俄高共和黨大會に奮鬪し、勢可ならずして分離するや、極力國民進歩黨の組織に盡瘁し、八月上旬同黨大會を市俄高に開催し、休息の暇も無くして同月下旬選擧運動に着手しぬ、九月二日コネチカット州に演說し、直ちに西馳、四日アイオワ州に演說し、七日モンタナ州に入り、十日太平洋沿岸に來り、華盛頓、オレゴン、アイダホ諸州を經て十四日馬を桑港灣頭に立つ、爾後南船北馬、席暖るに遑なうして、十月十四日遂にミルウオキー市に入り、兇漢シユランクの爲に狙擊せらる、彼れ屈せず、右胸に入れる銃彈、取除かれざるに、演說會場に進み、血に汚れたる襯衣を打振りつゝ說いて曰く、予は飽く迄その主義を述べざる可からずと、

民主黨候補ウイルソン氏は、遊說に於て少しくロ氏に立ち後れ、その中部旅行を開始したるも九月中旬以後なりき、又た氏は學者出身者の常として、ロ氏の如く奇警の言、熱烈の辭、以て庶民を醉はしむるよりも、循々理を說くの傾きありて、氣焰少しく劣れるの觀ありき、然かも堂々正々の議論、識者を首肯せしむるに至ては、前者何ぞ後者の敵ならん哉、

唯た獨りタフト氏に至ては、自ら出陣を避け、八月下旬議會閉會後、風光明媚のビヴリーに退きぬ、蓋し是一國の元首たる威嚴を顧みて、選擧運動を旗下の諸勇將に一任するの策に出でたるならん、然かも幸にハラン、ベードの徒あり、卓拔の辯才、全國を動かせるは、聊か以て慰むに足ると言ふ可き也、

二

然らば則ち三傑の勝敗は如何。

選擧演說の形勢のみより言はしめは、ロオスヱルト氏、第一位に在り、ウイルソン氏第二位に下り、タフト氏第三位に落つ可しと雖も、現下に於ける民主、共和、進歩三黨の黨勢より言はん乎、ウイルソン氏第一位、タフト氏第二位、ロオスヱルト氏第三位と見る可きに似たり、蓋しウイルソン氏は確實なる根據地とし

もアラバマ、テキサス、ケンタッキー以下十四州（州選擧委員數百六十）を有し、タフト氏はマサチユセッツ、コネチカット以下十二州（約一百票）を有し、ロオスエルト氏はカリフオニヤ、オレゴン以下六州（五十票）を有す、猶ほ形勢不明の州十八あり、勝敗の數は之等諸州の向背如何に決定す可しと雖も、ロ氏、タ氏の勝利困難にしてウ氏の勝利比較的容易なるは、恐らくは贅辯を待たざる可き乎、況んや共和黨執政久しく、ロタ兩氏亦舊人物たり、米人の傾向は寧ろ新人物を欲するの色あるに於てをや、吾人は十月下旬より十一月上旬にかけて新事情の發生せざる限り、ウ氏の優勢を想像するの至當なるを見ずんばあらず、

然かも豫言は不可能なり、殊に之を困難にするの原因別に之あり、何ぞや、三候補鼎立てふ特別の事情あること即ち是也、蓋し米國憲法に依れば大統領當選には候補者中の最高點たるを以て足れりとせず、人民に依りて選擧せらるゝ各州大統領選擧委員數五百三十一の內少くとも二百六十六を獲得せざる可からず、知らず三名競爭の現狀に在りて其內の一名が能く總委員數二分一以上を占め得るの希望ある乎、是或は望み難からんも知る可からず、果して然らば、今月五日の大統領選擧は何等の決定を見ずして終り、止む無く斯る場合に對する憲法の規定に從ひ來春の新議會に於て之を選擧する窮手段に出づるの外無きに至る可し、併し斯く言ふも亦想像のみ、天下の識者それ或は吾人が餘りに想像に耽るを笑はん、

東歐の老弱國

憐む可き國の姿を見んと欲するものよ、汝は羅馬衰亡史を讀むを要せず、十八世紀末年の波蘭を回顧するを要せざる也、

起つて東歐の土耳其帝國を見よ、亡びんとして未だ亡びず、仆れんとして未だ仆れず、運命の波に翻弄せらるゝそのさまの、何ぞ悲しきや、

十月十七日、瑞西ウーシーに於て假伊土講和條約成りぬ、一年一箇月の戰爭は、土耳其の屈服に依りて茲に終了しぬ、其條件の大要に曰く

土耳其は伊太利のツリポリ及びサイレナイカ合併を既成の事實として承認し、唯土耳其に許すに宗教上の至上權を代表する高僧をツリポリに送るの權を以てす、

伊太利は土地割讓につきて償金を土耳其に致し、ツ

リポリ及びサイレナイカに關する過去の國債を引受くるものとす、

伊太利は己にエジアン海諸島を還附す、但し土耳其は右諸島民に對し大赦を行ふ可し、

價金の如き形式的性質のみ、又た土耳其は最終迄サイレナイカに於けるトブルク港を保留し、內地回敎徒との交通を維持せんと力めたりと雖も、此計畫は不幸にして失敗せりき、換言すれば、土耳其政府は近東形勢切迫せる爲め、止むを得ず、一切の主張を拋つて、伊太利の脚下に屈服したりし也、吁嗟十三世紀以後、短小の期間西班牙王フェルヂナンド、若くはマルタ武士連の支配を受けたるの外、常に回敎徒の治下に在りたる北阿回敎徒の鄕土は、遂に基督敎國の領土とならざる可からざりし乎、

然かも禍難は屬領に止まらずして、本國に起りぬ、他無し、マセドニヤ問題に起因せる巴爾幹戰爭即ち是れ也、

マセドニアに於て虐殺、放火、掠奪相繼ぎ、基督敎諸民族の生命財產危きを致せるは、青年土耳其黨の失政に依るもの多からん、然かも何んぞ知らん、一日も早くマセドニアの獨立若くは分離を希望せる基督敎徒中の過激派が爆裂彈騷動を以て土耳其人の憤怒を挑發し、之をして殘酷行動を敢てせしめ、更に之を口實として歐洲の輿論を動かさんとせる猾策も、亦た其罪の半ばを負ふ可きことを、コチャナ虐殺と言ひ、イシチブ暴行と言ひ、孰れか其適例にあらざるものぞ、

然かも十月八日黑山國先土耳其の不信を責めて宣戰し、同十八日勃牙利塞爾比と土耳其と亦た開戰す、希臘も恐らくは其後を追ふならん乎、墺露平和の爲め干涉を聲言し乍ら壓迫を加ふるをなさず、英佛も躊躇逡巡す、明かに列强不一致の醜態を描出し來れるの感あり、戰端已に開く、勝敗固より期し難し、是時に至て唯だ憂ふ可きは、土耳其が能く擧國一致、事に當るを得可き乎是也、

七月二十二日ガシ、ムクタル、パーシャの元老內閣成立せる以來、政府と青年土耳其黨との軋轢甚しきものあり、時に或は青年土耳其黨首領タラット、ベイ、同ドジャウイド、ベイ等叛亂を企つるの說を聞く、是固より浮說に過ぎざらんも、以て双方の惡關係を免る可からずや、

青年土耳其黨由來愛國の士、大事の前に小異を捨て、擧國一致しなば、是半月旗國の幸福ならん、然かも土

耳其人は日本人にあらざるを奈何、

愛蘭の自治反對

九月二十八日、愛蘭ウルスターの新教徒等、「愛蘭自治反對誓約」に署名す、ロンドデリー卿先頭として貴族、下院議員、官吏等相踵く、絶叫して曰く吾人は愛蘭に於て羅馬敎徒が政治的に優越地位を占むるを默許する能はずと、彼等の首領たる統一黨名士サー、ヘンリー、カーゾン氏二十九日愛蘭出發、英國リヴァープールに向ふ、出發の際語つて曰く、平和は予等の欲する所、然かも戰はさる可からざらん乎、敢て之を辭せずと、知る可し愛蘭新敎徒は武力に訴へてまでも、愛蘭が英國より分離するを防止せんとするものなるを、

然るに他方を見れば下院に於ける愛蘭自治案議事は、着々進捗して止まざらんとす、此間に於て英國が執り得可き良策は、ウルスター州を愛蘭より分離するに在らんも、是恐らくは愛蘭黨の激烈なる反對を招く可く、アスキス首相も之を敢てするの勇斷無かる可し、斯くの如くにして愛蘭問題は此處兩三年間、最も甚しき英國政局の禍ひたらん乎。

葡國の得手勝手

葡萄牙共和國、一八九七年締結西葡條約を廢棄せんとす、その理由に曰く西班牙は其義務を履行せず、就中西班牙諸港を經て行はるゝ葡國人の秘密移住を制止す可してふ誓約を履行せず、爲めに葡萄牙人が西班牙人の援助を得て北南米に移住するもの數年前迄は三萬なりしに今や七萬に激增したりと、

愚なるかな葡國政府や、移民の激增は之れ實に葡國政治の失態に依ることを自ら悟り得ざる乎、最近葡國の事情を語れる一英人の言に曰く、

里斯本府と言ひ、オポルトオと言ひ葡國各地の人民は共和政を樂むが如けれども、眞相は全く然らず、商買不振に、商店は使用人を減少し、一般勞働者は就業の機會無きのみならず、物價騰貴甚しく、生活困難なり、從つて資本家も勞働者も續々ブラジル其他に移住するに至るのみ、加ふるに共和政府當局者は帝政時代以上に奢侈に流れ、濫費頗る多し、曾つて共和政の熱心家たりしヂアリオ、ド、ポルト新聞の主筆さえ現態に憤慨して、ブラジルに移動したりき、

失政已に斯くの如し、移民增加も當然のみ、然るに自ら責めずして、却て他を咎む、誰か斯くの如き不明の政事家を有する葡國の不幸を悲まざらん哉、

西班牙、佛蘭西、摩洛哥、

九月下旬、西班牙政府、訓令を在摩洛哥諸領事に下し、佛國の勢力圏内に於て一切政治的干渉をなす可からずと嚴命す、以て佛西協約の明確なる成立已に切迫せるを見る可き也、

斯くの如く摩洛哥分割計畫着々進行するにつけても思ひ出でらるゝは、摩洛哥王室の悲運也、前王ムライハフキッドは年金に安んじて、巨萬の黄白を巴里訪問中に費し、宛然小兒の如く大なる玩具を買入れ、滿足歸國せりと言りと雖も、彼や由來決して愚物にあらず、恐らくは深夜、痛恨窮り無く、獨り哭するの時あらん、新王ムライ、ユセフに至ては目下國内を旅行し、即位早々、得意の念に充つが如きも、其夢亦何ぞ能く長からんや。

（横沙歴客）

新刊批評

▲財政と金融

田尻稻次郎著　同文館發行

田尻博士が其深遠該博なる學殖と、我國財務最高官として多年我財政金融の實情を知悉せる經歴とが、博士をして財政經濟界の第一人たらしめ、而して其大著「財政と金融」は斯界のオーソリチーたることは何人にも異議なき所にして、而して博士が毎年一回づゝ、新學理と新事實とを附加して、全部改版することも亦隱れもなき事實也。今回出版せられたるは其第二十三版にして乾坤二册合せて千六百餘頁に亘る、財政經濟の根本義及び我財政の實情を知らんと欲するもの必らず一讀せよ（定價金五圓）

▲太閤とカイゼル

福本日南述　岡部春秋堂發行

本誌昨年新年號の呼物たりし「カイゼル論」と。本誌本年四、七、八に連載せられたる「太閤論」を更らに增補したるものゝ二篇を集めたり。日南氏の史論の面白くして且つ文章の痛快なる、今更ら贅言を要せざる所、青年子弟の必讀を薦む。（定價一圓二十錢）

▲新式辭典

芳賀矢一著　大倉書店發行

「言海」「言葉の泉」等は純粹の國語辭典として、「漢和大辭典」は純粹の漢語辭典として世を益して居るが、我國の如き漢和の兩語を使用して居るものには、是非共此等の孰れをも備へ置かれば實用に事を缺く。「辭林」

は國語を主として多少の漢語を交へ、餘程實用的に出來て居るが、それでも漢語や熟字を引く時には漢字の音を知つて居られば役に立たぬのである。此篇は芳賀博士主監の下に出來たもので、我國日常實際に使用する普通文の讀み書きに實益あることを主眼としたもので、漢語和語共に親語と子語と分ち、親語の條下に實用多き複語、熟字又時としては諺、格言までも附し、殊に索引によつて音の分らぬものは劃で、字のわからぬものは訓で探し出すことが出來るやうにやつてあるので、作文讀書に當つて實益を與へることは極めて多い辭典である。（定價二圓四十錢）

山本唯三郎著
實業之日本社發行

▲支那の將來

支那の將來ほど世界の誰にも豫言の六つかしいものはなく、又支那の將來ほど我國の利害にとつて重大なる關係を有するものがない。著者は多年支那貿易に從事してた人で、其實情實勢を觀察した上から此篇を爲したのである。一讀を薦める。（定價一圓五十錢）

小林中澤等共著
中西屋書店發行

▲東海道（下の卷）

小林鐘吉、岡野榮、中澤弘光、跡見泰、山本森之助等の諸畫伯が、名古屋から西伊勢路にかけそれから琵琶湖廻りをした寫生と紀行を集めたもので、勿論寫生が主となつて居る。「日本名勝寫生紀行」の第五篇として發行せられたるもので、畫に趣味を持ち、旅行に趣味を持つ人の愛玩に値する。（定價三圓五十錢）

向軍治著
警醒社發行

▲八當集

一時八釜かつたマグダ誤譯問題の顛末を纏めて小冊子にしたものである。淺薄零碎な知識を以て陋劣な黨派的根性から徒らに譯者を陷れんとした假名文學士の面皮を剝いで遺憾ない。著者の如何に今の文學者に言語文章の智識が乏しいかを當局者に警告せんとした趣意は充分に伺はれる。只願はくば是れと同時に斯うした著者からどし／＼外國文學の名作を我文壇に紹介して貰ひたいものである。（定價三十錢）

富田碎花著
岡村盛花堂發行

▲悲しき愛

著者が若き日の空しき影から逃れて「情想」の海に來るべき日を待たんとする紀念の歌集なり。裝幀極めて洒脫。（定價七十五錢）

石田新太郎著
北文館發行

▲天化人育

從來の堅苦しい文字の羅列を以て事とした教育書では一般教育思想の普及は難いと言ふので極めて通俗的に且つ面白く讀ませるやうに書いた教育書である。天の化育と人の教育とを併せ說いた所見るべし。敢て江湖に推薦する。（定價壹圓四十錢）

相馬御風著
新潮社發行

▲黎明期の文學

燃えいづる強烈な内部の要求が何者に因つても滿たされ得ない素水（さみづ）のやうな淡い儚さは現代人の味ふ心持である。此心持の自らなる發露が即近代文學の特色である。題して黎明期の文學と言ふ。收むる所は嘗て早稻田文學を始め其他の雜誌に掲載されたものであるが斯うして纏つたのを讀むと更に氏の情味のある筆致が讀者を氏の痛烈なる内的生活に引張つてゆく。近頃の寂しい論壇に得易からざる好書である。（定價八十五錢）

新刊批評十數件は頁數超過の爲め次號に廻したり

(中付二の一)

綠蔭叢書

綠蔭叢書はさきに『破戒』、『春』を出し、第三篇として『家』を上梓したり。
本叢書は藤村の著作を刊行するものにて、版本の素質は讀者の爲に親切を旨とす。

島崎藤村著

小説『家』

（綠蔭叢書第三篇）

第三版

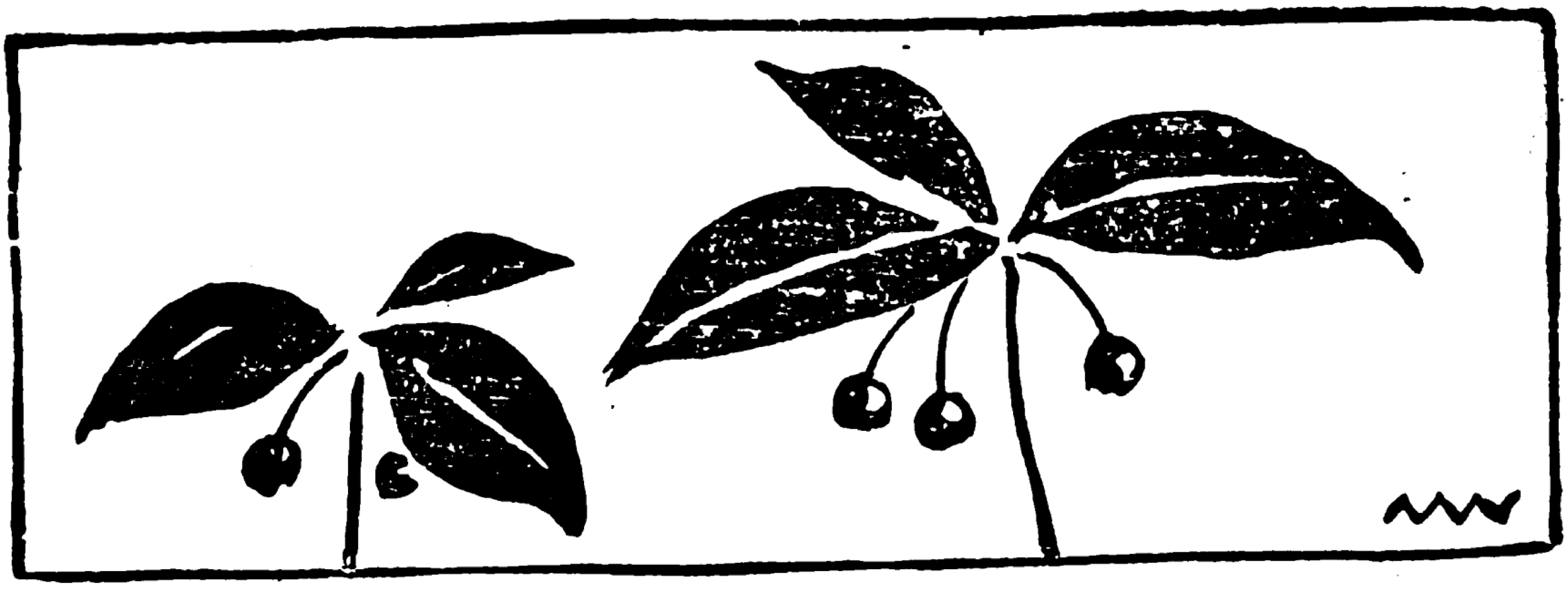
●中澤臨川君序、●有島壬馬君挿畫二葉
●上下全二冊、總紙數八百九十八頁
●四六版本新裁、定價各金七十五錢
郵税各金八錢

發賣元 上田屋
東京神田區裏神保町一

家とは何ぞや。多趣多樣なる其光景を辿りて、文學的ツルハシを打ち込まんとしたるものは本書なり。

●小説春……綠蔭叢書第二篇◎和田英作氏挿畫◎全一冊◎紙數五百八十三頁 讀切定價金九十錢 郵税各金八錢

(中付二の四)



蝮

眞山青果

一

「有るよ、小母さん。そりや、私の方が確實さ。」

「然うかねえ——有るとすれば下の茶箱だらうけれど、大變だからねえ。」

「骨惜みだよ、又。」と、女は目と流して、爪の耳を嚙み取つた。

「それに、有つた所が六年も前だよ。何んても——あれは、戸崎町に居た時分のことだから。」

「然う〳〵、戸崎町でしたッけねえ。」と、膝の上の爪屑を一つ〳〵撮み寄せて「今のあの活版所の邊だらう。表にソレ、啞の洗張屋さんが居てさ。あれが六年なんて、そんなにもなるのかねえ。」と起ち上つて、爪屑を出窓に拂つて來た。

「全くだよ。思ひ出して考へる日になると、何日だつて、月日に借錢でもして

來たやうな心持さ。」

「本當にねえ。」

女――おしづは、眞實つまされるやうに云つて、『さつき』の袋を煙管の首に引き寄せた。

老婆の引込んだ目は、その何日になくシホ〳〵した姿を不審さうに見て居たが、旋て、厄介さうに起き上つて、壁の手垢を撫でながら、階子段をギシ〳〵降りて行つた。

彼岸過ぎの噎たいほど明るい日は、長雨に疲れ果てた障子の棧にカツと燃えて、塵埃に鈍つた腰硝子を漉す日光が、チヂれたやうな日の皺を疊に顫はせた。目に見えぬ空氣の流動が、時々、思ひ掛けぬ所に鰯賣の振れ聲をハツキリ聞かせて、明るさの中を顫えて來る羅宇屋の汽笛が、滲み付くやうに耳の底を離れなかつた。

おしづは所在なげに、また横になつた。小肥りの姿勢を暖かい疊に賴して、今朝婆さんに買はせた新聞紙を取り上げた。今一度、一枚々々細かに三面記事へ目を通したけれど、昨夜の事は何所にも出て居なかつた。改めてホツと息付いたやうなもの丶、何んとなく物足りないやうな氣もする。女は日和に逆せた唇の表皮を犬歯に探しあてつ丶、自墮落に腹這して、その中の一枚を小聲に讀み初めた。

それは嘗ておしづの生涯を讀物にして、「稀代の女賊、蝮の何某。」と眞黒に大きな標題て、二月も呼物にした事さへある新聞であつた。それなのに最う、今日こゝに居る自分を忘れたのか、知らないのか

何うせ生温ッこい藝者の立引など面白さうに書き立てゝ居る。このお高祖頭巾の後姿を描いた畫工の師匠は――一昨年死んだが――然も柔かさうにフックリとした下顋のかゝりと、何んとも云はれず濕味の深かい女の目を描く人であつた。春に降る淡雪を置炬燵の窓からでも眺めるやうな、あの睫毛の深かい目――、濃い肩拔絞の浴衣を着て、蓮葉らしい横櫛に立膝して、格子戸を踏み込んで來る諜者の金太をチロリと眺めた姿などは、自分ながら氣が遠くなるほど惚々して、當分は鏡の顔が耻かしかつた――おしづは何時か新聞を放り出して、兩手を頸の下に組み合はせつゝ、寢不足の瞼をジイワリと細めて、明るい天井裏を見詰めて居た。羅宇屋の汽笛は未だ、執念く耳の底に鳴つてる。

『若し昨暮、あのまゝ捕縛になつて居たら――。』

考はまた此所へ行つた。おしづは冷やりと顫えた。丁度、剃刀の指傷を思ひ出した時のやうな、或るムヅ痒さが短かい牛蒡指の先を動いた。

　昨暮淺草からの歸途に、本郷通の小間物屋の前で、あの恐ろしい刑事の叫聲を聞いた時には、唯顛動して、呼吸が詰つて、左右の考もなく洋酒屋の露地へ隱れた。濡れた青苔にズルリ膝を突いて、蟹目垣を這ひ潜つて、麹室らしい香氣にも退つた――湯屋の薪置場の間から再び賑かな宵の町通へ拔け出た時には、唯、露店のカンテラと人の足音が、ムンムと顔に衝き當るより知らなかつた。ベルを蹈んで來る電車の警燈が、顔に風切つて掠れ違ふその瞬間までは、空々しいほど小さく遠く見へて、あの下に人

が嚇き殺されやうなぞとは、思はれも爲なかつた。

暗らい裏町から又暗らい方へと、靜かに身體を搬んで行くおしづは、何かしら大事なものを咽頭の下まで嚥んで居る人のやう、石に蹪付いてもそれが溢れ出さうになつた。兩手でキッシリその蓋を抑え付けてると、突き倒りさうに心が急ぎ立つて居ながら、意識は空甕のやうに空になつた。

嚴しい石垣に沿ふて暗らい坂を下りて、濡れた水藹の池に映つる電燈がキラ〳〵と瞬く所まで來た時この心の空虚が初めて破れた。ホッと呼吸を吐くと共に、膝頭の皿がグラ〳〵と搖いて、片方の下駄が脫げた。そして、男の顏が目先に廻轉した。

「達さん、勘忍しておくれ、私が惡い、私が、私が。」

土に膝付いたおしづは、急に、小娘のやうに噦晞り上げた――本鄉の通からこゝまで、窃つと大事に抱えて來たのは、然もこの悲哀でゞもあつたやうに、口に出して呼べば呼ぶほど、悲しい淚がメリ〳〵湧いて來て、何んとなく女の心を輕くした。

「達さん、私が惡いんだよ。私が……私が……。」

聲に節が付くほど斯う繰返して、窃つと顏を擡げると、濡れた半紙のやうな空から月光が薄く地に落ちた。

おしづは目で聞くやうな顏付になつた。何か知れぬ或る戰慄に襲はれて居るやうな氣がした。それは、戀しい男の顏でも無ければ、數を掛けた犯罪の恐怖でもなく、況して今の刑事の叫聲なぞではない。ま

だ〳〵ズッと深かいところから來て居る寂寞のやうに思はれたが、ハッキりそれを摑めなかつた。凝つと心を空虚にして居ると、今にもその壁が頽れ掛つて來るやうで、何所へ行つても立停まる所はなかつた。考へやうとすると、唯モヤ〳〵と心が騷いて、惡阻のやうに寂寞が詰上げて來る。

「達さん……達さん……。」

おしづは自分の心を欺くお護符のやうに、一心に男の名を呼んだ。そして、ビッショり濡れた夜露に氣が付いて見ると、何時の間にか、潮足が葦原の根を洗つてる、千住鐵橋の方まで來て、月は小さくなつて居た。

夜更けてこの鳥越の老婆の家を起して、おしづは要愼に着のまゝ寢床へ入つた。そして横になつてからも、襲ひ來るこの寂寞には目を瞑ぢて、夜通し顫えて居た。

二

「有つたよ、おしづさん。この小さな竹行李だらう。」

未練らしく小さな丸髷を乘せた、萎びた老婆の顏が、梯子段の上り口に見えた。おしづはグタりと窓に凭れて、陶器の釉藥のやうに冴々した瑠璃空を見上げつゝ、屋根瓦へ空唾を吐いて居た。振り向いた唇ばかり燃えて居た。

「何うかおしなのかへ、お前さん、淺間樣でもあげやうか。」

老婆は眞田紐でからげた、塵埃だらけな竹行李を持つて來た。

「何有、好いのよ。頭がすこし重いだけ。」と、おしづは頽れた髪の間に指を入れてゴス〳〵と地を搔いて、

「そして小母さん。コレは未だ。」と、その拇指を鼻の前に出した。

「大丈夫だよ。なんぼあの馬鹿だつて、「今日の日にノウ〳〵と話し込んでも居やすまい、一目見じて、こりや刑事が立廻つたと思へば、直ぐ飛んで來るよ。」

「それも然うねえ。では、遅いだけ脈があるとするのかねえ。」

「まア然うさ。それに暦を見たら大安のトッだらう。私の八卦ぢやまア大抵大丈夫と出たね。」

「何方だつて好いよ。最う、斯うなりや覺悟さ。」

おしづは聞くのも面倒臭さう。ドタリと肱から投げ出して疊に俯伏した。

「旨く云つて、年下の亭主ほど何んだつてかから、お前さんも心配だらうけれど――。」

老婆は厭味らしい鐵漿齒を顯して水を向けて見たが、おしづは頰を疊の縁へ擦り付けて、背中を固くして居た。

その着頽した双子小袖の綿の故以か、着柄か、肩付が固くなつて、襟筋が縮れて、腰にまいた木爪木綿の腰蒲團まで、何處までも田舍臭く見えた。一昨年かその前の年、新聞の續物が公園で芝居にされた時、自分からその當人と名乘つて、役者どもを奴鰻へ呼んで大騒ぎした頃の娑婆ッ氣は何所にも無くな

つた。眉の間の剃刀傷へ硝酸銀を塗り足して、芝居がゝつた言葉など眞似たのも、今では話になつた。

「だがねえ、おしづさんや、また先刻の話になるけど、私ア何うも考へるのだよ。」

下から匂つて來る味噌鍋の小鍋を氣にしながら、老婆はおしづの胴の長がい姿勢を染々眺めた。澤のきれたおしづの肱は、皮膚が固くなつて、日和でも粟が出て居た。

「最う澤山よ。私ア外の事を考へてるんだから。」と頭を抑えてるおしづは、鼻聲であつた。

「ちよッ、本當に煩さい羅宇屋だよ。」

「そりや、私だつて、昨日今日の中でもないから、お前さんの勝氣な、負けじ嫌ひな氣性は知つて居るさ。知つては居るけど、何時まで然う怐々して身體を忙しくして居たつて、爲うやがあるまいと思ふのさ。あのボンクラな家の人さへこの頃お前さんが持込む贓品の手筋を見て、こりやおしづさんも些と焦り過ぎてるッてね、陰ぢや噂してる位なんだよ。」

「だから、達さんと別れろだらう。」おしづは赤い目をして、顔を上げた。

「達さんは、お前、達さんだよ。お前さんの身の上も考へないぢや嘘だよ。例令どんな稼ぎ人でも、ケチが付き初めちや駄目だからねえ。少し身熱を冷してからの事だゝ。全體、お前さんは性急過ぎるよ。」

老婆は小竹行李を膝の上に掻い込んで他事のやうに身體をグラ／＼した。

「お小母さん。」おしづの目から涙がハラ／＼と落ちた。

「お前だよ、無垢の私をこんな身にしたのは。」

「あれ、お前さん。」

「いゝえ、お前だよ、お前だ。人にヤコをかつてこゝまで突き堕して置きながら、今更らそんな人を馬鹿にした……。最う汁氣の無い身體だと思つて……。私は、初めて暗らい所へ行く時、お前さんに云はれた事を忘れないよ……、散々ッぱら人の膏を吸つて居ながら……。」

おしづは涙に曇つて、聲まで見えなくなつた。老婆が手を付けかねて默つてるのを見ると、他人は皆氣樂に暢氣なのに、自分だけ一人暗らい穽にでも落されるやうな氣がして、無上に悲しくなつた。自分に髮を掻き毟つて、手足をもがいて泣き叫んだ。老婆一人の力では、何うする事も出來なかつた。

三

快く一寢入して目を覺すと、日は最う窓に掠れて塵埃を吸つた障子紙が薄黑く疲れて見えた。音羽の家に何事もなければ、昨暮の探偵は自分ではなかつたかも知れない。然う云へば、刑事は掏奴らしい若者の方へ呼び掛けたやうにもある。

おしづは寢起きの煙り臭い煙草を喫ひながら、力が拔けたやうに表を見て居た。昨夜からの長がい一日が、馬鹿々々しい道化芝居のやうに顧られた。

おしづは詰らなさうに生欠伸しつゝ、竹行李の紐を解いた。その中には、紐の付いた足袋、鈴の鈴の剪刀、井桁香、石版刷の双六、芝口のひと藥、大事さうに紙につゝんだ香水壜、總て田舍から出たての

八九年前の生活と心持とをソックリその儘見せるやうな物が保存されて居た。中に一冊の小使帳は手帳の下書にもしたと見えて、正直に小工面な字で案文を書いてあつた。片手を懐に引込めながら、ダラリと壁に凭れて、おしづは龍脳臭い帳面の粉を拂ひ落した。

世渡りのためにとて教え下されし字を、こんな不孝な不孝な手紙をかくやうになりし私の不孝を御ゆるし下さるべく候。御兩親様にそむきしその罰には、泣いても笑つても今は他人ばかりの中に泣きあかし申居り候。

あの加藤め、人を教える訓導の身で居ながら、私をだまして村にも居られぬやうにして置きながらノメ／＼と暮し居り候こと、口惜しくて／＼なり申さず候。あゝ、私ほど不運なものは世間に一人もなかるべしと思へば、胸の中に五寸釘でもうたれるやうに候。初めの約束は養子に來て、御兩親様々に例へ一ぴきの魚でも三合のお酒でも樂に上げると申され、だまされ申し候。私は下女よはしたよと云はれても、これから御給金をためて、安樂な日を御兩親様々に送らせ申すべく、今日二圓だけかはせの札を買ひ申候――

「まア、こんな氣で居られたのだよ。」

おしづは自分の身にありさうにないものでも見付けたやうに、壁に頰杖付いて、初めから讀み直した。

數ある下書のうちには、男に送る舌たるい文面などもあつた。

この行李を預けたのが七年前とすれば、淺草の「だるま」から初めて竊盗罪に送られて出た頃である。

出ても豐親の付けどころが無いので、一緒に居た四人の世話を幸ひ、故買商とも知らずにこの貸蒲團屋に來たのだ。それから行徳のお寺へ行き、佐原で客につとめ、深川の淺蜊屋で世帶を持ち、濱町に旦那取をして、その間に二度も暗らい所へ行つて來た。新聞で書けば面白さうにも書き、面白さうにも書かせたが、一度だつて他を羨まずに惡事を働いた事はない。あゝ、世間の人は面白さうに着飾つて、小兒の手を引き、兩親をいたはつて……氣樂さうに……苦が無さゝうに……

「小母さん、兎に角私は歸つて見るよ。」

おしづは重い頬をして、半纏を引掛けながら二階を下りて來た。老婆さんは急に土の臭が目口に滲みて來る臺所に居て、凉爐の火を煽いで居た。その良人は鼻の先に眼鏡をかけて茶の間に講談本を讀んで居たが、眼鏡を外して茶棚の上へ置いた。

「おしづさん。老婆にも聞いたらうが、考へ所だよ。ユックリした所へ身體をまかせて、少し氣を暢べるさ。」

「親方。」

おしづは笑ひながら身をひねつて、自分の素足を見るやうな姿勢をした。

「これだもの。駄目だよ、最う私と云ふ人も。精々お寺のおばさん位の所になつたよ。」と、ムックリした自分の姿を振り返つた。

「然うてもねえよ、これて。」

四

達哉は夜勤にでも出たのか、臺所の戸だけ閉めて居た。合長屋の麻裏屋へ寄つて、門口に立話してると、聲を聞き付けて、長屋の小兒どもがおしづの腰骨へたかつて來た。

一人々々に愛措して、蟇金財布から銅貨を一枚づゝ握らせると、小さな頭が露地の常夜燈にチラ〳〵駈つて行つた。笑つてその後を見送りながら「ぢや、お寢みなさい。」と輕い挨拶して、炭俵のこぼれてる暗らい土間を入る時、近所で八時をうつた。

見廻した所、家の中に變つた樣子も無かつた。

冷の通る足の指を裾にくるんで、おしづはベタリと火鉢の縁にくづれたが、瀬戸の湯沸は冷たくなつて居た。烈しい空腹に襲はれながらも、起つ張合はなかつた。越後者の隣屋の夫婦が面白くない辛抱話を聞いてる氣て居るうちに、温熱でも嗅ぐやうに頸を襟へ埋めて、ツクネンと自分の鼻先を見詰めて居た。耳の底を尋ねると、晝間の羅宇屋がまだ鳴つてるやうにも思はれた。やけに枕を投げ付けて、固く蒲團にくるまつて見たが、寢られもしなかつた。

鑛油臭い船室の隅に、風呂敷荷に俯伏して、蒼褪め顫ひながら溜息して居る、田舍臭い肩揚の少女……

それが、自分だ。何の人の目も自分なぞには立停らないやうて、唯顫えつゝ世間を見廻はした。

「おい、そりや請求書ぢやないんだぜ。娘持つ親の同情さ。」と銃豆煙管を叩きながら刑事に天どんを出されて、顫えながら泣きながら、それでも粒も殘さず喰べ終つた女‥‥それが自分だ。

厚い冷たい煉瓦壁の小窓から、外の五月を眺めて、好く同四の年寄に睨められた女‥‥それが自分だ。待ちもしない寂しい弱々しい自分の姿が、連絡もなく目の前を通り過ぎた。そして、あの冷たく人の臭氣する拘留所も、腹皮の砂利道にダク〳〵鳴る四人馬車も、檻房も、然うまで恐ろしい所ではないやうに思はれた。刑事に追跡されて逃げる時の、苦しい中にも鋭敏になる嗅覺の異狀なぞは、寧ろなつかしいやうにも思はれて、却つて檻房の中で空想して來た種々の事に欺かれた今が悲慘なやうにもあつた。

「馬鹿を云へ、職長の用事で爲方なしなんだ。あゝ醉つた。」

逹哉は兩足を枕元へ投出して、ふら付く頭を兩手で縋り付いて居た。

「最う、何時だい。」

「然うさ、あれを出たのが十時二十分頃かな。」

では、おしづは睡つたのだ。昨夜からの留守を何んとか云ふだらうと待つて居たが、逹哉は漸々に赤かい目を明けて、蒲團へもぐり込んだ。

「お前さん。職長は何んとか云つたらう、私の事をさ。あの人は私の身性を知つてるんだよ。

「いゝえ。」
「隠したつて駄目だよ。私に別れろと云つたんだよ。」
「いゝえ、まるて違ふよ。」達哉は最うウト〳〵して居た。
「だがねえ、達さん。私も何時からか一度は話し為やう〳〵と思つてたんだが、相互の事だよ、何う考へてもね、私は……。」
おしづは男の心を誘ふやうにシンミリ云ひかけて見たが、男は疲れ切つたやうに半分睡つて居た。長がい額毛が貼り付いて顔に膏が浮いて、頬が痩せて見える。
「ねえ、達さん。達さんてば。」
女は最う泣き出しさうにして、鼻をつまらせて居た。
「明日があるよ。お前の話は何十年前の生立から初めるから厭さ。俺ア寝るよ。」
男は寝返りして、鼾に陥ちた。おしづはその疲労しきつた男の寝顔を暫く眺めて居た。
格子を閉めに出て表を見ると、町の方の空はボッと明るかつた。
「おや、火事のやうだよ。」
おしづはうすら寒むい寝間着を掻合せて、戸口に立つて居た。

火事は矢來町の邊で落火になつた。提灯を消してゾロ〳〵歸つて來る群集に雜つて、おしづはあてもなく毘沙門の方まで來て居た。人造金とか、鑛泉水、出盛りを商ふ露店はポツ〳〵脚搨を仕舞ひ初めたが、古本屋や古道具やの前には、ユックリ蹲んで探して居る人々があつた。

少し前屈みになる癖のおしづは、何時の間にか人通りの中から、或る若かい夫婦の後姿を見分けて居た。初めはその細君のやゝ矜らしく伸びた後姿を調はせる、濃い納戶色の薄帶に引かれたのだが、少し蓮葉らしく踏み出す白い足袋……初々しいが、ハッキリ澄んだ聲……時々、聽いたやうに良人を見上げる目……優やかに白い指先……と、目が行つた。おしづは力無く溜息を吐いた。そして、或る店頭の眩しい瓦斯に、半纒ゝ着なかつた、自分の姿を見た。

若かい夫婦は新世帶になくてならぬやうな品物を買集めてから、或る水菓子屋の前に立つた。釣錢を出しに小僧が立つた間でも、時々顏を見合せて微笑を交した。そして、坂下の或る橫丁を曲つて行つた。おしづはツイ交番の前も忘れて、その角まで來た。その邊は植木屋のカンテラが土に並んで、通る人を呼び止めて居た。

おしづはその油煙の間から、赤い行燈の出てる居酒屋を見付けた。

「姉さん、脂つこい所を刺身に、お酒を、正宗ですよ。」

大勢の客が目を寄越す間に、おしづは榑の上を掵つて、ユッタリ腰掛けた。そして、寒ひさうな唇に微笑を置いて、話の與づみさうな方へ顏を向けた。

「さア〳〵、此所が明いてますよ。」

おしづは氣輕るく皿を除けて、後から來る人達に席を分けた。

他の二人連の代まで拂つて居酒屋の潜戸から出たおしづは、何所へてもつかまつて泣きたいほど醉つて居た。二人は坂の上て、笑ひながら別れて行つた。退潮の跡のやうにヒッソリした町には、時々、人の下駄音が遠くへ響いた。

おしづは口の中にブツ〳〵獨り言を云ひながら、毘沙門前のおでん屋の前へ來た。

「おでん屋さん、御繁盛てすね。」おしづは酒の香のムッとする暖簾に頸を入れた。

「御免遊ばせ、お孃樣てすから。」

おしづは蹌踉けるやうに前から居る客の傍へ寄つた。

「然うてすね、兎に角一杯と云ふ事にしてと。」と、おしづは鍋の中を窺いて見てから、

「矢張り、この旦那の召上つて居るものが好いのよ。ねえ、旦那。」

鳥打帽を被つて、湯を呑んで居た男は、それを除けながら、默つておしづの足もとまで目を遣つた。

「おい、幾ら。スヂに、竹環、茶飯が二杯だよ。」

錢を投げ出して、そこを出て行つた。おしづも出た。

六

「あら、旦那。」
おしづは交番の前に立ち停つた。鳥打帽の男はこゝへ來て、巡査と立話して居た。聲を聞くと振返つて見て、指示しながら巡査と笑つた。
「旦那。本當に用があるんですよ、ある、賣込の筋なんですよ。」
郵便箱につかまりながら態と小聲になると、二人はそれが可笑しさうに又笑つて居る。
「あら本當ですよ。内田しづ——ほら、蝮のおしづ好い犯人ですぜ、旦那。」
おしづは甘ッたるい鼻聲になつた。
「好し〳〵判つた。歸つて〳〵。」
制服の方の巡査は、兩肱を肩に張つてから、笑ひながら手を振つた。
「嘘だと思つてる。岩戸町から屆が出て居るのに、本當ですよ、旦那。」
「おや、何所だ住所は。」
鳥打帽の男は敷島を一本口へ咬へて、目を細めながらマチを擦つた。
「あら、知らないの、旦那。」
「あゝ、知らないよ。」

「この姐さんですよ。」

おしづは指を顔に指した。巡査は顔を見合せして笑つた。

「ぢや參りますよ、旦那、參つてもよろしいのですね、娘のおしづですよ。」おしづは故と下齒の足音を踏んで、媚びるやうな目付をした。

「馬鹿、家ぢや探してるよ、歸つた〳〵。」

制服巡査は年配だけに苦い顔して、目を餘所の方へそらした。

「ヘン、待つてる人なんか……。」と、冗談らしくした溜息が本當になつて、「待つてる情夫（いろ）は闇暗（くらやみ）ぐらゐなものだ。」と、然も詰らなさうにボツ〳〵歩るき出した。

全く、闇暗が前に待つて居た。郵便局の前を出拔けると深夜（よふけ）の町は暗らく寂れて、二時間前に見た軒燈ガションボリと萎縮（かぢか）んで居る。偶（たま）に人足するかと思ふと、橫町に消えて了つた。おしづは知らない土地でも彷徨つて居るやうな氣がした。

ドキリとして立停つた。後からスタ〳〵と跟（つ）いて來る人があるやうに思つたのである。耳を肩先に向けて暫く樣子を窺つて居たけれど、それ限り音も無い。空耳であつたかも知れぬ。

夜冷えの空氣は耳に微かに鳴つた。靜かな沼の水でも攪亂して行くやう、此方が足を停めると、耳の鳴るのも又止つた。おしづは偶と、好く斯う云ふ夜、無盡講に行く父を提灯に送つて行つた、娘の頃の

事を思ひ出した。父と云ふ人は、耳朶も口も小さく、誰の前に出てもヒヨコ〳〵お辭義ばかりして居る人であつた。三代つゞいた宮大工の棟を落すまいと齷齪して、野の鼠の目のやうに、オド〳〵顫える目て、世間を見上げて居る人であつた。子飼から仕込んだ源三を自分の婿にして、氣樂な一合酒を飲みたいぐらゐが、希望であつた。

「おしづ、俺ア何も欲は無い。例令曲りなりにも源三を棟梁にして、廢れた宮大工の後を殘して貰ひば澤山だ。少しは私得金もあらから、然うしたら俺は婆さんと一緒に善光寺様だけ詣つて來たい。」好く云ふ言葉が斯うてあつた。源三は好いとも惡るいも云つた事の無い男て、何時もニヤリ〳〵聞いて居た。あゝあの顏も見える。自分が暗らい身體になつてからも、源三は父に内緒で窃つと金など送つて來た事もある。二度目に監獄へ入つた時には、窃かに面會に來た。一度は會つたが、二度目からは事故を申告して、會はなかつた——會はれなかつたのだ。あゝ、あの顏が目に見える。

おしづは胸が煩燥して來て、吐しさうになつた。强いてそれをまぎらすべく、咬ひた揚子をプッツリ嚙み切つて、少し芝居がゝつた歩調りを眞似ねて、何がブツ〳〵呟き初めた。然し、カラ〳〵と聲だけて笑つて見ても、沈澁する砂のやうな不快だけは何うする事も出來なかつた。自分て自分の心を食むて居た事が、やゝ氣が付いた。

町は場末のやうにヒッソリ寢鎭つて、行先は暗らかつた。こゝに寢る所もないやうな人が彷徨して居るのに、何の家も落付いて深々と寢て居た。

「あゝ、あの暗らい穴を通り拔けて歸るのかねえ。」

おしづは偶ある勾配の上に立つて、ボンヤリ先を眺めた。忘れて居た草履音は又スタ〳〵と後から來る。

「ぢや、若しや――。」おしづは發乎として立停つた。横町の方へ曲がると見せて、その薪屋の闇暗に足音を踏んで居たが、後から來たのは、今日一日の勞銀を賭博にすつて終つて明日の拂曉が明けるまてあてもなく夜を迷ひ歩るくやうな勞働者風の男であつた。

おしづは安心と失望と兩方を一度に味つた。――溜息。

六

交番の赤電燈。おしづは急に活々した、張り詰めた心になつてその前を通りながら見ると、夜警に困憊した巡査は、電信柱にもたれてウト〳〵して居た。逼げるやうに窃つとそこを通り越して振り返ると、巡査は氣が付いて、鈍い目で後姿を切りに見越して居た。何時か行狀視察に來た事のあるあの老巡査だ。あの時は權柄に責叱されたけれど、少しも恐しくは無つた。家に居て燒豆腐でも喰つてるだらうと思ふと、意地惡るく可笑しかつた。

おしづは半町ほど來てから、急にバラ〳〵と駈け出した。

「オイ。オイ。」

巡査の寢恍け聲が後から聞えるので、その度に故々足音して駈け出した。巡査も已むを得ず後から駈つて來た。

「オイ、用がある、待て。」

おしづの膝は急に顫えた。あゝ、しまつた。最う今は冗談のうちてはなくなつた。殆んど本能的に下駄を脱ぐと共に、暗らい横町の闇に駈入つた。

「オイ、用がある、待て、待て。」

巡査の聲が後から來る。おしづの目は痙攣性に鋭くなつて、犬のやうに嗅覺が敏くなつた。若し今捕はれたらばと思ふと、空の壁がグラ／＼と落ち掛つて來るやうで、男の顔や父の顔が、火輪車のやうにクル／＼と目の前にくるめいた。

「あゝ若し捕縛になつたら何うしやう。」と一つの心が心に顫え搖れると共に、一つの意地惡るい心が又、「何に怖くて遁げる。本當に自分は、遁げてまでも助かりたいのか、考へろ。」と、囁くやうにも思はれる。

横町から鐵工場の露地……溝……井戸傍……石置場……

「汗をかゝせたな、おい。最う駄目だぜ、穩和しくするんだぜ。」

斯う云つて巡査が額の汗を拭つた時には、おしづの手首に捕繩がかゝつて、グル／＼と乳房がらみ喰

込んで居た。巡査の大きな鼻は、快い運動をした後のやうに白い息を吐いて居た。おしづは咽頭が乾からびて、暫く口が利けなかつた。

「おしづ、今度ア少し長からうぜ。最うお目こぼしも利かんからなア。」

大兵肥滿な老巡査は、冷かすやうに腹をさすつて笑つた。蒼褪めたおしづはヂロリとそれを見上げた。

「旦那。」と暫く唾を吸出して、「この暮の年末賞與は餘つ程大きいてせうよ。」

「然うさな、はゝはゝゝ。おかげ樣てとても云ふかな、おしづ。」

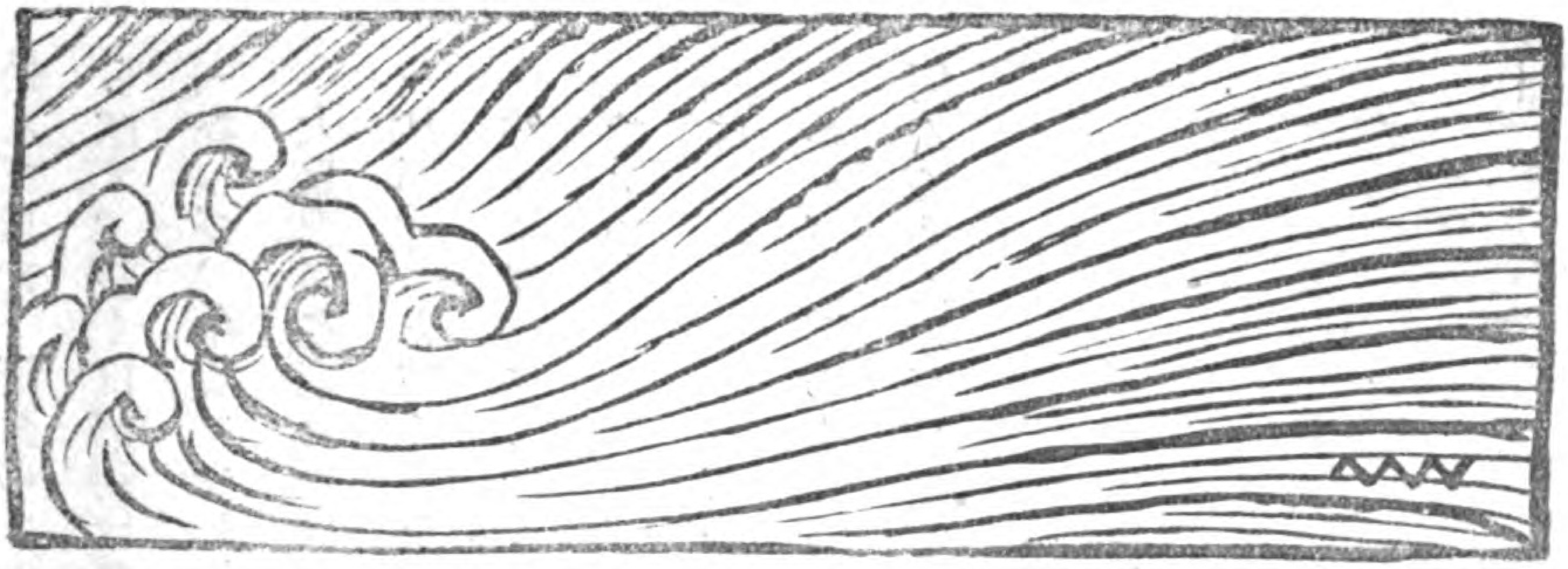
「まアね。」

「はゝはゝゝ、ぢやお陰樣てと。」巡査は繩尾を取つてユックリ歩るき出した。

おしづは裾の冷たいのに初めて氣が付くと、何時の間にか腰から下ビッショリと溝水に濡れて居た。

何んてこんな抵抗なぞしたのだう……馬鹿〳〵しい。

（完）



汐風

正宗白鳥

平磯の端の岩から岩を傳つてゐる間に、日は暮れかゝつた。吹きつける風は冷たくなつた。潮は次第に滿ちて來て、遠くの廣い岩は姿をかくした。飛沫はあたりに物凄くなつた。私は一歩づゝ陸の方へ身を退いた。

浪の音ばかりて人の聲一つ聞えない。どの岩も黑く汐に染み、浪て磨削られてゐる。陸を緣取つた雜草も汐風に萎れて褪せた色をしてゐる。私自身も激しい汐風に揉まれて身體中の血が乾くやうな氣がした。目を向けるたびに、黑ずんだ太洋は私の心を呑まうと嚇してゐるやうに見えた。北の方磯崎の町を顧みると、最早薄闇になつて、人家もぼんやりしてゐる。闇の中に白い飛沫が見えた。

私は燈火のある方へ急いだ。…‥初秋の夕陽に照らされ磯馴松の影を靜かに映つす故郷の海を思出すと、この荒海は只無氣味で厭はしかつた。…‥催眠歌のやうな柔しい音を立てゝ、病める心をいたはり慰めて呉れる懷しい海。——海といへばさう云ふやうな懷しい者と極めて、都を脫けて慕つて來たのに、今目に見耳に聞く海は、かねて私の心に宿つてゐたやうな者ではなかつた。

朋輩と盥に乘つて漕廻つたり、埠頭場で沙魚を釣つたりしたあの親しい海とは似もつかない。正午過ぎから一里二里、安らかな所を見付けるつもりで磯を傳つて來たが、何處まで行つても、風は止絕えず波は强い。激しい汐の香で逆吐きさうになる。宿屋の赤い欄干も岸邊の石段も、目に觸れるぎり汐風に荒らされてゐる。往來の人の顏を見ても軟かな頰は見つからなかつた。かの岩に似た顏をした漁夫、目を赤くたゞらせた女。

かういふ土地でよく安らかに一生が送れると私は思つた。二三の旅行記にかういふ磯邊を　人を誘ふやうな美しい文句で褒めそやしてゐるが不思議であつた。あの波の音に嚇されるのは私ばかりなのだらうか。——荒い汐風に惱まされるのは私ばかりなのだらうか。…‥瘤のやうな根を浮かせてゐる荒くれた松の木の外には、勢よく茂つた樹木もなくて、可憐な草花などは何處に一つも見當らない。

…‥篝火が燃えて裸體が照らされてゐる。近づいて見ると、大きな鰹船が引上げられてゐるのだつた。轆轤を船底へ押當てゝ、大勢の男女が太い綱を曳いてゐる。子供でも老人も、其處にゐる者は皆その綱に手を掛けて聲を合せた。が、船は容易に動かなかつた。篝火は風に吹きまくられて、漁夫の赭い身體

には火の粉が降りかゝつた。どす黒い烟は私の側まで流れた。

私は次第に後退りした。大勢の掛聲も風に消え、船の姿も闇に消えたが、火の粉を浴びてゐる漁夫の姿のみは、生々と浮んでゐる。折々白い波がその足許に渦巻いては消えた。

陸へ上ると、既に雨戸を鎖した家が多い。村の者は大抵磯の方へ群がつてゐるのか、人影はあまり見えなかつた。濃い大きな字の書かれた提灯を持つた男女が小走りに歩いてゐるのに、たまに出會つた。

雲の切目から星が見えたり隠れたりした。私は覺束ない光を手頼りに、畑に挾まれた小徑を急いだ。そして、湊の町を横切つて、橋の袂から俥で大洗の宿へ歸つた。

祝町の女郎屋の障子の隙間から、袢天を頭から被つて赭い鼻を出して覘いてゐた男の顔のみが、途中で目についた只一つの鮮かな影だつた。

海に臨んだ一室に倒れるやうに横になつたが、激しい波の音は私の頭を絶間なく鞭打つやうに響いた。避けやうとしても避ける術はなかつた。

……人の言葉や書物の文字を信じて、安らかに身を置く所を訪ねて來て見ても、何處の山も何處の海も私には無慈悲の者に過ぎなかつた。澎湃たる怒濤は私の心を勵す聲ではなくて、只理由なく虐げる鞭だつた。

……ふと襖を開けて飛ぶやうに身輕に入つて來た男があつた。凸凹の際立つた穢るしい顔に、盲いた小粒の目を据ゑて私の側へ寄つた。

「よく呼んで呉れましたね」と、黄ろい歯を出してニッと笑つた。

「お前かへ。磯節の名人といふのは」私は身を起した。

「私が安中です」

この男も汐風で顔が磨削られたのだと、私は痛ましい思をして相手を見た。……二三日前ふと目についたある新聞の旅行記に、この按摩の磯節を聞いて、感涙を催したと書いてあつたのを思出して、今夜呼んで唄はせることゝしたのである。

磯節でも何節でも、美しい聲が聞きたい。旅に出てから數日の間、人間の聲と云つては、女中が給仕をしながら、お勤めに話す味のない話を聞いたばかりである。……感情の迸つた人間の肉聲が聞きたい。

「ぢや、誰れか三味線を彈く女を連れて來て、其處で唄つて聞かして呉れ」

安中は立つて行つた。

風と浪に壓えつけられて、話聲も足音も少しも耳に入らなかつたが、やがて出拔けに女中や藝者やかの名人がどや〳〵入つて來た。藝者の顔は淺黒くて、絶えず媚を含んだ目遣ひをした。

三味線が鳴つた。磯節が唄はれた。私は耳を澄ましてゐた。

磯節には海の眺めや漁船のことを歌つてゐるのが多かつた。安中は上目を使つて、口端を引釣るやうにして唄つた。句切り〳〵では吃逆(しやくり)をつくやうに喉を鳴らした。聲は汐臭くてむしろ濁つてゐる。私の感情を托されるやうな美しい聲ではなかつた。

代り合つて唄ふ藝者の聲の方に、まだしも懐し氣があつた。て、
「お前もこの土地の生れかね」と訊いた。
「えゝ、さうですとも」
「こんな荒い所でよく育つものだね」
「こんな所でも住めば都ですからね」
さう云つて笑つて、藝者はまた撥を持つたが、安中が麥酒の泡を口端に垂らしながらムッヽリしてゐるのを、冷かに見やつて、ふと思出したやうに、
「この人に猫を抑付けると、そりや面白いんですよ」と云つて、チラと私の方を見て愛嬌を賣つた。
「それだけは御免だよ〳〵」と、安中は子供のやうな樣をして、眉を顰めた。
「この人がね、猫を生埋めにしたことがあるんですよ。自分が大事に飼つてた小鳥を喰はれたつて、死物狂ひになつて猫を慍まへて、生きたまんまで庭先へ埋めたんです。隨分無慈悲ぢやありませんか、幾ら憎いたつて、そんなにまでしなくつたつていゝてせうに。……畜生だつて無念に思ふ譯てさあね。だもんだから、四五日立つと枕許へ來ちや、爪を立てゝ飛付からうとするんですつて。外へ出てゝも猫さへ見れば、安ちやんの顏は眞靑になつて慄え出すんですよ」と云つて、女中を顧みて、「あの時は面白かつたわねえ。」
「人を馬鹿にしてやがる。何が面白いものか」と、安中は脣を尖らせた。

「あの時の安ちやんの顏つたらない。……まあかうなんですよ」と、藝者はまた私の方を見て、「お客樣にそのお話をすると、そりや面白いつて、お客樣達が寄つてたかつて安ちやんを兵子帶で柱へ縛りつけましてね、近所から大きな猫を連れて來て、安ちやんの脊に括りつけたんですよ。さうすると、猫は逃げやうと思つて脊をがりがり掻きまはすんでせう。安ちやん堪まりませんわね。初めの中は怒つてたのが、終ひにはボロボロ淚を出して、手を合せて拜むんですよ。……もつと打遣つといたら、氣絕でもしたらうね、安ちやん」

「なあに」と事もなげに云つて、安中は、「御祈禱をして貰つてるんだから、猫だつてもう成佛してらあね。ねえ、旦那。何時までも祟るものぢやないでせう」

「うん。だが、さう云へばお前の顏は猫でも祟つてゐさうな顏だね」

かう云つた私の言葉は戲談ではなかつた。座興にと藝者が語つた今の話から、この男の顏は一層無氣味になつて、聲も不快に響いた。

「一つ追分をやりませう」と、安中は悄氣てゐた顏に强いて笑ひを浮べた。

「安ちやんは藝者泣かせだね、何でも巧いんだから敵はないよ」と、藝者は悅しがらせを云つて調子を合はせた。

一つ二つ聲を張つて唄つた。

「もう澤山だ。……おれはもう眠くなつた」私は欠伸をした。

「安中さん」と、ふと幽かな聲がして、廊下の薄暗い所に、髮を亂した女の姿が見えた。
「ホイ」と、安中は身輕に驅けて行つた。
「コレですよ」と、藝者は私の前に小指を出して見せた。
「子供もあるんかい」
「二人(ふたあり)！。小い(ちい)方は坊主にするんですて。崇りが恐いんですてせうよ」そう云つて、藝者は座に戻つた安中を見て、「何を話して來たの」
「それは内證だあ」
二人は私に挨拶して打連れて出て行つたが、安中はふとまた襖の間から顔を出して、「旦那、また呼んで下さいな」と聲高に云つて引込んだ。
私は浪と風との中に、只一人取殘されて、目を閉ぢてゐた。明日は朝早くこの土地を逃げて、何處か住みよき里を訪ねやうと思ひながら。…………



嘲弄

田村俊子

老博士は中々出てこなかつた。禮子はなつかしい人を待ち倦むと云ふやうな物に甘へた心持て、何がなし惡戯でもしてやりたく、そこいらを見廻してゐたが、艶消しの硝子障子のはいつた高い窓のところから、一と枝低く延びてゐる梅の樹のこまかく茂つた小さい葉の隙間がくれに、おもちやの様な丸い梅の實が一とつ此方を向いて頭をだしてゐるのを見付ると、禮子は椅子を立つて行つてその梅の實を手を差出してもぎ取つた。丁度その時に正面に見える試演場の廊下を、女優のます美が兩袖をかさねて小さな帶をしめた側面を禮子の方

に見せながら、その廊下に添つた右方のどの室かに入つて行くのがちらと禮子の目にはいつた。
「ます美さんだ。」
禮子は歡びの眼でその後を見送りながら、もぎ取つた梅の實を掌に握つて舊の椅子へ復ると、禮子はそれを卓子の上に載せながら、博士の足音の聞こえた途端に直ぐこれを隱さうと云ふ事をふと思つた。禮子はその刹那的の興味に心をいつぱい浮はつかせながら、卓子の上に載せた梅の實を賭てもする樣にいつまでも見守つてゐた。
少したつと、そゝくさとした博士の足音が扉の外に聞こえた。禮子は氣會を計ることに心を竪めながら、博士の手が扉にかゝつたその瞬間にいそいで梅の實を袂の中に入れてしまつて然うして椅子を立つた。博士を迎へた禮子の顏は人知れぬ可笑味となつかしさの笑みとて、ちよつとしてもその顏面の隙間から笑ひが突つ走りさうに見えてゐたけれども、
「や。」
と云つた老博士の顏は、柔らかく滋味をもつて人の笑みは觸らせない樣な嚴つい皺を深くさせてゐた。禮子の心はそれを見ると一時に平坦になつて改まつた。
「いよ〳〵明日から通つて御覽なさるか。」
博士は然う云つて腕組みをした。
博士が會長のこの演藝協會に、禮子が入ることに定まつたのは嘗ての事であつた。その時に長い時間

博士と話し會つた禮子は、今日再び顏を會はせても別に變つた話もなかつた。

博士は禮子に向つての不安があつた。不安と云ふよりは不信があつた。それは禮子が文藝にたづさはつてゐる女で社會の表にも立ち得る資格がありながら、それにも寄らず生徒並みになつてこの協會へ入らうとした事と、演劇に就いて初心でないと云ふ事と、この女の餘り若くない年齡との比較から、協會へ入つてからの後に賢しら立つて若い女たちを掻き廻すやうな邪魔をしはしないかと云ふやうな疑ひてあつた。博士が禮子への演藝の注意に交ぢつて、こんな事がその言葉の後先に響いてゐた。

「まあやつて御覽なさい。失望するから。」

博士は優しく云つて冷めたく笑つた。

禮子の心は一途であつた。禮子はこゝへ通つて唯遊びさへすればいゝのであつた。今までやつてゐた文學を捨てゝもこれに付きたいと云ふのは、兎もするとその乏しい頭が文學にむづかしく强ひられる苦しさから遁れて、好きな舞臺の空氣の内に若い人たちと遊びたいばかりなのであつた。文學に深くその心を突き入れゝば入れるほど禮子の智識だけては兎ても解しきれないむづかしさに幾度か出つ逢した。それを解いてくれるやうな人は禮子の周圍には一人もゐなかつた。禮子はその煩はしさと倦怠に疲れて、いつでも文學と離れることの出來るやうな焦れた氣分になつてゐた。そうして一度芝居の空氣のうちに浸つたことのある禮子はその面白さを再び描くと、この苦い味の身にしみてきた文學を捨てることは、心の失くなりかけた蠟燭を抛り出すよりも當然の事のやうに思つた。禮子は抑してこの協會へ入れて貰

ふことにした。その代り眞面目な女優の努めと云ふ事は少しも考へてゐなかつた。演劇の上でも自分の力がそれに適つてくるまでは、他からむづかしく強いられるのはいやであつた。自分の力以上に自分を苦しめない程で、のんきに暗い樂屋の陰で、紅色の絹をなよめた樣な情調の内に思ひきり浸つて遊ぶことさへ出來ればそれでいゝのであつた。

最初博士が役爭ひと云ふ上に注意のあつた時も、禮子はこの考へを打明けてしまはうかと思つたのだけれ共、それは協會へ入つてからの勉强と云ふ事の上に誤解を帶びられそうなので口を噤んでゐた。禮子は、博士が禮子に何か野心でも潜んでゐるやうに見て取つてる事が厭ではあつたが、それは長い間に自分の愚な事が博士に知れる時があればそれで解けてゆく事だと思つて何も云はずにゐた。

「非常に殘酷な性格の女なんぞはいゝだらう。」

博士が然う云つた時、禮子は妙にその感情がたかぶつて、生身なものを突き刺す心持を追想しながら眼を上げた。

やがて博士は禮子を伴れて試演場の事務室に導きながら、科目のうちに新らしく立廻りの稽古を挾むつもりだと云はれた。禮子はそれを聞くと、

「立まわりの稽古は嬉しい。」

と呟きながら一人で笑つた。時間割りを見ながらも、禮子は立廻りの稽古の時と能の稽古の時と博士の朗讀の時だけ出てくれればいゝと考へてゐた。

ます美はもう踊つた後であつた。禮子は女の小使からその住居を敎へてもらつて、歸り途に通りかゝりのます美の間借りをしてる家の前で聲をかけて見た。二階から下りてきたます美は、禮子を見ると驚いた眼色をして、その可愛らしい頰をちつと赤くした。

禮子はます美の部屋へ上がつていつた。往來へ向いた小さな部屋の内に机も簞笥も並べてあつた。藤色裄のお召の袷の前が壁にすんなりと赤い裏を返して引つかゝつてゐた。ます美は落着かない物腰で物馴れない笑ひを浮べてゐたけれども、禮子は間近くこの人を見た好奇と、きのふまで演劇をつゞけてゐたそのあとの疲れと淋しさを何所か倦るい瞼のうちに潛めてゐるのを見付けたなつかしさとで、膝と膝とを突き合はせて其の手を握つてゞもやり度いやうな熱した心持になつてます美の顏を眺めた。

「しばゐの濟んだあとは淋しいもんでせう。」

「えゝ。今まで寢てゐましたの。」

ます美は平生着を短く着て、平つたい板のやうな脊中にめりんすの帶を小さくこぢんと締めてゐた。

「しばゐを演つてる間は、朝中々起きられないんですよ。かうして寐てゐて天井を見詰めて、今日の芝居の事をいろ〳〵と考へてゝ、なか〳〵起きられませんの。」

その床のなかで、ます美は舞臺の上の自分の美しい姿をちら〳〵と幻の間に搖かせながら、ゆうべの拍手の音を、自分の心臟の底から再び戰いひゞかせ、そうして更に耳に傳はつて來たその花の開くやうな幽な拍手の音に限りもない誇りのよろこびを漲らせて、夜着の襟にその息をもひそめるのであらう。

ゆうべ舞臺の上で情熱に輝かしたあの眼の力は、疲れの眠りと、寐覺めの倦るさとで、たゞ瞼毛のしほに柔らかく隱れ、時とすると今の世の一の女優とはやされるその功名の嬉しさに匂ひを含んだ涙さへ浮べる事もあるに違ひない。朝の床のうちの寐覺めの靜かさは、どんなにこの人の昨夜の華やかなきらびやかな氣分をほんのりと押包んで霞のやうに烟らせる事であらう。禮子はそんな事を思ひながら、默つて、うつとりしながらます美を見てゐた。

ます美の聲は斯うして話てる間も凛々と底の力をふるはして響いてゐた。脂肪の浮いてる顏は、どこか呆やけてゐたけれども、擦つたあとの樣に瞼の赤くなつてる一と重の眼が、斜に禮子の顏にその光りを投げる時、小さな花片のふと散るやうな優しさを見せた。話がはづんで腮のあたりが緊張してくると、舞臺で見るやうなあの小さく皮肉に纏つた俤が、その顏の上にちら／＼と影を射した。

ます美は協會の内部の噂や、今までの自分の生活なぞを薄い唇を小波のやうにひた／＼と艇りせながらこま／＼と禮子に語つた。禮子は何事にも親しみを含んでます美の云ふ事をよく聞いた。同じ女優の三千子とその意氣の合はない事も話のうちに出た。ます美が腕で押してゆくのを、三千子はその容貌といくらか出來た頭腦とでます美の押し行く先きを遮らうとしてゐる樣な、二人の心の爭ひが聞いてる禮子の胸にゑがかれた。

「あなたの樣なかたが生徒になるなんて嘘見たいですわ。でも私はお姉さんが出來たやうなもんですからほんとに嬉しう御座いますわ。これからいろ／＼な事を教へて戴かなけりや。」

ます美はこんな事を云ふ口の下から、

「斯う云ふところは後から來る人ほど損ですわ。前きの人にみんな好い役を取られてしまひますから。隨分女優もいろんな人が來たんですけれど大抵一と月か二た月、三月ぐらゐで來なくなつてしまつた人もあるんです。ほんとに續かないんですよ。」

ます美は少しの得意を鼻聲の内に捲き込めながら笑つて云つた。この後から來た女優と云ふものゝます美の解釋の內に、自分も入れてるのではないかと思つた時、禮子は好い心持がしなかつた。好きだと思ふ人と向ひ合つてる時は、無理にも自分からその人の態度の上にちやーむを見付けだして置いて、そうして一人で逆上て嬉しがる癖のある禮子は、かうしてる間にも何うかするとます美を抱き締めてとも遣りたいやうに其の心が熱つぽく動いてゐた。そこを不意と諷刺されたやうなこの言葉を聞きつけると禮子の心は急にかぢかんで了つた。

禮子はあの可愛らしいと思つてる口のなかゝら何か濕ひのある情を含んだ言葉は聞かれないものかと思つたが、ます美は眞面目くさつて、勉强の事だの堪忍の事だのを成功の秘訣とでも云ひ度いやうな口調で話するばかりであつた。

「私、これから劇場へ行く時なんかはあなたに連れてつて頂きますわ。ほんとに嬉しい。」

斯う云つたます美の言葉だけは禮子にも嬉しかつた。

その晩家へ歸つた禮子は、まるで尖々したもの丶突き出てゐる地上をよろ〳〵しながら歩き廻つてゐたと云ふ樣な氣分ばかりがその頭の内に殘つてゐた。禮子の胸にはたゞ石塊ばかりが詰め込まれて、其所から温いもの丶發散してくる隙間もなかつた。禮子はおもく疲れて眠つてしまつた。

翌る日の午後になると禮子は時間と云ふもの丶制限に惱まされながら、遠い道を急いて協會へ行つた。

禮子は博士の邸の方から入つて試演場へ行つた。其所に揃へてあつた赤い鼻緒の草履を穿いて、人の集まつてゐる方へ歩いてゆくと、小使室から顔を出した男が禮子を呼んでそうして咎めた、生徒の入る門は別に附いてる事と、草履は自分で買つて持つてこなければいけないと云はれた。禮子は眞つ赤になつて、今日だけ草履を貸して貰ふやうに頼むと小使の女房は、

「直ぐ表に草履は賣つてますがね。」

と云つて禮子の顔を見た。

生徒の控室を知らなかつた禮子は、昨日見た事務室へ脱いだ半コートを引つ掛けに行くと、其室に講師の米崎が腰をかけてゐた。前から禮子を知つてゐるこの人は、

「中々諦められないと見えますね。」

と云ひながら小さな錐のやうに鋭い眼て禮子の顔を見ながら聲をかけた。

禮子は初めて親しい人に出逢つた悦びて、打解けた表情を眉毛の尖きにまで漲らしながら、この人の

前に腰をかけて何かを多く話しやうとした。誰かゞ、リヤ王の本と踊りの扇子を持つて來て禮子の前においた。禮子はそれに束修と一所に少しの金を拂つてからも、この人の前を立たうとしなかつたが、米崎が禮子の何時までもこゝて相手にしてゐる事を憚るやうな、心の搖ぎを、その眼のうちから看取ると、禮子はこの人に挨拶をして本と扇子を持つて教場の方へ行つて見た。そこには若い男が大勢ゐた。女も二人ゐた。さうして臺詞を獨習したり、笑ひの稽古をしたり、唱歌をうたつたりするさま〳〵な聲が入り亂れて、その餘韻から餘韻が次の室、前の廊下へ砂塵を吹き捲るやうに騷々しく押し擴がつていつた。禮子は其室に立つと、誰にでも馴染んだ笑ひを見せやうとしてそれ等の人の顏を見まわたしたけれども、誰も禮子を見て挨拶しやうとした人はなかつた。一人の友が漸く遠くから眞面目な顏でその頭を下げたばかりであつた。禮子の笑へなくなつた顏は、急に顳顬から頰へかけての皮膚の下に針金でも突つ込まれたやうな强張つた感じがした。

　若い親しんだ人同士は指と指の觸れにも賑やかなはしやぎ笑ひをして、床板を踏みならす音の高ければ高いほどその踊り立つ心が滿足するやうに、輕い草履でどし〳〵と其の若い人たちは其邊を驅けめぐつてゐた。その人たちの笑ひは禮子の心へも聯絡してくるやうな響きは持つてゐなかつた。禮子は取付き穗のない淋しい心でその教場を出ると踊りの舞臺の方へ來て其所の硝子窓から、昨日梅の實をもいだ應接室の窓の方を眺めた。午後の柔らかい若葉を撫でるやうなつかしい光線は、どこか沈んだ黄色味を含んでちら〳〵と梅の樹のある一部の輪廓をぼかしてゐた。禮子はその光りの内に心を蒸されるやうな

温かさを慕ひながら踊りの扇子とリヤ王の本を抱へたまゝていつまでも其所に立つてゐた。

「あなた、踊りの稽古におつきなさいますか。」

禮子の傍へ來て然う云つたのは博士の夫人であつた。禮子はその聲を聞くと向き返つて丁寧に辭儀をしながら、

「はい。」

といかにも娘らしい言葉で返事した。禮子は此會へ來ても外の人たちと一所に踊りの稽古ばかりはやらない積りでゐたのであつたが、自分の生徒と云ふことがこの夫人の前でそんな我が儘の云へない樣な氣咎めをさせて、柔順にその形までをやはらげて夫人の前に俯向いてゐた。夫人が室の外へ出てゆくと入れ違ひに、白布で咽喉を卷いた踊りの師匠と三味線を持つた博士の娘がこの舞臺の上へあがつてきた。若い人たちは袴の下から着物の前を繕つたり、扇子で掌を打いたりしながら、前へ行くものを後から目白押してわや／＼とこの舞臺の方へはいつて來た。

禮子はそれを振返つて眺めた時に、なんの機であつたか自分の年齢を指を折つて讀み直して見たやうな白けた氣がしたのであつた。自分の老け過ぎた年齢をふと人々の前ではつきりと意識にのぼらせた禮子は、もう其所に立交ぢつて扇子をひろげるのさへ氣恥かしく、自分を覗く周圍の眼の前に自分の顏を曝すことさへ厭なことに思はれた。禮子は師匠にも博士の娘にも目を向けずに窓をはなれると眞つ直ぐに舞臺の外へ出て、隣りの教場内の腰かけのところに少時の間立つてゐた。

純粹な若い息は若い息をのみ吸ひ合はうとする協會の若い人たちの空氣が、年と云ふことは思はずにその胸にのみ絕へず鮮かな紅いろの絞りを散らしてゐるやうな禮子の若やいだ氣分を、たゞ頑固に打消してしまつた。その若い亂雜な人々の間に交ぢつて引つきりなしに凝結した自分を見守つてゐなければならないと云ふ苦しさとぎごちなさに、たゞ一日で禮子の神經は疲れてしまつた。そうしてその中から馴染みのない新米と云ふ哀れつぽい自分の姿を拾ひださなければならない痛ましさは、兎ても禮子を再び協會の門を潜らせまいとするほどに氣重い氣分に其の心を閉ぢさせたが、翌る日になると禮子はもう一度あのかけ離れたまとゐの中に自分の縮んだ心を投げ入れて見やうと決めて、昨日よりは時間をおそく自分の家を出た。

暖な乾いた外の空氣は、白く膨らんだ禮子の皮膚を袖口のそとから彈くやうに潜み込んできた。袷の裾がちりめんの長襦袢の褄としどけなく靡き合ふ度に、禮子の足取りは唯ゆるく流れるやうに駒下駄のうしろを辷らした。澄み徹つた明るい五月の空は、禮子の顏を振り向ける彼方此方に銀のやうな光りをきら〳〵と降らせてゐた。禮子の翳した洋傘の蔭にその銀色の光線は仄かな紅を含んで、洋傘のふちから下を幽に染めてゐた。禮子はこの快い光りを睫毛のさきに漂はせて、その瞳を羞ぢらはしてゆく樂しさを味ひながらも、日光なぞの照つた事のない樣な暗い格子のはまつた貧しい大久保の町を思いだすと、

心は直きに滅入つた。

協會へはいると、大勢の人の唱歌の聲が聞こえた。禮子は門をくゞつてから草履を忘れたことに氣が付いたけれども、その日は足袋はだしてゐやうときめて草履を小使から借りることをよした。教場では元野と云ふのが生徒に音樂を教へてゐるところてあつた。皮膚に厚みのある豐かな顏を力まして、この人は汗になりながら生徒の調のはない調子をやかましく云つて直してゐた。禮子が入つてゆくと寫眞て見た事のある女優の三千子が、だまつてその席を禮子の爲に詰めてくれた。三千子はその美しい顏を仰向けて、そうして美しい聲を思ふさま張り上げて歌つてゐた。

直きにこの課目はお終ひになつた。元野は室を出る時に、

「今日からお出かけてすか。」

と禮子に聲をかけた。禮子が立つてこの人に何か云はうとしてる間に元野は直ぐ行つてしまつた。禮子の顏には言葉を殘した撓みが口許をふるはして、どこか極り惡るげな表情を浮べてゐた。

「お入りになつたんてすつてね。」

三千子は禮子の隣りに來てから云つた。

「えゝ。お仲間に入れていたゞきます。」

禮子は斯う返事して三千子の顏を眺めたが、ます美に逢つた時ほどの懷しみは浮ばなかつた。昨日見た他の二人の女も三千子の傍に寄つて來た。禮子はその内の十六七の若い娘に、

「今の唱歌はおもしろさうですね。教へて下さいな。」
と云ふとその娘は禮子の顏を見ずに、三千子の方にその眼を走らせて默つてゐた。
「あゝ、私もうそれは〳〵嬉しくつて〳〵仕方がない事があるかと思ふと、もう何もかも厭になつてほんとに失望のどん底の方に落つこつてしまふやうな事があるの。」
三千子は二人を相手に、其のから〳〵した聲を大きくしてこんなことを云つた。
「ちよいと、あなたは何の花が好き。」
「私は眞つ赤な〳〵黒く見える位な薔薇の花が好き。」
「私は一番藤の花が好き。東京では藤の名所はどこにあるんでせう。」
然う云つたのはひどい國訛りの、容貌のわるいおとなしさうな女の人であつた。
禮子は默つて聞いてゐた。三千子は立つて何所かへ行つてしまつた。その國訛りのある女優はいを子と云つた。今度の試演の喜劇に田舍の老婆をやるのに違ひないと云つて、その人はその臺詞を机の前で、眼を時々空に据はらせながら胸から先きを突きだして、獨りで稽古をやつてゐた。
今日は試演の役割りを定めるのだとか云つて、卒業してしまつた生徒たちがみんな協會へ集まつてゐた。禮子はつまらなくその神經を揺かせるのがいやで腰掛けから身體を動かさうともしずに、其所にあつた「建築師」をひろげて讀んでゐた。
「ぐづして下さいな。」

その聲と一所に禮子の眼の前に二十錢の銀貨が現はれたので、振返ると其れはます美であつた。禮子は小さい錢を蟇口から數へる間も、この人に媚びたい程なつかしさて其の心を戰はした。禮子はます美を放すまいとしたけれ共、ます美は直ぐ來るからと云つて事務室の方へかけ出して行つた。禮子もます美の後を立つて行かうかと思ひながら、廊下ていろ〳〵な知らない人たちの顏を見る事が厭はしくて、又其所に腰を据へてしまつた。本に向つてゐる禮子の耳には、生き〳〵した若い男たちの物を貫くやうな聲が方々から集まつて響いてきた。

鈴が鳴ると、博士が眼鏡の内に穩かな笑ひをひそめて、寒さうな羽織の襞積を袖の下に窄ませながらはいつて來た。今度の試演に出る博士の作した舞踊劇の、その最初のところに附く喜劇じみた一と場の役割りを、博士は朗らかな音聲てそれ〳〵に決めてゐた。そうして役を決めた人たちに直ぐその臺詞を机の上てやらして見た。

博士はみんなを伴れて試演場の舞臺へ行つた。禮子もその後に隨いて、見物席のところから舞臺にのつた人々を眺めてゐた。禮子は成るたけ人々から離れてゐやうとして其の後の隅に腰をかけてゐると、此所は通り路て邪魔だからもつと前へ出てくれと小使に云はれて、禮子は追ひ立てられた。十歩ばかり前に出て渡りの上に腰をかけてゐると、其所ては淺妻の背景を畫いてゐた髯のある畫工に、

「すこし。」

と云つて除けられた。

三千子は與へられた其の役を、手の内に握つて押抱へるやうな大切さうな眼の輝きをして、彼方を向いて些細なところの表情をして見たり、何か煩はしげに男の傍に行つて物を云ひかけたりしてゐた。一とつの中心に人々の眼も心もいつしよになつて集つてゐるその仲間から外れて、禮子はたゞ一人で前髮の毛にまで淋しさを宿らせて默然としてゐた。遠くから禮子を見る人はあつても、傍へ來て話をしやうと云ふ人はなかつた。ます美が稽古を見に入つて來たけれども、禮子の方へは寄らずに、今度の試演の舞臺を監督する男の生徒の傍へいつて腰をおろしてしまつた。禮子はます美の傍へ行くのも恥ぢがましく物憂かつた。舞臺の稽古を見てゐる人は誰れも彼れもその拙ないのに笑ひの聲を上げてゐたけれども、禮子はそれを笑ふことも出來ないやうな神經の怯えと共に、身體までが固まつてゐた。

禮子はふいと歸らうと思つた。

自分のこゝろを小さな袋のうちに押し詰めて、そこからは些つとでも自分の心を覗かせまいとするやうな、この鬧鬪から早く免れて歸らうと思つた。

これらの一團のうちに自分の身體を投じたからこそ、これらの人を標準にした心の平均から、自分の上に思ひがけなく權威を奪はれたやうな間拔けさ加減も覺えるのだけれども、こゝを離れてしまへばこれ等の人は自分の片手で壓し付けても差支へはないのだと思つた。

禮子はもう今日ぎりで協會へは來ない事にして歸らうと決めた。

敎場へ行つて風呂敷包みを取つてくると、禮子は博士にだけ挨拶して歸らうと思つて、その入口のところに凭れながら舞臺の方を眺めてゐた。ふと向ふから振返つて禮子を見付けた博士は、わざ〳〵禮子のところまで歩いて來て微笑みながら、

「あなたも此場へは出て下さい。賑やかなほどいゝんだから。これは誰れも仕出し見たいなもんだから構ひません。丸番がいゝか……何か一とつ思ひ付いたものを考へておいて。」

禮子はその博士の顔を打守りながら、

「えゝ、よろしう御坐います。」

と云つた。靑い悲しみの流れが禮子の胸のなかをすつと冷めたくさせたやうな氣がした。

禮子は門を出る時に、常々知り合つた親しい文學者たちをその胸になつかしく思い出してゐた。それ等の人々が自分を親しいものに、又優しくあしらつて吳れるその喜びを今新らしく思ひ返して、そうして涙ぐむほどにその心があたゝかく潤つた。

「あれが又はいつた女優だ。」

昨日其所の酒屋でから呼いてゐたその前も、禮子は明日からは通らないのだと思つた時に、今までどこかに潜んでゐた自分の心がはつきりと自分の手のうちに返つて來たやうな氣がして、此の通りを歩いてゆく人々の顔を禮子は眞正面に見る事ができた。

禮子が何をしやうとも、それに頓着のない禮子の良人は三日目から禮子が協會へ行かなくなつた事を別に深くは聞かうともしなかつた。禮子は久し振りて自分と云ふものを取返したやうな嬉しさて、机の前に無徒な日を送つてゐた。五六日經つと協會を卒業した男て演藝記者をやつてゐる小林と云ふのが禮子を訪ねてきた。

「折角所と人とを得たものだと思つて我々は喜んてゐるんてすから、是非お出かけなさいませんか。一日てもお休みになると矢つ張り博士の御機嫌がわるいてすから、然うすると却つて、失禮てすけれどもあなたのためにお成りならんやうなものてす。」

こんな事をその男は云つた。

「協會てあんまり親密らしうすると、何うも先生がたの御機嫌がわるいてす。てすからお目にかゝつても逐うと／＼しう致して居ります。」

禮子はこの男に何にも云はなかつた。身體が疲れてゐるからそれが回復ると又出かけますと云つて歸した。

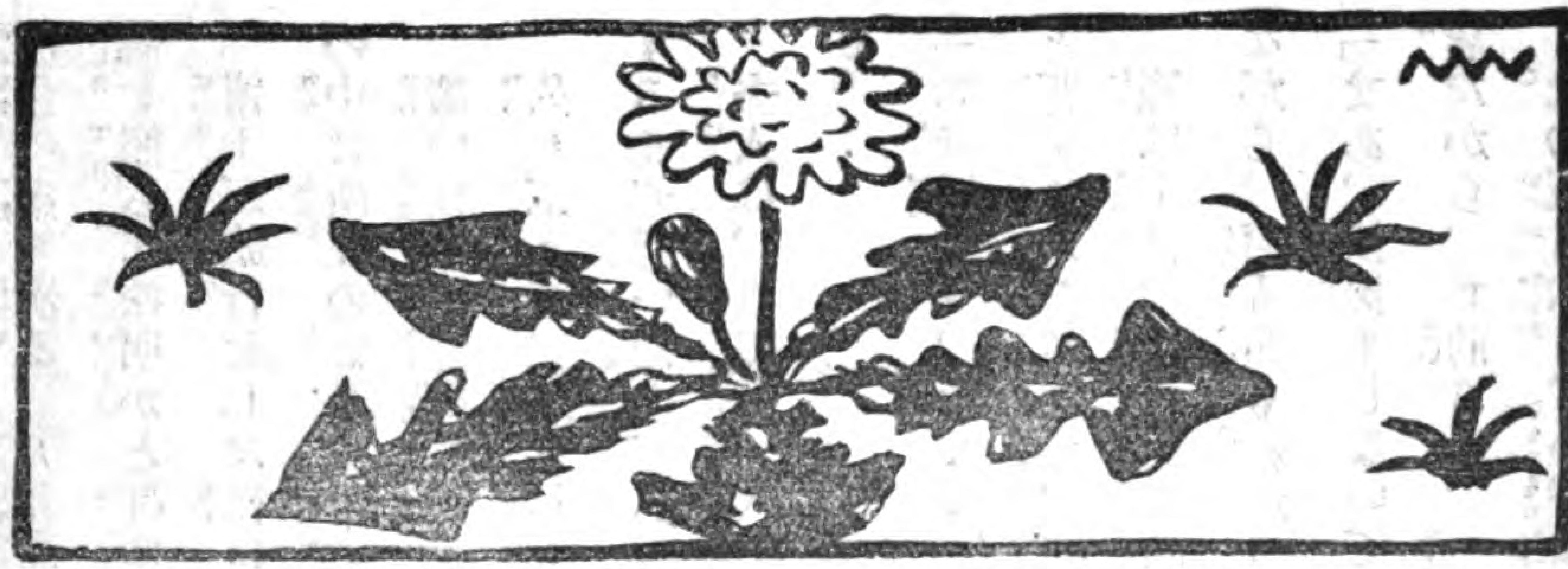
禮子は博士のところへ手紙をだした。それは、折角協會へ入れて頂いたけれども、もう再び舞臺は踏まないと云ふ事を誓ひにして、協會を退くことに定めた。私の年はあんまり老り逐ぎてゐた。私はやつ

ばり筆にたづさはる人間だと考へた。と云ふやうな事であつた。舞臺を踏まないと云ふ誓ひは、なつかしい老博士へ對しての禮子の唯一とつの操であつた。禮子は手紙を書いてから、今度舞臺を踏むやうな時は、それは自分の周圍の何もかも打捨てゝ、旅役者にても交ちるやうな落醜した境涯を送る時であらうと考へた。

如何なされ候にかと心にかゝり居候ところ御書面の趣實に御尤千萬乍併小生は此度の御決心こそ却つて作家として大成せらるべき眞機縁と信じ居候深く賀し申候何れ八、九日に御入來の際口上にて可申陳候へどどう考へても小生には俳優といふことが筆より上とは不被存候多忙中ほんの御返しのみ如此候草々

これは博士からの返書であつた。禮子が博士への手紙に書いたほど、これから先き一心に文學に取り縋ると云ふやうな熱をもつた考へが、今の禮子の胸のうちに燃えてるのではないのであつた。作家として大成と云ふ文字が、いかにも世馴れた、人間と云ふものを粗末にしない老博士の美しいお世辭のやうに禮子には思はれた。

(十、二十一、)



印度更紗

泉　鏡花

一

「鸚鵡さん、しばらくね……」

と眞紅へ、ほんのりと霞をかけて、新しい火の𤏋と移る、棟瓦が夕舂日を噛むだ状なる瓦斯煖爐の前へ、長倚子を斜めに、と裳を床。上草履の爪前細く嫋娜に腰を掛けた、年少き夫人が、博多の伊達巻した不斷着に、お召の紺の雨絣の羽織ばかり、繕はず、等閑に引被けた、其の姿は、敷詰めた絨氈の浮出てた綾もなく、袖を投げた椅子の手の緑の深さにも押沈められて、消えもやせむと淡かつた。けれども、美しさは、夜の雲に暗く梢を蔽はれながら、もみぢの枝の裏透くばかり、友染の紅ちら／＼と、櫛巻の黒髮の

濡色の露も滴る、天井高き山の端に、電燈の影白うして、揺めく如き煖爐の焔は、世に隠れたる山姫の錦を照らす松明かと冴ゆ。

博士が旅行をした後に、交際ぎらひて、籠勝ちな、此の夫人が留守した家は、まだ宵の間も、實際蔦の中に所在の知るゝ山家の如き、窓明。

廣い住居の近所も遠し。

久しぶりて、恁うして火を置かせたまゝ、氣に入りの小間使さへ遠ざけて、ハタと扉を閉した音が谺するまで響いたのであつた。

夫人は、さて唯一人、壁に寄せた塗棚に据置いた、籠の中なる、雪衣の鸚鵡と、差向ひに居るのである。

「御機嫌よう、ほゝゝ」

と莟を含んだ趣して、鸚鵡の雪に照添ふ唇……

籠は上に、棚の丈稍高ければ、打仰ぐやうにした、眉の優しさ。鬢の毛はひた〳〵と、羽織の襟を着ながら、肩も頸も細かつた。

「まあ、挨拶もしないで、……默然さん。お澄ましてすこと。……あゝ、此の間、鳩にばッかり構つて居たから、お前さん、一寸お冠が曲りましたね。」

此の五日六日、心持煩はしければとて、客にも逢はず、二階の一室に籠りつ切、て、寢起の隙には、

裏庭の松の梢高き、城のもの見のやうな窓から、雲と、水色の空とを視ながら、徒然にさしまねいて、蒼空を舞ふ遠方の伽藍の鳩を呼んだ。――眞白なのは、掌へ、紫なるは、かへして、指環の紅玉の輝く甲へ、朱鷺色と黄の脚して、輕く來て留るまでに馴れたのであつた。

「それ〱、お冠の通り、嘴が曲つて來ました。目をくる〱……ても、矢張り可愛いねえ。」

と艶麗に打傾き、

「其の代り、今ね、寢ながら本を讀んで居て、面白い事があつたから、お話をして上げやうと思つて、故々遊びに來たんぢやないか。途中が寒かつたよ。」

と、犇と合はせた、兩袖堅く締つたが、溢るゝ蹴出し柔かに、褄が一靡き落着いて、胸を反らして、顔を引き、

「否、まだ出して上げません。……お話を聞かなくッちや、……てないと袖を啣へたり、乘つたり、惡戯をして邪魔なんてすもの。

お聞きなさいよ。

可かい、お聞きなさいよ。

まあ、ねえ。

座敷は――こんな貸家建ぢやありません。壁も、床も、皆彩色した石を敷いた、明放した二階の大廣間、客室なんてす。

外面の、印度洋に向いた方の、大理石の廻り椽には、軒から掛けて、床へ敷く……水晶の簾に、星の數々鏤めたやうな、ぎやまんの燈籠が、十五、晃々點いて並んで居ます。草花の繪の蠟燭が、月の桂の透くやうに。」

と襟を壓へた、指の先。

二

引合はせ、又袖を當て、

「丁ど、まだ灯を入れたばかりの暮方でね、……其の高樓から瞰下ろされる港口の町通には、燒酎賣だの、雜貨屋だの、油賣だの、肉屋だのが、皆黑人に荷車を曳かせて、……商人は、各自に、ちやるめらを吹く、さゝらを摺る、鈴を鳴らしたり、小太鼓を打つたり、宛然お神樂のやうなんですがね、家が大いから、遠くに聞こえて、夜中の、あの魔もの〻お囃子見たやうよ、……そして車に着いた商人の、一人一人、穗身の鎗を支いたり、擔いだりして行く形が、ぞろ〳〵影のやうに黑いのに、椰子の樹の茂つた上へ、どんよりと黃色に出た、月の明で、白刄ばかりが、閃々、と稻妻のやうに行交はす。

其の向ふは、鰐の泳ぐ、可恐い大河よ……水上は幾千里だか分らない、天竺のね、流沙河の末だとさ、河幅が三里の上、深さは何百尋か分りません。

船のある事……帆柱に卷着いた赤い雲は、夕日の餘波で、鰐の口へ血の晚御飯を注込むんだわね。

時は十二月なんだけれど、五月のお節句の、此は鯉、其は金銀の絲の翼、輝く虹を手鞠にして投げた

やうに、空を舞つて居た孔雀も、最う庭へ歸つて居るの……燻占めはせぬけれど、棚に飼つた麝香猫の強い薫が芬とする……

同やうに吹通しの、裏は、川筋を一つ向ふに、夜中は尾長猿が、キツキと鳴き、カラ〳〵カラと安達ケ原て聞くやうな、黄金蛇の聲がする、椰子、檳榔子の生へ茂つた山に添つて、城のやうに築上げた、煉瓦造がづらりと並んて、矢間を切つた黒い窓から、弩の口がづん、と出て、幾つも幾つも仰向けに、星を呑まうとして居るのよ……

和蘭人の館なんてす。

其の一の、和蘭館の貴公子と、其の父親の二人が客て、卓子の青い鉢、青い皿を圍んて向合つた、唐人の夫婦が二人。別に、肩には更紗を投掛け、腰に長劍を捲いた、目の鋭い、裸の筋骨の引締つた、威風の凛々とした男は、島の王様のやうなものなの……

周圍に、可いほど間を置いて、黒人の召使が三人て、謹んて給仕に着いて居る處。」

と俯目に、睫毛濃く、黒棚の一ツの仕劃を見た。袖口白く手を伸べて、

「あゝ、一人此處に居たよ。」

と言ふ。天窓の大きな、頤のしやくれた、如法玩弄の燒ものゝ、ペロリと舌て、西瓜喰ふ黒人の人形が、ト赤い目て、額て睨んて、灰色の下唇を反らして突立つ。

「……餘り謹んては居ないわね……一寸、お話の中へ出ておいて、」

と手を掛けると、ぶるりとした、貧乏動ぎと云ふ胴搖りて、ふてくされにぐら〳〵と拗身に震ふ……はつと思ふと、左の足が股のつけもとから、ぽきりと折れて、ポンと尻持を支いた體に、踵の黒いのを眞向きに見せて、一本ストンと投出した、……恰も可、他の人形など一所に並んだ、中に交つて、其處に、木彫にうまごやしを萠黄で描いた、舶來ものゝ靴が片隻。

て、肩を持たれたまゝ、右の跛の黒どのは、夫人の白魚の細い指に、ぶらりと掛つて、一ツ、ト前のめりに泳いだつけ、臀を搖つた珍な形で、けろりとしたもの、西瓜をがぶり。

熟と視て、

「まあ……」

離すと、可いことに、あたり近所の、我朝の姉樣を仰向に抱込んで、引くりかへりさうて危いから、不氣味らしくも手からは落さず……

「島か、光か、翅を掛けて——お待ちよ、否、然う〳〵……矢張これは、此の話の中て、鰐に片足食切られたと云ふ土人か。人殺しをして、山へ遁げて、大木の梢へ攀ぢて、枝から枝へ、千仭の谷を傳はる處を、捕吏の役人に鐵砲で射られた人だよ。

「ねえ、鸚鵡さん。」

と、足を繼いて、籠の傍へ立掛けた。

鸚鵡の目こそ輝いたれ。

三

「あんな顔をして、」
と夫人は聲を沈めたが、打仰ぐやうに籠を覗いた。
「お前さん、お知己ぢやありませんか。最も御先祖の頃だらうけれど――其の黑人も……和蘭陀人も、」
て、木彫の、小さな、護謨細工のやうに柔かに襞積の入つた、靴をも取つて、籠の前に差置いて、
「此のね、可愛らしいのが、其の時の、和蘭陀館の貴公子ですよ。御覧、――お待ちなさいよ、恁うして並べたら、何だか、もの足りないから。」
フト夫人は椅子を立つたが、前に挾んだ達手巻の端をキウと締めた、絨氈を運ぶ上靴は、雪に南天の實の赤きを行く……
書棚を覗いて奥を見て、抽出す論語の第一巻――邸は、置場所のある處とさへ言へば、廊下の通口も二階の上下も、ぎつしりと東西の書もつの揃つた、硝子戸に突當つて其から曲る、……本箱の五ツ七ツが家の五丁目七丁目で、縦横に通ずるので――こゝの此の書棚の上には、花は丁ど挿してなかつた、――手附の大形の花籠と並べて、白木の桐の、軸もの、箱が三ツばかり。其の眞中の蓋の上に……
恁う仰々しく言出すと、仇の髑髏か、毒藥の瓶か、と驚かれやう、眞個の事を言ひませう、さしたる儀でない、紫の切を掛けたなりで、一尺三寸、一口の白鞘もの、刀がある。
と黒目勝な、意味の深い、活々とした瞳に映ると、何思ひけむ、紫ぐるみ、本に添へて、すら／＼と持

つて倚子に歸つた。

其だけて、身の脳ましき人は吻と息する。

「さあ、此の本が、唐土の人……揃つたわね、主人も、客も。

而して鰐の晩飯時分、孔雀のやうな玉の燈籠の裡て、御馳走を會食して居る……

一寸、其の高樓を何處だと思ひます……印度の中のね、蕃蛇剌馬──船着の貿易所、──お前さんが御存じだよ、私よりか、」

と打微笑み、

「主人は、支那の福州の大商買て、客は、其も、和蘭陀の富豪父子と、此の島の酋長なんてすがね、こゝてね、皆がね、たゞ一ッ、其だけに就いて繰近して話して居たのは、──此のね、酋長の手から買取つて、和蘭陀の、其の貴公子が、此の家へ贈りものにした──然うね、お前さんの、あの、御先祖と云ふと年寄染みます、其の時分は少いのよ、出が王様の城だから、姫君の鸚鵡が一羽。

全身緋色なんだつて。……

此が、哥太寛と云ふ、此家の主人たち夫婦の秘藏娘て、今年十八に成る、哥鬱賢と云てね、島第一の美しい人のものに成つたの。和蘭陀の公子は本望てしやう……實は其が望みだつたらしいから──

鸚鵡は多年馴らしてあつて、土地の言語は固よりだし、瓜哇、勃泥亞の訛から、馬尼剌、錫蘭、澤山は未だなかつた、英吉利の語も使つて、其は……怜悧な娘をはじめ、誰にも、よく解るのに、一ッ人の聞

馴れない、不思議な言語があつたんてす。以前の持主、二度目のはお取次、一人も仕込んだ覺えはないから、其の人たちは無論の事、港へ出入る、國々島々のものに尋ねても、まるつきし通じない。希有な文句を歌ぶんてすがね、檢べて見ると、其が何なの、此の内へ來てから、はじまつたと分つたんてす。

何かの折の御馳走に、哥大寛が、——今夜だわね——其の人たちを高楼に招いて、話の折に、又其の事を言出して、鸚鵡の口眞似もしたけれども、分らない文句は、鳥の聲とばッかし聞こえて、傍て聞く黒人だちも、妙な顔色て居る處……ね……

其處へてすよ、奥深く居て顔は見せない、娘の哥鬱賢から、腰元が一人使者て出ました……」

四

「差出がましうござんすが、お座興にもと存じて、お客様の前ながら、申上げます、とお嬢様、御口上。——内に、日本と云ふ、草雀の若い人が居りませう、……ふと思ひ着きました。あのものをお召し遊ばし、鸚鵡の謎をお問合はせなさいましては如何てせうか、と其の腰元が陳べたんてす。

鸚鵡は、最も、お嬢さんが片時も傍を離さないから、席へ出ては居なかつたの。

てね、此を聞くと、人の好い、氣の優しい、哥太寛の御新姐が、おゝ、と云つて、袖を開く……主人もはた、と手を拍つて、」

とて、夫人は倚子なる袖に寄せた、白鞘を輕く壓へながら、

「前刻より御覧に入れた、此なる劍、と哥太寛の云つたのが、――卓子の上に置いた、蠟塗、鮫鞘巻、椽頭、目貫も揃つて、金銀造りの脇差なんです――此の日本の劍と一所に、泯汰脳の土蠻が船に積んで、賣りに参つた日本人を、三年前に買取つて、現に下僕として使ひまする。が、傍へも寄せぬ下働の漢なれば、劍は此處にありながら、其の事とも存ぜなんだ。……成程、呼べ、と給仕を遣つて、鸚鵡を此へ、と急いで孃に、て、婢を立たせたのよ。

たゞ玉の緒のしるしばかり、髮は糸で結んでも、胡沙吹く風に肩に亂れた、身は痩せ、顏は窶れたけれども、目鼻立ちの凛として、口元の締つたのは、服裝は何うでも日本の若草。黒人の給仕に導かれて、燈籠の影へ顯はれたつけね――主人の用に商賣ものを運ぶ節は、盜賊の要心に屹と持つ……穂長の鎗をねえ、こんな場所へは出つけないから、突立てたまゝて居るんぢやありませんか。

和蘭陀のは騒がなかつたが、蒸蛇刺馬の酋長は、帯を手繰つて、長劍の柄へ手を掛けました。……此のお夥間です……人の賣買をする連中は……まあね、鎗は給仕が、此も慌てゝ受取つたつて。

靜かに進んで禮をする時、牡丹に八ッ橋を架けたやうに、花の中を廻り繞つて、奥へ續いた高樓の廊下づたひに、黒女の婢が前後に三人屬いて、淺緑の衣に同じ裳をした……面は、雪の香が沈む……銀の櫛照々と、兩方の鬢に十二枚の黄金の簪、玉の瓔珞はら〳〵と、お孃さん。耳鉗、腕釧も細い姿に、拔出るらしく跚々として……あの、さら〳〵と歩行くと響く。

母親が曲碌を立つて、花の中で迎へた處で、哥鬱賢は立停まつて、而して……桃の花の重つて、影も

染まる緋色の鸚鵡は、お孃さんの肩から翼、翩然と母親の手に留まる。其を持つて、卓子に歸つて來る間に、お孃さんの姿は、紗の三ッの黑い中に隱れたんです。

鸚鵡は、誰にも馴染だわね。

卓子の其處へ、花片の翼を兩方、燃立つやうに、」

と云ふ。聲さへ、其の色。暖爐の瓦斯は颯々と霜夜に冴えて、一廚殷紅に、且つ鮮麗なるものであつた。

「影を映した時てした……其の間に早や用の趣を言ひ開かされた、髮の長い、日本の若い人の、熟と見るのと、瞳を合はせたやうだつたつて……

若い人の、窶れ顏に、血の色が颯と上つて、――國々島々、方々が、いづれもお分りのないとある、唯一句、不思議な、短い、鸚鵡の聲と申すのを、私が先へ申して見ませう……もしや?……

――港で待つよ――

と、憚う申すのてはござりませぬか、と言ひも未だ果てなかつたに、島の毒蛇の呼吸を消して、椰子の峯、鰐の流、馬蒸剌馬の黃色な月も晴れ渡る、世にも朗かな涼しい聲して、

――港で待つよ――

と、羽を靡かして、其の緋鸚鵡が、高らかに歌つたんです。

釵の搖らぐ氣勢は、彼方に、お孃さんの方にして……卓子の其の周圍は、却つて寂然となりました。

たゞ、和蘭陀の貴公子の、前刻から娘に通はす碧を湛へた目の美しさ。

はじめて鸚鵡に見返して、此の言葉よ、此の言葉よ！日本、と眞前に云ひましたとさ。」

五

「眞個、其の言に違はないもんですから、主人も、客も、坐を正して、其のいはれを聞かうと云つたの。

——湛て待つよ——

深夜に、可恐い黄金蛇の、カラ〳〵と爬ふ時は、土蠻でさへ、誰も皆耳を塞ぐ……其の時には何うか知らない……そんな果敢い、一生奴隷に買はれた身だのに、一度も泣いた事を見ないと云ふ、日本の其の少い人は、今其の鸚鵡の一言を聞くか聞かないに、鎗をそばめた手も恥かしい、ばつたり床に、俯向けに倒れて、潸々と泣くんです。

お孃さんは、伸上るやうに見えたの。

涙を拂つて——唯今の鸚鵡の聲は、私が日本の地を吹流されて、恁うした身に成ります、其の船出の夜中に、歴然と聞きました……十二一重に緋の袴を召させられた、百人一首と云ふ歌の本において遊ばす、貴方々にはお解りあるまい、尊い姫君の繪姿に、面影の肖させられた御方から、お聲かゝりがありました、其の言葉に違ひありませぬ。いま赫耀とした鳥の翼を見まするると、射らるゝやうに其の緋の袴が目に見えたのでござります。——と此から話したの——其の時のは、船の女神さまのお姿だつたんです。

若い人は筑前の出生、博多の孫一と云ふ水主でね、十九の年……七年前、福岡藩の米を積んだ、千

六百石の大船に、乘組の人數、船頭とも二十人、寶暦午の年十月六日に、伊勢丸と云ふ其の新造の乘初てす。先づは滯りなく大阪へ——それから豐前へ廻つて、中津の米を江戸へ積んて、江戸から奧州へ渡つて、又青森から津輕藩の米を托つて、一度品川まて戻つた處、更めて津輕の材木を積むために、奧州へ下つたんてす——其の内、年號は明和と成る……元年申の七月八日、材木を積濟まして、立火の小泊から帆を開いて、順風に沖へ走り出した時、一人、櫓から倒に落ちて死んだのがあつたんてす、此があやかしの憑いたはじめなのよ。

南部の才浦と云ふ處で、七日ばかり風待をして居た内に、長八と云ふ若い男が、船宿小宿の娘と馴染んて、明日は出帆、と云ふ前の晩、手に手を取つて、行衛も知れず……一寸……驅落をして了つたんだわ!」

ふと蓮葉に、ものを言つて、夫人はすつと立つて、對丈に、黑人の西瓜を避けつゝ、鸚鵡の籠をコト〳〵と音信れた……

「何う? 多分其の我まゝな驅落ものゝ、……私は子孫だ、と思ふんだがね。……御覽の通りだから、ね、」

と、霜の冷い色して、

「でも、驅落ちをしたお庇て、無事に生命を助かつたんてす。思つた同士は、道行きに限るのねえ。」

と力なさゝうに、疲れたらしく、立姿のなり、黑棚に、柔かな袖を掛けたのである。

「あとの大勢つたら、其のあくる日から、火の雨、火の風、火の浪に吹放されて、西へ――西へ――毎日毎日、百日と六日の間、鳥の影一つ見えない大灘を漂ふて、お米を二升に水一斗の薄粥で、二十人の一日の生命を繋いだのも、はじめの内。くまびきさへ釣れないもの、長い間に漁したのは、二尋ばかりの鱶が一疋。さ、其を食べた所為でせう、お腹の皮が蒼白く、鱶のやうにだぶ／＼して、手足は海松の枝の枯れたやうになつて、漸つと見着けたのが鬼ヶ島、――魔界だわね。

然うして地を見てからも、島の周圍に、底から生へて、幹ばかりも五丈、八丈、すく／＼と水から出た、名も知れない、樹が邪魔に成つて、船を着ける事が出來ないで、海の中の森の間を、潮あかりに、月も日もなく、夜晝七日流れたつて言ふんですもの‥‥

其の時分、大きな海鼠の二尺計りなのを取つて食べて、毒に當つて、死なゝいまでに、こはれ／＼の船の中で、七顛八倒の苦痛をしたつて言ふよ。‥‥まあ、どんな、心持だつたらうね。渴くのは尚ほ辛くつて、雨のない日の續く時は、帆布を擴げて、夜露を受けて、皆が口をつけて吸つたんだつて――大慨唇は破れて血が出て、――助かつた此の話の孫一は、餘り激しく吸つたゝめ、前齒二つ反つて居たとさ‥‥

お聞き、島へ着くと、元船を乘棄てゝ、魔國とこゝを覺悟して、死裝束に、髮を撫着け、衣類を着換へ、羽織を着て、紐も結んで、てん／＼が一腰づゝ、嗜みの脇差をさして上陸つたけれど、飢渴えた上、毒に當つて、足腰も立たないものを、何うしませう？‥‥」

六

「三百人ばかり、山手から黒煙を揚げて、羽蟻のやうに渦巻いて來た、黒人の鎗の石突て、濱に倒れて、呻吟き悩む一人々々が、胴、腹、腰、背コツ〳〵と、突かれて、生死を驗されながら、抵抗も成らず裸體にされて、懷中ものまで剝取られた上、親船、端舟も、斧で、ばら〳〵に摧かれて、帆綱、帆柱、離れた釘は、可忌い禁壓、可恐い呪咀の用に、皆奪られて了んたんです……

あとは殘らず牛馬扱ひ。それ、草を芟れ、馬鈴薯を堀れ、貝を突け、て、焦げつくやうな炎天、夜は毒蛇の霧、毒蟲の靄の中を、鞭打ち鞭打ち、こき使はれて、三月、半歳、一年と云ふ中には、大方死んで、あと二三人だけ殘つたのが、一人々々、牛小屋から摑み出されて、果しも知らない海の上を、二十日目に島一つ、五十日目に島一つ、離れ〳〵に方々へ賣られて奴隷に成りました。

孫一も其の一人だつたの……此の人はね、乳も涙も涸り落ちる黒女の俘囚と一所に、島々を目見得に廻つて、其の間には、日本、日本、て觀世ものゝ小屋に置かれた事もあつた。一度何所か方角も知れない島へ、船が水汲に寄つた時、濱つゞきの椰子の樹の奥に、恁うね、透かすと、一人、コトン〳〵と、寂しく粟を搗いて居た亡者があつてね、其が夥間の一人だつたのが分つたから、」聲を掛ける、と黒人が突倒して、船は其のまゝ、朱色の海へ、ぶく〳〵と出たんだとさ……可哀相ねえ。

まだ可哀なのはね、一所に連廻はられた黒女なのよ。又何とか云ふ可恐い島でね、人が死ぬ、と家屬のものが、其の首は大事に藏つて、他人の首を活きながら切つて、死人の首へ繼合はせて、其を埋める

と云ふ習慣があつて、工面のいゝのは、不斷から首代の人間を放飼に飼つて置く。日本ぢや身がはりの首と云ふ武士道とかゞあつたけれど、其の島ぢや遁げると不可いからつて、足を縛つて首から掛けて、股の間へ鐵の分銅を釣るんだつて……其處へ、あの、黒い乳の膨れた女は買はれたんだよ。

孫一は、天の助けか、其の土地では賣れなくつて——とう〳〵蕃蛇剌馬て方が着いた——と云ふ譯なの……

話は此なんだよ。」

夫人は小さな吐息した。

「其のね、ね、可悲い、可恐い、滅亡の運命が、人たちの身に、暴風雨と成つて、天地とゝもに崩掛らうとする前の夜、……風はよし、凪はよし……船出の祝ひに酒盛したあと、船中殘らず、ぐつすりと寢込んで居た、仙臺の小淵の港で——霜の月に獨り覺めた、年十九の孫一の目に——思ひも掛けない、艫の間の神龕の前に、凍つた龍宮の几帳と思ふ、白氣が一筋月に透いて、向ふへ大波が畝るのが、累つて凄く映る。其の蔭に、端麗さも端麗に、神々しさも神々しい、緋の袴の姫が、お一方、孫一を一目見なすつて、

——港で待つよ——

と其の一言。すらりと背後向かるゝ黒髪のたけ、帆柱より長く靡くと思ふと、袴の裳が波を摺つて、月の前を、さら〳〵と、かけ波の沫の玉を散らしながら、衝と港口へ飛んで消えるを見ました……あつと思ふと夢は覺めたが、月明りに霜の薄煙りがするばかり、船の中に、尊い香の薫が殘つたと……。

此を船中に話したがね、船頭はじめ——白痴め、婦に誘はれて、驅落の眞似がしたいのか——て、船は人ぐるみ、然うした奈落へ逆に落込んだんです。

まあ、何と言はれても、美しい人の言ふことに、從へば可かつたものをね。

七年幾月の其の日はじめて、世界を代へた天竺の蕃蛇剌馬の黄昏に、緋の色した鸚鵡の口から、同じ言を聞いたので、身を投臥して泣いた、と言ひます。

微妙き姫神、餘りの事の靈威に打たれて、一座皆跪づいて、東の空を拜みました。

言ふにも及ばない事、奴隷の恥も、苦みも、孫一は、其の坐て解けて、娘の哥鬱賢が聽した其の鸚鵡を肩に据えて。」

と籠を開ける、と翩然と來た、が、此は純白雪の如きが、嬉しさに、颯と揚羽の、羽裏の色は淡く黄に、嘴は珊瑚の薄紅。

「哥太寛も餞別しました、金銀づくりの脇指を、片手に、」と、肱を張つたが、撓々と成つて、紫の切も亂るゝまゝに、弛き博多の達手卷へ。

肩を斜めに前へ落すと、袖の上へ、腕を辷つた、……月が投げたるダリヤの大輪、白々と、揺れながら戯れかゝる、羽搔の下を、輕く手に受け、清しい目を、熟と合はせて、

「……あら嬉しや、三千日の夜あけ方、和蘭陀の黑船に、旭を載せた鸚鵡の緋の色。めでたく筑前へ歸つたんです——

お聞きよ此を！　今、現在、私のために、荒浪に漂つて、蕃蛇剌馬に辛苦すると同じやうな少い人があつたらね、――お前は何と云ふの！何と言ふの？

私は、其が聞きたいの、聞きたいの、…たとへばだよ…お前さんの一言て、運命が極ると云つたら、」

と、息切れのする瞼が颯と、氣を込めた手に力が入つて、鸚鵡の胸を壓したと思ふ、嘴を捺いて開けて、カッキと嚙んだ小指の一節。

「あ、」と離すと、爪を袖口に縋りながら、胸毛を倒に仰向きかゝつた、鸚鵡の翼に、垂々と鮮血。振離すと、床まで落ちず、宙て、はらりと影を亂して、黒棚に、パッと乘る、と驚駭に衝と退つて、夫人がひたと逅稍への扉に凭れた時であつた。

呀！　西瓜は投げぬが、がつくり動いて、ベッカッコ、と目を剝く拍子に、前へのめらうとした黒人の其の土人形が、勢餘つて、どたりと仰狀。ト木彫の、あの、和蘭陀靴は、スポンと裏を見せて引繰返る。

……煽をくつて、論語は、ぱら〳〵と暖爐に映つて赫と朱を注ぎながら、頁を開く。

雪なす鸚鵡は、見る〳〵全身、美しい血に染つたが、目を眠るばかり恍惚と成つて、朗かに歌つたのである。

――港て待つよ――

時に立竦みつゝ、白鞘に思はず手を掛けて、以ての外かな、怪異なるものどもの擧動を屹と視た夫人が、忘れたやうに、柄をしなやかに袖て捲いて、するりと帯に落しつゝ、片手にをくれ毛を拂ひもあへず……頷いて……莞爾した。

（完）

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　京橋元數寄屋町　北隆館
仝　京橋西紺屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但淸國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
	以上郵稅共	

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は　**本鄕西片町十番地反省社**　と指定し拂渡局を　**東京市東片町局**　と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり、これにより御送金の方は外に**登記料一錢**を加へらるべし、然らざれば送金額より差引くにより缺金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用　必ず**一割增**の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、**座ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

大正元年十月廿八日印刷納本
大正元年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

OHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す